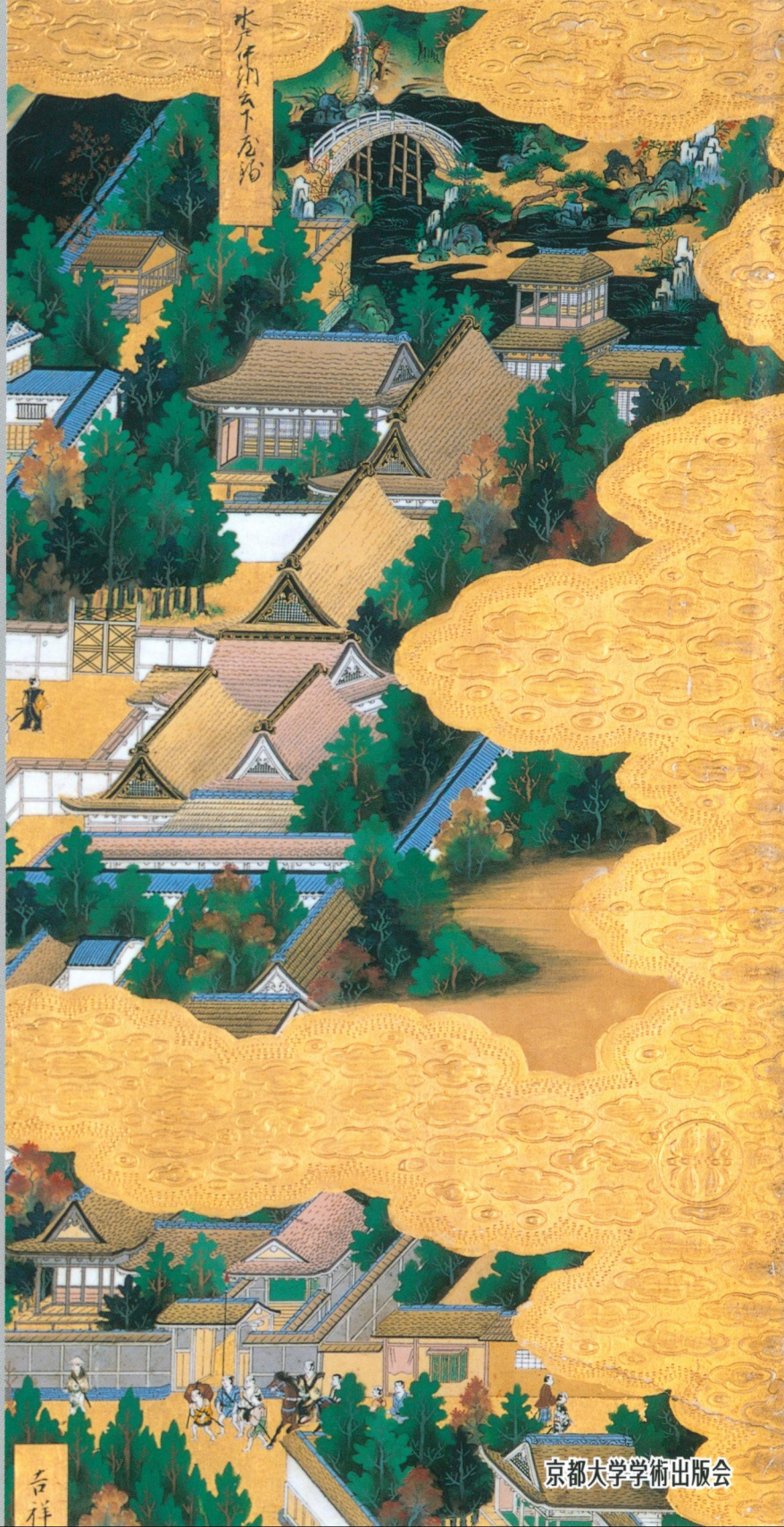


日本庭園の植栽史

飛田範夫 著



京都大学学術出版会

日本庭園の植栽史

飛田 範夫 著

目次

序

1

I 中国文化の影響下

第一章 奈良時代までの庭園植栽

一 古代人と植物

7

二 「しま」(海洋風景式庭園)の伝来——飛鳥時代の庭園

16

三 中国趣味の植栽——奈良時代の庭園

26

四 奈良時代までの植栽技法

43

五 奈良時代までの特色

49

II 寢殿造庭園の時代

第二章 平安時代の庭園植栽

一 平安京の概観 57

二 キク・タケからサクラの愛好へ——平安前期の庭園 59

三 浄土式庭園の誕生——平安中期の庭園 74

四 大規模な郊外別荘の植栽——平安後期の庭園 83

五 平安時代の植栽技法 95

六 平安時代の特色 107

第三章 鎌倉時代の庭園植栽

一 新しい美意識の登場——京都の庭園 113

二 中世の始まり——鎌倉の庭園 134

三 鎌倉時代の植栽技法 148

四 鎌倉時代の特色 151

III 枯山水と露地の時代

第四章 室町時代の庭園植栽

一 針葉樹の使用——室町前期の庭園

157

二 枯山水の発展——室町後期の庭園

181

三 室町時代の植栽技法

200

四 室町時代の特色

206

第五章 安土桃山時代の庭園植栽

一 城郭庭園の植栽

215

二 露地の植栽

234

三 安土桃山時代の植栽技法

236

四 安土桃山時代の特色

238

IV 回遊式庭園と洋風庭園の時代

第六章 江戸時代の庭園植栽

- 一 大規模回遊式庭園の出現——江戸前期の庭園 243
- 二 社会政策としての行楽地——江戸中期の庭園 268
- 三 個人経営の庭園の増加——江戸後期の庭園 280
- 四 江戸時代の植栽技法 292
- 五 江戸時代の特色 303

243

第七章 明治・大正・昭和前期の庭園植栽

- 一 「文人風」から「自然風」へ——明治・大正時代の庭園 311
- 二 「実用庭園」の流行——昭和前期の庭園 321
- 三 明治・大正・昭和前期の植栽技法 328
- 四 明治・大正・昭和前期の特色 333

311

V 花壇・生垣・禁忌・植物名

第八章 日本の花壇

一 花壇成立前の状況 339

二 花壇の出現 343

三 花壇とは何か 356

第九章 生垣の歴史

一 生垣の定義 359

二 刈り込み生垣の出現まで 361

三 刈り込み生垣の出現 369

四 生垣の剪定用具 372

五 結論として 373

第一〇章 庭園植栽の禁忌

一 禁忌の意味 377

索引	435
あとがき	425
収録図版一覧	419
引用文献	407
おわりに	405
二 植物名の時代比較	395
一 植物名の同定	393
第一章 植物名の比較	393
二 禁忌とされる植栽植物	378
三 禁忌の根拠の分析	382
四 存続する禁忌	390

序

日本庭園の構成要素としては、園池・築山・石組・流れ・植栽・建築物・石造品などがある。京都の龍安寺庭園のように、植物としてはコケしかないという庭園も存在するが、多くの庭園において植栽は重要な役割を担っている。だが、これまでの日本庭園史の研究では、各時代にどのような様式が出現しているのかを明らかにしたり、個々の庭園の変遷をたどることを主に研究してきたために、植栽を問題とすることは少なかった。

植物文化史の立場からは松田修著『植物世相史』（社会思想社、一九七二年）があり、庭園植栽の時代的変遷を概観することはできるのだが、主として文学的史料を扱っている。庭園史研究としては、河原武敏著『平安鎌倉時代の庭園植栽』（信山社、一九九九年）が刊行されて、平安・鎌倉時代の様子は明確になってきている。また、一般的な読み物としては、庭園植栽の歴史を龍居竹之介が「植栽の流れ」と題して執筆している（『月刊公園緑地建設産業』一九八八年以降連載）。しかし、各時代の個々の庭園に何が植えられていたのか、植栽についてどのように考えられていたのか、植栽技術はどのようなものだったのか、植栽をしたあとの維持管理はどのようにしていたのか、などについては不明な点が多い。日本庭園史における植栽の変遷については、通史がまだ完成されていないと言っても過言ではないだろう。

本書においては、日本庭園の植栽についての通史を完成させるとともに、植栽という新たな角度から日本庭園史を見直す

ことを試みてみたい。各時代に使用されていた植物、観賞のされ方、植栽・管理技術などについて、個々の庭園においてはどうかだったのかを、文献史料や発掘調査結果などから明確にするとともに、文化・政治・経済などの他分野の影響をどのように受けているのかといったことも合わせて、検討を加えていきたいと思います。歴史的に著名な庭園の植栽については、古いものほど当初の植物が残っていることは少ない。だが、日記・詩文・絵画などの史料、あるいは発掘による花粉分析や植物遺体の調査によって、各時代の庭園にどのような植物が植栽されていたのかを、かなりの程度まで知ることができる。庭園植栽を歴史的にたどることによって、別な角度から日本庭園というものを見直すことを試みたい。

本書は五部構成とし、IからIVで庭園植栽の歴史をたどって全体的に考察を行なうことにした。また、Vでは個々のテーマから庭園植栽とはどのようなものだったかを追究してみることにした。

IからIVまでの庭園植栽の歴史では、古代については、無土器・縄文・弥生時代までさかのぼって植物と人間との関わりを考察し、それがどのように庭園植栽に影響を与えているのかを明らかにしてみたい。大陸から日本庭園の源流となった海洋風景式の庭園が伝えられた飛鳥時代は、どのような植物が植栽されていたのだろうか。近年発掘によって庭園の形態が解明されてきた奈良時代、あるいは、寝殿造庭園が主流になった平安時代の状況は、どうだったのだろうか。

中世については、武家政権が誕生した鎌倉時代の寝殿造庭園では、植栽がどのように変化していったのかを考察したい。次の室町時代には針葉樹が使われるようになったことが、これまでの研究で明らかになっているが、実際にはどの程度の針葉樹が使用されていたのだろうか。また、安土桃山時代に出現した露地の植栽はどのようなものだったのかについても考えてみたい。

また、近世及び近代については、江戸時代の回遊式庭園の植栽の特質、園芸品種が与えた影響、庶民が楽しんだ行楽地の植栽などを調べてみたいと思う。近代の庭園植栽については史料が大量に存在するのだが、現代と密接に関連してくるために、価値評価することが困難に感じられるものが少なくない。明治に誕生した公園や昭和前期に提唱された公園緑地系統について、庭園植栽との差異を概観することでもとめてみることにしたい。

Vでは庭園に関わる次のような事柄を追求することにした。花壇は日本においていつ頃発生したのか、何を目的としていたのか、形状はどのようなものだったのかを、歴史的に見ていくことにしたい。生垣については、どのような形態のものがあつたのか、現代見るような刈り込み生垣はいつ頃から登場したのかを、古代にさかのぼって考察してみたい。庭園植栽の禁忌とは、ある種の植物を庭園に植える縁起が悪いというような言い伝えを指すわけだが、庭園植栽についてはどのような禁忌が存在するのか、類例を分析してその意味を明らかにしてみたい。最後に、歴史上の植物名は実際には何に該当するのかを、古代・中世・近世にわけて比較することで、植栽の歴史を概観したいと思う。

I 中国文化の影響下

古代の中国風庭園

(『華嚴宗祖師絵伝』13世紀前半)

第一章 奈良時代までの庭園植栽

庭園植栽の歴史をさかのぼると、無土器時代から古墳時代にかけての人間と植物の関連を考えざるをえなくなる。植物を利用するようになったのはいつ頃からなのか、植物を植えるという行為をするようになったのはいつからなのか、それはどのような理由からだったのかという基本的な事柄について、庭園史側からの研究はまだ行なわれていない。文献的に明確になる飛鳥時代のことに関しては、発掘調査が進んでいるのだが、出土している庭園遺構は少なくて、植栽については不明な点が多い。奈良時代については発掘調査によって個々の庭園の植栽が明らかになってきているが、文献を含めて全体的に見直すことはされていない。文献や民俗調査や発掘調査結果を基に、古代人と植物の関係や飛鳥時代から奈良時代にかけての庭園植栽について、見ていくことにしたい。

一 古代人と植物

(一) 考古学による考察

人間が植物に対して関心を持ち始めたのはいつ頃からだったのだろうか。約五万年前頃の旧人（ネアンデルタール人）が植



フジバカマ (『草花絵前集』
元禄 12 年 [1699])

物に対してある感情を抱いていたことは、一九六〇年に行なわれたイラク北部のシャニダール洞窟の発掘調査で、ムスカリ類・キンボウゲ・タチアオイ・ノボロギクなどの花が死体に供えられていた例が見られたことから推察される。^① 発掘した考古学者 R・S・ソレッキは、ネアンデルタール人が花の美しさを知っていたとして、彼らのことを「最初に花を愛でた人びと（ザ・ファースト・フラワー・ピープル）」と呼んでいる。

日本においてはではどうだったかについては、『日本書紀』（養老四年「七二〇」成立）の「神代上（第八段）」に、神武天皇の時代に日本の森林が誕生したことについて次のように述べられている。

初め五十猛神、天降ります時に、多に樹種を將ちて下る。然れども韓地に殖えずして、盡に持ち帰る。遂に筑紫より始めて、凡て大八洲国の内に、播殖して青山に成さずといふこと莫し。

天上の神が降下して来て全国の森林をつくったというのが、古代人の考え方だったのだろう。実際のな樹木利用については、続いて次のように書かれている。

杉及び櫟、此の両の樹は、以て浮宝とすべし。檜は以て瑞宮を為る材にすべし。楸は以て顕見蒼生（目立つて草木の青く茂る所）の奥津棄戸（墓所）に將ち臥さむ具にすべし。

スギ・クスノキは舟、ヒノキは建物、コウヤマキは棺というように、樹種について利用面から識別がされていたことがわかる。しかし、これだけでは古代の状況を察することはできないので、最近の考古学の研究成果によって植物との関連について見ることにしたい。

無土器時代の植物利用

日本列島に人類が出現したのは、二万五〇〇〇年ほど前の氷河期のこととされている。縄文時代が始まる紀元前一万年ま

でを、土器が存在していなかったことから無土器時代（あるいは先土器時代）と呼ぶが、この時代の遺構としては群馬県の岩宿遺跡が名高い。昭和二十四年（一九四九）に行なわれた発掘では、石器に混ざって炭化したクリの木の細片が発見され、その二年後の東京都の茂呂遺跡の調査では、礫群の中や周囲から多数の木炭片が出土している。このような検出例は近年増加していて、木炭片としてはクリ・カシ・コナラ・ブナや針葉樹類も見つかっている。同時に発見されている礫群の多くは、拳大以下のもので、径数十センチメートルから二メートルの範囲で密集している。焼けているものが多いことから、この礫群は食物の加熱調理に用いられたものと推定されている。こうしたことから、木炭片の用途は燃えやすい樹種の枝を集めて薪としていたと見られている。なお、横浜市港北区の二の丸遺跡からは、木炭片とともに炭化したドングリも出土している^②で、堅果類を食料にしていたとも考えられている^③。

また、チヨウセンゴヨウ類（ハイマツ・ヒメコマツ・キタゴヨウ・ヤクタネゴヨウなど）が九州中・南部を除くナイフ型石器文化や本州の細石刃文化などにおいては、有力な食糧源だったという説も出されている^④。

縄文時代の管理栽培

氷期の終息によって温帯森林が急速に拡大したことから、狩猟とともに植物性食料の採集が始まり定住生活となった。この時代、紀元前一万年から紀元前三世紀は縄文時代と呼ばれている。温帯森林の植物性食料資源の季節的変動は極めて大きいために、人びとは冬の食料を確保することが必要だった^⑤。縄文遺跡からは、直径一メートルほどの貯蔵穴が数多く出土しているが、この中には木の実が大量に蓄えられていた。東日本では中期にクルミ・クリなど、西日本では中期以降アカガシ・イチイガシ・アラカシ・ツブラジイ・マテバシイ・コジイなどのドングリ類を中心としたものが目立っている^⑥。出土遺物の地域差は自然環境による植物相の違いに由来しているが、一定の木の実を集めていることから、縄文人にはどの木にどのような実が成るかといった樹木の識別能力があつたと推測される。

日本のナラ林帯ではクリ・クルミ・トチノキなどの管理栽培が行なわれていたという説も、近年では有力になっている。

発掘調査の際の花粉分析によると、これらの花粉の出現率が天然では考えられないほど異常に高いことから、有用樹として保護・管理されただけではなく、積極的に植えられた可能性もあるとされている。^⑥ 縄文時代は狩猟採集の時代だと言われたが、福井県の鳥浜貝塚からは日本に自生していないアサ・カジノキ・ヒヨウタン・シソ・エゴマ・リョクトウ・ゴボウなどの有用植物の種子が出土している。^⑦ 縄文時代にはかなり大陸から植物栽培の知識も入っていたと考えられる。

縄文人に樹木の材質について識別能力があったことは、生活必需品である狩猟や日用品等に使われていた木器の樹種の鑑定からわかる。鳥浜貝塚では、石斧の柄としてヤブツバキやサカキも使われているが、四六本中一八本がユズリハだった。弓ではカヤ・ヤナギ・クリ・トネリコなどが用いられているが、カシが最も多い。盆・鉢の大半はトチノキで、板のほとんどは割りやすいスギ、舟の櫂には堅固なケヤキが使用されていた。用途によって樹種を選択していたことは間違いないだろう。^⑧

弥生時代の植物栽培

紀元前三世紀から三世紀までの弥生時代は、中心的生産は水稻農耕だったが、補完するために畑作を行なう地域もあり、また、水稻の適さない山間地では專業的に畑作をしていたらしい。このことはムギ・ヒエ・アワ・キビ・ソバ・エンバク・ダイズ・アズキなどの種子が発見されていることからわかる。^⑨ このようことから草本類の栽培についての知識は、縄文時代より一層増加していたと考えられる。

のちに観賞用の庭園にも植えられるようになる果樹は、縄文時代に長崎に大陸からモモが伝わっていたようだが、弥生時代への関連はよくわかっていない。弥生時代前期にモモとウメは九州北部や山口で栽培され、やや遅れて西日本にも伝わり、中期には東日本にも伝播して、後期には全国的にモモ・ウメ・スモモ・カキを栽培するようになり、古墳時代に引き継がれていく〔表1-1参照〕^⑩。ウメについては『日本書紀』に記載がなく、『万葉集』の奈良時代の歌に多く詠まれていることから、これまで奈良時代に渡来したとする説が一般に言われてきたが、誤りだったことになる。

文時代にクリ・トチノキの堅果を利用していたのだが、弥生時代にはクスギ材の利用が多くなっている。東日本では縄文時代の樹木との関係は引き継がれていない。これは水田開発地域が縄文時代の住居地域と異なることなどから生じたのではないかと見られている⁽¹⁾。

古墳時代の植栽

三世紀末から七世紀までは古墳時代と呼ばれているが、この時代の植栽事例としては、奈良県北葛城郡河合町^{かわい}の四世紀後半とされる佐味田宝塚古墳から出土した「家屋文鏡」(宮内庁書陵部蔵)に見ることができる。鏡の裏面には高床と平屋建物の

写真 1-1 家屋文鏡の植栽樹木 (4 世紀後半)

ところで、この時代の出土木製品は農耕が主体となったことから、農具として使われていたものが多い。例えば大阪府の池上及び四ツ池遺跡では、農具の柄としては強靱で重いカシ・シイ・アカメモチ・サカキ・シャシャンボなどが使われているが、鋳は五九例中五七例、鋤は三六例中三五例がカシからつくられている。杵もカシが多いが、臼には巨木が多く加工の容易なクスノキが選ばれている。鉢としてはクワ・ケヤキ・サクラなども使用されているが、クスノキが多い。他の弥生時代の遺跡の木製遺物と多くの点で共通性が認められるが、クスノキを多く用いていることがこの特色になっている⁽²⁾。地域によって植物相が異なることから、身近なものの中から使用目的に合った樹種を選んでいたと考えられる。

なお、西日本ではこのようにカシが使われているのは、縄文時代にカシの堅果を利用していた関係からと推測されている。東日本では縄

表1-1 弥生・古墳時代の果樹栽培（寺沢薫「畑作物」から果樹のみ抽出）

時代	九州	西日本	東日本
弥生時代	前 佐賀・菜畑（モモ） 福岡・板付（モモ）	岡山・津島（モモ） 島根・タテナヨウ（モモ・スモモ） 兵庫・上ノ島（モモ）	
	期 山口・下東（カキ） 山口・綾羅木（モモ・ウメ） 山口・岩田（モモ・ウメ）	奈良・唐古（モモ） 香川・行末（モモ） 兵庫・松ヶ崎（モモ・ウメ） 三重・上箕田（モモ）	
	中 長崎・里田原（モモ） 福岡・板付（モモ） 福岡・四箇（モモ）	愛媛・土居窪（モモ） 大阪・鬼虎川（モモ） 大阪・池上（モモ） 奈良・新沢一（モモ） 京都・森本（モモ） 大阪・四ツ池（モモ・スモモ） 京都・深草（モモ） 愛知・瓜郷（モモ・カキ）	
古墳時代		香川・紫雲出（モモ） 岡山・惣図（モモ） 岡山・用木山（モモ） 大阪・瓜生堂（モモ） 大阪・池上（モモ） 大阪・亀井（モモ） 滋賀・長沢（モモ） 三重・納所（モモ・スモモ）	千葉・城の腰（モモ） 神奈川・清水場（モモ） 宮城・富沢（モモ・ウメ？） 静岡・沢田（モモ・カキ） 静岡・宮下（モモ）
	後 福岡・板付（スモモ）	愛媛・八堂山（モモ） 香川・葛谷（モモ） 徳島・大柿（モモ） 兵庫・会下山（モモ） 奈良・唐古（モモ） 奈良・鴨都波（モモ）	静岡・伊場（モモ） 静岡・稻ヶ谷（モモ） 静岡・登呂（モモ・ナシ）

時代	九州	西日本	東日本
弥生時代		奈良・高塚 (モモ・ウメ) 愛知・朝日 (モモ) 鳥取・遠藤谷峯 (モモ) 大阪・池上 (モモ・カキ) 大阪・亀井 (モモ) 広島・豊谷 (モモ・カキ)	静岡・山木 (モモ) 群馬・日高 (モモ) 静岡・八兵衛 (モモ) 東京・甲の原 (カキ)
	福岡・門田 (モモ・スモモ)	鳥取・青木 (モモ) 兵庫・田能 (モモ)	石川・寺家 (モモ)
	福岡・湯納 (モモ・スモモ)	京都・大藪 (モモ) 大阪・中田 (モモ)	長野・高松原 (モモ)
	福岡・辻田 (モモ)	奈良・新沢一 (モモ) 香川・加藤 (モモ)	静岡・北神馬土手 (モモ)
古前期	熊本・古閑原 (モモ)	高知・ヒビキノ (モモ) 岡山・上東 (モモ・カキ)	東京・鞍骨山 (モモ)
	大分・小園 (モモ)	岡山・雄町 (モモ)	石川・猫橋 (モモ・ウメ)
	大分・ネギノ (モモ)	鳥取・長瀬高浜 (モモ) 兵庫・弥布ヶ森 (モモ)	石川・塚崎 (モモ)
	大分・安国寺 (モモ・カキ)	兵庫・川島 (モモ・スモモ) 兵庫・下坂部 (モモ)	新潟・千種 (モモ)
初期	山口・吹越 (モモ・ウメ)	大阪・西岩田 (モモ) 大阪・船橋 (モモ) 大阪・亀井 (モモ・スモモ)	
		和歌山・井辺 (モモ) 和歌山・笠嶋 (モモ)	
		奈良・纏向 (モモ)	
		奈良・大西 (モモ・ウメ・スモモ・カキ)	
時代		滋賀・鴨田 (モモ) 三重・納所 (モモ)	
		愛知・伊保 (モモ・ウメ)	
		三重・北堀池 (モモ)	

左右に、樹木が生えている様子が描きだされている「写真1-1」¹³。果樹を採るためか、それとも祭祀のためかといった植栽の意味はわかりにくい¹⁴が、どの樹木も古木でないことや左右対称であることからすると、人為的に植えたものと考えられる。

また、五世紀末から六世紀初頭とされる群馬県北群馬郡子持村の黒井峯遺跡では、祭祀の対象として単独に植栽された樹木が集落内で発見されている¹⁵。検出された樹木の根系は主根が切断され、側根が残っているだけだったことから、実生ではなく他所から移植されたものとされている。

(二) 人類学・民俗学の事例

古代人が植物とどのような関わりがあったかについて調べるには、文献調査や考古学以外には、現代の未開民族の生活を通して古代の状況を推測する人類学的方法や、一民族の生活あるいは伝承から歴史を探る民俗学的方法がある。人類学の調査によると、東アフリカのスワヒリ族は、家の庭にマンゴー・ライム・ムスワキのような木陰となり果実が食用になる樹木を植えたり、あるいは整地の際に伐採せずに残すという¹⁶。縄文時代のクリ・クルミ・トチノキなどの管理栽培が行なわれていたとすれば、このようなものだったのではないだろうか。

日本においては、アイヌ民族について植物との関係が調べられている¹⁶。結果をまとめると表1-2のようになる。木本類をみても北方系の針葉樹や落葉広葉樹が多用されていて地域差が感じられる。木本類は衣服・焚木・食糧・住宅・丸木舟・道具類・矢毒・薬・魔除・木幣などに、草本類は食糧・薬・魔除・呪術・住宅・衣類・履物・楽器などに使用されていることがわかる。それぞれの用途に合わせて、さまざまな植物が巧みに利用されていたことには驚かされるが、古代人と植物の関係も同様の状態だったと推測される。

日本においては無土器時代以降、各時代の生活様式に合わせて、木本類・草本類の栽培や利用を行なって、植物に対する知識は豊富になり、技術的に進歩して高度なものとなっていったと考えられる。こうした無土器時代からの長年にわたる植

表1-2 アイス民俗と植物(更科源蔵・更科光『コタン生物記I』より)

<木本類>	用 途 と 植 物
衣 服	(厚司) オヒョウ・オオバボダイジュ・ハルニレ(縫糸) ツルウメモドキ (染料) クルミ・カツラ・カシワ・アオダモ・ケヤマウコギ・ハンノキ・エゾマツ・キハダ・ガン コウラン
焚 木	(発火器) ハルニレ (薪) ヤチダモ・イタヤカエデ・アオダモ・ハンノキ・ナナカマド [火格子と して] (松明) シラカバ・ウダイカンバ
食 糧	(食用果実) カシワ・クリ・ヤマブドウ・サルナシ・ミヤマタタビ・ハマナス・エゾイチゴ・ク ロイチゴ・エゾノコリンゴ・アズキナシ・クロミノウグイスカグラ・アキグミ (茶) イソツツジ (調味料) ツルコケモモ (食用) マイタケ
住 宅	(柱) ハシドイ (梁・垂木) トドマツ
丸 木 舟	カツラ・ヤチダモ・ドロノキ・セン・エゾノバッコヤナギ・オオバヤナギ
道 具 類	(矢筒) ホオノキ(山刀柄・鞘) イタヤカエデ(矢柄・箆) エゾマツ(鉾先) ノリノキ(盆・木鉢・箕・ 臼・杵) ハリギリ(弓) イチイ(仕掛弓・槍・鉾柄) シウリザクラ(箆) コマユミ(雪輪・弓・箆) ヤ マグワ(弓補強) エゾヤマザクラ(矢柄・鏃・鉾) ネマガリダケ(杓子・鉾先) エゾマユミ
矢 毒	(矢毒) ニガキ(鉾毒) ナニワズ
薬	(補血剤・洗眼剤) ケヤマハンノキ(補血剤) エゾハンノキ(止血) シラカバ(下剤) クロウメモド キ(下剤・淋病薬) ミヤマウコギ(風邪薬・船酔薬) チョウセンゴミシ(湿布) ハナヒリノキ(利尿・ 下剤) ハイマツ(目薬) ヒロハノヘビノボラス
魔 除	イヌエンジュ・エゾニワトコ・キタコブシ・エゾノウワミズザクラ・ミズナラ・タラノキ・エゾ ウコギ・カンボク・ハイネズ
木 幣	ナガバヤナギ・カラフトキハダ・ミズキ・コシアブラ
<草本類>	用 途 と 植 物
食 糧	フキ・ヤブマメ・エゾエンゴサク・ギョウジャニンニク・ウバユリ・ザゼンソウ・エンレイソウ・ フユノハナワラビ・ニンジンソウ・クロユリ・エゾスカシユリ・クルマユリ・カタクリ・ゼンマイ・ ノビル・エゾネギ・オニノヤガラ・ガガイモ・ユキザサ・ハナウド・ヒルガオ・バアソブ・カラ ハナソウ・イチゴ類・ヤマゴボウ・ヒシ・コウホネ・コンブなど
薬	(婦人病) スミレ(腫れ物・発汗剤) ミズバショウ(発汗・婦人病・洗眼・湿布・膿れ物) フッキソ ウ(止血・腰痛) クジャクシダ(腫れ物) マイズルソウ(座薬・胃腸) オオアマドコロ(化膿止め) ウ ド(あかぎれ・腹痛) サイハイラン(湿疹) ハンゴンソウ(皮膚病) ノダイオウ(風邪・腹痛・打撲) ヤマシャクヤク(腹痛・下痢) ゲンノショウコ(打身, 腹痛) カラマツソウ(鎮痛・腫れ物) オオバ コ(打身) ミチヤナギ(利尿) ツリフネソウ(虫刺され・打身) ハコベ(痔) クサノオオ(腰痛) キジ カクシ(止血) ノコギリソウ(駆虫・神経症) エゾテンナンショウ(解毒) ショウブ(咳止め・止血・ 虫下し・鎮痛) ヨモギ(腫れ物・神経痛) エゾオグルマ(下痢止め・神経痛) ダイコンソウ(狩猟用 毒) トリカブト
魔除・呪術	クサソテツ・パイケイソウ・センダイハギ・オオバタケシマラン・ヒカゲノカヅラ
住 宅	(囲い・寝床) ワラビ(屋根・壁) ササ・カヤ(冬囲い) オオイタドリ(屋根・壁・天井・葺戸) アシ (敷物・寝具・天幕) ガマ(敷物) フトイ・オオカサスゲ・カサスゲ
衣類・履物	(織物) オオバイラクサ・ムカゴイラクサ(皮沓の保温) ワタスゲ
楽 器	(管楽器) ヨブスマソウ(柴笛) テンキグサ
そ の 他	(食用・桜紙) コジャク(やすり) トクサ(食用) スギナ(船の防水剤・おむつ) ミズゴケ
農 作 物	アワ・ヒエ・センダイカブ・ジャガイモ

物との密接な関係があったからこそ、樹木や草花を植えて観賞用の庭園をつくることが可能になったと言えるだろう。

二 「しま」(海洋風景式庭園)の伝来——飛鳥時代の庭園

飛鳥時代(六世紀末—七〇九)の農業を見ると、果樹・穀物については『日本書紀』の推古天皇二十四年(六一六)正月の条に「桃李、実^{みな}れり」、翌年の条に「五穀登^{いづののち}れり」、同三十四年正月の条には「桃李、花さけり」と記されている。弥生時代からすでにモモやスモモの栽培は始まっているので、果樹園もかなり増加していたと推測される。五穀はコメ・ムギ・アワ・マメ・キビ(一説にはヒエ)をいうが、開発が進んで田畑面積も増大していたのだろう。持統天皇七年(六九三)三月十七日には、五穀を補うために「桑・紵^{かろむし}(アサの一種)・梨・栗・燕^{あおな}蓍(カブラナ)」を植えることが奨励されている。実際にどのような植物が栽培されていたかは、平成二年(一九八九)度に発掘が行なわれた奈良県桜井市の上之宮^{うえのみや}遺跡によって知ることができる。遺物から六世紀後半から七世紀初頭にかけての遺構と判定され、庭園遺構と結論付けられているが、横穴式石室説もだされているように庭園遺構かどうかは、類似例がないために判断が困難なものだった「写真112」。排棄された食用植物遺物としては、ウリ・ヒョウタン・クリ・クルミ・モミ・モモ・ウメなどが検出されている。⁽¹⁷⁾

また、これまでに発掘された遺物から見ると、飛鳥時代の奈良地方では、スギ・ヒノキが曲げ物・鞘・削り物・建築材、モミ属が施設材・鞘・楯、二葉松類が施設材・笛・削り物、コウヤマキが祭祀具・織機材・棺・建築材・削り物、コナラ節が燃料材・鋤鋤類・建築材・梯子、アカガシ亜属が鋤鋤類・槌・施設材・工具柄というように、種類と用途を限定しながらもさまざまな木材を利用していることがわかる。⁽¹⁸⁾

ところで、『続日本紀^{しよくにほんぎ}』の慶雲三年(七〇六)三月十四日の条には、



写真 1-2 上之宮遺跡の出土状況（1990 年撮影）



写真 1-3 飛鳥島庄の方形園池の出土状況（1972 年撮影）

氏々の祖の墓と百姓の宅の辺とに、樹を栽ゑて林とすること、并せて周二、三十許歩ならむは、禁の限に在らず〔原漢文、以下同様〕。

とあるように、各氏の祖先の墓と一般農民の家の周囲に、樹木を植えて林とすることが許可されている。植物栽培についての知識と技法は、この時代には一段と高まっていたと感じられる。

飛鳥時代は庭園史上では画期的な時期であつて、庭園を築くことが大陸から伝わっている。『日本書紀』によれば、推古天皇二十年に百濟から渡来した男が、飛鳥の小墾田宮の南庭に須弥山と呉橋を築き、また、同三十四年五月二十日の蘇我馬子の死去の記事によると、馬子が飛鳥川の傍らの邸内に小池を掘つて小島を設けたことから、人びとは彼のことを「島大臣」と呼んだという。馬子は仏教導入も図っているように、新文化を摂取することを積極的に行なっていることからすると、大陸式の庭園をつくらせたのではないかと考えられる。こうした大陸の影響を受けた庭園の植栽が、どのようなものだったのかを見てみたい。

(一) 飛鳥浄御原宮の時代まで

方形の園池の植栽

昭和四十七年（一九七二）に飛鳥の島庄で、石積護岸を持つ一辺約四二メートルの巨大な方形の池が発見されている〔写真1-3〕。護岸は垂直な石積で、高い所では一・六メートルあり、池底には発掘した部分では直径三〇センチメートルほどの石が張られている。年代的には遺物から六世紀末から七世紀前半のものと見られている。この池は形態などから溜池ではなく庭園としてつくられたものと考えられているが、植栽については明らかになっていない。その後、昭和五十五年から平成五年まで行なわれた飛鳥の石神遺跡では礫を敷き詰めた方形の池が発見され、坂田寺跡や平田キタガワ遺跡で出土した園池も



写真1-4 韓国・雁鴨池のシダレヤナギ

方形の可能性が高いと言われている。⁽²⁰⁾

こうした園池の植栽がどうだったかを、同時代の朝鮮の文献や発掘事例に探してみると、『三国史記(百濟本紀)』の武王三十五年(六三四)三月の条に、

池を宮南に掘って、水を二十余里も上流から引き、周囲の岸辺に揚柳を植え、池の中に島をつくり、この島を方丈の仙人の住む山になぞらえた。⁽²¹⁾

とある。古代中国でシダレヤナギが愛好されていることからすると、「楊柳」はシダレヤナギを指しているのだろう。中国や朝鮮と交流が行なわれていたことから「写真1-4」、島庄の園池にも中国原産のシダレヤナギが植栽されていた可能性が考えられる。また、近年百濟の泗沘城^{しび}の王宮跡と推定されている官北里遺跡でも、方形の池が出土していて、ハスを植えていた痕跡が確認されている。ただし、この池底は石張りではなくて粘土になつていた。⁽²²⁾

『日本書紀』の舒明天皇七年(六三五)七月の条にも、「瑞蓮、剣池^{あやしきはちすつるぎのいけ}に生ひたり。一茎^{ひとこ}に二つの花あり」とあって、飛鳥の剣池にハスが植えられていたことがわかる。ハスはアジア南部などが原産地のようなだが、二〇〇〇年前の弥生時代の遺跡から種子が発見されている。池底が完全な石張りであれば根を張ることができないので無理だろうが、飛鳥の方池にハスが植栽されていた可能性は考えられる。



写真 1-5 復元された須弥山石像（飛鳥資料館）

飛鳥寺西の広場のケヤキ

観賞用の庭園ではないが、集会などに用いられた広場としての事例が『日本書紀』に見られる。飛鳥寺は崇峻天皇元年（五八八）に蘇我馬子が造立したもののだが、斎明天皇三年（六五七）七月十五日の条に「須弥山の像を飛鳥寺の西に作る。且、孟蘭盆会うらぼんのおがみ設く。暮ゆうべに観貨邏人とからに饗あえたまふ」とあるように、この寺の西の広場には須弥山像がつくられ、先祖の霊に供えものをして餓鬼に施し、冥福を祈る孟蘭盆会が行なわれて渡来人が招かれている。

中国では魏晋南北朝時代に姚興（ちょうこう）（三六六―四一六）という人物が、長安で須弥山を設けたということが『長安志（卷五）』に述べられているので、起源は中国にあったことがわかる。²³ 明治三十五年（一九〇二）に、飛鳥寺の西北から須弥山石像といわれているものが出土しているが、これに該当するとされている。発見された須弥山石像は、現在では実験の結果から噴水とする説が有力になっている【写真 1-5】。

これより先、皇極天皇四年（六四五）六月に中大兄皇子（のちの天智天皇）が中臣鎌子（藤原鎌足）らと蘇我氏を討っているが、同三年正月一日の条によると、彼らが親しくなったのは飛鳥寺の「槻きの樹（ケヤキ）の下」の打毬（蹴鞠？）の時だったという。同四年六月十九日に孝德天皇は群臣をこのケヤキの下に集めて忠誠を誓わせ、天武天皇六年（六七七）二月には、種子島の人びとをこの樹の下で饗応している。ケヤキの大本が重要視されていた

のは、なぜなのだろうか。孝徳天皇がケヤキの下で群臣を集めて誓わせたのは、巨木に対しての信仰心からのように思える。『万葉集』の中の大伴安磨（七一四年没）の歌に、「神樹」〔五一七〕という言葉があり、他に「三諸の神の神杉」〔二五六〕、「長谷の斎樹」〔二三五三〕と歌われているように、巨木は神が宿る所として大切にされ、手を触れることも禁じられている。現代では神社内の巨木を神木としているが、当時の人びとはすべての巨木に対して神が宿る場所と考えていたのではないだろうか。ケヤキの大木は広場の植栽としてもふさわしいことから、一層好まれるようになったのだろう。

（二）飛鳥浄御原宮の時代

島の宮のサツキ

飛鳥浄御原宮の時代（六七二―六九三）の代表的な庭園としては、島の宮が知られている。持統天皇三年（六八九）四月十三日に天武天皇の皇子草壁が亡くなった時、家人が島の宮に関して次の歌を詠んでいる。

み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも〔一八一〕
水伝ふ磯の浦廻の石上つつじ茂く開く道をまた見なむかも〔一八五〕

この邸宅が「島の宮」と呼ばれていたことは、『万葉集』の他の歌〔二七九〕からわかる。島の宮は蘇我馬子あるいは中大兄皇子の邸を天武天皇が引き継いだものという。上記の歌から海洋風景を写した「荒磯」があり、「浦廻」という言葉から湾曲した護岸を持つ園池だったと推測される。島庄で発掘された方形の池は、島の宮に関わるのかもしれないが、この歌のものではないことになる。植栽としては「石上つつじ」〔原本、石上乍自〕があつたことがわかるが、これはサツキとされている。河岸の岩壁などに生育することから、このような名前が付けられたのだろう。花が美しく常緑であることから、庭園に植えられたものと考えられる。

大津皇子邸のアセビ

同様に天武天皇の息子だった大津皇子は、反逆をくだてたとして朱鳥元年（六八六）十月三日に自害させられているが、その姉の大来皇女が死を悲しんで、

磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに「一六六」

という歌を詠んでいる。「万葉集」の本文の注には、「今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮より京に還る時、路のへに花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか」とある。

これに対して、大来皇女が都に帰ったのは十一月でアセビの開花時期（春）に合わないことと、島の宮の舎人の歌と同種だろうということから、磯を香具山の東北方の磐余の「訳語田の舎」の庭園とする説が出されている。²⁵「奥山の馬酔木」〔原本、馬酔〕の花「一九〇三」と歌ったものもあるように、アセビは山野に自生する植物であつて、海岸の磯の上に育つものではない。「磯」を島の宮の場合と同様に、園池のことであると考えれば解釈は容易になる。「磯のうへに生ふる馬酔木」という表現から、大津皇子の邸宅には海洋風景を模写した園池が存在していて、アセビが岸に植えられていたと考えられる。浄御原宮の時代には、このような海洋風景式の庭園がいくつかつづられていたのではないだろうか。

発掘された飛鳥京跡苑池の植栽

平成十一年（一九九九）に奈良県明日香村で、大正五年（一九一六）に酒舟石（京都の碧雲荘庭園に移設）が発見された場所から、七世紀後半の造営と見られる「飛鳥京跡苑池」が発掘されている〔写真1-6〕。飛鳥板蓋宮跡（六四三―六五五）と推定された一帯は、重複する遺構の上層部分は飛鳥浄御原宮の可能性が高まったことから、「飛鳥京跡」と呼ばれるようになっていて、その近くで発見されたことからこのような遺跡名が付けられている。水盤状の石造物や張り出し部分の石積の屈曲具合



写真 1-6 飛鳥京跡苑池の出土状況 (1999 年撮影)

は、韓国慶州の雁鴨池(七世紀後半)の給水路の泥溜めや中島の護岸に類似している⁽²⁶⁾ので、朝鮮の影響が考えられるが、すでに遣隋使や遣唐使が派遣されているので、中国の影響を直接受けている可能性も考えられる。この園池の堆積泥土の中からは、ハス・オニバス・センダン・モモ・カキ・ウメ・スモモ・ナシ・アカマツ・チョウセンゴヨウなどの植物遺体や花粉が見つかり、庭園にはこれらが植栽されていた可能性があるとされている⁽²⁶⁾。果樹類が多いのが特徴と言えるだろう。チョウセンゴヨウが朝鮮から運ばれたものかどうかが問題になるが、チョウセンゴヨウ類は氷河期時代には東北南部から北九州にかけて分布していたとされている⁽²⁷⁾。現在もチョウセンゴヨウは、本州では福島県以南から岐阜県までと四国では愛媛県内に見られるので、飛鳥時代に朝鮮から渡来したものではないだろう。

なお、この園池近くからは「嶋官(しまのつかさ)」と書かれた木簡が出土していることから、後の律令制の園池そのいけのつかさ司の前身だとされている⁽²⁸⁾。しかし、園池司は天皇の食事の素材となる魚や野菜を育成・管理する役職だったことや、飛鳥・奈良時代には庭園は「しま」と呼ばれていたことからすると、嶋官は園池司の前身ではなくて庭園の管理者と考えるべきだろう。また、木簡には薬の処方箋や、「波々支道花」というような薬草らしい名を書いたものが見つかっていることからすると、北側で発見された池状の遺構は薬草園の池の可能性が強い。古代において薬草は病氣治療

のための必需品だったから、飛鳥京内で栽培されていても不思議ではない。『日本書紀』の欽明天皇十五年二月の条には、百済が「採葉師」^{くすりかりはかせ}を送ってきたと述べられている。おそらくこの頃から本格的な葉草栽培が始まったのだろう。²⁹⁾

(三) 藤原京の時代

街路樹のタチバナ

藤原京は日本で都城制が採用された最初の都で、持統八年(六九四)十二月六日にここに遷っている。造宮の際には中国の北魏の洛陽城が規範とされたらしく、宮の北には二条分の余地があることも、洛陽城に類似しているという。洛陽城のこの部分には、華林園という庭園がつくられているが、藤原京のこの場所には「テンヤク」という小字名があり、「蘭司」「蘭官」と書かれた木簡も出土していることから、葉園を含む園池があったという推測がされている。³⁰⁾昭和四十五年の発掘調査では、内裏の東外郭地区で玉石張りの浅い池が検出されているが、植栽については判明していない。植栽に関連することでは、『万葉集』の藤原京の時代として分類されている歌の中に、「橘の蔭履む路の八衢(道の分かれる所)に」「一二五」とある。藤原京では街路樹としてタチバナが植えられていたことがわかるのだが、果樹を植えたのは救荒対策を兼ねていたのだろう。

『懷風藻』の庭園

天平勝宝三年(七五二)の序を持つ漢詩集『懷風藻』には、庭園を歌った詩が多い。詩の配列は作詩者の没年からすると、ほぼ没年順になっていると考えられる。藤原京の時代の庭園を詠んだ可能性が高い詩の中から、歌われている植栽についてまとめると表1-3のようになる。

葛野王の歌「二〇」は没年が慶雲五年(七〇五)なので、平城京造宮以前の詩ということになるが、浄御原宮時代か藤原京時代かは厳密には区別しにくい。「御苑」という言葉などから、「苑」を觀賞用の庭園と考えるのは問題で、「苑に入りて」と

表1-3 『懷風藻』の藤原京時代の庭園
(10・14は浄御原宮時代、24～44は奈良時代の作である可能性がある)

番号	作詩者	生 没 年	場 所	庭園形態	樹種〔()は場所〕
10	葛野王	669～705	御苑?	園?	梅
14	紀麻呂	705没	御苑	池	梅(階)・柳(堤)
17	文武天皇	683～707	御苑(藤原京)	園?	李
18	大神高市麻呂	657～706	離宮?(藤原京)	池	松(滝)・竹(池)・花
19・20	巨勢多益須	663～710	離宮?(藤原京)	池	松
24	美努浄麻呂	～705・708～	御苑	池	桃(階前)・柳(堤)・松
28	調老人	～689・703～	離宮	園?	梅
35	刀利康嗣	～710～	御苑	池	柳(堤)・松・花
37	大石王	～699・739～	御苑	池	梅
38	田辺百枝	～700～	御苑	池	松・梅
40	石川石足	667～729	御苑	池	花
42	采女比良夫	～704・711～	御苑	池	柳・山桜[紅色]
43	安部名	664～727	御苑	?	松・筠[タケ]・花
44	大伴旅人	665～731	御苑	池	梅

いう表現やウメを歌っていることからすると、食用などのための果樹を専用に植えた畑、すなわち果樹園である可能性の方が高い。文武天皇の「雪を詠む」「一七」に「園裏花李を看れば」と詠まれている場所は、文武の年齢からすると藤原京内あるいはその近辺だろう。この場合も果樹園とするのが妥当ではないだろうか。飛鳥時代には弥生時代からのウメやスモモの栽培技術を受け継いで、果樹園を盛んに営んでいたと考えられる。

紀麻呂の「春日 応詔」「二四」の詩も同様に時代が判別しにくい上に、場所は宮中なのか郊外の離宮なのか明らかではない。「瑤水花藻」陳く。階梅素蝶に闘きおひ、塘柳芳塵を掃ふ」という内容からすると、園池に面した御殿の前の階段横にはウメが植えられ、池の岸辺にはシダレヤナギが存在していたことがわかる。「芳塵を掃ふ」という表現から、「柳」はシダレヤナギと推定できる。大神高市麻呂の「駕がに従ふ、応詔」「二八」の歌は、「病に臥して已に白髪」と述べていることからすると、やはり藤原京時代のもと考えられる。この詩には「駕に従ふ上林の春。松巖鳴泉落ち、竹浦笑花新あらたし」とあって、離宮のマツ林の中の岩の上から滝が落ち、タケの生えている池のほとりには花が咲いているという情景を詠っている。離宮だったことから、原生林が破壊されたのちに生じたアカマツ林を背景とした自然的な庭園だったのだろう。藤原京時代の離宮としては、「白錦後苑しろにしきごえん」という名が『日本書紀』

の天武天皇十四年(六八五)十一月六日の条に見られるが、ここかどうかは判断しがたい。

なお、美努浄麻呂「二四」から大伴旅人「四四」までの詩は、場所が藤原京か平城京か判別できないのだが、これらを藤原京時代の作として庭園の植栽樹種を見ても、「梅・李・松・竹・桃・柳・山桜」の七種類しか現れていない。中国の詩文を模倣したからといって、どの詩にも同じ植物しか歌われていないことは異様な感じがする。藤原京の時代の庭園には、植栽植物の種類も数も少なかったのではないだろうか。

三 中国趣味の植栽——奈良時代の庭園

和銅三年(七一〇)三月十日に平城京に遷都が行なわれているが、「続日本紀」に収録されている同元年二月十五日の遷都の詔に「平城の地、四禽図に叶ひ、三山鎮を作し」とあるように、自然環境に恵まれた四神相応の土地だった。平城京造営以前の自然環境については、平城宮北側の市庭古墳周濠の発掘調査結果から知ることができる³²⁾。五世紀初めから八世紀初めまでの泥土層からは、スギ・マツ・モミ・ツガ・コナラ(カシ類を含む)・クリ・ウルシ・トネリコなどの樹木の花粉二五種類とイネ科・キク科などの草本類の花粉が検出されている。五世紀ですでにマツ・コナラ・イネ科植物などが多くなっているのは、古墳時代には水稻耕作が進み、原生林も伐開されて二次林が多くなっていたということだろう。植物の種類からみて、森林型や気候型は現在の奈良地方北部とほとんど差異がなかったと推定されている。

現在、天然記念物として保存されている春日山原始林は、暖帯性の植物だけでなく、温帯植物が錯綜して分布している場所として貴重とされている。ここにはソヨゴ・クロガネモチ・ナナミノキ・カゴノキ・ヒサカキ・ヤブツバキ・アラカシ・クロバイ・マツラニツケイ・アオガシ・ヤブニツケイ・シキミ・ヤマモモ・ツブラジイ・アカガシ・ツクバネガシ・イチイガシ・ウラジロガシ・ヒイラギ・ネズミモチ・カナメモチ・リンボクなどの常緑広葉樹や、イヌシデ・アカシデ・アサダ・



写真1-7 春日山原始林のアセビの古木

ウリハダカエデ・イロハモミジ・ケヤマザクラ・ウワミズザクラ・クマノミズキ・コナラ・エノキ・ムクノキ・アキニレ・カラスザンショウ・アカメガシワなどの落葉広葉樹、アカマツ・モミ・ツガ・スギ・カヤ・イヌガヤ・ナギなどの常緑針葉樹が見られる³³。古墳時代前には、このような原生林が奈良北部には広がっていたのだろう〔写真1-7〕。

平城京内に存在していた庭園については、『続日本紀』『万葉集』『懷風藻』などの文献からいくつか知られているのだが、所在地や形状については不明な点が多い。近年は発掘調査が進み、発見された庭園の数は増加していて、文献と発掘調査によって所在が確認されたものは一〇か所を越えている。平城宮を中心とした部分に庭園が多いのは、宮廷所属の施設や高級官僚の邸宅が配置されていたためと考えられる。文献や発掘調査によると、三位^{さんみ}以上の邸宅が二町（二町は約一万四四〇〇平方メートル）、四・五位が一町、六位が二分の一町ほどだったと推定されている。大庭園を造営するには、この程度の面積が必要だったのだろう。平城京内の邸宅には多くの樹木が植栽されていて、都の景観は整然として美しかったと思うのだが、実際はどうだったのだろうか。

(一) 平城京の大路と市の植栽

大路のシダレヤナギ

都全体の景観を考える場合には重要な要素となるので、平城京内の大路と市の植栽について触れておきたい。天平尺の一八〇丈(五四〇メートル)を基準にして方眼地割を行ない、各大路は原則として幅八丈(三四メートル)で割付け、中央の朱雀大路は二八丈(八四メートル)だったという。³⁴この大路に植えられた街路樹については、『万葉集』に大伴家持(七八五年没)が越中守だった時に都を偲んでつくった次の歌がある。

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路思ほゆ〔四一四二〕

この歌から大路にはシダレヤナギが植栽されていたことがわかる。唐の長安を詠んだ李白(七〇一―七六二)の詩「相逢行」に、「万戸垂楊の裏、君が家は阿那の辺」とあることなどからすると、唐の影響だろうか。³⁵藤原京の街路にはタチバナが植えられていたのと対照的になっている。

『類聚三代格(巻七)』に収録されている天平宝字三年(七五九)六月二十二日付けの乾政官(太政官に同じ)府には、畿内七道の諸国の駅路の両側に「菓樹(実のなる樹木)」を植えるべきだという、東大寺の僧侶普照の意見が掲載されている。その主旨は次のようなものだった。

道路は百姓の来去絶えず。樹その傍にあらば、疲乏を息するに足る。夏は則ち蔭について熱を避け、飢れば則ち子を摘みてこれを啖う。〔原漢文〕

果樹を街路樹として植えれば、夏には木陰になり、実は飢えをしのぐのに貴重だったということらしい。こうしたことか

らすると、街路樹としてシダレヤナギを植栽したことは、まったく景観的配慮だったことになる。

市の植木

平城京には東西の市が存在したが、この植栽については『万葉集』に、

東の市の植木この木垂るまで逢はず久しもうべ恋ひにけり〔三一〇〕

と歌われている。人びとが集まる場所だったことから、木陰をつくるために樹木を植えたのだろうが、樹種まではわからない。『日本書紀』の景行天皇十二年十月の条の海石榴市つばきち、雄略天皇十三年三月の条の餌香市えかのいち、敏達天皇十二年の条の阿斗桑市あつのくわいにはそれぞれツバキ・タチバナ・クワが植えられていたとする説もある²⁶。伝説的な話なので確信は持てないが、市には日陰をつくるために樹木を植えることが、伝統的に行なわれていたということだろうか。

(二) 文献から見た「しま」の植栽

『万葉集』の「しま」

『万葉集』によれば、奈良時代の海洋風景式の園池は、飛鳥時代の蘇我馬子の場合と同様に「しま」と呼ばれている。庭園を意味する「しま」という言葉は、『万葉集』には大伴家持が天平八年（七三六）十二月十二日に「古典二節」として、

春さらばををりにををり鶯の鳴くわが山斎い「原本は「嶋」そやまず通はせ」〔一〇一二〕

という歌などを引いていることからすると、古い語彙ということになる。天平宝字二年（七五八）二月に、式部省次官だった中臣清麿邸で行なわれた宴席での作ではないかと考えられる歌に、

鴛鴦（オシドリ）の住む君がこの山齋今日見れば馬酔木「原本、安之婢」の花も咲きにけるかも〔四五二〕

とある。清麿邸での歌に「君が家の池の白波磯に寄せ」〔四五〇三〕と詠まれていることから、この「しま」と呼ばれていた庭園には、海岸の荒磯を表現した石組が置かれていたことがわかる。

この庭園の植栽だが、別な歌には「磯松」〔四四九八〕とあり、類例としては橘諸兄（六八四―七五七）邸での歌に「松蔭の清き浜辺に」〔四二七二〕とあることから、海辺のマツ林を模して数多くマツを植えていたのではないかと考えられる。しかし、マツだけではなくて、中臣邸では先の歌のようにアセビやウメ〔四五〇二〕なども植えている。アセビを使っているのは、浄御原宮時代からの伝統だろうか。海洋風景を意識して造形しているものの、さまざまな樹木で飾りたいという気持ちが強かったのだろう。

『懷風藻』の庭園

『懷風藻』にも園池や流れのある庭園の情景が歌われている。すべての園池が「しま」の形態だったとは断定できないが、その可能性は強い。まとめると表1-4のようになる。

■御苑の植栽

御苑については、藤原総前の詩「八七」には「南浦・東浜」とあり、南側の岸は湾曲していて、東岸には小石が敷き並べられた州浜がつくられていたことがわかる。この場合は本格的な海洋風景式の園池だと言える。背奈王行文の詩「上巳」（最初の巳の日）禊飲、応詔「六一」は、三月三日の宴を詠んだものだが、「桃花曲浦に軽し」と述べているところからすると、御殿の前面には湾曲した汀線を持つ園池が存在していて、岸にはモモが植えられていたことになる。これも「しま」と呼べる本格的な庭園だったのだろう。安倍広庭の「春日宴に待す」〔七〇〕には、「堤上糸柳」とあるので、この園池は堤を築いて水を溜

表1-4 『懷風藻』の奈良時代の庭園

番号	作詩者	生 没	場 所	庭園形態	樹種〔()は場所〕
50	境部王	～717・721～	長屋王邸	?	梅・竹
52	山田三方	～692・721～	長屋王邸	流れ	柳・丹桂(築山)・紫蘭(坂)
54	同 上	同 上	御苑?	流れ	桃(築山)
61	背奈王行文	～721・727～	御苑	池	竹・桃(池)
66	田中淨足	～734～	長屋王邸	池	菊(岩前)
67	長屋王	729没	御苑	?	梅・桃・柳・蘭
68	同 上	同 上	長屋王邸(佐保)	池	桂(山)・菊(池)
69	同 上	同 上	長屋王邸(佐保)	流れ・池	松・桜・柳・瑠璃
70	安倍広庭	659～732	御苑	池	桃・蘭・柳(堤)
71	同 上	同 上	長屋王邸	流れ	松(流れ)
75	百済和麻呂	～707～	長屋王邸	?	梅・柳
82	箭集虫麻呂	～721・732～	長屋王邸	?	柳・梅
84	大津首	～707・730～	長屋王邸	池	梅・柳(門)
87	藤原総前	681～737	御苑	池	蘭・柳
88	藤原宇合	694～737	南池(宇合邸)	池	桃(池)・柳(岸)
90	同 上	同 上	長屋王邸	?	松(門)
94	藤原万里	695～737	宇合邸?	池	桃・李

めていたと考えられる。長屋王の詩「元日の宴、応詔」「六七」からは、御苑には「梅・桃・柳・蘭」が植栽されていたことがわかる。『続日本紀』によると、神亀年間(七二四―七二八)に主として朝廷の儀式が行なわれたのは「南苑」なので、これらの詩のほとんどは南苑を詠んだものではないだろうか。南苑については神亀四年(七二七)五月二十日の条に、「楯波池より飄風忽ち来りて南苑の樹二株を吹き折れり。即ち化して雉と成る」と記されている。

山田三方^{みかた}の詩「五四」の場所は、題詞に「三月三日曲水の宴」とあるから、平城京内の御苑か近郊の離宮だろう。この詩からは曲水の流れの形態と植栽を知ることができる。「錦巖^{きんがん}(美しい岩に)飛瀑^{ひはく}激^きき、春岫^{しゅんしゅう}(春の峰に)暉桃^{きとう}開く」と詠まれているから、流れの上手には滝が組まれ、築山にはモモが植えられていたと考えられる。『続日本紀』によると、神亀三年から天平二年(七三〇)にかけては、曲水の宴が行なわれるようになっていた。長屋王の死去(天平元年二月十二日)前という詩の配列順からすると、神亀三年の「南苑」、同五年の「鳥池^{うのいけ}の塘^{つたみ}」のいずれかに該当するのではないだろうか。

『懷風藻』の御苑の植栽植物をまとめてみると、「竹・桃・梅・柳・蘭」が挙げられているにすぎない。中国の詩文集『文選^{もんせん}』(詩

編』(六世紀前半)には植物として、

蘭(フジバカマ?)・榴(ザクロ)・烏榉(シブガキ)・梨・松・椅梧(イイギリ)・松柏(コノテガシワ)・菊・竹・桃・柳(シ
ダレヤナギ)・楓(カエデ)・芙蓉(ハス)・槿(ムクゲ)・李(スモモ)

などが見られる。⁽³⁷⁾『懷風藻』の植栽植物はほとんどが『文選』に出ている植物なので、中国趣味が植栽に大きな影響を与えていたと言えるだろう。

■佐保邸と新羅使

長屋王邸とされるものが平城京左京三条二坊で発見され、敷地の東南部からは園池跡も検出されているので「写真1-8」、『懷風藻』の詩文は佐保の邸宅(作宝楼)とに分けて考察することが必要になる。ここでは詩作が多い佐保邸だけを見ることにしたい。佐保邸の所在地については、左京一条六坊三―六坪という説が出されている。⁽³⁸⁾

「略」松烟雙びて翠を吐き、桜柳分きて新しきことを含む。⁽³⁹⁾嶺は高し闇雲の路、魚は驚く乱藻の浜。激泉に舞袖を移せば、流声松筠に韵く。

という長屋王の詩「六九」は、題に「於作宝楼」とあるので佐保邸に間違いない。嶺は邸内のことだとすれば築山と園路があり、州浜を持った池とそれに注ぐ流れも存在し、マツ・ヤマザクラ・シダレヤナギ・タケが植えられていたことがわかる。新羅からの使節を招いた時の長屋王の詩「六八」も、題詞によると佐保邸でのもので、植栽については「桂山・菊浦」と詠まれている。「桂」はキンモクセイと解釈されているが、モクセイの名が文献上で見られるのは、室町時代の辞典『下学集』(文安元年「一四四四」)が最初とされていることなどからすると、奈良時代にはまだ渡来していなかったと考えられる。中国の詩から言葉を借りているので、「桂」が実際には何を指しているのかは判断できない。キクは池の浦の荒磯石組付近に植えら



写真 1-8 長屋王邸園池の出土状況 (1999 年撮影)

れていたのだろう。キクが中国から渡来したのは八世紀末頃で、『懷風藻』で歌っているのは想像上のものにすぎないという説もある^⑩。しかし、佐保の邸かどうかは明確でないが、田中浄足が長屋王邸を詠んだ詩「六六」にも、「巖前に菊気芳し」というように写實的に書かれているので、すでにキクが渡来していたと考えてもおかしくはないだろう。

山田三方の詩「五二」も新羅使との酒宴の席だから、佐保邸の可能性が高い。この題詞には「商郊（郊外）」とあるので、平城京のはずれに位置していた佐保邸のことだと考えられる。庭園の描写も長屋王の詩と類似していて、「柳葉・蘆花・小山の丹桂・長坂の紫蘭」と詠われている。シダレヤナギがおそらく園池の周辺に植えられていて、池中にはアシが茂り、築山には丹桂が咲き、築山の長い坂には紫蘭が香りを放っていたということになる。「蘭」は中国の詩文から引用された言葉であって、本来はフジバカマを意味するのだが、『懷風藻』の詩句ではラン科・ユリ科・キク科などの草本類を総称しているのだろう。下毛野虫麻呂の詩「六五」もおそらく同日のもので、「南亭・北林」という記載からすると、北側に山林が続き南側には建物が存在していたと推測される。百済和麻呂の詩「七七」に「勝地山園の宅」と述べられていることから、佐保邸は景色のすぐれた山に臨

む林に囲まれた邸宅だったと考えられる。

■藤原宇合邸の植栽

藤原宇合邸の場合、「南池」「八八」という表現からすると主屋の南側に池は存在し、「池台」と呼んでいるのは池に臨んで高殿が建っていたからだろう。「浦に映ゆる紅桃」、「略」岸に低るる翠柳」と序に記されていることから、池の岸にモモとシダレヤナギが植えられていたことがわかる。藤原万里邸の詩「九四」は、宇合邸のことか明らかではないのだが、「池明らかにして桃錦舒く」とあることからすると、宇合の詩の「浦に映ゆる紅桃」という描写と合致しているので、同一の場所ではないだろうか。モモは春の花として好まれていたようだが、中国の詩人陶淵明（三六五―四二七）の詩の「桃源郷」を意味するものとして植栽されたのではないかと考えられる。『万葉集（巻十七）』の中の天平十九年（七四七）三月四日に大伴池主がつくった「七言、晩春の遊覧一首」は、「上巳の名辰（めでたい日）は、暮春の麗景、桃花^{まふた}暎を照して紅を分ち」と序に述べたのちに、「桃源は海に通ひて仙舟を浮ぶ」と歌い、その関連を示唆している。

（三）文献と発掘結果との相違

発掘された庭園

当時海洋風景式の庭園は「しま」と呼ばれていたわけだが、発掘の調査結果から庭園の植栽が明らかになっているものとしては、東院と左京三条二坊六坪庭園がある。文献との比較のために、これらを見ておきたい。

■東院の庭園

平城宮東南隅に位置する東院跡から、昭和四十二年（一九六七）と五十一年度から五十三年度の発掘調査で、東西五〇メー

トル、南北六〇メートルほどある園池が検出されている。園池は二時期のものが重なっていて、護岸周辺部に玉石を敷き詰めた下層の古い池は、遺物から天平年間（七二九―七四八）頃に築造されたもので、礫を敷き詰めた上層の新しい池は天平勝宝年間（七四九―七五六）に全面的に改修され、平安初期まで存続していたものと推定されている。

植栽については文献から、『続日本紀』の宝龜八年（七七七）六月十八日の条に「楊梅宮の南の池に蓮生^おふ。一茎に二花あり」と記されていることから、ハスが存在していたことがわかる。発掘調査の際には、新しい池の堆積土中の植物遺体の検出と花粉分析が行なわれている。枝葉などが出土したものの鑑定結果は、マツ属（二葉松）一八六点、ヒノキ四五点、ツツジ属・シキミ各一点、ヤナギ属九点、アカガシ亜属（アラカシ？）八点、センダン六点、スモモ亜属五点、サカキ・モモ・ツバキ・グミ属？・リョウブ各三点、サクラ亜属・シャヤン^{シャヤン}各二点、スダジイ・カキノキ・ネムノキ・クマシデ属・イボタノキ属？各一点だった「図1-1」。花粉分析や種子の鑑定結果などから検討すると、ここにはアカマツ・ヒノキ・ウメ・モモ・センダン・アラカシの六種が植栽されていた可能性が最も高く、ついでヤナギ類・サクラ・ツバキ・ツツジ類などが可能性がある^④と推定されている。出土状態からすると、東岸の北側岬部分にはアカマツ、東側の中島付近にはヒノキが植えられている^④と考えられている。

■左京三条二坊六坪庭園

左京三条二坊六坪の庭園は、昭和五十年に発掘調査によって発見されたもので、現在「宮跡庭園」という名称で復元整備されている。園池は全長五五メートルで、幅は二七メートルだが、S字状に蛇行していて、水深は二〇―三〇センチメートルと浅い。池底は全面玉石張りで、荒磯石組が要所要所に配置されている。東院と同様に、庭園部分が主要家屋とは分離^{くわん}していて、後園と呼ばれる形態になっているのは、この時代の特色だろうか。園池の造営年代は出土遺物から、天平末年から天平勝宝年間（七四八―七五六）頃と推定されている。

園池の泥土中からはクロマツ球果六一個、モモ・ウメ核各五個、センダン核七個と種子三個、ウツギ果実九個、ゴキズル

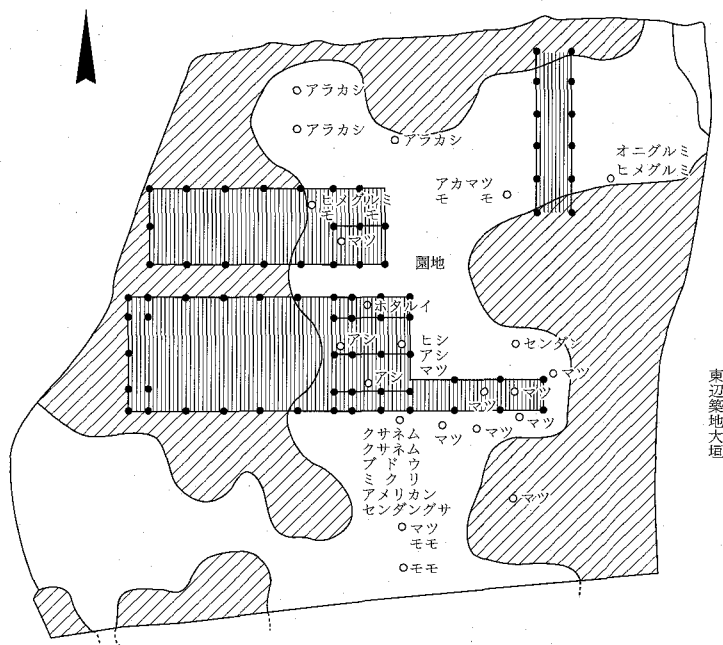


図1-1 東院園地の果実・種子の出土地点（『平城宮整備調査報告Ⅰ』より⁽⁴²⁾）

種子三個、ヒルムシロ果実・ヘラオモダカ種子各一個などが出土している。報告書は「クロマツが植えてあったと考えられなくもない」とするが、センダン・モモ・ウメなどが植栽されていた可能性も高いだろう。クロマツが現在と同様に近辺に自生していなかったとすれば、海洋風景式の園地であることを意識して、海岸地帯からクロマツを移植していたことになる。

文献との比較

庭園植栽についてこの二例の発掘調査結果と文献を比較してみると、「しま」と呼ばれた海洋風景式の園地では、マツが主木であり数も多かったことが発掘調査で裏付けられたわけである。発掘結果からすると、海岸のクロマツをわざわざ移植していた可能性もある。

詩歌ではマツの他に、ウメ・シダレヤナギ・モモ・サクラ・スモモ・アセビ・タケ・キクなどが詠まれているが、発掘調査からは、アカマツ・クロマツ・ヒノキ・ウメ・モモ・センダン・アラカシ・ヤナギ類・サクラ・ツバキ・ツツジ類などが植えられていた可能性が高いとされている。文献ともほぼ一致するのだが、詩歌に詠まれたものは花が

美しいとか、葉・枝などが風情のあるものではなかったかと思う。

(四) 貴族邸宅の一般的庭園

「やど」の植栽

奈良時代の貴族がすべて「しま」のような本格的な庭園を所有していたわけではない。『万葉集』を見ていくと、「やど」という言葉を使った歌に、庭園的描写が多いことに気付く。例えば、

わが屋戸の秋の萩〔原本、芽子〕咲く夕影に今も見てしか妹が光儀を〔一六二二〕

というような歌がある。「わがやど」というのは、本来「私の家」という意味なのだが、邸宅内のすべてを指すことから、庭園も含むことになったものだろう。

「やど」という語を使った歌から植物を搜すと、木本類では「松・橘・梅・桜・蛙手かえりて（カエデ）・梨・柳・桃・芽子はぎ（ハギ）・藤・山吹・竹」などがあり、草本類では「韓藍からあい（ケイトウ）・尾花おはな（ススキ）・瞿麦あざむぎ〔石竹〕（カワラナデシコ）・浅茅（チガヤ）」などが見られる。頻度からするとハギ・タチバナ・ナデシコ・ウメが多い。樹木類は邸宅内のどこか確定できないものが多いが、草本類は居住家屋の周辺だったと考えられる。

「屋外・屋前」の意味

庭園描写を含む歌に使われている「やど」という語だが、表記としては「夜杼・夜度・夜等・耶登・屋度・屋戸・屋外・屋所・屋前・宿」がある。表音表記ではない「屋外・屋前」をなぜ使用しているのだろうか。『万葉集』の中では「には」という言葉は、「飼飯けひの海の庭好くあらし」〔二五六〕というように海面という意味もあるが、一般的には敷地内の平坦な場所を

指している場合が多い。『古事記(下巻)』に「かりとわ獨庭(狩場)」という用例があるように、古くは広大で平坦な所という意味が「には」にはあったのだろう。邸内の地面を指すようになってからは、植物があればそれを含めて「には」と呼ぶようになったらしく、『万葉集』にもいくつか事例が見られる。だが、植物が主になった場合には、「には」という言葉では不適當であるために、「やど」という語に「屋外・屋前」という表記をつくったのではないかと考えられる。家屋の外側、あるいは家屋の前面という場所を示すことで、庭園を意味させようとしたのではないだろうか。

『万葉集』の「屋外・屋前」を使用している歌を調べてみると、「梅・橘・柳・桃・芽子・瞿麦・浅茅」などが詠まれている。平安時代には主として草花を植えて一部に樹木を配したものを「前栽」と呼ぶようになるが、奈良時代にはまだあまり意識せずに、草花と一緒にさまざまな樹木を植え付けている。貴族で『万葉集』の編纂者でもある大伴家持(七一六―七八五)の場合を見ると、奈良の佐保邸に「瞿麦・橘・藤・芽子・梅」を植栽している。

八千種やちくさに草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つつ賞しのはな〔四三一四〕

という歌を作っていることからすると、季節の変化を告げる草木の花を家持は好んでいたらしい。園池を設けることはしないで、家屋から眺めて楽しめるように、樹木や草花を庭に植えていたらしい。おそらく、これが当時の貴族の一般的な庭園だったのだろう。

家持は天平十八年(七四六)から天平勝宝三年(七五二)まで越中国(現、富山県)に国守として赴任しているが、

いぶせみと 情慰こころなぐさに 石竹花なでしこ〔原本、奈泥之故〕を 屋戸まに蒔おき生し 夏の野の さ百合〔左由利〕引き植ゑて〔四一一三〕

と歌い、また、奈良に残っている妻に対して、

繁山しげやまの 谿边たにべに生おふる 山吹〔山振〕を 屋戸に引き植ゑて 朝露に にほへる花を 見る毎ごとに 思ひは止まず 恋し繁し

も〔四一八五〕

と述べている。彼は任地でもナデシコの種を蒔き、野山からユリ・ヤマブキを採ってきて庭に植えていたことがわかる。地方には本格的な庭園をつくる技術者がいなかったために、こうした植栽を主とした庭園がつくられていたのではないだろうか。

生垣・門の植栽

貴族邸宅の周囲は葦垣などのような垣根で囲まれていたようだが、一部には生垣も存在していたらしく次の歌がつくられている。

春されば卯の花〔原本、宇乃花〕ぐたし（ちらし）わが越えし妹が垣間は荒れにけるかも〔一八九九〕

この歌からは、家の周囲にはウツギの生垣が設けられていたことがわかる。また、生垣や垣根で囲うとともに出入り口に門を設置しているが、

うちなびく春立ちぬらしわが門かどの末うれに鶯鳴きつ〔二八一九〕

というように、門の近くには樹木が存在していた例がいくつかみられる。『万葉集』にはこの他に「わが門かどの五株いっも柳

六、「わが門の榎えの実」〔三八七二〕とあり、『懷風藻』では長屋王邸において「門柳」〔八四〕と詠まれている。これらの樹木は新たに植えたものもあつたかもしれないが、既存樹木を造成の際に保存していたことも考えられる。出入り口の景観を構成する要素として、樹木が重視されていたと言えるのではないだろうか。

(五) 果樹との関連

貴族邸宅の果樹園

果樹は当時は貴重な嗜好品だったから、果樹園で盛んに栽培されるようになっていたのだろう。のちの時代の庭園にも果樹が多く取り入れられるようになるので、果樹園と庭園用例に近い果樹の植栽事例を見ておきたい。

大伴家持が越中国守として赴任していた時の歌として、『万葉集』に次のものがある。

わが園の李の花か庭に降るはだれのいまだ残りたるかも〔四一四〇〕

「園」を庭園と見るよりも、隣接する果樹園のスモモの花びらが居住する建物の前の庭に散り積もっている、と解釈した方が理解しやすい。古代中国で果樹園を意味する「園」という文字が使われていることや、スモモが植えられていることから、「園」は果樹園を指しているとするのが妥当だろう。

同様の例を探してみると、家持の父である大伴旅人は、天平二年（七三〇）正月十三日に赴任先の大宰府の官邸で初春の宴を行なつて、

わが園に梅〔原本、宇米〕の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも〔八二二〕

と歌っている。この歌や他の歌からすると、かなりの数のウメが存在していたと考えられるので、シダレヤナギ〔八一七他〕や竹林〔八二四〕を添景として植えた、果樹園だったのではないだろうか。

この他にも中央の貴族の邸宅にも果樹園が存在したと考えられる例が見られる。橘諸兄邸での宴席での歌に、

橘「原本、多知婆奈」の下照る庭に殿建てて酒みづきいますわが大君かも「四〇五九」

というのがある。橘が多く植えられていた庭に御殿を建てたということは、本来この場所はタチバナだけを植えた果樹園だったのではないだろうか。果実が貴重なものだったことから、地方官僚の邸宅内にも果樹園が設けられるようになっていたと考えられる。

布施屋の果樹

奈良時代には調・庸などの租税の運搬人や旅行する人びとが宿泊できるように、主要街道に布施屋というものが設置されていた。『寧楽遺文（中巻、経済編上）』には東大寺東南院文書として「大和国十市莊券」と題したものが収録されている。これは宝亀二年（七七二）二月二十三日に、大和国十市にあった東大寺所有の布施屋の土地・家屋・樹木などについて調査確認したもので、樹木に関しては次のように記している。

雑生木合 捌拾参（八十三）根

棗（ナツメ）十七根 楊（ヤナギ）十九根 梨四根 槐（エンジュ）二根 檣莎（不詳）四根 栗五根 橡一根 加治木廿五根 枇（ビワ）一根 桃九根 梅一根 柿一根 標柱（目印の柱）一根

ナツメ・ナシ・クリ・ビワ・モモ・ウメ・カキなどは、果実が成ることから栽培されたもので、旅行者の用に供していたのだろう。果樹は農民の間で栽培されるようになっていたので、こうした場所にも植栽されるようになったのだろう。ヤナギは数の多さからするとシダレヤナギで、修景的に周囲に植えたものと考えられる。エンジュは中国原産で、花や果実が薬用になることから、この時代に伝わったのではないだろうか。「橡」は『万葉集』で「つるばみ」と呼ばれているものだろうが、クヌギかトチノキか判断しにくい。どちらにしても実が食用になり、樹皮は染料になっていたのだろう。「加治木」は『万

『葉集』では「たく」にあたり、コウゾあるいはカジノキとされている。⁽⁴⁶⁾紙・縄・織物などの原料になったもので、二五本も存在したのは利用価値があったからだろう。

(六) 恭仁京の庭園

天平十二年(七四〇)から同十六年まで、恭仁京(現、京都府相楽郡加茂町)が都になっている。『万葉集』には、

大日本^{おおやまと} 久邇^{くにな}の京^{みやこ}は うちなびく 春さりぬれば 山辺には 花咲きををり 河瀬には 年魚^{あゆこ}子^こさ走り^{ばし}〔略〕〔四七五〕

と詠まれているように、自然環境が美しい所だった。

この庭園については、『続日本紀』の天平十四年正月七日の条に、「天皇城北の苑に幸したまふ。五位已上^{うたげ}を宴す」と記されている。平城京では宮^{みや}(内裏・大極殿などを含む地域)の北側に松林苑と呼ばれる庭園が存在していて、近年その外周の築地塀が確認されている。藤原京では禁苑は宮の北側に存在していたようだが、京内だったという相違が見られる。唐の長安城では城外の北側に大明宮・西内苑があり、さらにこれを包むようにして広大な禁苑が造営されていた。平城京の松林苑は、藤原京よりもむしろ長安城の形態に近かったように見える。恭仁京の城北苑もその名称からすると、松林苑の配置形態を継承したものではないだろうか。平城京の松林苑は名前が示すように、マツ林を主体にしたものだったと考えられるが、城北苑は位置的には山際だろうから、アカマツ林を背景とした簡素な植栽だったのではないだろうか。

四 奈良時代までの植栽技法

飛鳥・奈良時代の庭園に植えられた植物、『万葉集』の「やど」という語を使用した歌にあるマツ・タチバナ・ウメ・サク
 ラ・カエデ・ナシ・シダレヤナギ・モモ・ハギ・フジ・ヤマブキ・タケ・ケイトウ・ススキ・ナデシコ・チガヤなどの植物
 を、当時はどのように入手・栽培していたのだろうか。また。後の時代に庭園に植栽されるようになった植物は、いつ頃か
 らどのような目的で栽培されていたのかを探ってみたい。

(一) 庭園植物の入手・栽培方法

薬用種子の利用

大伴家持が赴任先の越中国の館の庭にナデシコの種を蒔いていることは、『万葉集』に「情こころ慰なぐさに 石竹花を 屋戸に蒔き
 生おし」「四一一三」という歌があることからわかる。彼は若い時からナデシコが好きだったらしく、「わが屋外やうどに蒔まきし瞿麦」
 「二四四八」というように、自邸の庭にもナデシコの種を蒔いている。ナデシコは多年草なのだから、株分けをしたものをも
 らってきてもよさそうなのだが、なぜ播種をしているのだろうか。延長五年（九二七）成立の『延喜式（卷三十七、典藥寮）』
 に、薬としてナデシコの名が掲載されているのは、種子が利尿剤になるためらしい。薬として世に広まっていたから、種子
 を入手しやすかったのではないだろうか。

また、ケイトウについては『万葉集』の山部赤人の歌に、

わが屋戸に韓藍からあい植ゑ生し枯れぬれど懲りずてまたも時かむと思ふ〔三八四〕

とあり、別の歌にも「わが蒔きし韓藍の花」〔一三六二〕と歌われている。一年草であるから播種するのは当然だが、ケイトウも『延喜式（卷三十七）』に薬として「鶏頭子」という名で掲載されている。種子が止血剤などになることから、ナデシコと同様にケイトウの種子も盛んに採取されていたのではないだろうか。ただし、ケイトウの場合は染料としての利用価値も高かったらしい。

農業技術の応用

『万葉集』によると家持はユリとヤマブキも野山から採ってきて越中国の館の庭に植えているが、他邸の庭園のハギを詠んだ歌に次のようなものがある。

君が家に植ゑたる萩〔原本、芽子〕の初花を折りて挿頭かぶさな旅別るとち〔四二五二〕

「植ゑたる萩」とあるから自生ではなく、花が美しいことから移植していたのだろう。ウメは初春の花として多くの人に愛好されていたらしく、

去年こぞの春い掘こじて植ゑしわが屋外の若樹の梅は花咲きにけり〔一四二三〕

というように移植が行なわれている。フジについても、

恋しければ形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲きにけり〔一四七二〕

と歌われている。樹木の移植が技術的に容易になっていたのは、弥生時代以降、農業としてクリ・ナシ・ウメ・モモなどの

果樹やクワなどの移植を繰り返していたからと考えられる。

樹木の移植が日常化していたことから、『万葉集』中の天平宝字二年（七五八）一月六日付けの伴家持の歌「四四九五」の題詞に、「内庭（内裏の庭）に仮に樹木を植ゑ林帷（垣）と作して肆宴（宴會）きこしめす」とあるように、儀式の際に樹木を幔幕代わりに仮植することも行なわれたのだろう。

植林と挿し木

片岡のこの向つ峯に椎蒔かば今年の夏の蔭に比へむか「二〇九九」

という歌が『万葉集』の中にある。シイの実を蒔くということだが、果実をえるために樹木の種子を蒔くことは縄文時代から続いてきていて、技術的にも植林の知識は蓄積していたように思う。

古の人の植ゑけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし「一八一四」

柿本人麿の歌集に含まれていたものと本文の注にあるから、八世紀初頭以前の作だろう。スギの苗木を育成して植林を行なっていたことを、この歌は示しているのではないだろうか。スギが一〇〇年以上たっているとすれば、飛鳥時代初期あるいはその前の古墳時代まで植林の歴史はさかのぼることになる。

シダレヤナギについては挿し木が行なわれていたらしく、「小山田の池の堤に刺す楊」[三四九二]と歌われている。「刺楊（さしやなぎ）根張梓（梓弓）を」[三三二四]というように掛詞にまで使用されているのは、よほど一般に知られていたことなのだろう。果樹や薬用植物についても、挿し木で活着するかどうかを試みられていたに違いない。

植物の採取地

『万葉集』の中で、山上憶良(六六〇―七三三頃)は秋の野の「七種の花」として、

萩「原本、芽子」の花尾花「乎花」(ススキ)葛花瞿麦なでしこの花女郎花おみなえし「姫部志」また藤袴朝貌あさかぶ「朝皐」(植物不明)の花「二五三八」

と歌っている。他の植物の具体的な場所としては、「奈良山の小松」「二四八七」、「佐紀山に咲ける桜」「一八八七」、「春日野の藤」「二九七四」、「神名火川かんなび「略」山吹「山振」の花」「二四三五」、「宇陀うだの野の秋萩」「二六〇九」、「高円たかまきの尾花「乎婆奈」「二九五」、「高円の秋の野の上の瞿麦の花」「二六一〇」、「春日野の浅茅が原」「二九六」などがある。

こうしてみると、マツ・サクラ・ハギ・ヤマブキ・ススキ・ナデシコ・チガヤなどは周辺の野山から移し植えたもので、タチバナ・ウメ・ナシ・モモは果樹園から持ち出し、シダレヤナギは古くから修景的に植栽していたものと推測される。ただし、ナデシコについては、薬用に採取した種子を利用した場合もあったらしい。ケイトウは「韓藍」という名が示すように、古く朝鮮から薬用・染料として伝わったものが、花が美しいことから庭園に持ち込まれたものだろう。このような状況からすると、植物の移植・栽培技術はかなり進歩していて、一般にも広まっていたと考えられる。

(二)『風土記』の植物

常陸国の植物

『風土記』は朝廷が和銅六年(七一三)に諸国に命じて郡郷名・産物・土地の状況・伝承などを報告させたもので、一部の国の記録が残存している。産物の中には各地方に生育・栽培している植物の名が挙げられているので、当時の自然環境の状況と植物栽培の目的を推測することができる。

表1-5 出雲国意宇郡の植物(『出雲国風土記』より)

名 称	読 み	現代和名	名 称	読 み	現代和名
麦門冬	やますげ	リュウノヒゲ	葛根	くずのね	クズ
独 活	つちたら	ウド	牡丹	ふかみぐさ	ボタン
石 斛	いはぐすり	セッコク	藍漆	やまあさ	モンテン
前 胡	のぜり	ミシマサイコ	薇	わらび	ワラビ
高良姜	かうらはじかみ	ショウガ	藤	ふじ	フジ
連 翹	いたちぐさ	レンギョウ	李	すもも	スモモ
黄 精	おほゑみ	ナルコユリ	檜	ひのき	ヒノキ
百部根	ほとづら	ビヤクブ	杉[栢]	すぎ	スギ
貫 衆	おにわらび	オニワラビ?	赤桐	あかぎり	キリ?
白 朮	をけら	オケラ	白桐 [栢]	あおぎり	アオギリ
薯 蕷	やまついも	ヤマノイモ	楠	くすのき	クスノキ
苦 参	くらら	クララ	椎	しひ	シイノキ
細 辛	みらのねぐさ	サイシン	海榴 [椿]	つばき	ツバキ
商 陸	いをすぎ	ヤマゴボウ	楊梅	やまもも	ヤマモモ
藁 本	さはそらし	カサモチ	松	まつ	マツ
玄 参	おしぐさ	ゴマノハグサ	栢 [榧]	かへ	カヤ
五味子	さねかづら	サネカズラ	藥	きはだ	キハダ
黄 芬	ひひらぎ	ヒイラギ	楓	つき	ケヤキ

『常陸国風土記』によると、「櫟(イチイガシ?)・柴(クヌギ)・椎・栗・柞(コナラ)」などが混在した山林があり、社の林には「鶏頭樹(カエデ)・比之木(ヒノキ)・楡(ニレ)・榎(エノキ)・楓(ケヤキ)・椿・竹」なども生育していたらしい。また、海岸沿いには「松の林」が存在していたことも記されている。常陸国は現在の茨城県に当たっていて、常緑広葉樹林帯の北端に位置しているから、『風土記』の記述は現況とほぼ一致する。なお、香島郡(現、鹿島郡)の項に、沼尾の池のハスに関して「生へる蓮根は味気太だ異にして、甘きこと他所に絶れたり」とあり、以前の郡家(郡役所)の場所については「多く橋を跨ぎて、其の美味し」と記されているので、ハス・タチバナの栽培をしていたことがわかる。

出雲国の植物

『出雲国風土記』には、非常に詳しく植物名が記載されている。例えば意宇郡(現、松江市・安来市など)の項には、山野に生育している草木として表1-5のものが挙げられている⁽⁴⁸⁾。これらのうち、草本類は薬として利用されていたものが多い。平安時代に編集された『延喜式(卷三十七)』には、出雲国から貢進された薬草が五三種記載されているが、表1-5の玄参までのもの

はほとんど含まれている。しかも、すべてが中国の古い本草書にみえる薬草名と一致している。こうしたことからすると、薬用になるものとか薬草として栽培されていたものを、本草学者が採録したものと考えられる。⁽¹⁹⁾

他の郡では庭園植栽と関係があるものとしては、「芍薬（シャクヤク）・桔梗（キキョウ）・竜胆（リンドウ）・百合（ユリ）」などが挙げられているが、シャクヤクはボタンと同様に大陸から運ばれて来たものだった。これらはのちには観賞用として庭園に植えられるようになるのだが、『延喜式』に名前がみられるように当初は薬用だった。

播磨国・肥前国の植物

『播磨国風土記』には植物として、「柹（ヒノキ）・杉・真木（コウヤマキ）・栗・檀（マユミ）・槐（エンジュ）・杜（カツラ）・黄蓮（オウレン）・黒葛（ツヅラフジ）・山薑（ワサビ）」などが記されている。現在の兵庫県西南部に当たる所だが、山にはヒノキやスギが多かったらしい。エンジュは中国原産の樹木で、薬用として植えられていたものだろう。

また、『肥前国風土記』によると、松浦郡（現、佐賀県・長崎県の一部）の島々には、「檳榔（ビロウ）・木蘭（シモクレン）・枝子（クチナシ）・木蓮子（イタビカズラ）・黒葛・簞（メダケ）・篠（タケ・ササ類）・木綿（コウゾ）・荷（ハス）・莫（ヒユ）」が生育している。暖地性の植物が多くなっているのも土地柄なのだろう。クチナシは果実が染料として用いられていたことも考えられるが、クチナシと中国原産のモクレンは、『延喜式（卷三十七）』に薬として名が挙げられているように、当初は薬用として栽培されていたものだろう。

以上のことからすると、『風土記』に記載されている植物は、薬用・食料・木材などとしての利用という観点から収録されたものであることがわかる。時代が下がるにつれて、これらの植物の中から花や枝葉の美しいものが、庭園植栽として用いられるようになっていく。このような状況下で庭園用植物の種類は増加し、栽培・管理技術も進歩していったと推測される。

五 奈良時代までの特色

庭園の植栽は大陸から庭園が伝わってくる以前の、日本列島における無土器時代からの長年にわたる植物との密接な関係があつたからこそ、可能になつたものと言える。無土器時代には燃えやすい樹種や枝などを薪とし、ドングリ類を食料としていたと推測されている。縄文時代になると、木の実を採集するだけでなく貯蔵もするようになり、樹木の管理栽培も始まつたらしい。道具類の材料とした樹種も選択されていることからすると、樹木に対する知識もかなり持っていたと考えられる。弥生時代には、水田耕作や畑作が盛んに行なわれるようになるが、ウメ・カキ・スモモ・ナシ・モモなどの果樹栽培も行なわれている。古墳時代には、祭祀の対象となる樹木を移植するだけではなく、居住家屋の周辺に樹木を植栽することと始まつている。植栽の目的は不明だが、庭園植栽の初期の事例として考えることもできる。

また、アイヌ民族についての調査からは、木本類・草本類が生活に必要なすべてのものに、巧みに利用されていたことがわかる。古代においても、おそらく植物の利用は同様だっただろう。無土器時代以降、各時代の生活様式に合わせて、木本類・草本類の栽培や利用を行なつて、植物に対しての知識は豊富になり、技術的に進歩して高度なものになつていたと考えられる。

飛鳥時代になると、大陸から日本庭園の基になつた「しま」と呼ばれる海洋風景式庭園が伝えられ、海岸の風景を模してマツを数多く植栽している。文献からはサツキ・アセビなどの自生の花木が植えられていたことが知られていたただだが、発掘調査でハス・オニバスなどの水生植物や、モモ・カキ・ウメ・スモモ・ナシなどの果樹も一緒に植えられていたことが判明した。これらは食用よりも、花や実を眺めて楽しむためのものだっただろう。藤原京の時代の海洋風形式庭園の植栽は、ウメ・スモモ・マツ・タケ・モモ・シダレヤナギ・ヤマザクラというように種類が限られていて、数量的にも少なかったの

ではないかと感じられる。奈良時代には種類が増加して、マツ・ウメ・モモ・スモモ・サクラ・センダン・シダレヤナギ・ツバキ・アセビ・アラカシ・ツツジ類・ヒノキ・タケ・キクなどが植えられていたことが、文献と発掘調査からわかる。

奈良時代の貴族の一般的な庭園は植栽を主にしたものだったらしく、『万葉集』によると、木本類としてはマツ・タチバナ・ウメ・サクラ・カエデ・ナシ・シダレヤナギ・モモ・ハギ・フジ・ヤマブキなど、草本類としてはナデシコ・ユリ・ケイトウ・ススキ・チガヤなどが植えられている。マツ・サクラ・カエデといった、後の日本庭園には欠かすことのできない樹種が使われだしていることは、日本の伝統的美意識が奈良時代には生じ始めていたことを示している。マツの緑とサクラの花とカエデの紅葉が好まれたのは、四季の変化があることが大きく影響しているように思う。

一方、飛鳥時代の方形の池には、シダレヤナギやハスが植栽されていた可能性が強い。奈良時代にはウメやモモが好んで庭園に植栽されているが、こうした背景には中国文化の反映がある。各時代とも大陸からの新しい渡来植物が愛好されていくようになるのだが、その始まりだったと言える。ウメ・モモは弥生時代から果樹として栽培されていたものだが、飛鳥・奈良時代には花の時期に、果樹園で花見を行なうという庭園的な利用もされている。

『風土記』からは、大陸からさまざまな植物を取り入れて薬用として栽培していたことが知られる。ケイトウ・ボタン・シャクヤク・キキョウ・リンドウ・エンジュ・モクレン・クチナシなどは、当初は薬用とされたものだった。このような薬用植物が、次第に庭園に利用されるようになることは見逃せない。

庭園植物の入手の仕方を見ると、山野や果樹園から移植することや渡来植物の利用などがあつたことがわかる。植物の栽培技法としては播種・挿し木・移植などが見られるが、これらは稲作・蔬菜・薬草・果樹・造林などの育成技法を応用した高度なものだったと考えられる。こうした技法が存在したからこそ庭園植栽も可能になったわけで、以後の時代も他分野の栽培・管理技法が庭園へ及ぼした影響を考慮する必要がある。

ところで、日本の植物の種類の豊富さは、日本列島が誕生した以降の地殻変動や気候条件の変化によって、南方系や北方系の植物が入ってきたことによって形成されたものだった。氷河期の終息後には日本列島の主要部分は暖温帯に属するように

なって、気候が穏やかになったことが、日本の庭園植栽を美しくする基礎をつくったことを忘れてはならないだろう。

第一章 註

- (1) R・S・ソレッキ著、香原志勢・松井倫子訳『シャニ
ダール洞窟の謎』蒼樹書房、一九七七年、二二一・二三
二頁。
- (2) 岡本勇『先土器・縄文時代の食料生産』日本考古学
(三)、岩波書店、一九八六年、四一・四二頁。
- (3) 鈴木公雄『縄文時代はいつ始まったか』争点 日本の
歴史(二) 新人物往来社、一九九〇年、八二頁。
- (4) 西田正規『縄文時代の環境』『日本考古学(二)』岩波書
店、一九八五年、一一三―一二〇頁。
- (5) 潮見浩『縄文時代の食用植物』『日本考古学論集(二)』
吉川弘文館、一九八六年、四四六―四四九頁。
- (6) 安田喜憲『森林の荒廃と文明の盛衰』思索社、一九八
八年、九一・九二頁。
- (7) 西田正規、前掲論文、一五三・一五四頁。
- (8) 安田喜憲『環境考古学事始』日本放送出版協会、一九
八〇年、一三八頁。
- (9) 後藤直『農耕社会の成立』『日本考古学(六)』岩波書
店、一九八六年、一二八頁。
- (10) 寺沢薫『畑作物』『季刊考古学(一四)』雄山閣出版、一
九八六年、二二一―二二頁。
- (11) 松田隆嗣『木製遺物の樹種について』『池上・四ツ池遺
跡(六)』大阪文化財センター、一九八〇年、一三一―一
四一頁。
- (12) 山田昌久『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集
成―用材から見た人間・植物関係史』『植生史研究(特別
第一号)』植生史研究会、一九九三年、五・六頁。
- (13) 池浩三『家屋文鏡の世界』相模書房、一九八三年、三
一〇―三二三頁。
- (14) 本中真『飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構』『ランド
スケープ研究(六一―三)』日本造園学会、一九九八年、
一八九頁。
- (15) 群馬県北群馬郡子持村教育委員会『黒井峯遺跡発掘調査
報告書』『子持村文化財調査報告(一一)』一九九〇年。
- (16) 石毛直道『住居空間の人類学』鹿島出版会、一九七一
年、九四・九五頁。
- (17) 更科源蔵・更科光『コタン生物記(二)』法政大学出版
局、一九七六年。
- (18) 桜井市文化財協会編・発行『桜井市埋蔵文化財一九八
九年度発掘調査概要二』一九九〇年。
- (19) 山田昌久、前掲論文、三九頁。

- (19) 奈良県教育委員会『嶋宮伝承地 昭和四六―四八年度発掘調査概報』一九七四年、八・九、二四―三一頁。秋山日出雄「飛鳥島庄の苑池遺構」『仏教芸術』(二〇九)『毎日新聞』社、一九七六年、二〇―三一頁。
- (20) 高瀬要一「飛鳥時代、奈良時代の庭園遺構」、前掲『ランドスケープ研究』(六一―三)一九二―一九八頁。
- (21) 金富軾撰・井上秀雄訳注『三国史記』(二)『東洋文庫』(四二五)、平凡社、一九八三年、三八七頁。原文は、「穿池於宮南。引水二十餘里。四岸植以楊柳。水中築島嶼。擬方丈仙山」。
- (22) 亀田博「飛鳥地域の苑池」『檀原考古学研究所論集』(九)『吉川弘文館』一九八八年、四六六頁。
- (23) 井上正「神仙思想と山水」『特別展覧会山水目録』京都国立博物館、一九八三年、一二頁。
- (24) 清水卓二「万葉集の植物」『万葉集大成』(八)『平凡社』一九五三年、一六六・一六七頁。
- (25) 渡瀬昌忠「文学の場としての島の宮」『国文学』(二七―五)『学燈社』一九八二年、五二・五三頁。
- (26) ジャパン通信情報センター編・発行「奈良新聞記事」(一九九九年十一月二〇日)『月刊文化財発掘出土情報』(二二)『二〇〇〇年』六六・六七頁。
- (27) 鈴木公雄「縄文時代はいつ始まったか」『争点 日本の歴史』(二)『新人物往来社』一九九〇年、八二頁。
- (28) 日本経済新聞記事(二〇〇一年四月十七日朝刊)。
- (29) 上田三平著・三浦三郎編『改定増補日本薬園史の研究』渡辺書店、一九七二年、四頁。
- (30) 岸俊男「日本の宮都と中国の都城」『都城』社会思想社、一九七六年、一〇二―一〇九頁。
- (31) 橘は現在の何に当たるかについては、クネンボ・ダイ・ミカン・ニッポンタチバナなどとする諸説があつて一定しないので、読みに従つて以下、仮に現代和名をタチバナとしておきたい。
- (32) 竹岡政治「平城宮跡第一三次調査(市庭古墳周壕)樹木花粉分析」『平城宮整備調査報告Ⅰ』奈良国立文化財研究所、一九七九年、九四頁。
- (33) 筒井迪夫『万葉の森 物語の森』朝日選書(三七二)、朝日新聞社、一九八九年、八頁。
- (34) 八木充『古代日本の都』講談社現代新書、講談社、一九七四年、一三六―一三八頁。
- (35) 直木孝次郎『奈良』岩波文庫、岩波書店、一九七四年、二二二頁。
- (36) 坂本太郎・他校注『日本書紀(上)』『日本古典文学大系』(六七)、岩波書店、一九七四年、四八八・四八九頁。
- (37) 『文選(詩編・上)』内田泉之助・網祐次、新釈漢文大系(一四)、明治書院、一九七六年。
- (38) 大山誠一「長屋王家木簡と奈良朝政治史」『吉川弘文館』一九九三年、一三五―一三八頁。
- (39) 木村陽二郎監修『図説草木名彙辞典』柏書店、一九九一年、三四〇頁。
- (40) 斎藤正二『植物と日本文化』八坂書房、一九八五年、

一一九—一二三頁。

(41) 光谷拓実『古代庭園の植生復元』『文化財論叢』同朋舎出版、一九八三年、四八七—五〇〇頁。

(42) 粉河昭平『平城宮跡第99次発掘調査（東院地区東南隅園地）種子分析』、前掲『平城宮整備調査報告Ⅰ』九二・九三頁。

(43) 奈良国立文化財研究所編・発行『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』、一九八六年、二五・八四・八五・八九頁。

(44) 白鳥敦夫『総索引単語篇（四）』万葉集大成（二八）、平凡社、一九五五年。

(45) 倉野憲司・武田祐吉校注『古事記』日本古典文学大系

（一）、岩波書店、一九六九年、三〇四・三〇五頁。

(46) 清水卓二、前掲論文、一六八・一六九、一六二・一六三頁。

(47) 麓次郎『四季の花事典』八坂書房、一九八八年、三四三頁。

(48) 『風土記』の植物の現代名は次のものによった。松田修「風土記の植物」『植物と文化（二）』八坂書房、一九七一年、三六—五九頁。

(49) 伊藤清司「風土記と中国地誌」『風土記』、一九八四年、四三—六六頁、社会思想社。

II

寢殿 庭園の時代造

鎌倉時代の寝殿造庭園
(『春日権現験記絵』14世紀前半)

第二章 平安時代の庭園植栽

平安時代（七九四—一二九二）の庭園植栽については、古くは森蘊が植栽技法に関して論じ、近年は河原武敏が当時の物語・日記類・絵巻物・作庭書などから、庭園の植物と植栽技法について明らかにしている。^① 本章では、これまでの研究では総論的に述べられてきた庭園植栽の特徴を、当時の日記類を基にして、貴族や寺院の各庭園にどのような植物が植えられているかを、具体的に把握することを試みることにしたい。^② また、当時の植栽技術の進展具合を明確にすることで、平安時代の庭園の動向をさらに詳しく論じてみたい。

平安時代は四〇〇年にもわたるので、天徳四年（九六〇）の内裏焼失までの天皇親政時代を前期とし、^③ それ以後の摂関政治全盛時代を中期、応徳三年（一〇八六）の白河上皇による院政の開始から建久二年（一一九二）の鎌倉幕府成立までを後期、という三時期に区分して考察することにした。

一 平安京の概観

（一）平安京の自然

庭園植栽は周辺の自然環境と密接な関係にあるので、京都の自然環境の変化を概観しておきたい。左京区の八丁平湿原（標



キク（『草花絵前集』より）

高八一〇メートル)の花粉分析結果では、約四五〇〇—一五〇〇年前頃からミズナラ・シデ類・ミズメ・ブナ・ケヤキなど、現在と同様の冷温帯落葉広葉樹林になっている。一五〇〇年前からはマツが増加するが、これは人間による自然林の破壊によって、広域に分布を広げたアカマツに由来するものとされている^④。

一方、北区にある深泥池の調査によれば、六四〇〇年前頃から気候が温暖化したことから、コナラ亜属に代わってアカガシ亜属が優勢になった暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)が出現している^⑤。現在も京都市周辺の林にその面影を見ることができ、シイやアラカシを主としたもので、ツバキ・サカキ・ナメノキ・ヤブニツケイ・ヒサカキなどが混生する。深泥池においても縄文時代頃からマツが増加しているが、ソバの花粉も含まれている。池の周辺の山地を利用して、焼畑を始めたものと考えられている。遺跡の状況からすると、古墳時代には京都盆地内の開発は進み、奈良時代にはほぼ全域に条里制が実施されたのではないかと言われている。

しかし、山麓には原野も残っていたらしく、桓武天皇が延暦十五年(七九六)に狩猟を行なった場所として、大原野・紫野・日野・北野・栗栖野・水生野などの名が『日本後紀』に見られる^⑥。今日では都会化してしまったが、紫野・北野も狩猟ができるほどの未開の地だったのだろう。

(二) 平安京の規模

延暦十三年(七九四)十月に長岡京から京都に遷都が行なわれているが、平安京の規模は『延喜式(卷四十二)』(延長五年「九二七」編纂)によると、「南北一千七百五十三丈」「東西一千五百八丈」だった。発掘調査結果によると造営尺は一尺が二九・八三四九五センチメートルなので、南北は五二三〇メートル、東西は四四九メートルほどだったことになる。

中央に位置していた朱雀大路は、幅が「二十八丈(約八四メートル)」あった。『続日本後紀』の承和三年(八三六)七月二十一日の条に「雷雨[略]夜分に至り、朱雀の柳樹震う」「原漢文、以下同様」と書かれているので、朱雀大路にはシダレヤナギ

が街路樹として植栽されていたことがわかる。これは平城京に街路樹としてシダレヤナギが植えられていたことを踏襲したものでしょう。『延喜式（巻四十二）』によると管理者は左右京職で、「凡道路辺の樹、当司・当家これを栽う」「原漢文、以下同様」という仕組みで、「朱雀の樹を守るに四人」という管理体制になっていた。

貴族邸宅の規模についてはのちの記録になるが、『中右記』の元永元年（一一一八）十一月二十六日の条に、「初めて六角東洞院の新造亭に渡ると云々。これ法の如く一町の家にして」「原漢文、以下同様」とあることなどからすると、三位以上に一町（四〇丈四方）、四・五位に半町、六位以下に四分の一町が標準ではなかったかと推測されている。^⑧ 広大な園池を持つ庭園を造営することも、これだけの敷地の規模だったから可能になったと言えるだろう。

二 キク・タケからサクラの愛好へ——平安前期の庭園

（一）国風化までの庭園

平安前期は、政治的には天皇が強い権限を持っていた時期で、天皇親政期と呼ばれているように、庭園についても朝廷に所属するものが多く造営されている。この時期の前半は、平安京遷都（延暦十三年「七九四」）から九世紀半ばまでの中国文化の影響が強かった時代で、九世紀半ばから天徳四年（九六〇）までの後半は、文化的に日本化していく国風化の時期だった。

平安前期前半の貴族邸宅の庭園植栽を概観すると、園池の岸にはシダレヤナギやマツ、あるいは場合によってはキク・タケ・ミカン類もあり、池中にはハスやアシ、中島にはススキ、園路に沿ってはタケやシダレヤナギ、築山辺にはマツ、平地部分にはサクラやアオギリ、建物近くにはナシ・ノイバラなどが植栽されていたことになるのだが、個々の庭園は実際にはどのようなものだったかを見てみよう。

平安京内の邸宅

■中国様式の神泉苑

平安前期前半の代表的な庭園としては神泉苑がある。『日本紀略』の延暦十九年(八〇〇)七月十九日の条に、「神泉に幸す」^{みゆき}「原漢文、以下同様」とあるのが文献上の初見とされている。『拾芥抄』^{しゅうがいしやう}(鎌倉末期)の「東京図」によれば、南北四町(二町は約一二〇メートル)、東西二町という広大なもので、大内裏の東南角に位置していた。神泉苑という名称が示すように、自然の湧水があった所を庭園にしたもので、朝廷の行事の場所や歴代天皇の離宮として利用されている「写真2-1」。北側中央には

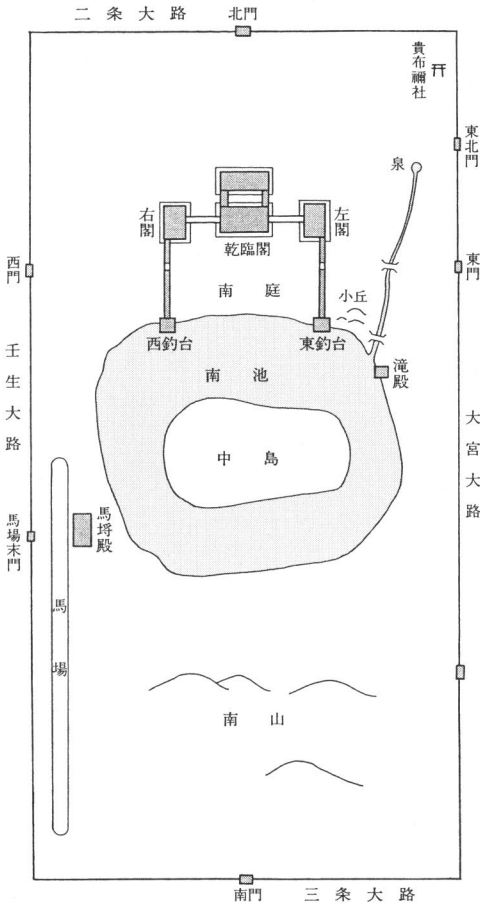


図2-1 神泉苑推定復原図(太田静六『寝殿造の研究』より)

正殿として乾臨閣^{けんりんかく}があり、その左右には閣が置かれ、中央には園池が掘られていたが、園池に接して東西に釣台が設けられていた。これらの建築は中国風のものであったと推測されている[図2-1]⁽⁹⁾。

苑内に関しては、『文華秀麗集』(弘仁九年「八一八」頃成立)に「神泉の古松に代りて衰へしを傷む歌」と題した詩「一二〇」があり、マツの古木が存在していたことがわかる。



写真 2-1 神泉苑出土の船着き (1991 年撮影)

『日本後紀』によると弘仁三年二月十二日に「花宴」が行なわれていて、以後年中行事化していくことからすると、かなり多くのサクラが植栽されていたと考えられる。『経国集(巻一)』(天長四年「八二七」成立)の滋野貞主の詩には、「上苑の楓林」〔原漢文、以下同様〕とあるから、カエデの林も存在していたらしい。また、『凌雲集』(弘仁五年頃成立)の菅野真道の詩に「竹疎にして竿節長く」〔原漢文〕とあるので、タケも植えられていたことがわかる。小野岑守の詩の「浦暗く橘柚の陰」という表現からは、園池の湾曲部分にミカン類が植栽されていたことが窺える。『経国集(巻二)』の太上天皇(嵯峨)の詩には「柳の岸」とあるから、園池の岸にはシダレヤナギが植えられていたことになる。

草本類としては、九月九日の重陽節のために岸边や丘にキクを植え付けていたことが、『凌雲集』の淳和天皇の詩に「岸頭に菊を洗い、早花低し」とあることや、先の『経国集(巻一)』の嵯峨天皇の詩に「芳菊の丘阜を望む」と詠まれていることからわかる。また、『凌雲集』には藤原冬嗣の詩に「蘆の洲」、良岑安世の詩に「靈沼の秋蓮」とあるから、池の州にはアシが生え、池中にはハスが植えられていたと考えられる。『日本後紀』の大同三年(八〇八)九月十九日の条には、「いかに吹く風にあ

ればか大島の尾花「原本、平婆奈」の末を吹き結びたる」いう平群賀是麻呂の歌が掲載されているので、園池の中島にはススキが植えられていたことになる。

斎藤正二は、奈良時代の貴族たちにとっては「竹を所有すること、竹を詩歌に詠み込むことは、ハイカラな中国文化を享受する証しであった」としている¹⁰。キク・タケ・シダレヤナギ・ミカン類を植栽している点是中国文化の影響が考えられるのだが、マツ・サクラ・カエデ・ススキを植えていることからすると、神泉苑の庭園はかなり日本的な様相を帯びていたことになる。

■冷然院のタケ

冷然院は弘仁年間（八一〇―八二三）に、嵯峨天皇（七八六―八四二）が譲位後の居所である後院として創設したもので、大内裏の南東角の東側に位置し、規模は二町四方だった。植栽については『文華秀麗集』の「秋日冷然院の新林の池」と題した詩「一一」に、「徑に栽うる晩竹（古い竹）」とあるので、園路にはタケが植えられていたことがわかる。「冷然院にして各一物を賦し、澗底（谷川の底）の松を得たり」という詩「一二三」の題からは、築山の間にはマツの老木が植栽されていたと推測される。また、『続日本後紀』の承和九年（八四二）七月十八日の条には、

冷然院の西釣台の東山辺の松樹一株、その高さ丈五尺許（約四・五メートル）の者、故なく自ずから折る。僉（皆）以て異となす。

と書かれているので、西の釣台の東側にあった築山の近くにも、高木のマツが存在していたと考えられる。

■淳和院のアシ

淳和天皇（七八六―八四〇）の後院だった淳和院（当時の名称は南池院）は、四条大路の北、西堀川小路の西に位置したものの

で、敷地は二町四方だったとされている。植栽については、『凌雲集』の嵯峨天皇の詩に「岸の柳」、小野岑守の詩に「梨庭露を帯びて冷葉落ち、蘆浦風を生じて水葉翻る」と詠まれていることから、園池の岸にはシダレヤナギがあり、池中にはアシが生え、平地部分にはナシが植えられていたことがわかる。

『文華秀麗集』の嵯峨天皇の「春日大弟の雅院」という詩〔四〕は、淳和院での作である可能性が高いとされている。「陽砌（陽の当たる軒下の石だたみ）新柳の色を見ると雖も」とあるから、主要な建物の近くにはシダレヤナギが植栽されていたのだろう。『凌雲集』の嵯峨天皇の詩に「風来たりて前浦煙を収めて遠く、鳥散じて後林暮んと欲して閑か」と詠まれているから、園池の後方は樹木が植え込まれて林になっていたらしい。『三代実録』によると、この淳和院は貞観十六年（八七四）四月十九日に焼失している。

寝殿造の庭園のつくり方を記した『作庭記』（一二世紀後半頃）には、

沼様は、石をたつことはまれにして、こゝかしこのいり江に、あし、かつみ、あやめ、かきつばたやうの水草をあらしめて、〔略〕

と書かれている。神泉苑や淳和院ですでにアシが池に植えられていたことからすると、「沼様」という庭園形態は意外と早くから生まれていたのではないだろうか。

■閑院のアオギリ

閑院は左大臣藤原冬嗣（七七五―八二六）の邸宅だったもので、『拾芥抄（中）』はその位置及び規模について、「二条南西洞院西一町」としている。植栽としては、『文華秀麗集』の淳和天皇の詩〔九〕に「竹・薔（ノイバラ）・松・梧（アオギリ）」が詠まれている。タケは「水竹」と言われているから、水辺に植栽されていたのだろう。マツは「長松」、アオギリは「老梧」と書かれているから、かなりの大きさのものだったように思う。アオギリはすでに『出雲国風土記』や『万葉集』に事例がある



写真 2-2 大覚寺大沢池の現況

が、中国の樹木として親しまれていたのではないだろうか。『凌雲集』の嵯峨天皇の詩には、「廻塘の柳翠に夕陽暗く、曲岸の松声に炎節寒し」とあることから、園池の岸にシダレヤナギやマツが存在していたことがわかる。

郊外の別荘

■嵯峨院とアカマツ林

嵯峨天皇が別荘として創建した嵯峨院は現在大覚寺となっているが、園池は残存していて「大沢の池」と呼ばれている〔写真 2-2〕。文献上は『日本後紀』の弘仁五年（八一四）閏七月二十七日の条に、嵯峨天皇が北野での狩猟の帰りに寄ったとあるのが初見になっている。植栽については、『文華秀麗集』の嵯峨天皇の詩〔二〕に「楊柳（シダレヤナギ）」とあり、淳和天皇の詩〔三〕に「窓を抱く梅」と歌われていることからすると、建物の近くにはウメが植栽されていたことになる。巨勢識人の詩〔一〇〕には「池の際に涼しきを追ひては竹影に依り、巖の間に暑を避けては松帷に隠る」と詠まれていることからすると、池際にタケが群植されていて、山腹の岩がある辺りはマツ林になっていたということだろう。先の淳和天皇の詩〔三〕には「攢（集まった）松の嶺上」とあるから、周辺の山の峰にもマツ（現在の植生から

するとアカマツが多かったと考えられる。嵯峨院は南側に大沢池が広がっていた、アカマツ林に囲まれた別荘だったことになる。

(二) 国風化時代の庭園植栽

平安前期後半の庭園植栽は、サクラが愛好されたことと、前栽という形で草花を植えることが流行して、マツ・ウメ・フジ・カエデ類・タケ・キク・ススキなど多くの庭園にいく種類もの植物が見られるようになったことが特色になっている。特殊な事例になるが、内裏内の建物に挟まれた中庭は小規模なものだったことから、タケ・コウバイ・フジ・ウメ・キリ・ナシといった花の咲く樹木が植えられている。また、平安京内の発掘調査から、カキやツツジ類も庭園に植栽されていたことも判明している。以下、詳細を見ていくことにしたい。

サクラの流行

九世紀半ばから天徳四年（九六〇）までの庭園植栽の特色は、サクラの流行と前栽の出現と言えるだろう。九世紀後半に源融は、のちには河原院と呼ばれるようになる自邸東六条院に、奥州塩釜の風景をかたどった庭園をつくっている。中国ではなく国内の名所を模写したものだことから、庭園史上では国風化の最初の事例だとされている。しかし、植栽という点から見ると、国風化はもっと早かったことになる。弘仁三年（八二二）二月十二日の神泉苑での花宴について『日本後紀』は、

神泉苑に幸し、花樹を覧る。文人に命じて詩を賦せしむ。綿を賜うに差あり。花宴の節此に始まる。〔原漢文、以下同様〕

と記している。サクラの花を眺めながら酒宴を行なうという花見は、この時から始まったとされている。

サクラについては、仁寿三年（八五三）二月三十日に右大臣藤原良房邸に、文徳天皇もんてくが見物に訪れたと『文徳天皇実録』にある。邸宅名は不明だが、『三代実録』によれば貞観六年（八六四）二月二十五日と同八年閏三月一日に、清和天皇が良房の邸宅染殿で花見を行なっている。おそらくこの邸宅だったのだろう。内裏については、『続日本後紀』の承和十二年（八四五）二月一日の条には「殿（紫宸殿）前の梅花」とあるが、『三代実録』の貞観十六年八月二十四日の条に「紫宸殿前の桜」と記されていることから、紫宸殿前のウメがサクラに替わったのも、この頃のことではないかと見られている^①。

『古今和歌集』（延喜五年「九〇五」撰）には、在原業平（八二五—八八〇）が河内国交野かたの（大阪府枚方市）の惟喬親王これたか（八四四—八九七）の渚院みづのいんにおいて詠んだ、次の歌が掲載されている。

世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし「五三二」

渚院には多くのサクラが植えられていたらしい。また、『日本紀略』によれば、醍醐天皇の皇后藤原穩子の邸宅二条院において、天曆三年（九四九）三月十一日に「花宴」が催され、天徳元年（九五七）三月十五日には仁和寺で「桜花会」が行なわれている。キクやタケといった中国文化の影響を受けた植栽が流行した中で、サクラを愛好することは進み、『古今和歌集』の時代には代表的な庭木になったと言える。

見わたせば柳さくらをこきまぜて宮こそ春の錦なりける「五六」

という『古今和歌集（巻第二）』の素性法師そせいの歌は、こうした状況を示しているのだろう。

前栽の出現

植栽上のもう一つの変化としては、「前栽せんざい」の出現がある。前栽という言葉は、『凌雲集』の「聖製、旧宮に宿るに和し奉る。応製。一首」と題した藤原冬嗣（七七五—八二六）の詩の中に、「前栽の細菊」とあるのが初見という^②。『古今和歌集（巻第

十六』には、前栽についていくつか歌が見られ、次のような例が記されている。

元ありし前栽も、いと繁く荒れたりけるを見て、
 君がうへし一群すゝき虫のねのしげき野辺ともなりにけるかな
 〔略〕 御春有助みはるのありすけ

また、「人の前栽に、菊に結び付けて植へける歌」という題詞「二六八」もあるので、ススキやキクなどの草本類を主として

植えていたと考えられる。

『古今和歌集（巻第四）』の歌からすると、前栽の形態をさらに発展させて庭園を秋の野の姿にしたものも生まれている。

仁にんのみちど和帝（光孝天皇「八三〇―八八七」、親王みこにおはしましける時、布留ふるの滝御覽ぜむとおはしましける道に、遍昭が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野に作りて、御物語のついでに、よみて、奉りける

僧正遍昭へんしょう

里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬かきも秋の野良なる「二四八」

とあって、遍昭（八一六―八九〇）が母の家に秋の草花を植えた庭園をつくっていることがわかる。『古今和歌集（巻第四・五）』の秋の歌から野の草花を探すと「はぎ」「萩」「をみなへし」「女郎花」「ふぢばかま」「藤袴」「すゝき・山となでしこ」などがある。おそらく遍昭はこのような草花を使って庭園をつくっていたのだろう。

貴族邸宅の庭園

平安前期後半の庭園植栽が具体的にわかる例としては、貴族邸宅としては朱雀院・河原院・藤原兼輔邸などがあるので、平安前期前半と比較してみたい。

朱雀院の老松

朱雀院は『拾芥抄(中)』によれば累代の後院とされたもので、「三条北朱雀西」にあつて、四町を占めていた。敷地が広がったことから、寝殿とは別に柏梁殿を中心とした建物群が存在したことが、この特色になっている[図2-2]。『続日本後紀』の承和三年(八三六)五月二十五日の条に「朱雀院」とあるのが、初見とされている。庭園については昌泰元年(八九八)九月九日の宴のことを、菅原道真(八四五—九〇三)が『菅家文章』の詩「四四三」の序に、

砂岸爛々たり、松江を縮めて階前に導く。[略]節重陽を過ぎて、残菊猶し旧氣を含めり。[略]老松弥いよ新青に染みにたり。

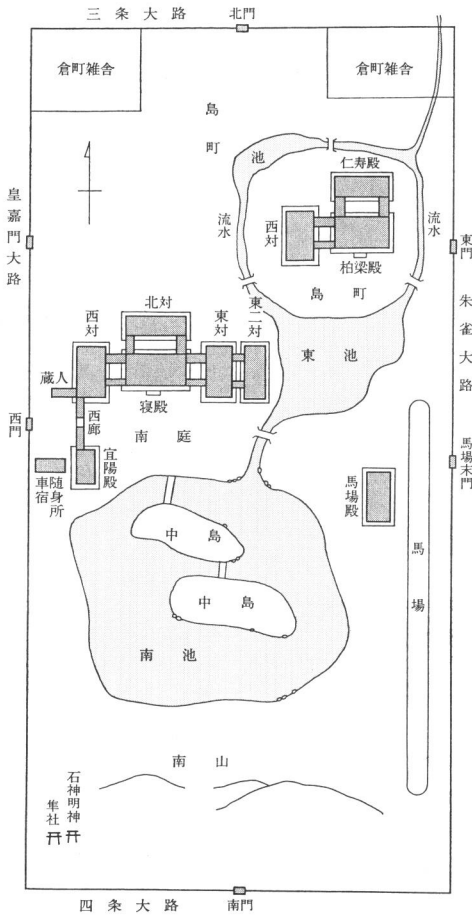


図2-2 朱雀院推定復原図(太田静六『寝殿造の研究』より)

と詠んでいる。続く詩に「潭菊」「岸松」とあるから、寝殿の前には州浜を持つ園池が広がり、水辺にはマツの老木がありキクが植えられていたと推定される。このマツはかなり優雅なものだったらしく、道真は「秋思寒松に入るを賦す」という詩「四四九」もついている。また、『日本紀略』の昌泰二年正月三日の条に「庭中梅花の詩を賦す」とあ

るので、ウメが存在していたことがわかる。『後撰和歌集』（天曆五年「九五二」頃成立）の大将御息所の歌「六一」の題詞には「朱雀院の桜のおもしろきことと延光朝臣の語り侍ければ」とあるから、サクラも数多く植えられていたらしい。

■河原院の塩釜の風景

河原院は嵯峨天皇の皇子源融（八二一―八九五）が造営したもので、『拾芥抄（中）』によれば「六条坊門南、万里小路東」に位置していた。敷地は当初は四町だったが、のちに八町という広大なものになったという。『古今和歌集（巻第十六）』に、

きみまさで煙たえにし塩釜のうらさびしくも見えわたる哉「八五二」

という歌が収録されていることから、奥州塩釜の海岸の風景を写した庭園として一層有名になったのだが、同書には植栽として「もみぢ葉」「八四八」が詠まれている。イロハモミジとも考えられるのだが、カエデ・ハゼ・サクラなどの落葉広葉樹を総称している可能性もある。

造営者である源融の没後は宇多天皇（八六七―九三二）の御所となり、塩釜の風景は残されただろうが、庭園の細部は改修された可能性が高い。宇多天皇が亡くなったのちの情景を詠んだ次の歌が、『拾遺和歌集』（寛弘二年「一〇〇五」―同四年頃成立）に収録されている。

河原院の泉のもとにすゞみ侍て 恵慶法師

松影の岩井の水をむすび上げて夏なき年と思ける哉「一二二」

庭園内には石を組んだ泉があつて、その近くにはマツが植わっていたらしい。「河原院の古松を詠み侍ける」という源道済の歌「四六一」もあるので、海岸の風景を写した庭園だっただけに、源融の時代からマツは多かったと推測される。

■菅原道真邸のウメとタケ

菅原道真（八四五―九〇三）がいう宣風坊の自邸は、『拾芥抄』の「東京図」によれば高辻の北、西洞院の東の「天神御所」に当たる。同書の本文に菅原院としている「解勘由小路南島丸西一丁」は、旧邸のことになるのだろうか。『菅家文草（巻第一）』に掲載されている「書斎にして雨ふる日、独り梅花にわか対ふ」と題した、貞観十六年（八七四）作の詩「六八」に「窓頭数箇の梅」とあるので、書斎としていた建物の窓近くに数本のウメが植えられていたことがわかる。年代からするとこれは旧邸の可能性が高い。

新邸の庭園については、寛平五年（八九三）七月一日作の「書斎記」〔五二六〕に、

東京の宣風坊に一家あり。家の伸ひびさるの維すゐに一廊あり。廊の南の極かぎりに一局あり。〔略〕山陰亭と号すは、小山の西にあるを以てなり。戸前かど近き側かたわらに、一株梅あり。東ひがしに去ること数歩にして、数竿竹あり。

と書かれている。家の南西側の廊下の南端に書斎を設けたが、築山の西側に位置していることから山陰亭と名付けたという。その戸の近くにウメが一株あり、東数歩の所に数本のタケが植えられているという。道真の詩からすると、この庭園には池は存在しなかったのではないだろうか。

タケについては「家の竹を思ふ」と題した詩「二二六」に、「三畝さんぼの琅玕ろうかん〔略〕始め旧宅の小園わがより分ちたりき」と述べられている。タケを旧宅の庭園から株分けしてきて植えていたことがわかる。別の詩「二一四」に「青き烟けなりなす竹の下、白き沙の庭」とあるから、タケを植えた庭には白砂が撒かれていたことになる。また、「白菊に寄す、四十韻」という詩「二六九」に、宣風坊の邸宅のことを「遙はるかに思ふ白菊の園」として、シラギクを植えていたことを思い浮かべている。道真がウメを愛好していたことは有名だが、タケやキクも好きだったように感じられる。

■藤原兼輔邸の遣水

藤原兼輔（八七七—九三三）邸については、『後撰和歌集』の彼の歌「二七」の題詞に「前栽に紅梅をうへて」と書かれ、「宿ちかく移して植へし」と歌にあるから、寝殿の前面にコウバイを植えたのだろう。また、三条右大臣の歌「一二五」の題詞に「（兼輔邸の）藤の花咲ける遣水のほとりにて」と説明されていることから、遣水の近くに大きなフジが茂っていたことがわかる。

■別荘の薬草園

菅原道真が仁和元年（八八五）九月二十六日に訪れた阿波守平某の河西（桂川の西）の別邸の庭園について、『菅家文章（巻第二）』に「晩秋二十詠」と題した詩を連作している。この中の「薄霧」という題の詩「一六四」に「菊壇（菊を植えた小さな土の盛り上がり）」という言葉があり、キクをまとめて植えた花壇のようなものがあつたと推測される。「小松」という詩「一五四」には、「小松「略」本是れ山中の種」とあつて、庭には山取りの小さなマツが植えられていたことがわかる。「疎竹」という詩「一五七」には、タケが「籬に在り」とあるから、周囲の垣にはタケが疎らに植えてあつたのだろう。「紅蘭」という詩「一五九」は蘭（フジバカマ）を詠んだものだが、「園は寒なり、葉を採る翁」と述べていることからすると、フジバカマには利尿効果などがあることから、薬草園に栽培されていたと考えられる。郊外の別荘なので敷地に余裕があり、薬草園を設けることもできたのだろう。

■大内裏の植物

天徳四年（九六〇）の焼失までの大内裏の植栽について見てみたい。大内裏域の内裏を除いた場所に関しては、『続日本後紀』の承和五年（八三八）八月十四日の条に「監物前の柳樹」とあり、『三代実録』の貞観元年（八五九）七月十九日の条に「内教坊の柿樹」、同年七月の条に「雅院の桜樹華く」、貞観十一年七月十三日の条に「武徳殿前の松樹」、『日本紀略』の昌泰二

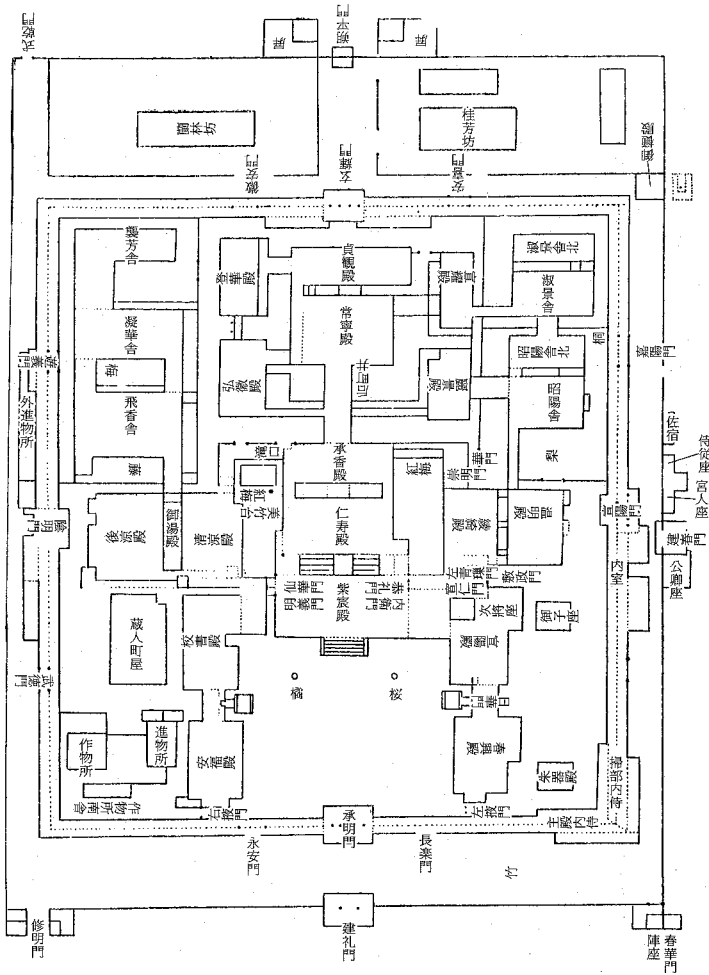


図 2-3 内裏の植栽（『拾芥抄』所収の「内裏図」）

年（八九九）六月四日の条に「監物局の枇杷の花」とある。「華く・花」とある以外は、それらの木に落雷があったという記録なので、建物の屋根以上のかんりの高木だったと推察される。このように大内裏域には、シダレヤナギ・カキ・サクラ・マツ・ビワというような、さまざまな樹木が植えられていたことがわかる。

内裏については『菅家文草（巻第五）』の「春、桜花を惜しむ」と題した詩「三八四」に、「清涼殿の東二三歩に、一の桜の樹あり。〔略〕花の北に五粒の松馬のたてがみの形をしたマツ）あり、〔略〕花の南に数竿の竹あ

り」と述べられている。サクラは古くからあつたものが枯れたので、同じ場所に植栽したという。また、『三代実録』の貞観十六年八月二十四日の条に「大風雨、樹を折り屋を廃す。紫宸殿前の桜、東宮の紅梅、侍從局の大梨等の樹木、名あるは皆吹き倒る」と台風で倒れた樹木を挙げている。また、『日本紀略』の昌泰二年六月四日の条には「東宮に藤花あり」、延喜二年(九〇二)三月二十日の条に「飛香舎に於いて藤花の宴あり」と記されている。同書の大慶四年(九四二)三月十五日の条に「承香殿東庭に於いて花宴あり」とあるが、「花」は当時はサクラを意味していた。天徳三年(九五九)十二月七日の条に「南殿なぐさでん・坤こん(南西)角に新たに橘樹一本を移栽す。高さ一丈二尺」と述べられているのは、紫宸殿の「右近の橘」の植え替えを指している。

以上のことからすると、内裏内にはサクラ・マツ・タケ・コウバイ・ナシ・フジ・タチバナが植栽されていたことになる。花木を多く植えているのは、建物に囲まれた狭い平坦な庭に変化と特色を持たせようとしたためだろう。宮廷に植えられていたこれらの植物は、当時の人びとに愛好されていた代表的な植物と言えるのではないだろうか。

『拾芥抄』所収の内裏図には、紫宸殿の南に橘と桜、清凉殿の東に竹と紅梅、飛香舎ひきようしゃの南に藤、凝華舎の南に梅、昭陽舎の南に梨、北東に桐、承香殿じやうかうでんの東に紅梅が記載されている[図2-3]。しかし、上記の文献と比較すると、紫宸殿と飛香舎は天徳四年の焼失までと同じ植栽だが、天徳四年までは清凉殿の東にサクラとマツ、承香殿の東にサクラが存在していたという相違がある。

■発掘された斎宮邸宅の植栽

京都市右京区の島津製作所内(平安京右京三条三坊)からは、針葉樹としてモミ・ヒノキ、常緑広葉樹としてアカガシ亜属・クスノキ、落葉広葉樹では花木としてウメ・スモモ・モモ・サクラ亜属・ナシ属・キイチゴ属・センダン・エゴノキ、花木以外ではハンノキ・ナラガシワ・ムクノキ・エノキ・クワ属・カジノキなどの遺体や花粉が発見されている。多くの湿地や川跡が検出されていることから、この場所は京都市域の原植生に非常に近い森林構成だったと推定されている¹³。平成十二年



写真 2-3 平安京右京三条二坊十六町の園池・泉遺構 (2000 年撮影)

にはこの東隣の京商高校グラウンド(右京三条二坊十六町)から、
 斎宮に関わる邸宅跡が発見された[写真2-3]。九世紀末から一
 ○世紀前葉の遺構で、東西一五メートル、南北四〇メートル、
 水深〇・五メートルの園池を持ち、植栽としてはカキ・カエデ
 類・ツツジ類・マツ類などが存在したとされている¹⁵⁾。上記の隣
 地に見られた原植生とは異なつて、観賞用の庭園らしい植栽が
 行なわれていたことがわかる。

三 浄土式庭園の誕生——平安中期の庭園

応和元年(九六一)の内裏焼失後から、院政が開始される前年
 の応徳二年(一〇八五)までの平安中期は、摂政・関白が天皇に
 代わつて政治を行なったことから摂関政治期と呼ばれている。

この時代の貴族邸宅内の寝殿造庭園の植栽について概観すると、
 園池の周囲にはサクラやマツ、中島にはツタあるいはフジが絡
 んだマツがあり、築山にはマツや落葉樹、遣水の近くにはオミ
 ナエシが植えられていたり、儀式の際にはキクが要所に仮植さ
 れていることが多かったということになる。当時流行しだした
 浄土式庭園の植栽を見ると、中島にマツ、岸にシダレヤナギが

植えられていたり、秋の野が設けられていた場合があったり、セキチクが一面に植え付けられていたというように、普通の貴族邸宅と変わりがなかったように見える。極楽浄土のイメージとしてハスは欠かせないものだったから、特色は園池にハスが植えられていたということになるのだろうか。それぞれの庭園を詳しく見ていくことにしたい。

(一) 寝殿造庭園

天徳四年(九六〇)の炎上以後、院政が始まる応徳三年(一〇八六)までの間、内裏はいく度も焼失を繰り返している。特に藤原道長(九六六—一〇二七)の生存期間中は多く、焼失は八回に及んでいる。内裏が焼失すると天皇は一時的に他の場所に移ることになるが、そのために堀河殿・東三条殿・一条院・二条殿・高陽院・京極殿(土御門殿)などが使用されている〔図2-4〕。これらの建物は里内裏さとないりあるいは今内裏と呼ばれているが、内裏としての機能を果たすために、大改造が行なわれることも少なくなかった。しかもこれらの里内裏はしばしば焼失を繰り返していて、平安中期に少なくとも堀河殿は一回、高陽院は三回、京極殿は四回、東三条殿は五回焼失している¹⁶。

この時期の貴族邸宅の建築様式は寝殿造で、中央に主人が住み客人に対応する寝殿があり、その左右及び背後に家人が生活する対屋たいのやが建てられていた。また、寝殿の前面に儀式のための南庭が置かれ、その南側には園池が掘られ、対屋から南側に延びた廊下の先には園池に臨んで釣殿が設けられていた。近年の建築史の研究によると、左右対称の建物配置は平安中期にはすでに崩れたものが見られるとされている。建物配置を大きく変えた原因の一つは、たび重なる火災にあったのではないだろうか。

『栄花物語(巻第十四)』には京極殿の寛仁二年(一〇一八)の再建について、

殿(建物)の造り様ざりさま、はじめは古体こたいの昔造なりしかば、屋の丈いと短くうちあはぬ事多かりしを、この度は殿(道長)の御心

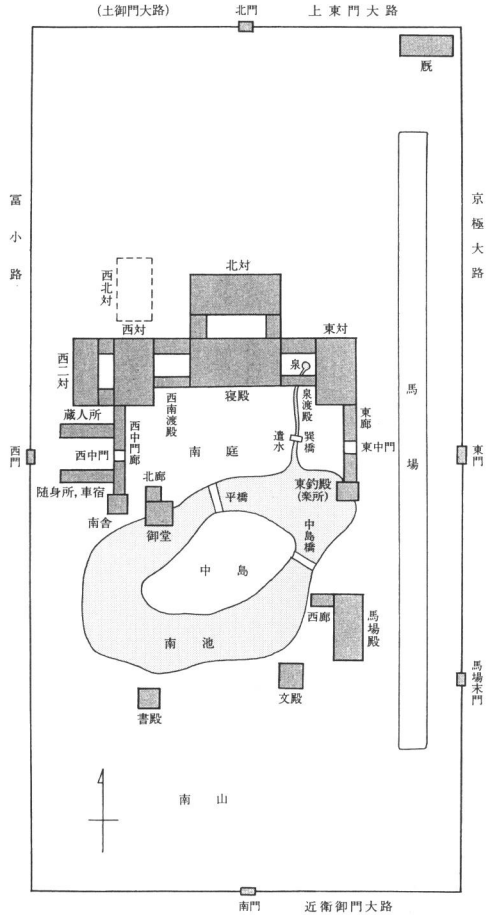


図2-4 土御門殿推定復原図(太田静六『寝殿造の研究』より)

火災にたびたび遭ったことから冷泉院^{れいぜいゐん}と改称されているが、天徳四年の内裏焼亡から翌応和元年(九六二)十一月二十日まで里内裏となつてゐる。『日本紀略』の応和元年三月五日の条に「天皇釣台に御し、文人を召して、桜花の宴あり」とあるように、花見が行なわれている。池に臨んだ釣殿の対岸には、サクラが植えられていたのだろう。『日本紀略』によれば翌閏三月十一日も釣台で「藤花の宴」が催されていることからすると、対岸の高木にはフジが懸かっていたと推測される。同書の応和三年六月九日の条には、「冷泉院西門南の大松樹風なく顛倒す」とあるから、西門の南内側にはマツの古木が存在していたことになる。なお、平成十二年(二〇〇〇)・十三年度に行なわれた二条城内の発掘では、冷泉院の園池跡と護岸石組の一部が出土している。

冷泉院の藤花の宴

天皇の後院だった冷然院は、うち合ふ限造らせ給へば、世にいみじき見物なり。とある。重要な邸宅であるために火災後すぐに再建されているわけだが、そのつど建築や庭園には工夫が施されて、形状は一層優美なものになっていったのだろう。植栽についてもかなり変化があったものと考えられる。

源高明の西宮

安和二年（九六九）の安和の変によって筑紫に流された源高明（九一四―九八二）の西宮は、『本朝文粹（巻第十）』の源順（九一―九八三）の詩「二九六」によって、岩を買って築山をつくり、池に塩を入れて海としていた邸宅として知られている。『拾芥抄（中）』によれば西宮は、「四条北、朱雀西」に位置していたという。庭園植栽については、先の源順の詩に「花塘（堤）映（は）えて深淺の影（かげ）縹（し）れし」「原漢文」と詠まれていることから、池の岸にはサクラが数多く咲いていたことがわかる。また、『順集』の詩「二」の題詞に、「にしの宮にちひさき紅梅をうゑさせたまひたりけるを」とあるので、小さなコウバイも植えられていることになる。

この西宮は『日本紀略』の安和二年四月一日の条に「員外師の西宮家焼亡す。残る所の雑舎兩三なり」とあるように、高明の配流直後に焼亡している。『惠慶法師集』に収録されている焼失後の庭園を見ての惠慶（九九二年頃まで活躍）の歌には、

松風も岸打つ浪ももろともに昔にもあらぬおとのするかな「九九」

とある。河原院と同様に園池の岸には、海辺の景色をつくるためにマツを植えていたのだろう。また、『栄花物語（巻第一）』（十一世紀後半）に、想像かもしれないが、「さまざまにさばかり植へ集め、つくろはせ給し前栽植木ども」が荒れてしまったと描いていることからすると、西宮の前栽には珍しい植物がそろえられていた可能性がある。

紫式部が見た京極殿

藤原道長の邸宅だった京極殿（土御門殿）は、『拾芥抄（中）』によれば「土御門南、京極西」に位置していたもので、当初は一町四方だったが、南一町をのちに加えたという。寛弘五年（一〇〇八）十月十六日に行幸が行なわれているが、このことを記した『紫式部日記』の巻頭部分には、庭園について「池のわたりの木ずゑども、遣水のほとりの草むら、をのがじゝ色づ

きわたりつゝ」と述べられている。また、東対から寝殿に通じる渡殿わたどのの下には遣水が流れていて、その南側には「女郎花（オミナエシ）」が植えられていたという記述もある。

行幸が近づいた九月十日すぎには建物の改修も進み、庭園も飾りたてられていくが、このことについては、

世におもしろき菊の根をたづねつゝ、掘りてまいる。色々うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植へたるも、

と、数多くの白や黄色のキクを植え込んでいることが書かれている。キクは移植が容易で花期も長いことから、秋の雰囲気を出すのにこのような形で利用されたと考えられる。行幸の当日には、池には竜頭りゅうとう鶴首くさきの船が浮かび、演奏の終わりには衆人たちが築山沿いの道を舞ながら退出しているが、「松風も、木深く吹きあはせて、いとおもしろし」とあることからすると、南側の築山辺にはマツが植栽されていたのだろう。『栄花物語（巻第七）』によると、「山の紅葉数を尽し、中島の松に懸れる鶯うすの色を見れば、紅・蘇芳すおうの濃き薄き、青う黄なるなど」という光景も見られたらしい。築山には落葉樹も多く、中島にはマツが植栽されていてツタがからんでいたことになる。

この京極殿は長和五年（一〇一六）に焼失し、前に述べたように寛仁二年（一〇一八）に再建されているが、『栄花物語（巻第十四）』は庭園について、

山（築山）の大きおほ（木）など失せにしこそ口惜しき事なれど、今ひき植へさせ給へる小木などは、末遙はるかに生先おいありて、頼しき若枝わかし覚えて、見所勝りてなむありける。

と述べている。大木などは皆焼けてしまったために、若木が植え付けられたことがわかる。

高陽院の「あやしき草木」

藤原道長の息子頼通が治安元年（一〇二二）に改造を行なった高陽院は、『拾芥抄（中）』によれば「中後門南、堀川東」にあり、同書の付図によると二町四方という広大なものだった。『榮花物語（卷第二十三）』には「寝殿の北・南・西・東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり」と述べられている。寝殿の四方に園池を設けるという当時としては風変りな邸宅だった。植栽や石組についても同書には、「あやしき（珍奇な）草木を掘り植へ、かどある（角張った）巖石を立て並べて」と記されている。『小右記』の治安元年九月二十九日の条に「五、六尺の立石を成らしめ、樹木を植えしむと云々」「原漢文、以下同様」と書かれているのも、同じことを言っているのだろうか。当時は伏せた石が多かったのに、一・五メートル以上もある立石を置いたというのは大胆な造形だった。植栽も同様に奇をてらったものだったのだろう。

『榮花物語（卷第二十三）』によると、行幸のあった万寿元年（一〇二四）九月二十日には、「みどりなる松の齡を争ふは汀に句ふ白菊の花」という歌がつくられている。庭園内にはマツがあり、池の汀にはシラギクが植えられていたことがわかる。また、同書（卷第三十二）によると、長元八年（一〇三五）五月十六日の歌合の際には、「常夏の匂へる庭は唐国に織れる錦もしかじとぞ思ふ」と歌われている。ナデシコは夏の代表的な草花として愛好されて、庭園に植えられていたらしい。

長暦三年（一〇三九）三月に高陽院は焼失し、翌長久元年十二月に再建されている。再建後の情景を『榮花物語（卷第三十六）』は、

山はまことの奥山と見え、滝木暗き中より落ち、池の面遙に澄み渡り、左右の釣殿などなべてならずおかし。

と述べている。築山には大木が多く移植されていて、滝も奥深く見えたというところだろう。『水左記』の治暦二年（一〇六六）三月十二日の条には、「今日主上馬場殿に渡り給いて花を御覧す」「原漢文」とあることから、馬場殿の周辺にはサクラが植えられていたと考えられる。のちのことだが、『中右記』の長治元年（一一〇四）三月十六日の条に、「左大臣殿高陽院において

馬場前の花樹の下で上げ鞠の興ありと云々」とあるから、馬場に沿ってサクラが植栽されていた可能性が強い。

(二) 浄土式庭園

庭園史上では、極楽浄土を表現した寺院の庭園を浄土式庭園と呼んでいるが、個人の邸宅内に堂を構えて前面に園池を設けた例も存在している。この浄土式庭園の植栽はどのようなものだったのだろうか。

慶滋保胤邸と『池亭記』

慶^{よしげのやすたね}滋保胤(一〇〇二年没)の邸宅は、『拾芥抄(中)』によれば「六条坊門南、町尻東隅」に位置していたもので、『本朝文粹』には彼が自邸について書いた『池亭記』が収録されている。「池の西に小堂を置きて弥陀を安ず」「原漢文、以下同様」というように、西方に極楽浄土が存在するという考えから、池の西側に堂を建て極楽浄土を主宰する阿弥陀仏をまつている。園池は理想とする極楽浄土の世界だったことになる。

庭園の植栽については、「緑松の島」「東岸の柳」と記されていることから、園池の中島にはマツがあり、東岸にはシダレヤナギが植栽されていたことがわかる。また、「北戸の竹」という表現からは、池の北側の主屋の裏に竹が植えられていたと考えられる。敷地内には「菜園」や水田が存在していたとも書かれている。菜園に草花が植えられていた可能性もある。文学的表現だろうが、これらの比率は「屋舎は十の四、池水は九の三、菜園は八の二、芹田^{きんたん}(水田)は七の一」だったという。

小野宮の秋の野

右大臣藤原実資^{さねすけ}(九五七—一〇四六)の邸宅小野宮は、『拾芥抄(中)』によれば「大炊御門南、烏丸西」に位置していた。この邸宅については『大鏡(第二卷)』に次のように記述されている。

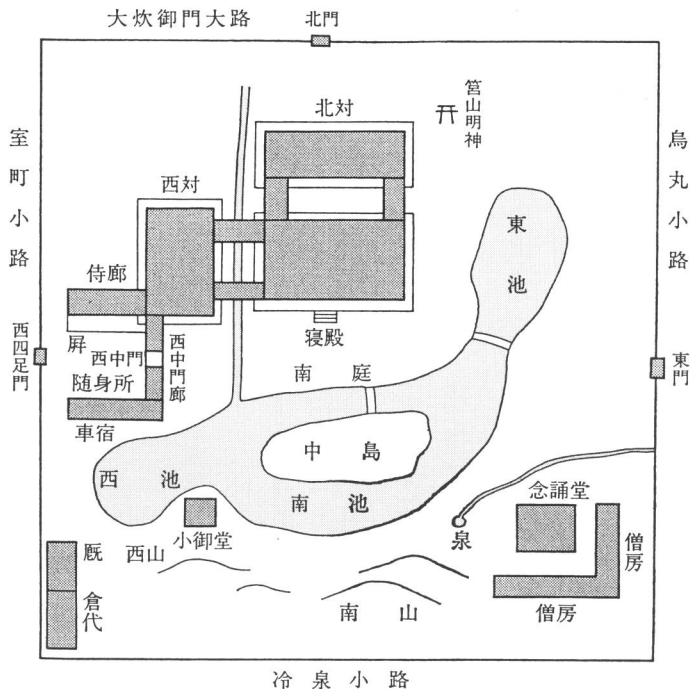


図2-5 小野宮推定復原図(太田静六『寝殿造の研究』より)

たつみのはうに、三間四面の御堂たてられて、「略」御堂へまいるみちは、御前のいけよりあなたをはるばると野につくらせ給て、ときどきのはな・もみぢをうへ給へり。

邸宅の南東に堂を建て、寝殿南側の園池から堂までの間を秋の野の姿につくっていらしい〔図2-5〕。この堂については、実資の日記『小右記』の長和四年(二〇一五)五月二十二日の条に、

南山の太木二本大風の為に吹き倒さる。南山に念誦堂を結構せんと欲すれど、太木の危きを思う為に、なお予、未だ思い定めざるの間すでに以て顛倒す。感悦これ宿念を遂ぐべきか。

と書かれている。池の南の築山の上には二本の太木があるために、念誦堂を建てられなかったのだが、大風で倒れたので堂を建てることにしたという。しかし、この太木の樹種まではわからない。

他の植栽については、同書の長和二年二月十二日の条に、「南池の北頭(南頭の誤りか)の紅桜樹」の下で湧水を発見したとあるから、南池の岸にはサクラが存在していたことになる。また、治安三年(一〇二

三) 八月二日の条に、

去る月西池に蓮生い出ず。〔略〕その後東池にまた生い出ず。〔略〕西山の小堂の西並びに北方に池あり。験徳あるべきに依りこの瑞応あるか。

と記されている。寝殿の東と南と西側に園池がつくられていたらしい。ハスは実資が長元四年(一〇三二)七月四日には東寺・広隆寺などに献じていることからすると、浄土の園池のハスのイメージで植えていたと考えられる。『百鍊抄(第四)』によれば天喜五年(一〇五七)十月二十六日に、この小野宮は焼亡している。

法成寺のハスと西北院のセキチク

本格的な寺院の例としては、藤原道長が寛仁四年(一〇二〇)に造立した法成寺がある。治安二年(一〇二二)の東宮行啓の際のことについて、『栄花物語(巻第十七)』に、

池の水清く澄みて、色々の蓮の花並み生ひたり。〔略〕東西南北の御堂々々・経蔵・鐘楼まで影写りて、一仏世界と見えたり。池の廻に植木あり。枝ごとに皆羅網(宝珠を綴って網とした物)かゝれり。

と書かれている。池中にはハスが植えられ、園池の周辺には樹木が植栽されていたのだろう。また、「池のめぐり・中島・御堂々々の御前の前栽に」(巻第十八)と記されているから、園池の周辺や中島、堂の前面には草花が植えられていたことになる。造営中のことについては、「力車にえもいはぬ大木どもを綱つけて叫びのゝしり引きもて上る」(巻第十五)と描写されているので、境内には大木が移植されていたと推測される。

法成寺境内の西北に位置していた西北院については同書(巻第十八)に、

南の方には、唐撫子（セキチク）をさながら（庭一面に）植へさせ給て、籬結はせ給へり。（からなでしこ ませゆ）「略」東の方には、様々色々の草前栽数を尽させ給へり。

と記されている。寺院に華やかに草花を植えていたのは不思議なことなのだが、貴族邸宅の影響があつたのだろうか。

四 大規模な郊外別荘の植栽——平安後期の庭園

応徳三年（一〇八六）の白河上皇による院政の開始から、鎌倉幕府成立前の建久二年（一一九二）までの、平安後期における貴族の別荘及び京内の邸宅、京都の寺社の庭園の植栽について考察することにした。この時期の庭園植栽を概観すると、サクラの愛好はさらに進んだようなのだが、サクラを数多く植えることは大規模な貴族邸宅や寺院境内などに限られていたのではないだろうか。寺院ではハスが浄土を表すものとして象徴的に植えられることを除けば、貴族邸宅も寺社も同様の樹木が植えられている。樹種としては文献から、マツ（アカマツ）・ヤマザクラ・シダレザクラ・コウバイ・シダレヤナギ・フジ・タケ・シユロなどが使われていたことがわかるが、鳥羽殿の発掘調査結果からすると、園池の周辺にはエノキ・ムクノキ・ヤマモモなどの山野の植物が植えられていたり、自生していた可能性が考えられる。

（一）天皇・貴族の別荘

鳥羽殿の発掘結果

白河天皇（一〇五三—一一二九）は、讓位後に院政を開始しているが、讓位する五カ月前の応徳三年（一〇八六）七月から、京

都の鳥羽に離宮の造営を開始している。鳥羽殿は朱雀大路から南に延びる「鳥羽作り道」の南端に位置していて、現在の城南宮一帯がその場所に当たっている。『扶桑略記(第三十)』の応徳三年十月二十日の条は、鳥羽殿の造営について次のように述べている。

公家近来九条以南の鳥羽山荘に新たに後院ごいんを建つ。凡百余町おおよそを卜ぼせり。近習・卿相・侍臣・地下雑人等じげざうにん、各家地を賜い、舎屋あやを营造うちかす。宛あたりも都を遷うつすが如し。〔原漢文〕

『本朝統文粹(巻第九)』の敦宗朝臣の詩にも「一名都を開く」〔原漢文、以下同様〕とあるから、藤原氏の勢力圏から脱して、新たに都を造営するという気持ちが出河天皇にはあったのだらう。先の『扶桑略記』によれば、御所を讃岐守高階泰仲がつくり、備前守季綱が山荘を献じたことから重任されたという。藤原氏に抑圧されていた中・下流貴族層を登用することで、院政は支持を受けていたとされている。

園池の規模については先の『扶桑略記』に、「南北八町、東西六町、水深八尺有余」とある。この広大な園池を中心に、その北岸に南殿(寛治元年「一〇八七」造営・北殿(寛治二年・馬場殿(寛治四年)・泉殿(寛治五年)・田中殿(承徳二年「一〇九八」・東殿(天仁元年「一一〇八」などの御殿群が建設された。これらの御殿の中には馬場殿を除いてそれぞれ、証金剛院(康和三年「一一〇一」・勝光明院(保延二年「一一三六」・成菩提院(天承元年「一一三二」・金剛心院(久寿元年「一一五四」・安樂寿院(保延三年)といった寺院が建立されて、園池と一体となった浄土世界が形成されている。¹⁹⁾

鳥羽殿の庭園植栽については、寛治四年四月十九日の行幸の際のものとされる『本朝統文粹(巻第九)』の大江匡房の詩は、「松樹池水に臨むを賦す」と題されている。場所は『中右記』の同日の条によれば馬場殿で、近くの池の岸にはマツが植栽されていたことになる。前掲の敦宗の詩も「仙洞に松竹多しを賦す」と題しているから、具体的な御殿名は不明だが、マツの他にタケが多かったことがわかる。

『中右記』の永長元年(一一〇九六)三月一日の条に、「時に庭の桜紛々(乱れ散り)、岸の柳依依いゝいとして(枝がしだれ)」と南殿の

状況が述べられている。寝殿の南庭側にはサクラがあり、園池の岸にはシダレヤナギが植えられていたらしい。『千載和歌集』の中の「堀河院（在位一〇八六一一〇七）御時、鳥羽殿行幸日」と題詞にある権中納言俊忠の歌には、

千歳^{ちとせ}すむ池の汀の八重ざくらかげさへ底にかさねてぞ見る〔六一三〕

とあるので、場所は不明だがヤエザクラも岸边に存在していたことがわかる。『宇槐記抄（台記）』の久寿元年（一一五四）二月十五日の条にも、鳥羽法皇と美福門院が勝光明院を訪れ、「殿庭の桜花を翫ぶ」「原漢文、以下同様」ということで歌をつくっていることから、鳥羽殿には数多くのサクラが植えられていたと推測される。

秋にはキクが植え付けられたらしく、西行（一一八一—一九〇）の歌集『山家集』の歌〔四六六〕の題詞に、

京極太政大臣（藤原宗輔）中納言と申ける折、菊をおびたゞしき程に仕立てて、鳥羽院にまゐらせ給たりけり。鳥羽の南殿の東面の坪（中庭）に、ところなきほどにうゑさせ給たりけり。

と南殿の壺庭の情景が記されている。園池については『百鍊抄（第六・七）』によると、保延四年（一一三八）六月二十四日に北殿の勝光明院の池に、仁平三年（一一五三）八月二日には南殿の証金剛院の池に、「一茎二花の蓮」が生じている。これらのハスは、浄土の雰囲気を醸し出すために植えられたものなのだろう。

造営中にどのように植栽が配慮されていたかは、北殿の勝光明院の造作過程を見ることがわかる。『長秋記』によると、保延元年（一一三五）八月二十二日に、「絵様（設計図）」に記した現況の樹木を切るかどうかを鳥羽法皇にたずねているが、法皇からの返事は、

霊木は暫く切り棄つべからず。御覧の後一定せらるべし。但し池際の柑子の樹、他所へ掘り遷すべし。〔原漢文〕

というものだった。九月二十六日には、中島の木を切ることにについては、図絵に描いて法皇の指示を受けるように決定され



写真 2-4 鳥羽殿金剛心院庭園の出土状況（1982 年撮影）

ている。既存樹木の保存に関しては、かなり注意が払われていたことがわかる。

近年、鳥羽殿跡周辺の開発が進み、それに伴って発掘調査が行なわれて次第に遺構の状況が明らかになってきている。昭和五十七年（一九八二）度の第七九次調査は、田中殿の金剛心院跡と推定されている所で行なわれ、建物基壇跡や園池の汀線などが検出されているが〔写真 2-4〕、園池の堆積物中からは木本類や草本類の種実などが発見されている。その分析結果によると、堂と園池の間の西岸部分にはサクラ・エノキ・センダン・ウメ・クリ・アカマツ（？）・ムクノキなどが存在していたと考えられている。近衛天皇陵周辺の東殿跡については、昭和五十八年度に行なわれた第八六次調査では園池汀線付近から、木本類としてはマツ（二葉・エノキ・カジノキ・サクラなどの種実が、昭和六十年度の第一・二次調査では、ヤマモモ・サクラ・センダン・カエデ・エノキ・カキノキなどが検出されている。引き続きこの近くで行なわれた昭和六十一年度の第一・七次調査では、アカマツ・サクラ・センダンの種実類が数多く検出されたことから、これらがこの調査域の主要構成樹木だったとされている。

その後、昭和六十二年度の白川天皇陵南側の第一・二次調査では、センダン・ムクノキ・エノキが多く検出され、そのほかの種実もすべて落葉広葉樹だったことから、落葉広葉樹がこの地域の景観を決定付ける要素になっていたと推論されている。昭和六十三年度の秋の山の北側の第一・二八次の発掘では、サクラ亜属・センダン・エゴノキのほかに、マダケ属の稗片も発見されている。平成元年度（一九八九）の近衛天皇陵の西

側で行われた第一三一次調査では、サクラ・センダン・カゴノキ・アカマツが多く検出され、わずかだがウメ・モモ・スモモの核も見つかっている¹⁹⁾。

こうした発掘結果や文献が示すように、主要な建物側にはマツ・タケのほかはサクラ・シダレヤナギ・ウメ・センダン・カエデなどのいわゆる庭木的な落葉広葉樹が主に植栽されていたと考えられる。発掘結果によるとエノキやムクノキも庭園に生育していたようだが、『兵範記』の仁平三年四月二十日の条に、金剛心院建立の場所を「馬場殿北の樹の北」〔原漢文、以下同様〕と定めたと述べられているように、馬場殿の北側には大木が存在していたらしい。エノキ・ムクノキなどの大木が、鳥羽殿内には所どころに茂っていたのではないだろうか。

伏見殿のカツラ

藤原頼通の息子だった橘俊綱（一〇二八—一〇九四）は、京都郊外の伏見に伏見殿と呼ばれる別荘を構えていたが、『今鏡（巻四）』によると白河上皇の「いちのをおもしろき（一番興趣がある）所はいづこかある」という問いに対して、俊綱は一番が石田殿、二番が高陽院で、三番は鳥羽殿でなくて、地形眺望がすぐれている自分の伏見殿だと答えている。

この伏見殿の植栽については、源師賢（^{もろかた}一〇三五—一〇八二）が「水辺桜花」という題で詠んだ次の歌が『詞花和歌集』（仁平元年「一一五一」頃成立）に掲載されている。

池水のみぎはならずはさくらばな影をも波におられましやは「二八」

眺望はすぐれていたが、植栽は鳥羽殿と同様に汀にサクラを植えていたことになる。『月詣和歌集』（寿永元年「一一八二」成立）には賀茂成助の歌「七六」の題詞に、「俊綱朝臣ふしみの家にうゑんとてかつらをこひて侍りければ、つかはすとてよみて侍りける」と書かれている。京都の賀茂神社のカツラを俊綱は伏見殿に移植したのだろう。カツラを植えるのは特殊なように感じられるが、『源氏物語（花散里・藤袴）』には、中河（京極川）近くの邸宅や玉鬘邸にカツラが存在していたことが描かれ

図2-6 法住寺南殿の庭園植栽（『年中行事絵巻』原本は12世紀後半）

ている。『枕草子（三七段）』の中で、花の咲く木以外で良いものとして「かつら」を挙げているのは、庭木として見ることが多かったからと考えられる。

（二）京内の邸宅の植栽

『年中行事絵巻』の法住寺殿

院政期に京内に造営された邸宅の代表的なものとしては法住寺殿がある。後白河天皇（一二七一—一九二）は、讓位後の応保元年（一一六一）にここに移っている。法住寺殿は現在の東山七条付近に位置していたもので、現存する三十三間堂も関連した建物だった。中心となっていた法住寺南殿の状況は、後白河法皇が制作を命じたという『年中行事絵巻（巻二）』によって知ることができる〔図2-6〕。正面に位置するのが寝殿で、右手には東釣殿があり、寝殿前面の左右にはコウバイが描かれている。他は描写が不完全なために樹種を判定しにくい上に、同じ南庭を描いた別の場面では樹種が異なるなど絵画の限界が見られる。しかし、寝殿前の南庭の植栽は絵巻に描かれているように、儀式のためと建物から園池を眺めるのに妨げとならないように、高木は少なく樹種も限られていたと感ぜられる。

図2-7 東三条殿の遣水の植栽（『年中行事絵巻』より）

儀式の際には樹木が配置の目安になっていたらしく、『中右記』によると天永二年（一一一一）八月二十日の京極殿（土御門殿）での相撲の際には、「南庭の樹木の中左右に各太鼓二面・鉦鼓^{しやうこ}二面を立て」というように、南庭が使用されている。

『年中行事絵巻』の東三条殿

平安前期に造営されて藤原氏の氏長者に代々伝領された東三条殿は、位置・規模は『拾芥抄（中）』によると「二条南町西、南北二町」というものだった。平安後期には重要な儀式が行なわれる場所になり、建物や庭園について多くの記録が残されている。『年中行事絵巻（巻六）』には東三条殿と推定されている図がいくつかあるが、図2-7からは南庭の遣水の状況がよくわかる。植栽としては遣水の手上に、アカマツとカエデのような落葉広葉樹が見られる。別本巻二の図2-8には、寝殿の西側にあった千貫泉と呼ばれた湧泉と、その南西側に存在した築山が描かれている。築山には低木がなくて、シダレヤナギと他の樹木が植栽されていたことがわかる。こうした簡素な植栽を当時の人びとは好んでいたのではないだろうか。

『本朝統文粹（巻第九）』の在良朝臣の詩「初冬右親衛納言の

書閣（東三条殿）に陪^{したか}い、松に遐年寿^{かねじゆ}（長寿）を献ずるを賦す」には、「時に前庭に松あり」と詠まれている。『台記』の仁平二年（一一五二）正月二十六日の条には、「反橋西の池岸、前栽の北」と記載されているから、園池の西側辺りには前栽がまとめて植えられていたのだろう。翌日の条には「寝殿の異角の梅樹」とあるので、寝殿の南東にはウメも植えられていたことになる。

築山の植栽の事例

当時の築山の例としては東三条殿の他に、里内裏となつた堀川殿や六条内裏などがある。『中右記』の嘉承二年（一一〇七）六月二十一日の条に、

皇居堀川院の南山の大樹折損す。疑うらくはこれ雷の所為かと。およそ未だ此の如くの事あらず。誠に以て希有なり。

とある。堀川殿の南側の築山の樹木が小高かつたために雷が落ちたのだが、まったく稀なことだとされている。

また、鳥羽天皇が里内裏として用いた六条内裏については、『中右記』の天仁元年（一一〇八）六月九日の条に、「この里亭の杖座（公卿が列座した座席）前に小山あり。樹木陰を合わせて、涼風来たらず」と記されている。寝殿の南側の築山の樹木が茂っていたために、風通しが悪かつたのだろう。同書の永久二年（一一一四）八月十一日の条に「仰せに云う、皇居六条殿の南殿並びに南庭甚だ狭少なり。節会の御装束よくせず」とあるように、寝殿や南庭が狭かつたことが原因なのだろう。

特殊な例になるが、『平家物語（巻第六、紅葉）』によれば高倉天皇（一一六一―一一八二）が一〇歳ほどの時に、

図 2-8 東三条殿の築山の植栽（『年中行事絵巻』より）

あまりに紅葉を愛せさせ給ひて、北の陣（内裏の北正面の朔平門）に小山をつかせ、はじ・かへでのいろいろつくしうもみぢたるをうへさせて、紅葉の山となづけて、終日に観覧あるに「略」

というように、内裏の門内にハゼノキ・カエデを植えた築山をつくっている。この木を庭の掃除係の殿守が酒をあたたためるために、薪にしてしまったので大問題となったのだが、「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」という白楽天の詩のようだと言つて天皇は許したという。実際の築山にもこのような樹種が植えられていたと考えられる。

植栽の先例の尊重

『兵範記』の仁平二年（一一五二）正月二十五日の条に、東三条殿の大饗のための用意について、

酒部所の幄（幕）、南西の松樹の下にあり。立作りの幄は寢殿巽角の砌の南にあれど、往昔梅樹あれど、大治（一一二六—一一三〇）以後その樹仆る。今入道殿の仰せに依り、その跡に大梅を切り立て、旧例に復させらるなり。

と述べられている。南庭の南西側にはマツがあり、寢殿の南東側には以前はウメの古木が存在していたが、倒れて枯れたために儀式の際にはその跡に、大きなウメの幹を立てたという。先例を尊重した時代だったために、このように植栽を復元することも多かったのだろう。

里内裏になった大炊殿では、『中右記』によれば天永三年（一一一二）十月十八日に、「南庭の桜・橘の樹等を左右衛門府に仰せて栽えしむ」ということを行なっている。これは内裏の左近の桜、右近の橘という意味で植えたものだった。また、保元二年（一一五七）十月に再建された内裏にも、『兵範記』の翌三年三月二十二日の条によると「呉竹」が、旧来のように清涼殿の東庭に植えられている。『年中行事絵巻（巻六）』の清涼殿東庭の図は、この状態を描いたものだろうか（図2-9）。先例に従うということだけではなく、こうした樹木があつてこそ内裏であるという気持ち、当時の人びとにあつたように思う。

図 2-9 清涼殿の河竹と呉竹（『年中行事絵巻』より）

藤原成範邸の吉野山のサクラ

サクラの愛好が続いていたことは、藤原通憲（信西）の息子の藤原成範が、「桜町の中納言」と呼ばれていたことから知ることができる。『平家物語（巻第一、吾身栄花）』に次のような話が掲載されている。

すぐれて心数奇給へる人にて、常は吉野山を窓ひ、町（敷地の一区画）に桜を植へ並べ、其内に屋を立てすみ給ひしかば、来る年の春ごとに、見る人、桜町とぞ申ける。

普通のサクラではなく、わざわざ奈良の吉野山のサクラを持ってきて身近に植えて楽しんだということが、風情を解す人として成範を有名にしている。

(三) 寺院・神社の植栽

寺院の植栽

■法勝寺のハスとシダレザクラ

法勝寺は白河天皇が建立したもので、承暦元年（一〇七七）に金堂などの落慶供養が行なわれている。『百鍊抄（第七一九）』によるとこの園池には、天養元年（一一四四）七月一日と治承四年（一一八〇）六月二十一日、

図2-10 法勝寺の園池とハス（『法然上人絵伝（巻二十）』14世紀前半）

養和元年（一一八二）六月二十六日に、「一茎二花の蓮」が生じている。このハスも浄土世界を表現しているものだろう〔図2-10〕。また、境内にはサクラが多く植栽されていたようで、『中右記』によると白河上皇は永久二年（一一一四）二月二十五日にサクラを見物に来ているが、同書は「桜花盛んに開き、感趣極まりなし」と述べている。『百鍊抄（第六）』によれば天治元年（一一二四）閏二月十二日に白河上皇が鳥羽上皇とともに法勝寺のサクラの花を見物している。そのサクラの種類については、仁安二年（一一六七）以前に成立したとされる『唯心房集』中の歌「八」の題詞に、「法勝寺へたちいりて見るに、いとさぐらのさかりにて」と書かれているので、シダレザクラだったことがわかる。

シダレザクラの初期の例を追ってみると、『散木奇歌集』さんぼきかきゅう（大治二年「一二七」―同四年頃成立）には、藤原俊忠（一〇七一―一一二三）の別邸について次のような歌が記載されている。

二条師俊忠のかつら山里に、桜柳交枝といへる事をよめる

あすもこんしだり桜の枝ほそみ柳のいとにむすほはれけり「九八」

シダレザクラは「本州中部以西にはえるウバヒガンの一変種」とされているから、平安後期頃に山中にあつたものを都に運んで来たのではないだろうか。

■法成寺のサクラ

藤原道長が建立した法成寺については、『散木奇歌集』の源俊賴（二〇五五頃—一二二九頃）の歌「六三」の題詞に次のような説明がある。

法成寺の花さかりと聞きて、人びとあまたぐして見ありきけるに、柳の木のもとにゐて侍りける人びとは、花のしたにあそばれければ、〔略〕

この時代の法成寺にはサクラとシダレヤナギが植栽されていたことがわかるが、サクラはかなり本数が多かったと推測される。「法成寺の花さかりと聞きて」と述べられていることからすると、当時寺院のサクラを個人的に見物することは、貴族の間では一般化していたのだろう。『宇槐記抄（台記）』の仁平二年（一一五二）二月二十二日の条にも「花を見んために、東北院に向かう処、桜花悉く散りたり」とあり、境内の東北院にもサクラが数多く植栽されていたことがわかる。寺社境内にサクラを植えることは、この時代にも流行していたと言える。

神社の植栽

神社境内の植栽を見ると、『中右記』の天永二年（一一一一）四月九日の条に、上賀茂神社のことについて「（大風雨のため）鳥居内の柳樹一本転倒す」とある。『年中行事絵巻（巻二）』にも、下賀茂神社では賀茂川沿いにシダレヤナギが数多く描かれている。梅宮神社についても『年中行事絵巻（巻十二）』によつて、その植栽を知ることができる〔図2-11〕。一の鳥居の横の池にはハスが生え、その岸近くの高木にはフジが絡み付き、境内の堂の前にはシュロが二本立っている。シュロは珍しい感じがするが、『禁秘抄考註（上巻）』には「櫻栢」について、

延喜五年（九〇五）東庭に栽う。清涼殿の前にこの樹ありて枯るるか。旧跡を尋て栽えらる。是貞親王の家の樹なり。また応

図 2-11 梅宮神社境内のシュロ (『年中行事絵巻』より)

和(九六一—九六三)に中殿の前に栽えらる「原漢文」。

と記されている。また、『枕草子(三七段)』にも「姿なけれど、棕櫚の木、唐めきてわるき家のものとは見えず」と好意的に書かれている。ただし、神社でシュロを二本対にして植えたものには、特別な意味合いがあったという考え方もある⁽²⁾。

五 平安時代の植栽技法

(一) 樹木の移植

樹木の山採り

植栽の仕方などの技術的な面から、平安時代の庭園技法を見ることがしたい。植物の入手方法については、『万葉集』に野山から草花や樹木を採って来て植えたということが歌われているが、平安時代も同様だったと感ぜられる。内裏の清涼殿のサクラについて、『管家文章(巻第五)』の「春、桜花を惜しむ」と題した詩「三八四」には、次のように述べ

られている。

承和の代（八三四―八四七）、清凉殿の東二三歩に、一の桜の樹あり。〔略〕代変じて樹遂に枯れぬ。先皇（光孝天皇）〔略〕特に樹を種うえることを知る者ひとに詔みことりして、山木を移して、庭実（庭先に列べられる貢物）に備ふ（加える）。

内裏の清凉殿の近くにあつたサクラの古木が枯れたので、樹木を植えることをよく知っている者を呼び寄せて、山から採ってきた木を植えさせたという。山野から樹木を採ってくる場合、運搬に便利のように根を大部分切ってしまうために、水分や養分を吸収する細かい根がなくなり、移植しても枯れてしまうことになる。そのため植木畑で養生して発根させてから、移植するのが望ましい方法とされている。技術者なのか趣味人なのか不明瞭だが、当時も樹木の移植について熟知した人間が存在していて、山採りすることにも慣れていたということだろう。

樹木の移植

『文華秀麗集』（弘仁九年「八一八」頃成立）の「秋日冷然院の新林の池」と題した詩「一一」に、「歳浅き新林未だ拱いかぬ枝（両腕でかかえるほどのない枝）」と、造営後間もない頃の冷然院の庭園の情景が詠まれている。樹木は若木ばかりだったわけではなく、移植のために枝を切り縮めたものもあつたのだろう。また、同書には「神泉しんぜいの古松に代りて衰へしを傷む歌」と題した詩「一二〇」があり、神泉苑内にはマツの古木があつたことがわかるが、詩の中には「昔凡木ぼんぼくを上林に殖よゑし従り」と述べられている。造営後二〇年ほどで「凡木（普通の木）」のマツが老木になるはずがないので、かなりの古木を移植していたと推定される。冷然院や神泉苑を詠んだ他の詩からも、多くの樹木を新たに植え込んでいたように見える。都が造営される以前は水田か畑地だった所を、更地同然に造成したために、残存していた樹木は少なかったのだろう。マツの太木を移植していることからすると、移植技術もかなり進歩していたに違いない。

『古今著聞集』は建長六年（一二五四）に成立したもので直接的な史料ではないが、花山院の庭園への樹木の移植につい

て次のような話が巻第十九に収録されている。

貞信公（藤原忠平「八八〇—九四九」）、なつめをあいしてまいりけり。式部卿親王（重明「九〇六—九五四」）の家に、よきなつめの木ありけり。其木をゝろし枝にせられて、手づからみづから、花山院の北対の西の妻の庭前にうへ給けり。

「をろし枝」とは今日言う「寸胴切り」の技法を指している⁽²²⁾。大木の場合はそのまま移植するのが大変なため、着根しやすい丈夫な樹木の場合は枝を皆切り落として幹だけにして、根鉢も最小限にして移植する方法をとる。クワや果樹の栽培などを通して、こうした移植技術は進展してきたものなのだろう。

樹木の運搬方法

樹木を植栽地に運搬するには、どのようにしていたのだろうか。近くなら人が肩に担いで運ぶという方法があるが、遠距離だとそうはいかなくなる。寛仁四年（一〇二〇）に藤原道長は法成寺を造営しているが、前述のように『栄花物語（巻第十五）』に、「力車にえもいはぬ大木どもを綱つけて叫びのゝしり引きもて上る」と描写されている。力車は古くから存在していたようで、

恋草（恋心）を力車に七車積みて恋ふらくわが心から「六九四」

と『万葉集』にも歌われている⁽²³⁾。牛車のような車の荷台に大木を載せ、綱を縛り付けてたくさんの人で引いたのだろう。次の鎌倉時代も同様だったらしく、『明月記』によれば藤原定家は元久二年（一二〇五）九月二十日に、自邸のキリを九条良経の中御門殿（京極殿）に運び込むのに「車二両（二台）」を使っている。

(二) 樹木・竹類の栽培技法

サクラの接ぎ木

この時代は自生する植物ばかりを利用していたのではなく、繁殖技術もかなり進んでいて、接ぎ木も行なわれている。『月詣和歌集』によると平経盛(一一二四—一一八五)は、「ならの八重ざくらを家のはなにつがんとて」〔七〇〇題詞〕と、ヤエザクラの枝を他家に所望している。サクラ類は実生だと遺伝子の組み合わせによって変異が多く生じるため、現在でも繁殖は接ぎ木によるのが普通とされている。²⁴ 接ぎ木は増やしたい植物の枝の一部や芽を切り取って、台木とする他の植物に継いで育てるという技術だが、おそらくこれも果樹栽培の技法の応用なのだろう。ヤエザクラの流行は、接ぎ木の技術の普及がなかったら生じなかったと言えるだろう。

フジとタケの育成方法

植物の育成技法については、現代と異なる点がある。フジは栽培用の棚をつくることはなく、マツの高木に絡んだ姿が美しいとして好まれている。『枕草子(八四段)』には、

めでたき物「略」色あひふかく花房ながく咲きたる藤の花、松にかゝりたる。

とある。『源氏物語(藤裏葉)』にも、

図2-12 マツに絡めたフジ（『法然上人絵伝』より）

いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かゝれる（フジの）花のさま、世の常ならずおもしろし。

と述べられている。

鎌倉時代に制作された『法然上人絵伝（巻四）』（一四世紀前半）にも、マツに絡んだフジの光景が描かれている〔図2-12〕。フジは周辺の高木に絡みつく性質があるので、自然状態に近い生育方法をとったのだろう。マツと一对にされたのは、絡まるのにマツだと枝や葉が透いているので、フジの花がよく見えるからに違いない。棚作りが行なわれるようになったのは、江戸時代からのことのように思う。後に述べるように、『実隆公記』によると長享元年（一四八七）二月二十一日に、室町時代の三条西実隆邸ではブドウ棚がつくられているが、こうした果樹のための棚がフジに転用されるようになったのではないだろうか。

タケの栽培法を見ると、菅原道真は『管家文章（巻第四）』の中の「白菊に寄する四十韻」と題した詩「二六九」で、「畝有^{うね}りて竹、逾^{いよ}繁^{いよ}し」と詠み、その詳しい状況に

ついで「家の竹を思う」という詩「二二六」で、「三畝ぼの琅玕ろうかん（玉のように美しい竹）」と述べている。土を盛って畝をつくるということは、おそらく畑作の影響を受けたもので鑑賞上は見苦しいが、排水などの点では良い育成方法と言えるだろう。

（三）草本類の植栽技法

前栽掘り

前栽として植えていた草花も、奈良時代と同様に郊外の原野から採取することが多かった。藤原道長の日記である『御堂関白記』の長和元年（一〇一二）九月六日の条には、「時々小雨降る。殿上人てんじやうびと嵯峨に出でて、前栽を掘り、皇太后宮に献ず」「原文」と述べられている。また、『中右記』によると、寛治元年（一〇八七）七月十日に鳥羽殿において「前栽掘り逍遙」が行なわれている。当時の貴族にとっては、前栽掘りは野外での気晴らしとなる遊びだったのだろう。

ナデシコの種子

すでに『万葉集』の時代にも見られたことだが、平安時代には草花の種子を蒔くということが一般的に行なわれている。草花の種子を知人に贈ることもされていて、『師記そちき』によると源経信は承暦四年（一〇八〇）四月九日に、「常夏の花も遂にはちりければ形見に是ぞ以て送たる」という和歌を添えて、瞿麦なでしこの種を贈っている。こうしたことで人びとは親睦を深めていたのだろう。ナデシコの種子については、『大鏡（第三巻）』が次の話を載せている。

なでしこのたねをついひぢのうへにまかせたまへりければ、思がけぬ四方に、いろいろのからにしきをひきかけたるやうに、さきたりし〔略〕

花山法皇（九六八一—一〇〇八）が居住する花山院において、築地塀の上にナデシコの種を蒔いたという。土塀だったことから

発芽して、一面に鮮やかな花が咲いたらしい。花山法皇は常軌を逸していたというから、これは特殊な事例と見るべきなのだろうが、草花の種子を入手することは容易になって、趣味的に栽培する人びとも多くなっていたと考えられる。

キクの栽培

キクの栽培について見ると、菅原道真は『管家文章（巻第四）』によると、「官舎の前に菊苗を播く」と題して次の詩「二八八」をつくっている。

少かりし年より菊を愛して、老いて逾いよいよ加れり。公館の堂の前（官舎の前庭）、数畝斜はなり。去いにし歳黄なるを占めて、野種を移せしが、此の春は白きを問ひて、僧家に乞ひたり。

また、前に述べたように菅原道真は阿波守平某の別邸での詩「一六四」に、「菊墻きくかい」という言葉を使っているので、キクをまとめて植えた畝のようなものがあつたと考えられる。この時代には畑で蔬菜類を栽培するのと同じ様に、キクは畝をつくって植えていたのだろう。現代でも畑では同じ方法でキクを育てているから、実際的な育成法だったと言える。

しかし、一三世紀初頭に慶算という人物が『作庭記』をまとめた『山水抄せんすいしょう（下）』には、キクについて以下のように書かれている。

菊花ノ盛ニ、掘移シテ植ウ事ハ、所ヲキラハズ。南庭モ、中門廊内外、コトニ好シ。花菱ちぢミナン後ハ、晴ノ所ヲバ、皆掘除クベキナリ。

キクは開花期に庭園に移し植えることが多かったことがわかる。この場合は一三世紀後半頃に作成された『駒競行幸絵巻』に描かれているように、花壇などは設けずに直接地面に植えていたと考えられる。

『文華秀麗集』の小野岑守みねもり（七七八―八三〇）の重陽の節の詩「四九」に、「黄花一両（一二二）殿前に開く」と詠まれている。

から、平安初期には黄色のキクが愛好されていたことになる。キクが奈良時代に渡来していたと考えるのは誤りではないだろう。『古今和歌集』（延喜五年「九〇五」撰）に「しらぎく〔白菊〕」が多く詠まれていることからすると、九世紀後半頃には白色のキクが大陸から渡来したように思えるのだが、シラギクは日本から中国に伝えられたもので、宋の劉蒙の『菊譜』には「倭菊」として名を連ねているとされている²⁵。

黄色のキクについては、『延喜式』卷三十七（延長五年「九二七」）の「諸国進むる年料の雜菓」の項に、「黄菊の花」を甲斐国が一〇両（一両は三七・五グラム）、近江国が一斤二両（一斤は一六両）、下野国が五両、若狭国が二両、阿波国が一斤、讃岐国が三両を収めていたと記されている。キクは当初は薬として輸入され、一〇世紀には全国的に栽培されるようになったことがわかる。なお、『和名類聚抄』（承平年中「九三二—九三七」）には「菊には白菊・紫菊・黄菊あり」（原漢文）と書かれているので、一〇世紀初頭頃には赤色系も愛好されていたことになる。

（四）庭園植栽の技法

園池の植栽

平安時代の作庭技法を集大成した『作庭記』は、一二世紀頃に成立したものと推定されている。これによって平安時代の園池と遣水の植栽を見てみたい。

若いけあらば、島には、松柳、釣殿のほとりにはかへでやうの、夏こだちすゞしげならん木をうふべし。

諸邸宅の植栽を文献で調べた結果と、この表現とはよく一致しているように思える。種類も数も少なく、マツ・シダレヤナギ・カエデなどは軽やかなものだから、庭園の感じは簡素だが優美だったと想像される。園池の具体的な形状に関しては、「大海・大河・山河・沼池・葦手」などの形があると述べられている。大海の場合に植栽については、

所々に州崎白はま（浜）みえわたりて、松などあらしむべきなり。

というように、海岸の光景をまねてマツを植えるべきだとされている。また、前にも引用したが沼池の時には、

こゝかしこのいり江に、あし、かつみ（マコモ）、あやめ（シヨウブ）、かきつばたやうの草をあらしめて、〔略〕

とされている。実際に沼池に生育しているものを示している点で、写実的な庭園だったことがわかる。

これとは逆に、人工的な形態の園池もあった。「葦手」というのは、アシが乱れているような形に仮名を崩して歌などを描いたものを意味しているが、こうした姿につくることも行なわれている。

池のみぎはなどに、石所々たてゝ、そのわきわきに、こぎさ、やますげ（ヤブラン）やうの草うゑて、樹には梅柳等のたをやかなる木をこのみうふべし。

「葦手」の感じになるように、葉や枝がしなやかな感じのする植物を選んでいたことがわかる。

園池の中には変化を付けるために中島が設けられているが、中島についても多くの種類が考え出されている。自然に見られるさまざまな島の形を分類して、図案的に考えられる形を加えて、その特徴から名を付けたものらしい。

山しまは、〔略〕ときは木（常緑樹）をしげくうふべし。〔略〕

野島は、〔略〕秋の草などをうゑて、ひまひまにはこけなどをふすべきなり。

と述べられている。山島は山のように見える島という意味から、常緑樹を植えたのだろう。野島は野の姿であることから、秋咲きの草花を植えるのだが、なぜかコケを植え付けている。これに対して、

杜しまは、たゞ平地に樹をまばらにうゑみてゝ、こしげきにしたをすかして、〔略〕しばをもふせ、すなごをもちらすべきな

り。

というように、杜島は林の感じにつくったもので、木の根元にはノシバを張っている。コケやシバを使っていることからすると、地被類についてもかなり工夫がされていたと考えられる。

遣水の植栽

一方、遣水も寝殿造庭園の主要な構成要素だった。この植栽については、『作庭記』に次のように記されている。

遣水のほとりの野筋には、おほきにはびこる前栽をうふべからず。桔梗、女郎、われもかう、ぎぼうし様のものをうふべし。

成長して大きくなる草花は、遣水が見えなくなるので避けているように窺える。「桔梗」については、キキヨウ・ムクゲ・アサガオが考えられるが、状況からするとやはりキキヨウが妥当だろう。遣水の植栽の実際の姿は、『年中行事絵巻（巻十）』の貴族邸宅の描写から知ることができる〔図2-13〕。草花は種類も数も少なかったようで、要所にしか植えていなかった

図2-13 遣水の植栽（『年中行事絵巻』より）

たと考えられる。草花も樹木と同様に簡潔なものだったのが、この時代の特徴ということになる。

前栽の植栽技法

『作庭記』の異本『山水抄』には「前栽事」の項があり、前栽の植栽技法を知ることができる。

萩ハ階隱はしかいし（寝殿の正面の階段ノ脇、妻寄ニ植ウベシ。又ハ中門ノ廊ノ内ノ、妻戸ノアトヲシニ植ウベシ。

ハギは繁茂するもので、単独に階隱や中門廊の近くに植えていたらしい。ナデシコについては、「瞿麦ハ、坪、若クハ立部たてぶみノ内ノ方ナドニ宜シカルベシ」と記されている。ナデシコは小さなもので、中庭など身近な所が良いということなのだろう。

園池が存在しない小規模な邸宅の場合については、

南庭ノ面ヨリ、築牆ついがきノホトリニハ、薄すすき、カルカヤ、萩、ラン（フジバカマ）、紫苑しおんヤウノ高キ草ノ、アララカナルヲ植エテ、其前ニ桔梗おみなえし、女郎花おみなえし、牡丹ヤウノ物ヲ植ウベシ。

というように、後方の築地塀の近くには背の高くなる草花を植え、手前には比較的低いものを植えるように配慮すべきだと説かれている。

ボタンは奈良時代には薬用だったが、次第に観賞用になったらしく、『菅家文草（巻第四）』にも「法花寺（讃岐の国分尼寺）の白牡丹」と題した仁和四年（八八八）作の詩「二五七」が掲載されている。また、『蜻蛉日記（中）』には天禄二年（九七一）六月に、京都西山の僧坊で「牡丹草」を見たとき記されている。寺院に植えられている例が多いのは、薬草として用いられていたためではないだろうか。

こうしてみると、前栽は草花ばかりのように思えるが、樹木もかなり混ざっていたようで、『後撰和歌集』（天徳二年「九五八」

図2-14 樹木を含む前栽（『法然上人絵伝』より）

頃成立^すには藤原兼輔邸の例以外に、「前栽の中に棕櫚^{すうり}の木（シュロ）生^おいて待^はべる」「一二二九題詞」などがある。また、鎌倉時代の『法然上人絵伝（巻四十六）』にも、オミナエシ・キキヨウ・リンドウの中にカエデが植えられている光景が描かれている「図2-14」。建物の周辺に植栽されている樹木と草花を合わせて、前面に植わっているものという意味で、「前栽」と呼んでいたと考えられる。「前栽」という文字の読み方は、平安時代は「せんざい」ではなく、「せんさい」と清音が使われていた。⁽²⁶⁾『栄花物語（巻第十八）』には「草前栽」という言葉があるが、草花だけ（現代の分類だと木本類も含まれる）を植えることも多かったので、こうした用語も生じたのだろう。

前栽の中には垣もつくられていたようで、『枕草子（二五四段）』には「前栽に萱草^{かんそう}といふ草を、籬^{ませ}ゆひて、いとおほくうへたりける」と述べられている。『源氏物語（野分）』にも秋の草を植えた前栽の中に「よしある黒木（樹皮のついた木）・赤木（樹皮を取り去った木）の籬^{ませ}お（を）結^ゆひまぜつゝ」とあるから、垣根にも趣向を凝らしていたのだろう。前栽の中に低い垣をつくって、草花が倒れないように垣に結び付けるということは一般化していたのではないだろうか。

庭園の管理

平安後期に造営された鳥羽殿に、どのような草本類が植えられていたのかは文献では知ることができない。しかし、東殿跡の第一・二次調査で検出された種実からは、草本類はカタバミ・スベリヒユなどの丈の低いもので構成されていたことが判明している。丈の高い草本が生えていなかったということは、極めて好い庭園管理がなされていたことを示しているもので、年数回の除草が行なわれていたと推定されている。²⁷⁾『為房卿記』の康和五年(一一〇三)八月十二日の条に、「庭掃百二人〔北殿八十二人、南殿二十人〕」とあるから、鳥羽殿の庭園の手入れはよくされていたのだろう。²⁸⁾

六 平安時代の特徴

『枕草子』や『源氏物語』などの記述からすると、平安中期の人びとは豊富な植物知識を持っていたようなのだが、この時代の庭園植栽について見直してみると非常に貧弱な感じがしてならない。奈良時代や平安前期前半よりも、植栽された植物の種類は減少している。だが、平安中期と平安前期後半とを比較してみると、貴族邸宅の場合は大差がないように見える。ということは、園池が存在する大邸宅の植栽は、平安前期後半から変化が生じているということになる。

神泉苑の情景を詠んだ『経国集(巻十四)』の滋野貞主の詩に、「遵行して直に白沙の洲に到る」とあり、『菅家文章(巻第六)』所収の朱雀院での詩「四四九」に、「沙を踏みて行くゆく見れば」とあるように、平安前期前半には園池の州浜に降り立つということが行なわれていた。奈良時代の東院庭園のように、全体を歩いて巡れるように庭園をつくっていたと考えられる。そのためにこの時代の庭園は、園池の岸にはシダレヤナギ・マツ・キク・タケ・ミカン類、池中にはハス・アシ、中島にはススキ、園路に沿ってはタケ・シダレヤナギ、築山辺にはマツ、平地部分にはサクラ・アオギリ、建物近くにはナシ・

ノイバラというように、見所となるような植栽が全体的にされていたのだろう。しかし、平安前期後半からは庭園を巡り歩くということはほとんど見られなくなる。

平安中期の『本朝文粹（巻第十）』の詩文を読むと、冷泉院のことについての菅三品（菅原文時）の詩「三〇〇」に、「観ればそれ花綻びて岸に在り」「原漢文、以下同様」、東三条殿については大江匡衡（九五二—一〇二二）の詩「三〇八」に「観ればそれ落花閑ならずして、水を度り自ら舞う」とあり、「冬日左相府（左大臣）少侯書閣に陪りて、同じく落葉波上の舟を賦す」と題した慶滋保胤の詩「三二五」に、「水辺に紅の錦繡の林あり」と詠われている。平安中期の園池の周辺には、サクランボなどの花木やカエデなどの落葉樹が多かったということになる。つまり園池の周辺には、数多くの樹木が带状に植栽されていたと推測される。

しかし、園池の北側、寝殿の前面の南庭と呼ばれた部分は、平安後期の『年中行事絵巻』に見られるように、儀式の妨げにならないように植栽は少なく、ウメやマツなどがわずかに植えられていたにすぎなかった。南庭の利用に対して『作庭記』にも、

庭のおも（面）には石をたて、せんざいをうへむこと、階下の座などしかむこと、よいあるべきとか。

とあり、『山水抄（下）』にも「山池有ル所ナラバ、スベテ南面ニ、眺望ヲ障フル程ノ草木ヲ植ウベカラズ」と述べられている。つまり、平安前期後半から寝殿の南前面には、儀式のためにほとんど植栽のない平坦な庭を設け、この南庭のさらに南側に園池をつくるという寝殿造庭園の形態が完成したために、園池を巡って散策することができなくなったということではないだろうか。主人及び客人の歩行する場所は寝殿の南庭に限られ、園池を舟で巡るのも希だったから、植栽を識別することができなくなったと考えられる。

それでは平安前期後半から、庭園の植物の種類は少なくなってしまったのだろうか。大邸宅であっても園池が存在しなかった庭園もあったらしく、長和五年（一〇一六）十月に三条上皇の御所となった三条院について、『栄花物語（巻第十二）』は次の

ように述べている。

院の様わざと池・遣水なけれど、大木ども多くて、木立をかしうけ高く、なべてならぬ様したり。

こうした所は樹木を植栽して体裁を整えていたから、多種類の樹木が存在した可能性がある。『枕草子（二八八段）』にも、九月つごもり、十月のころ、空うちくもりて、風のいとさはがしく吹きて、黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。桜の葉、棕（せ）の葉こそ、いとくは落つれ。十月ばかりに、木立おほかる所の庭はいとめでたし。

と記されている。樹木の風情を愛した人びとも多かったのだろう。

架空の話だが、『源氏物語（少女）』に描かれている六条院は二町四方を占めている。これを四区画に分けた南東・南西・北東・北西側の各一町は、春・秋・夏・冬の各季節を特徴づける庭園植栽がされていた。南東（春）の町には前栽として「五えう・紅梅・桜・藤・山吹・岩躑躅」が植えられ、北東（夏）の町には「呉竹」と小高い木々と「卯の花（ウツギ）」の垣根、草花としては「花橘（タチバナ）・撫子・薔薇（さうび）・くたに（リンドウ）」などが植栽されていたという。南西（秋）の町には草花を植えた秋の野がつくられ、北西（冬）の町には「松の木・菊のまがき・柞（コナラ）原・深山木」などがあつたと描写されている。植物の見分けがついたように描かれているのは、作者が実際にそうした庭園を目撃していたからだろう。小庭園などでは園池がないことから、人びとは植物と親しみ安かったのではないだろうか。

高陽院などでは珍しい植物が植えられていたと伝えられている。また、鳥羽殿での発掘結果からも、山野のさまざまな植物が生育していたことが判明していることからすると、寝殿造庭園と呼ばれる形式の大園池のある貴族邸宅では、見られる範囲では植物の数が限られていたために種類は減少しているが、大規模邸宅の園池の背後や小規模な庭園、あるいは高陽院のような特殊な形態の庭園には、意外と多くの種類が存在していた可能性が考えられる。

第二章 註

- (1) 森蘊『平安時代庭園の研究』桑名文星堂、一九四五年、二〇九—二二七頁。
- (2) 河原武敏『平安鎌倉時代の庭園植栽』信山社、一九九九年。
- (3) 森蘊、前掲書、九三・九四頁。
- (4) 高原光・竹岡政治『京都市八丁平湿原周辺における最終氷期最盛期以降の植生変遷』日本生態学会誌(三六)、一九八六年、一〇五—一六頁。
- (5) 中堀謙二『深泥池の花粉分析』『深泥池の自然と人』京都市文化観光局文化財保護課、一九八一年、一六三—一八〇頁。
- (6) 延暦十五年(七九六)には、八月二十八日・十月十六日に登勒野、九月二十一日に栗前野、十月五日に大原野、翌六日に紫野、十月九日・翌月二十一日に日野、十一月二日に北野、十一月二十九日に栗栖野で狩猟が行なわれている。延暦十六年には、正月十九日に水生野みづの、同月二十五日に大原野、二月五日・三月二十日に北野、二月十六日に登勒野で狩猟が行なわれている。
- (7) 辻純一『平安京の条坊復原』『京都府埋蔵文化財情報(二七)』京都府埋蔵文化財調査研究センター、一九八八年、一一七頁。
- (8) 京都市編『京都の歴史(一)』京都市史編さん所、一九八〇年、二三五頁。
- (9) 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館、一九八七年、四五—六六頁。
- (10) 斎藤正二『植物と日本文化』八坂書房、一九八五年、七二頁。
- (11) 宮澤文吾『花木園藝』養賢堂、一九四〇年、三六二・三六三頁(復刻、八坂書房、一九七八年)。
- (12) 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店、一九三四年、一四四頁(復刻、思文閣、一九七三年)。
- (13) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典(縮刷版、四)』、小学館、一九八〇年、六二二頁。
- (14) 京都市埋蔵文化財研究所(一九九〇)『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告(一〇)、一二七—一二三頁。
- (15) 京都市埋蔵文化財研究所編・発行『平安京右京三条二坊十六町発掘調査現地説明会資料』二〇〇〇年。
- (16) 『堀河殿の焼失』長元四年(一一〇三)正月十五日(小右記)。
- 『高陽院の焼失』長暦三年(一一〇三九)三月十五日・天喜二年(一一〇五四)正月八日(『百鍊抄』、承暦四年(一一〇八〇)二月六日(『百鍊抄』)。
- 『京極殿(土御門殿)の焼失』長和五年(一一〇一六)七月二十一日(『御堂関白記』、長元四年十二月三日(『百鍊抄』、長久元年(一一〇四〇)九月九日(『春記』、天喜二年

- (一〇五四) 十二月八日〔百鍊抄〕。
- 〔東三条殿の焼失〕永観二年(九八四)三月十五日〔日本紀略〕、長徳二年(九九六)六月八日〔百鍊抄〕、長保二年(一〇〇〇)十二月十五日〔日本紀略〕、長和二年(一〇一三)正月十六日〔百鍊抄〕、長元四年四月二十九日〔日本紀略〕。
- (17) 太田静六、前掲書、二二一頁。
- (18) 城南文化研究会編『城南』城南宮、一九六七年、七三頁。
- (19) 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所編・発行『鳥羽離宮跡発掘調査概報(昭和五七―平成元年度)』一九八三―一九九〇年。
- (20) 牧野富太郎著、小野幹雄・他編『改訂増補牧野新日本植物図鑑』北隆館、一九八九年、三〇五頁。
- (21) 瀬田勝哉『木の語る中世』朝日選書(六六四)、朝日新聞社、二〇〇〇年、一九〇―二〇二頁。
- (22) 森蘊、前掲書、二二一頁。
- (23) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典(縮刷版、七)』小学館、一九八〇年、三二九頁。
- (24) 町田英夫編『接ぎ木のすべて』誠文堂新光社、一九七八年、一三六頁。
- (25) 湯浅浩史『花の履歴書』講談社学術文庫、講談社、一九九五年、一八四頁。
- (26) 大野晋・他編『岩波古語辞典』岩波書店、一九七四年、七三〇頁。
- (27) 前掲『鳥羽離宮発掘調査概報(昭和六〇年度)』一九八六年、三三・三四頁。
- (28) 太田静六、前掲書、四五一頁。

第三章 鎌倉時代の庭園植栽

鎌倉時代(一一九二—一三三三)は寝殿造庭園と浄土式庭園がつくり続けられているために、様式的には平安時代と同様に見えるが、鎌倉末期に夢窓疎石が出現して、枯山水を新しい様式として誕生させている点では、室町時代への過渡期と言える。この時代の庭園植栽について全般的には、河原武敏が作庭書や絵巻物あるいは物語・日記類から事例を挙げて^①いる。また、個々の邸宅に関しては、貴族で歌人として名高い藤原定家の邸宅の庭園について、吉永義信が定家の日記『明月記』に基づいて詳しく調べている^②。しかし、鎌倉時代の庭園植栽について個々の事例を明確にしなが、全体を見直すということはまだされていない。

鎌倉時代の庭園植栽の特色は、この時代全体を通しての年代的な差異よりも、京都と鎌倉という地域差の方が大きいように思える。京都は伝統的な貴族社会であり、鎌倉は新興の武士社会であるという政治的状況や、京都と鎌倉の風土上の相違が、これまでとは異なつた庭園植栽を生じさせているように感じられる。そこでまず京都の庭園を探つてから、次に鎌倉の庭園の植栽状況を見ていくことにしたい。

一 新しい美意識の登場——京都の庭園

(一) 京内の貴族邸宅の庭園

閑院のサクラ

平安初期に藤原冬嗣によって創建された閑院は、平安後期に里内裏として使用されているが、鎌倉時代に入っても引き続

き、後鳥羽・土御門天皇の里内裏として利用されている。仁安二年（一一六七）に新造されて承元二年（一二〇八）に罹災するまで存在したものは、寝殿の前面には大規模な園池があり、西側には釣殿が配置され、東対の前には園池に注ぎ込む遣水が存在するもので、この時代の代表的な寝殿造建築だった。⁽³⁾

鎌倉時代になってからの植栽については、『三長記』の建久六年（一一九五）十二月一日の条に次のような記事がある。

去る夜（閑院内裏の）大庭の樹一本焼失と云々。件の樹朽損し、穴内にありて木葉これに積る間、松明の火自然に投入し、よつてこの事あると云々。

南庭の一部に幹が朽ちて空洞ができていた樹木があつたが、これに夜松明の火が入って焼失したという。このような古木も植えられていた上に、仁安二年に再建されてから三〇年近く経っているから、樹木は全体に落ちついた感じになっていたのだろう。藤原家実の『猪隈閑白記』の正治二年（一二〇〇）閏二月二十一日の条には、

殿下大内（内裏）に渡御す。南殿の桜を御覧の為なり。余同参す。花盛んに開く。〔原漢文〕

と述べられているので、南殿（寢殿）の前庭にはサクラが、内裏の「左近の桜」の意味で植栽されていたと考えられる。

建保元年（一二二三）二月に再建された際には、園池も復興されたらしく、『百鍊抄』によると同六年六月十六日に舟遊びが行なわれている。建長元年（一二四九）二月一日に再び焼失するまでの植栽に関しては、同書の寛喜元年（一二二九）二月二十七日の条に、

仁和寺の宮の桜樹を一株閑院の南殿前に移殖せらる。左中将資季朝臣本府に仰せて沙汰せらると云々。

と記されている。南殿の前であるから、やはり「左近の桜」として植栽したものでしょう。藤原定家の日記『明月記』の天福元年（一二三三）十月五日の条には、「内裏の桜木花多く開く。建久二年に此の事有り」とあるが、これは仁和寺の宮から移植



写真 3-1 高陽院園池の出土状況（1981 年撮影）

したサクラのことだろうか。時期はずれに開花したことから、「吉相にあらず」ということで大騒ぎになったらしい。また、『古今著聞集（巻十九）』には嘉禄二年（一二二六）九月十一日のこととして、「台盤所（清涼殿の一室で、女房の詰め所）御壺の楓」の話「六六六」が載っている。このことから壺庭にはカエデが植えられていたことがわかる。

建長三年（一二五二）六月に再建された閑院については、『吾妻鏡』の建長二年三月一日の条に計画の詳細が書かれている。池の掃除も予定されているのだが、植栽についてはまったく記されていない。

藤原定家が見た高陽院

後鳥羽天皇（一一八〇—一二三九）は、建久九年（一一九八）に譲位したのちしばしば御所を替えているが、元久二年（一二〇五）には平安中期に藤原頼通が造営した高陽院かやのいんに移っている。その規模は『三長記』によれば「南北二町、東西一町、屋敷六十余宇」で、平安時代の半分になっているが、湧泉や園池が存在していたと推定されている（写真3-1⁴）。植栽については『明月記』によると、建暦二年（一二二二）八月十五日に定家は高陽院を訪れ、「近日、每庭（庭ごと）に前栽まえざいえらると云々」と記している。建築は承元三年（一二〇九）に大改修が行なわれているところからすると、庭園もこの時期に改修された可能性がある。その後、この高陽院は貞応二年（一二二三）正月十二日に再び焼亡している。

中御門殿（京極殿）と曲水の宴

九条兼実（一一四九—一二〇七）が源頼朝の信任を得て関白になったことから、息子の九条（藤原）良経（一一六九—一二〇六）は後鳥羽上皇の下で太政大臣に至っている。良経の邸宅である中御門殿は、東京極大路に接していたことから京極殿とも呼ばれていた。『明月記』によると、中御門殿は建仁三年（一二〇三）十一月頃に上棟し、元久二年（一二〇五）十月に良経は移り住んでいる。^⑤

この邸宅については『愚管抄（巻第六）』に、

中御門京極ニイツクニモマサリタルヤウナル家ツクリタテ、山水池水峨々タル事ニテメダクシテ、〔略〕

というように、建物がすぐれていただけでなく、庭園も見事だったことが述べられている。

庭園工事のことについては、『明月記』の元久二年七月二十一日の条に「南庭の池に橋を作るべき由、仰せに依りて之を沙汰す」とあることから、寝殿の前には園池を掘り、その中島には橋を架けようとしていたことがわかる。同年八月二十五日に工事は進んでマツの植え付けが行なわれている。これに対して定家は、「但し老松なり。生い付き難きか」と危惧している。九月二十日に定家は自邸の「桐樹」を車二台を使って運び、同二十三日には東山のサクラを掘って中御門殿に植え、二十九日にもサクラを一本献上している。

また、良経は途絶えていた曲水の宴を復活させようとして、『三長記』の元久三年二月十三日の条によれば、遣水を南庭の西側に導くことを計画している。後鳥羽上皇は古典芸能の復興を図っているが、その影響なのだろうか。『古今著聞集（巻十三「四六六」）』によれば、この遣水には「住吉（大阪市住吉神社の海岸）の松を引うへなどして」いる。しかし、都合で延期せざるをえなくなるうちに良経は急死してしまい、曲水の宴は取り止めとなった。

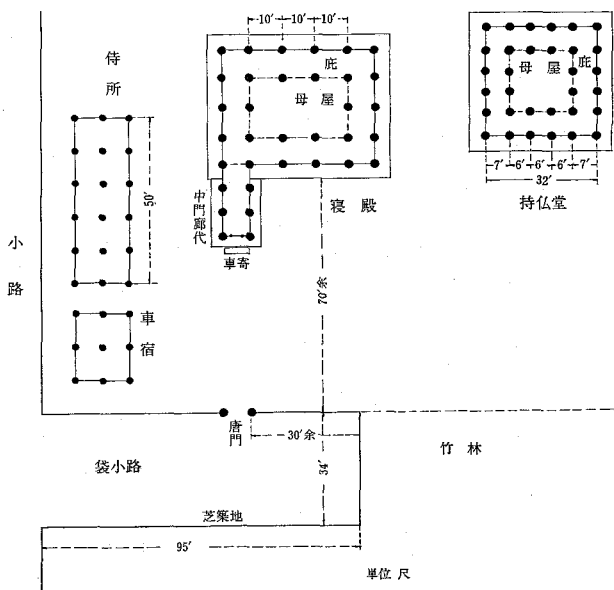


図3-1 藤原定家の京極第推定復原図（太田静六『寝殿造の研究』より）

藤原定家の園芸趣味

歌人として著名である藤原定家（一一六二—一二四一）邸の庭園については、最初に述べたようにすでに調べられていて、建築史の側からも邸宅について研究がされている〔図3-1〕⁽⁶⁾。ここでは建築との関わりという観点から、植栽についてさらに詳しく見ることにしたい。

定家は出生から建久元年（一一九〇）頃まで五条第に居住しているが、この邸には梅が存在していたことが、『明月記』の治承四年（一一八〇）二月十四日の条から知られる。その後は九条の邸宅に移っているが、嵯峨にあった山荘の庭には正治元年（一一九九）四月一日に萩と薄（ススキ）などを植えている。建仁二年（一二〇二）から承久年間（一二一九—一二二二）頃まで住んでいた冷泉第には、柳（シダレヤナギ）が数本あり、これを先述したように高陽院などに献上している。他には桐樹・梅・桜・松・欽冬（ヤマブキ）や嵯峨の山荘から運んだ鶏冠木（カエデ）などが植えられている⁽⁷⁾。

貞応年間（一二二二—一二二三）頃から死去までの邸宅だった一条京極第については、非常に植栽の記述が多い。

まとめると、表3-1のようになる。この表からは、一条・京極第を入手したのは貞応二年以前であり、建物が完成した嘉禄二年（一二二六）十二月二十一日以降に、本格的な植栽を行なっていることがわかる。植栽されていたものを木本類と草本類に分類すると次のようになる。

《針葉樹》真木（マキ）・檜木・浜松（クロマツ）

《常緑広葉樹》橘〔橘木・橘樹〕・柑子（クネンボ？）・椿・躑躅木（ツツジ）・南天竺（ナンテン）・八重躑躅・大柑子（？）

《落葉広葉樹》梨〔梨木〕・梅・奈良（コナラ）・桜〔桜木〕・桃・款冬（ヤマブキ）・鶏冠木〔加衣天〕（カエデ）・垂柳〔柳（シダレヤナギ）・樺紅葉（ハゼノキ）・牡丹・萩・夏梨（？）・御山ウツギ（ノリウツギ？）・白萩・林檎（リンゴ）

《シユロ・タケ類》棕櫚（シユロ）・竹

《草本類》菊〔白色〕・瞿麦（ナデシコ）・女郎（オミナエシ）・高宗薄（ススキの一種）・桔梗・蘭（フジバカマ）・槿花（アサガオ）・萱草（カンゾウ）・薄

《樹種不明》楡柏・柏〔柘〕

こうした植栽した植物の多さからすると、定家は花木や草花を愛好していたと言える。四分の一町ほどの敷地だったために、植栽を中心とした庭園をつくっていたのだろう。心寂房（一二三一年一月没）という僧侶がしばしば出入りして、木や草花を持参している。歎喜二年（一二三〇）十月二日の条に「心寂住房に入る。樹木・前栽の幽趣、目を驚かす」とあるから、心寂房自身も植物が好きで自邸の庭に数多く植栽していたのだろう。定家は彼を信頼していたらしく、同年二月二十五日の条に「草樹の事、只此の僧の進止に随ふ」と書いている。また、伊勢前司清定のような植物好きの人物もいて、定家は草木についていろいろと質問している。

定家はウメを特に好んでいたようで、「白梅・八重白梅・紅白梅・単（一重）紅梅・八重紅梅・薄紅梅・八重薄紅梅・木紅」

表3-1 藤原定家の一条京極第の植栽(『明月記』より)

年 月 日	植 栽 植 物
貞応2年(1223)	梨の種を埋める[安貞元年(1227)閏3月1日の条].
元仁元年(1224)	橘を植える[嘉禄元年(1225)4月22日の条].
嘉禄元年(1225)	正月28日 単紅梅を南庭に植える.
	2月1日 西面の八重紅梅が盛んに開く.
	2月7日 楡柏(?)・奈良を播州からもらう.
	4月22日 昨年植えた橘が開花する.
	10月16日 柑子・橘樹に霜除けの小屋を造り屋根を葺く.
	10月29日 菊の花ことごとく枯れる.
嘉禄2年(1226)	正月25日 白梅開く.
	正月27日 昨今、庭前の桜を切り、八重桜の枝を5、6本接ぐ.
	2月22日 心寂房来て、梨木を接ぐ.
	3月23日 梨・桃の花が落ち、冬が開く.
	9月15日 徒然に庭樹を植え替える.
	10月14日 南側の新たに購入した土地に庭の木を植える.
	11月29日 桜・鶏冠木[加衣天]をもらい、桜を植える.
	11月30日 鶏冠木を植える.
安貞元年(1227)	2月5日 東側の新たな土地に木を少し植える.
	2月6日 心寂房が3尺ほどの真木と白八重梅を持って来て植える.
	2月13日 橘の枝と浜松3本をもらい植える.
	2月21日 桜の小木3本を植える.
	2月22日 嵯峨から持ってきた桜木1本を南庭に植える.
	3月6日 終日、垂柳を眺める.
	3月24日 北東の楡木2本と棕櫚1本を東垣の下に移す.
	3月25日 椿・躑躅木を植える.
	閏3月1日 貞応2年に核(種子)を埋めた梨木が開花する.
	閏3月8日 一昨年に接いだ八重桜が開花する.
	閏3月10日 冬が盛んに開く.
	8月17日 昨年の冬に植えた木が枯れたので掘り捨て、小木などを植える.
	8月18日 庭前に小木を植える.
	9月17日 菊花(白)ようやく開く.
	9月21日 槿紅葉4、5本を掘り取らせて植える.
	10月1日 西園寺家の者が来て、東方の竹を掘り取る.
寛喜元年(1229)	3月2日 去年北から移した西面の紅梅が盛んに開く. 南の小桜も開く.
	3月9日 先年接いだ八重桜が開く. 枝を挿したものも開く.
	3月19日 庭の菊を分けて植える.
	3月27日 昨年接いだ2株の八重桜が盛んに開く.
	4月15日 牡丹の花を折り仏前に供える.
	4月20日 瞿麦初めて開く.
	5月5日 牡丹の花盛んに開く. 瞿麦がようやくほころぶ.
	6月4日 黃梅(ウメの実?)が風で落ちる.
	6月19日 萩・女郎少し開く.
	8月17日 萩の花盛んに開く.

年 月 日	植 栽 植 物
	8月26日 伊勢前司清定と草樹について話す。
	9月8日 心寂房が送ってきた夏梨(接木)・真木・椿・大柑子・御山ウツギ・白萩・高宗薄・躑躅等を植える。
	9月30日 菊の花綻び、萩は花盛り。
寛喜2年(1230)	正月13日 東の地の早梅初めて開く。
	閏正月24日 単紅梅の花が風雨で色衰える。垂柳がようやく緑となる。
	2月3日 柑子の枝をもらう。西北の紅梅開く。
	2月12日 庭の梅がようやく開く。
	2月15日 西の紅梅と北の白梅盛んに開く。
	2月18日 梅の枝を挿す。南庭に紅5本・白1本・木紅1本、北庭に木紅1本・白2本。南庭の桜3本が開く。
	2月25日 心寂房が来て紅白梅1株を掘り取り、別の紅梅を植える。
	3月7日 一条殿の枝を接いだ八重桜2株の花がようやく開く。草は「土用」でもかまわないので、菊苗を分けて植える。
	3月21日 冬の花が落ち尽くす。
	4月12日 清定朝臣が八重躑躅の3寸程のものを持って来る。
	5月19日 桔梗の花初めて開く。
	6月20日 もらった南天竺を前栽に植える。
	7月7日 萩の花が綻び出す。蘭も開く。
	9月1日 庭の梨子が結実する。菊も開く。
	9月7日 桜の葉が半ば紅葉する。菊が盛んに開く。
	9月21日 南庭の菊花を見る。
	10月13日 北庭の前栽を掘り捨て、麦の畝をつくる。
	10月19日 霜除けのために橘樹の竹屋を作る。
寛喜3年(1231)	正月25日 堀の東の白梅盛んに開く。南庭の西側の柳1本を掘り捨てる。その跡に西庭の八重桜を植える。
	2月4日 親尊法印へ紅梅1株を送る。
	2月7日 庭の樹を移し植える。
	2月10日 賀茂の栢[異本は「栢」]を掘らせ、紅梅の近くに植える。
	2月16日 紅梅と柳を眺める。
	2月20日 薄紅梅の枝をもらい、南の築垣近くに挿す。
	2月21日 南面の紅梅と柳を眺める。
	2月23日 橘木の覆屋を入手する。西北の薄紅梅盛んに開く。
	3月8日 庭の菊を分けて植える。
	3月11日 八重躑躅開く。
	3月17日 八重の紅桜を眺める。
	7月25日 萩花ようやく開く。
	8月10日 萩の花盛んに開く。毎朝、槿の花を見る。
	8月27日 南庭の梨の実が多く取れたので、知人に贈る。
	9月1日 萩の花が盛んに咲く。
	9月25日 菊の花が開く。
天福元年(1233)	正月2日 早梅盛んに開く。
	正月4日 通る人が八重紅梅の花枝を折り持っていく。

年 月 日	植 栽 植 物
正月5日	南側庇の紅梅(単)が少し開く。
2月4日	八重の薄紅梅盛んに開く。垂柳ようやく緑になる。
2月8日	八重紅梅の花が寒気のために落ちる。
2月12日	梅の花盛んに開く。
2月21日	桜の花盛んに開く。接ぎ木した八重桜開き始める。
2月28日	大殿からの使いが八重桜と柳木を掘り取る。
3月8日	冬盛んに開く。
3月11日	接ぎ木した八重桜が開く。款冬はまだ落花しない。
3月28日	牡丹盛んに開く。
3月30日	門内の八重白梅が根から折れる。風のために桜・桃・梅・梨の実が青いまま落ちる。牡丹だけが盛んに開く。
5月29日	桔梗の花初めて開く。萱草は中旬より開く。
8月14日	薄の穂が出て、萩の花が散る。
8月19日	庭の梨の実が虫のために落ちる。
9月22日	今年は菊の花が極めて遅く開く。
文暦元年(1234) 7月14日	槿の花を初めて開く。
7月16日	北の壺の桃が熟す。
8月26日	涼しくなったので、庭の草木を植え替える。
9月26日	庭木の梨子が暑さのために傷む。
嘉禎元年(1235) 正月1日	早梅多く開く。
2月12日	簾の際の紅梅が開き始める。
2月26日	簾前の2株の紅梅(単)が盛んに開く。南垣の薄紅梅も開く。
3月1日	簾前の梅が落ち始める。紅梅2本盛んに開く。
3月3日	もらった柑子の枝を持仏堂の前に挿す。
3月20日	南庭の八重桜がわずかに開く。
3月21日	庭の桜ようやく開く。
3月27日	庭の花が昨日落ち尽くす。梨の花が盛んに開く。
4月3日	梨の花が雨で散る。
4月6日	新しい八重桜開き始める。款冬以下の花が色々咲く。
6月23日	黄梅(ウメの実?)がほとんど落ちる。
閏6月8日	庭の林檎を籠に入れて贈る。
閏6月22日	槿花が初めて開く。
12月29日	紅梅わずかに開く。

といった種類が集められている。この中の「木紅」⁽⁸⁾は、蘇芳染を意味する言葉で、黒みを帯びた赤色を指している。寛喜元年（一二二九）六月四日の条に「黄梅風に落つ」とあるのは、季節的にみて早春に花をつけるオウバイのことではなく、梅の実のことだろう。梅は花を楽しむだけでなく、当然果実も利用していたと考えられる。

他の植物でもさまざまな品種が出現していたらしく、「八重桜・八重躑躅・白萩・高宗薄」などの名が挙げられている。果樹としては梅の他に、梨・橘・柑子・林檎・桃が植えられていた。ミカン類は室町時代末の『猿の草子』に、「蜜柑、柑子、橘に金柑、温州橘」が挙げられているように、後には次第に種類が増加している。梨は花も楽しんだようだが、果実が多く取れると知人に贈ったりしている。林檎も同様だった。

植栽の位置を見ると、寝殿前には単紅梅と菊と八重桜数本を植え、紅梅五本・白梅一本・木紅梅一本を挿し、北の壺には桃、南の垣近くに薄紅梅、南西側に柳を植え、寝殿東側の持仏堂前に柑子を挿し木している。西側には侍所が配置されていたためか植栽は少なく、薄紅梅・八重紅梅・八重桜を植栽している。東庭奥の小社の所には、檜木二本と棕櫚一本を植え付けているが、隣家の竹も侵入して来ている。北庭には白梅・八重白梅・草花などを植え、木紅梅一本・白梅二本を挿し木していたが、寛喜二年の飢饉の際には麦畑に変えてしまっている。

『明月記』に書かれている植物で、これまで見られなかったものを考察しておきたい。林檎は『和名類聚抄』に「林檎」〔略〕和名利字古字」と書かれているので、平安前期にはすでに中国から渡来していたと考えられている。建保五年（一二二七）三月二十九日の条によると、陰明門院での前栽合わせで「珍しき異物」として、「南天竺・長春花」という名前が出されている。「南天竺」つまりナンテンは、日本原産あるいは中国原産と言われているが定説はなく、この『明月記』が文献上の初見とされている。⁽⁹⁾薬用にされたナンテンが自生種であれば、奈良時代には利用されていただろうから、渡来種と見ていいのではないだろうか。「長春花」というのは、コウシンバラのことだろう。中国では南宋（一二二七—一二七九）の時代に都が江南地域に移ったことから、南方の植物が園芸植物として出現している。その一つが「中国のバラ」(*Rosa chinensis*)という学名を持つコウシンバラだった。⁽¹⁰⁾南宋の建国年代からすると、コウシンバラの日本への渡来は平安後期以降のことになるだろう。

図3-2 蹴鞠の庭の懸り（『年中行事絵巻（巻三）』より）

文暦元年（一二三四）七月十日の条にある「唐梅木」は、名前からすると中国から渡来したもののだろう。「其の木、棹の如くにして枝無し。高さ七丈許（約二メートル）」と説明されているが、後世ではロウバイを意味する名称なのだが、何を指しているのかはつきりしない。

鎌倉時代に入ってこれまで見られなかった外来種が増加しているのは、平安後期から宋との貿易が始まり、再び中国の植物が日本に渡来するようになっていたのではないだろうか。

蹴鞠の懸り

特殊な庭園植栽としては、蹴鞠^{けまり}の庭がある〔図3-2〕^①。後鳥羽天皇（一一八〇—一二三九）は蹴鞠にも通じていて、鞠道の「長者（最高者）」の称号が贈られているように、鎌倉時代には蹴鞠が非常に流行していた。鞠を蹴り掛ける樹木を懸り^{かか}と呼ぶが、後鳥羽天皇の時代頃から四本設けるようになったらしい。飛鳥井雅有^{あすかいまさあり}（一二八五—一三〇二）著『内外三時抄』^{ないげ}には、「当流には良^{うしろ}（北東）桜、巽^{うしろ}（南東）柳、坤^{うしろ}（南西）蛙手、乾^{うしろ}（北

西) 松なり」と、懸りの樹種と方向が書かれている。

実際の事例だが、源時賢(ときたか)(一一七六—一二五五)の綾小路壬生邸の懸りについては、『古今著聞集(巻十九)』の「二品時賢家の柳木関白より召さるる事」〔六六七〕の項に、次のような話が掲載されている。

鞠の懸に柳三本ありけり。其内戌亥(北西)のすみの木に、鳥すをくひ(つくる)侍けるを、いかゞ思けむ、その鳥そのすをはこびて、むかひの桃木に作てけり。人々あやしみあへりけるほどに、一兩日をへて、関白殿より柳をめされたりけり。

シダレヤナギは鞠を蹴り掛けやすいためか、当時懸りの木として好まれていたらしい。『伏見天皇宸記』の正応二年(一二八九)二月十七日の条にも、

賀茂神主久世の子息久宗、並に社司両三人参る。懸りを植えしむ。昨日持参する所の木、〔割注〕吉田殿の柳と云々。丑寅(うしとら)に植え了んぬ。〔略〕これを立つ。〔原漢文〕

という記載がある。植えた場所は内裏だった冷泉富小路殿ではないだろうか。このシダレヤナギは吉田殿(吉田泉殿)から運んだものという。上賀茂神社の宮司が登場しているのは、蹴鞠の一流派をなしていたからと考えられる。

(二) 京都郊外の別荘の庭園

鎌倉時代には、京都の周辺に多くの別荘が建てられている。平安後期には都の南の平坦地に築かれた鳥羽殿が代表的な別荘だったが、橘俊綱が主張した地形・眺望がすぐれた山麓が好まれるようになっていく。こうした別荘は、客を招き宴会などを行なう場所として使用されたことから、立派な庭園がつくられるようになり、名園として名を残しているものが少なくない。これらの代表的な別荘について、その植栽の特色を見ることにしたい。

図3-3 月輪殿の庭園植栽（『法然上人絵伝』より）

『法然上人絵伝』の月輪殿

月輪殿は九条兼実（一一四九―一二〇七）が晩年に造営したもので、建仁二年（一二〇二）に供養された御堂である報恩院がその中心になっている。場所は現在の京都市東山区の東福寺山内に当たり、藤原道長が再興した法性寺の東北側に位置していた。この月輪殿については、鎌倉末期に作成された『法然上人絵伝（巻八）』にその様子が伝えられている（図3-3）。

月輪殿の建物は文明四年（一二七二）頃には倒壊しているが、鎌倉末期には存続していたことから、『法然上人絵伝』の筆者は実際に月輪殿を見ている可能性が高いと考えられる。¹²中央には御堂（報恩院）が建てられ、図のように園池に臨んで釣殿が設けられていて、滝を眺められるようになっていた。園池の周辺にはカエデが多く、枝振りの良いマツが対岸にあり、釣殿の近くにタケが植えられていたことが窺える。

『明月記』によると、兼実の死後の嘉禄二年（一二三六）八月二十日には「南庭の岸水のために壊損。北の山の土を引きて築かると云々」というように荒廃している。植栽については同日の条に「庭院の松の間に翠簾（すだれ）僅に見ゆ」とあり、嘉禄元年（一二三五）三月二十四日の条に「月輪殿、花盛

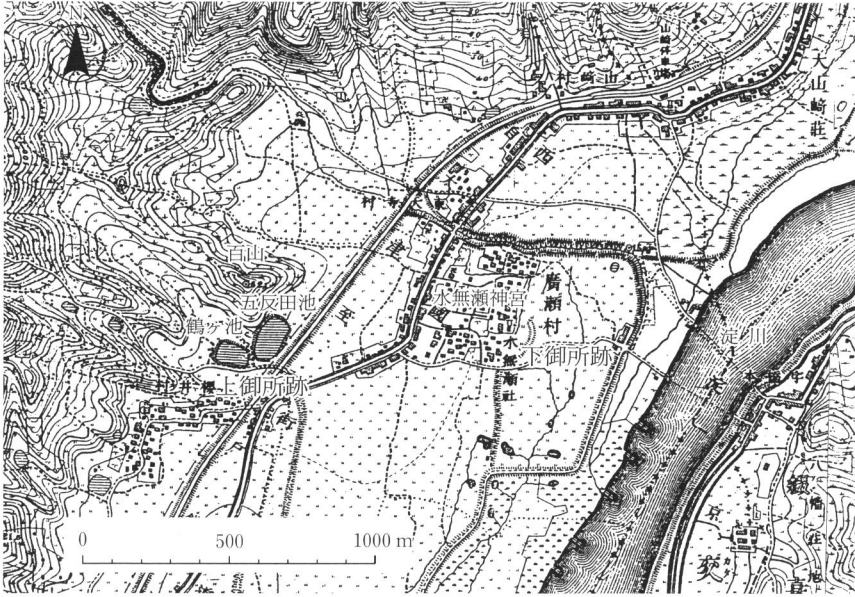


図3-4 水瀬殿位置図（「参謀本部仮製地形図」[1889年]より作成）

りと云々」とあるので、マツやサクラが植栽されていたことがわかる。

後鳥羽上皇の水無瀬殿

京都の西の郊外に造営された別荘としては、後鳥羽上皇の水無瀬殿がある。^⑬ 現在は大阪府三島郡島本町に属しているが、京都とは淀川で結ばれて交通の便の良い所だった。正治元年（一一九九）に現在の水無瀬神宮一带に、のちに下御所と呼ばれるものが建造されているが、水害で破損したことから、建保五年（一二二七）にその西方に上御所がつくられている〔図3-4〕。『明月記』の同年二月二十四日の条には、この御所のことが次のように述べられている。

山上に池有り。池の上に滝を構へらる。河を塞ぎ山を掘り、一兩日水を引く。又件の滝に大石を立つるため、兼ねて材木を取りに遣す。石を引くためと云々。国家の費、只此の事に在るか。

山上に池をつくり、滝を落とすというものだったが、現在は山は削られて池もほとんど埋め立てられてしまっている。水無瀬殿からの眺望は良かったらしく、後鳥羽上皇は『新古今和歌

集（巻第二）に、

見たせば山もとかすむ水無瀬河ゆふべは秋となに思ひけん「三六」

という歌を残している。

周辺の山の植生については、藤原定家の『拾遺愚草』に、

ありへけむ（生きて月日を送る）もとの千とせにふり（老いる）もせで我が君ちぎる峰のわか松「二五一八」

とあるから、峰にはマツ（現況からするとアカマツ）が生育していたことになる。庭園の植栽については『増鏡（第二）』に、「苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松」とあるが、周辺の樹林が残されていて庭園の小マツと調和していたのだろう。

鹿苑寺の原型——西園寺殿

西園寺殿は大政大臣だった西園寺公経（一一七一—一二四四）が造立したもので、現在の鹿苑寺（金閣寺）の地にあつて、北山殿とも呼ばれていた。『増鏡（第五）』によると本堂である西園寺を中心にくつかの建物がつくられ、園池のほとりには妙音堂、滝の近くには不動尊といった堂などが置かれ、北方には居住用の寝殿が存在したとされている。

植栽について同書は、

山ざくら峯にも尾にも植へをかんみぬ世の春を人や忍と

と公経の歌を引用している。周囲の山一带にヤマザクラを植えていたと考えられる。山の在来の樹木が何だったのかは、公経の長男である実氏（一一九四—一二六九）が『玉葉和歌集』の中の歌「二二二五」に「わがすむ山の松風の音」と詠んでいることから、マツだったことがわかる。現況からするとこれはアカマツということになる。緑のマツを背景として、ヤマザク

ラの花は一層鮮やかに見えたことだろう。サクラが建物の周辺にも植栽されたことについては、『明月記』の嘉禄元年（一二二五）二月八日の条に、「昨日北山に参ず。近日、人毎に桜木を充てられ、前庭に栽ゑらると云々」とある。また、『百鍊抄』の正元元年（一二五九）三月八日の条には、「北山第の南庭において舞楽。その間庭樹落花し殊に以て飛紛す。満庭興を催す」と記されている。

園池については『とはすがたり（巻三）』に、弘安八年（一二八五）に行なわれた実氏の妻貞子の九〇の賀が次のように描写されている。

釣殿遠く漕ぎ出でて見れば、旧昔年経たる松の枝差し交はしたるありさま、庭の池水言ふべくもあらず。満々たる海の上に漕ぎ出たらむ心地して、〔略〕

この園池は現在の金閣寺の前面のことだろうか。この行幸について『中務内侍日記（上）』の同年七月十九・二十日の条には、「入江の松の下」「中島の松の木末」「洲崎に立てる松の木立、釣殿近き松に」と詳しく記されているので、園池一帯にはマツが多く植栽されていたことがわかる。

なお、西園寺には上野と呼ばれる所があつたらしく、同書の七月十八日の条に「広き野に我もかうを混る物なく植へ渡したるに」と述べられている。ワレモコウを一面に植えた野原がつくられていたことになる。ワレモコウは『竹林抄（巻第十）』（文明八年「二四七六」頃）の題詞「二七二三」に、「吾木香など植たる庭を人の見せし時侍し会に」とあるように、次の室町時代にも使われている。また、『中務内侍日記（下）』の弘安十一年二月十三日の条には、「野中に走り散りたる、女郎花の中に萱草の咲きたる秋の野を見るにて」と述べられているので、野上にはオミナエシやカンゾウも植えられた部分があつたことがわかる。

図3-5 江戸時代の嵐山のサクラ（『都名所図会』1780年）

亀山殿と嵐山のサクラ

後鳥羽天皇の孫にあたる後嵯峨天皇（一二二〇—一二七二）の時代になると、政治的にも安定したらしく、譲位後に嵐山の現在の天竜寺の場所に、別荘として亀山殿を造営している。ここも西園寺と同様に寺院的要素が強く、大堰川おおいがわの北岸に嵐山に対して寝殿がつくられ、その範囲に薬草院・如来寿量院・浄金剛院などの堂が置かれていた。

亀山殿の特色はやはりサクラが植栽されていたことで、『五代帝王物語（後深草）』（鎌倉末期）に「向の山にはよしの山の桜を移し植られたり。自然の風流求ざるに眼をやしなふ」と書かれている。大堰川の対岸の嵐山に吉野山から移植したサクラは有名になり「図3-5」、現在も維持されている。吉野山のサクラのことは『万葉集』に見られないが、『古今和歌集（巻第一）』に紀友則（九〇五年頃没）の歌、

み吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれ
ける【六〇】

があることなどからすると、平安初期頃から有名になったらしい。京都のサクラを使わずに吉野から運んで来て植えた

いうことは、平安時代の「桜町の中納言」の例にならったのだろうか。

『増鏡(第七)』によれば、文永二年(一二六五)の亀山殿の棧敷殿での歌合わせで、

ほかよりは時雨もいかゞ染めざらん我植へてみる山のもみぢ葉

と嵯峨上皇は詠んでいる。「山のもみぢ葉」とあるのは嵐山のサクラのことで、鎌倉時代も『万葉集』の時代と同じように、まだカエデ以外の落葉樹が紅葉するのを楽しんでいたことがわかる。

寝殿の南側には園池が設けられていたが、この園池に関しては『統拾遺和歌集』に、

万代^{よろずよ}とかめのを山の松かげをうつしてすめるやどの池水「七二五」

という建治二年(一二七六)に大上天皇(亀山)が詠んだ歌が収録されている。西側の亀山には現在見られるように、アカマツが多く生育していたのだろうが、弘長三年(一二六三)二月の行幸の時の権大納言経任の歌には、

名にたてて万代ふべき亀のを山の桜はけふさきにけり「七三三」

とあるので、ヤマザクラが混ざっていたことになる。

亀山殿の庭園植栽については、『増鏡(第六)』に「わざとつくるはぬ(手を入れない)前栽」とあるが、これは嵐山に對峙していることを意識した文飾かもしれない。『増鏡(第七)』には、「御前のみぎはに船ども浮かめて、[略]花の木かげより漕ぎ出でたるほど」とあるから、園池の周囲にもサクラが植えられていたらしい。嵐山だけでなく庭園内や背後の亀山にもサクラがあったわけだから、春の光景は美しいものだっただろう。

(三) 京都の寺社の庭園

三条白川房と西行

鎌倉時代に建立された寺院のうち、京都の青蓮院しょうれんいんの前身である三条白川房は、『門葉記』(巻第百三十二)に当時の状況を描いた古図が掲載されていることから、庭園植栽が最もよくわかる「図3-6」^①。三条白川房は現在の京都市東山区の三条通と白川が交差する地点の北東側に位置していたもので、図は一三世紀前半頃の状況を描いたものと推定されている。建物は図の左手が御所(寝殿)で右手に熾盛光堂しじようこうどう、右上に懺法堂ざんぽうだうなどの堂を配するというように、月輪殿と同様に邸宅と寺院が合体した形になっている。

図の上方にある園池は、かつてここに後鳥羽上皇が造営した最勝四天王院の園池跡と考えられるもので、海洋風景を象つた寝殿造庭園の形態をとつていて、荒磯石組が置かれ岸には「浜松」と書かれている。先の藤原定家邸にも浜松が植えられていることからすると、海辺のマツという意味でクロマツを指しているのだろうか。このクロマツは最勝四天王院時代の名残かもしれない。

植栽については図中に位置が示され、植物名が書き込まれている。御所の東側に松、正面南側に「古木桜」、左右に「宮城野の西行萩」と「西行菟田山紅葉」、熾盛光堂の北西側に「遅桜」と桜が二本、懺法院に通じる中門廊の東横に「萩」、懺法堂の東正面に桜と「鶏冠木」が植えられている。僧侶で歌人でもあった西行(一一八一—一九〇)に関わる萩と山紅葉は、西行が門主だった慈円(一一五五—一二二五)に贈ったものと伝えられている。遅桜については『徒然草』(第一三九段)「(十四世紀後半)に、「遅桜、又すさまじ。虫の付きたるもむつかし」と述べられている。鎌倉時代に流行した品種のようだが、現代の何に該当するのか判明していない。このように三条白川房の植栽は全体的に簡素の感じになっているが、『作庭記』などからするとこれが一般的な状態ではなかったかと考えられる。

祇園社のサクラ

神社にもサクラは多かったらしく、祇園社（現、八坂神社）については、『とはずがたり（巻三）』に次のように書かれている。

文永の頃（一二六四—一二七四）、天王（牛頭天王）の御歌とて、

神垣に千本の桜花咲かば植へ置く人の身も栄へなむ

といふ示願^{じげん}ありとて、祇園の社に、をびたゝしく木ども植ゆる事ありしに「略」

貞観年間（八五九—八七七）の悪疫流行により、鉾をつくつて免疫の神である牛頭天王を祭り、これを神泉苑へ送り込んだのが祇園御霊会の始めとされている。祇園社境内にサクラを数多く植えたのは、花の散る季節に疫神が分散して疫病をおこすのを防ぐ「花鎮めの祭儀」のためと考えられる^⑬。

しかし、サクラは奈良の神社でも植えられている。『春日大社文書』によると、興福寺では嘉禎元年（一二三五）から建長三年（一二五二）にかけて、春日社一ノ鳥居から六道までの大道に、南には桜、北には柳を植えて並木をつくつていた^⑭。

（四）京都周辺の山林

鎌倉時代には三条白川房の図面が示すように、各地の珍しい樹木を集めたりしているので、その他の植物も存在していたと考えるのが妥当だろうが、平安後期と同様に寺院や神社の境内にはサクラをかなり植えている。別荘の庭園もマツ・サクラが主だったことがわかる。周囲の山にまでサクラを植え付けた例が見られるのは、平安時代のサクラの流行を山麓という立地条件で受け継いだからだろう。

別荘の周辺の山林にサクラを植栽することは、どうして可能だったのだろうか。水瀨殿・亀山殿・西園寺殿の史料からすると、天王山から嵐山をへて北山まで、京都周辺の山にはアカマツ林が広がっていて、おそらく東山まで及んでいたのではないかと考えられる。このアカマツ林はアラカシ・シイの原生林の後に生じた二次林で、絶えず肥料や燃料として落葉や枯枝が利用され続けたために、瘦地でも生育できるアカマツが残ったとされている。サクラは陽樹であるために常緑高木が生い茂った中では、種子は発芽しても日が良く当たらないと成長できず、成木を植えても花がつきにくく、衰弱してしまう傾向がある。現在の嵐山の状況が示しているように、アラカシ・シイ林内ではサクラは生存しにくい。周辺がアカマツ林の時代だったからこそ、陽樹であるサクラが生存することができたと言える。

二 中世の始まり——鎌倉の庭園

(一) 鎌倉の自然

植物の分布状態を見ると、鎌倉一帯は現状ではスダジイないしタブノキなどの常緑広葉樹林になっている。¹⁷ 海岸沿いで冬期には暖かいことから、タブノキが繁殖していることが、京都とは異なっている。しかし、江戸時代の鶴岡八幡宮・海蔵寺・建長寺・円覚寺・光明寺などの境内図を見ると、これらの寺社の周辺の山の植生は、ほとんどがマツ林になっている。¹⁸ 燃料や堆肥として落葉などが利用されたことから地力が衰えて、在来のスダジイ・タブノキ林は存続できなくなり、マツ林に変わったものだろう。近年になってガス・石油や化学肥料の使用が盛んになって、山林の利用が減少したために、原植生であるスダジイ・タブノキ林が復活したと考えられる。

(二) 武家邸宅の庭園

大倉御所の石の壺

治承四年(一一八〇)に源頼朝は鎌倉の大倉に新邸(大蔵御所)を構え、その北西に源氏の氏神をまつる鶴岡八幡宮を移し、この参道である若宮大路を中心に、大路・小路を基盤の目状に巡らして、都市を造営している。大蔵御所の規模は東西二町半、南北二町ほどだったとされているが、火災などのために四回に及ぶ改修ないし再建が行なわれている。

第一期の御所(一一八〇―一一九一年)では、中央に寝殿が置かれ、その西に侍所、南西側に釣殿が設けられていた。²⁰ 釣殿が存在するということは、寝殿の南側には園池が掘られていたことになるので、様式的には寝殿造庭園ということになる。植栽については、『吾妻鏡』(以下、この章の年月日だけの記事は『吾妻鏡』による)の元暦元年(一一八四)四月四日の条によると、「御亭の庭の桜開敷、艷色それ濃やかかなり」という状況だったので、頼朝は一条能保(一一四七―一一九七)を招いて花見を行なっている。

第二期(一一九一―一二二三)の御所においては、頼家(一一八二―一二〇四)の代の建仁二年(一二〇二)二月二十日に、相模国の積良の名木と言われたシダレヤナギの古木を、蹴鞠の懸りとするために御所の内庭に移植している。

相模国積良の辺に古柳あり。名木の由聞かしたまふに就きて、鞠の御壺に移し植ゑんがためにかの所に渡御す。北条五郎已下六十余輩、御共に候ず。また行景を召し具せらる。

これは同年三月十五日の条に「今日御鞠、終日に及ぶ。員^{かず}鞠を連続して蹴り揚げた回数」は百二十三、百二十、百二十、二百四十、二百五十なり」あるように、この時期に頼家は蹴鞠に熱中していた。二月二十一日の条によると、頼家はこのシダレヤナギを鎌倉の御所内の「石の御壺の内」に移植している。「石の御壺」は石を敷いていたとすると蹴鞠には不都合なの

で、庭石が置かれていた中庭ということだろう。行景という者が柳を植える奉行を行ない、「良木にあらざるの由」を言ったというから、彼は幕府の庭園担当者だったのではないだろうか。

実朝の時代には、承元元年（一二〇七）三月一日の条に、「桜・梅等の樹、多く北の御壺に植ゑらる。永福寺より引き移さるるところなり」とあるように、永福寺のサクラやウメなどを北の壺庭に移植している。建暦元年（一二二一）閏正月九日の条にも、次のような記事がある。

永福寺の辺より、梅樹一本を御所の北面に移し植ゑらる。これ北野廟庭の種なり。濃香の絶妙なるのみにあらず、南枝に鶯の棲あり。これによつて賞翫せらるると云々。

永福寺近くから京都の北野神社の系統のウメ一本を、御所の北面に移し植えているのだが、香りのよさだけでなく、鶯の巢がつくられていて面白いという理由からだった。

なお、嘉禄元年（一二三三）に大倉御所から次に移った鶴岡八幡宮南の宇都宮御所は、規模は大倉御所の半分程度だったとされている。建物はやはり寝殿造だったが、園池が存在したかどうかは不明で、植栽についても記事が見当たらない。

若宮御所と執権泰時

嘉禎二年（一二三六）に宇津宮御所の北側に造営された若宮御所は、宇都宮御所と同規模だったと推測されているが、存続期間が九七年と長いことから、四回以上の改修ないし再建が行なわれている。^②第一期（一二三六―一二五二年）の状態を見ると、寝殿と西侍は二棟廊で結ばれ、他に持仏堂・評定所・泉殿・南門などが設けられていた。これも寝殿造様式だったが、園池が存在したかどうかは明らかではない。

庭園について見ると、建長二年（一二五〇）八月七日に阿弥陀堂の加賀法印定清を呼び寄せて、御所の北の小庭に石を立てさせている。評定所の植栽に関しては、仁治二年（一二四二）三月十六日に「前武州なほ評定所に還り着き、庭上の落花を覧

て一首御獨吟あり」ということがあり、「前武州」と呼ばれた執権北条泰時（一一八三—一二四二）が次の歌を詠んでいる。

事しげき世のならひこそ懶もつけれ花の散らん春もしられず

このことから、評定所の庭園にはサクラが植えられていたことがわかる。

なお、北条泰時は街道に街路樹としてシダレヤナギを植えることを行なっていたらしく、『東関紀行』（仁治三年〔一二四二〕頃）に、

故武蔵の司つかさ（泰時）、道のたよりの輩ともから（道筋の住民たち）におほせて植へをかれたる柳も、いまだ陰とたのむまではなけれど、かつがつ（ともかくも）まづ道のしるべとなれるも哀あわれ也。

と書かれている。

その他の武家邸宅

他の武家邸宅に関しては、頼朝の乳母だった比企尼ひきのあまの邸がある。この南庭には「白菊」が植えられていたようで、文治三年（一一八七）九月九日にはこの庭だけ白菊が開花したことから、頼朝と政子を招いて都をまねて重陽の宴が盛大に催されている。

比企尼の家の南庭に、白菊開敷せり。外においてはいまだこの事あらず。よつて今日、重陽を迎へ、二品ならびに御台所、かの所に渡御す。

比企尼の養子である比企能員よしかず（一二〇三年没）の邸宅は、尼の邸と同一かどうか不明だが、建仁二年（一二〇二）三月八日に頼家がサクラ見物に訪れている。サクラを邸宅に多く植えたのは、京都の流行をまねたものだろう。

北条泰時の邸には、天福元年（一二三三）四月十七日に第四代將軍頼経（一二一八—一二五六）が妻とともに訪れている。

將軍家ならびに御台所、武州の御亭に入御す。かの東の壺の卯の花・瞿麦なごし等花盛りなり。よつて御連歌あり。

この時、東の壺庭はウツギやナデシコなどの花の盛りだった。ウツギは『万葉集』の時代から垣根に用いられているが、壺庭の例は珍しい。

將軍頼経が寛元元年（一二四三）九月五日に訪れた後藤基綱の大倉の家は、山陰やまかげの閑寂な所で、庭園には紅葉した落葉樹やマツがあり、「黄菊」がコケ地に植えられていて美しかったという。

將軍家、佐渡前司基綱が大倉の家に入御す。「略」この所もとより山陰に属し、閑寂の幽棲なり。しかのみならず、紅葉緑松枝を交ふるの体、黄菊青苔露を帯ぶるの粧よそい、感荷かんか一にあらず。

と、『吾妻鏡』にある。

（三）鎌倉の寺社の庭園

鎌倉の寺社の庭園の植栽はどのようなものだったのか、また武家邸宅や京都の寺社との相違はどうだったのかを見てみたい。

永福寺のサクラとクロマツ

源頼朝は建久三年（一一九二）に、奥州平泉の寺院を模しながらも、それを凌ぐものとして鎌倉に永福寺ようふくじを造営している。昭和五十八年（一九八三）度からの発掘調査で、中央東向きに二階堂が建ち、複廊で結ばれた北側には薬師堂、南側には阿弥

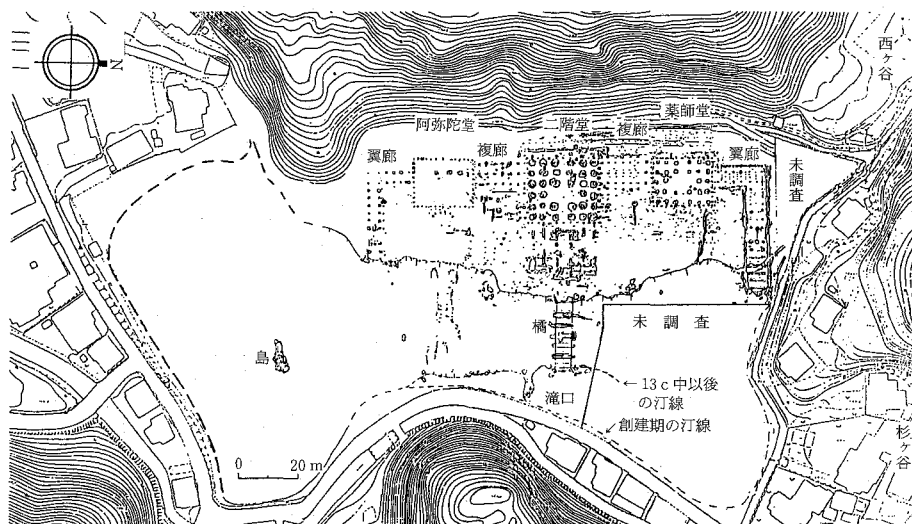


図3-7 永福寺境内の発掘平面図（鎌倉市教育委員会「永福寺跡」より）

陀堂が並び、両堂から翼廊が東に延びて園池に達した所に、釣殿が設けられていたことが明らかになった。翼廊を含めて堂の南北の長さは、平等院の二・五倍ほどの一三五メートルという巨大なもので、その前面の園池は南北約二〇〇メートル、東西約五〇メートルあり、二階堂前には対岸から橋が架けられていたことも判明している〔図318〕²²⁾。

植栽については大倉御所の項で述べたように、ここからサクラやウメを運んでいるので、これらが存在していたことがわかる。サクラに関しては、建仁三年（一二〇三）三月十五日に、頼家が一切経会に訪れた際に「桜花の艶色」を楽しんでいる。建保五年（一二二七）三月十日に第三代将軍実朝（一一九二―一二一九）が「桜花を覧んがために永福寺に御出」したのをはじめとして、寛喜元年（一二三九）三月十五日には第四代将軍九条頼経、建長三年（一二五一）三月十日には第五代将軍九条頼嗣（一二三九―一二五六）、文応元年（一二六〇）二月十八日には第六代将軍尊親王（一二四一―一二七四）²³⁾が、サクラ見物を行なっている。歴代の将軍が花見に訪れているということ、サクラが数多く植えられていて、開花期には壮観だったということだろう。発掘に伴う花粉分析結果によると、創建以前から一三世紀後半まで園池周辺はスギ林や照葉樹林が優勢だったが、一三世紀後半以降にクロマツが数多く植えられているという。池の周囲に

クロマツとサクラを組み合わせで植栽するようになったということなのだろう。

勝長寿院の老梅

頼朝が父義朝の供養のために、元暦元年（一一八四）に建立した南御堂とも呼ばれた勝長寿院では、建久五年（一一九四）二月二十二日に、三浦・渋谷などから集められたタケが、後の山麓に植え付けられている。

三浦・渋谷等より、竹数十本を召し寄せられ、今日南御堂の後山の麓に栽ゑらる。將軍家監臨せしめたまふ。三浦介これを奉行すと云々。

また、実朝の『金槐和歌集（巻之上）』の次の歌「二」の題詞によれば、境内の所どころにウメが存在していたらしい。

雨そほふれる朝に勝長寿院の梅とところさきけるを見て花にむすびつけ侍し

古寺のくち木の梅も春雨にそぼちて花もほころびにけり

「くち木の梅」と詠まれていることからすると、造営時に植えたウメは三〇年ほどでは朽ちないだろうから、かなり年数のたったものを当初に植栽していたと考えられる。

僧坊の庭のバシヨウ

貞応二年（一一三三）七月九日には、薬師堂谷の浄密という僧侶の坊の前庭に、三〇〇〇年に一度花が開くと伝えられているインド原産の「優曇花」（クワ科、学名 *Ficus glomerata* Roxb.）が咲いたということで、鎌倉中の男女が群をなして見物する騒ぎがあった。遠藤為俊という武士を見せにやらせたところ、「芭蕉の花か」という報告だった。

バシヨウは中国原産の植物だが、平安初期には渡来していたらしく、『古今和歌集（巻第十）』の紀乳母の歌「四五四」に、



写真3-2 建長寺境内のビャクシンの古木

「芭蕉葉ばしょうば」と出ている。また、菅原道真の『菅家文草（巻第四）』の讃岐守時代（仁和二年「八八六」—寛平二年「八九〇」）の詩にも、「路次（旅の途中）に芭蕉を見る」「三〇〇」と題したものがある。鎌倉には貞応初年頃に伝わり、暖地であることから活着したのだろう。鎌倉にバショウが伝わったのは、鎌倉が政治の中心になったことで、遠方から物資が到来するようになったからと考えられる。

建長寺のビャクシン

建長寺は執権北条時頼（一二二七—一二六三）によって、建長五年（一二五三）に造立されたもので、宗旨は禅宗で、宋から蘭溪道隆（一二二一—一二七八）を招いて開山としている。山門・仏殿・法堂ほふどう・方丈と直線的に大伽藍が並ぶもので、北条氏の権勢を示しているように感じられる。当初の建造物はすべて消滅しているが、現在も仏殿前には巨大なビャクシン（イブキ、学名 *Juniperus chinensis* L.）の古木が残っている〔写真3-2〕。

元弘元年（一二三二）の『建長寺指図さしず』〔図3-8〕には、高木が総門から山門までの通路の左右に各六本、山門から仏殿までの間には各五本ずつ描かれているが、おそらくこの一部が残存しているのだろう。中国の南宋（一二二七—一二七九）末の寺院の状況を描写した『大宋諸山図』を見ると、靈隠寺や天童寺・万年寺の仏殿前に何本か樹木は植えられているが、それらはビャクシンではなくマツのようで、建長寺のように長い並木にはなっていない。ビャクシンは学名が示すように中国に生育

しているが、日本でも福島県以南の海岸あるいは山上に自生している⁽²⁵⁾。建長寺のビャクシンは、中国から持つて来た可能性は少ないだろう。禅宗の伽藍配置の雰囲気に合わせてビャクシンを選び、並木状に植栽したものではないだろうか。

平成十二年(二〇〇〇)に行なわれた庭園部分の発掘では、『建長寺指図』に描かれている鎌倉時代の園池の一部が検出され

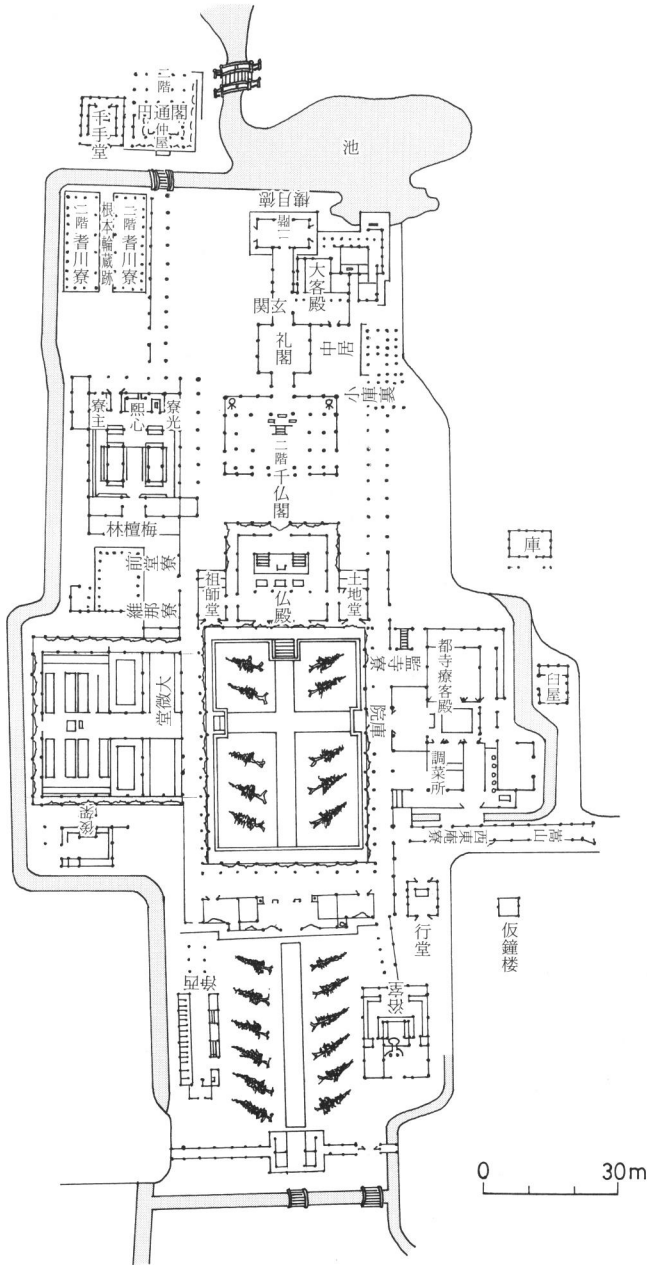


図3-8 建長寺境内の植栽（『建長寺指図』[1331年]模写）

た。建長寺の造営時から一四世紀中頃ないし後半までに堆積した土壌の分析調査によつて、ニヨウマツ類（クロマツあるいはアカマツ）・スギ・ケヤキなどの葉片・種子などが発見されたことから、これらが植栽されていたと推定されている²⁶。残存している種類が少ないので判断は難しいが、庭園植栽でもスギのような針葉樹が好まれる傾向が出てきているのではないだろうか。草本類は雑草の種子ばかりが検出されていることからすると、庭園は完成後たび重なる火災のために放置されていたと考えられる。

鶴岡八幡宮の樹木

鎌倉の中心になっていた鶴岡八幡宮の植栽については、文治四年（一一八八）十月二十日に頼朝が訪れた際のことだが、次のように記されている。

今日移徙^{いし}の儀あり。しかるにその庭上に多く樹を栽う。おのおの紅葉盛りにして錦のごとし。はなはだ興を催すの由、これを申さしむるによつて、二品かの所に入御。

直前になって庭に多くの紅葉した樹木を移し植えたのは、將軍の紅葉見物のために仮設的に行なったものだろう。同年十一月一日には「鶴岳宮の馬場の木、風無くして顛倒す」ということがあって、頼朝が見に行き神馬などの供え物をしているのは、祟りを恐れたからだろう。馬場の樹木が転倒するほどの古木だったということは、山裾の樹林が残されていたと考えられる。

また、寛喜三年（一二三二）正月二十日の山鳩の記事には、

鶴岳別当法印、御所に申し入れて云はく、当宮石階^{いしばし}の西辺に梅の木あり。山鳩^{ふたつ}二かの樹に居ること今日八ケ日、いまだ立ち去らずと云々。

と書かれていて、石段の西側にウメが植えられていたことがわかる。石段の下には三代將軍源実朝を暗殺した公暁くぎょうが隠れていたとされる大イチョウが存在するが、このイチョウについては、『増訂武江年表(二)』の文政四年(一八二二)の記事に、

正月十七日夜、相州鎌倉八幡宮焼亡。

筠庭いんてい云ふ、八幡宮石段の下に、大なる銀杏の大木あり。〔略〕年数もしれざる木ならん。中にうつろありて大蛇すめり。運数尽きたるにや、此の度の火に焼死。

とある。イチョウは焼け残ったのだろうか。

『称名寺絵図』の植栽

執権時頼を補佐した北条(金沢かねざわ)実時(一二三四—一二七六)は、正嘉二年(一二五八)頃に鎌倉の北東八キロメートルほどの金沢(横浜市金沢区)にある別荘に持仏堂を建立しているが、これが称名寺しょうなみじょうの始まりになっている。昭和五十三年(一九七八)度から同五十九年度まで行なわれた発掘調査で、州浜・石組・橋基礎などが検出されている。²⁷当初の状況については、元亨三年(一二三三)の『称名寺絵図』(称名寺蔵)「図3-9」によって知ることができる。金堂の正面には広大な園池が掘られ、それを囲むようにして堂が配置されているというように、典型的な浄土式庭園になっていた。植栽は園池の周辺や中島に、マツとカエデらしい落葉樹や常緑広葉樹が植えられている程度で、全体的に樹木の数が少ないのが特徴になっている。境内周辺の山は現在のような常緑広葉樹林ではなく、図ではマツが所どころに生えているにすぎない。すでに山林の利用が進んでいたということだろうか。

堯恵(一二三〇—一四九八頃)の『北国紀行』の文明十九年(二四八七)五月末の項に、

昔、為相卿ためすけ(藤原氏、一二六三—一二三八)、「いかにして此一本に時雨れけん山に先立つ庭のもみぢ葉」と侍りしより後

図3-9 称名寺境内の植栽（『称名寺絵図』1323年）

は、此木青葉にて玄冬まで侍る由聞ゆる楓樹、朽ち残りて仏殿の軒に侍り。

とあるので、仏殿（金堂）近くに鎌倉後期から室町前期にかけて、冬まで青葉のままのカエデが存在していたことになる。

『一遍上人絵伝』の三島神社

当時の神社境内の植栽状況がわかるものとしては、三島神社（静岡県三島市）がある。正安元年（一二九九）に完成した『一遍上人絵伝』には、一遍（一二三九—一二八九）が京に向かう途中、三島社に立ち寄った様子が描かれている「図3-10」。この絵が現地を見て書いたものか、他の図を写したものが問題になるが、建物配置が正確なことから、庭園も実際の状況に近いものと考えられる。現在では園池の護岸はすべて石積になっているが、この図では自然的で荒磯風の石組が置かれている。中央に島を置いて反橋と平橋を架けているのは、先の『称名寺絵図』と良く似ている。神社だが浄土式庭園の影響を強く受けているように思える。植栽は、入口の一の鳥居の左右にマツや常緑樹などがある。

図3-10 三島神社の庭園植栽（『一遍上人絵伝』1299年）

り、池の中島にはマツ、二の鳥居の所にマツとカエデ、中央手前の鳥居辺にシダレヤナギ、本殿の周辺には常緑広葉樹が見られる。低木類がまったく存在しない点も称名寺と似ている。

(四) 鎌倉と京都の相違

鎌倉の幕府の大蔵御所では、サクラが数多く植えられていたことから花見が催され、蹴鞠の懸りとしてシダレヤナギの古木を植え、北の壺庭にはサクラやウメを移植している。また、若宮御所内の評定所や比企能員邸の庭園にもサクラを植栽し、比企尼の家ではキクを植えて重陽の宴を行なっている。寝殿造庭園が伝わっただけでなく、遊びや儀式を通して、京都の影響を強く受けていることがわかる。永福寺・称名寺・三島神社などの寺社では、平安時代から流行している浄土式庭園がつくられていた。そのために植栽もウメ・サクラ・マツ・カエデ・マツ・シダレヤナギなど、京都と同様の植物が使用されている。政治的には鎌倉幕府が京都の天皇・貴族勢力を抑えていたが、文化的な面では京都を模倣せざるをえないという状況だったのだろう。

しかし、鎌倉の僧坊の庭にバショウが植えられ、建長寺境内にはビャクシンの並木が設けられている。これらは特殊な例というよりも、鎌倉が政治の中心地だったことから、商行活動が盛になって物資が集まるようになり、珍しい植物を入手することが可能になったことを示しているのではないだろうか。時代の動きが植栽にも現れていると言えるだろう。

三 鎌倉時代の植栽技法

(一) 挿し木と接ぎ木

挿し木は奈良時代、接ぎ木は平安時代にすでに行なわれているが、詳しいことは藤原定家の日記『明月記』から知ることができる。『古今著聞集(巻十九)』の「冷泉中将定家南庭の八重桜の枝を折取る事」「六六二」の項にあるように、内裏だった大炊殿おおいどのの八重桜の枝を接ぎ木にしようとして切り取ったほど、定家は植物好きだった。

表3-1に示したように、挿し木については安貞元年(一二二七)二月十三日に橘、寛喜二年(一二三〇)二月三日に柑子、同十八日に紅梅・白梅・木紅梅、翌年二月二十日に薄紅梅、嘉禎元年(一二三五)三月三日に柑子を行なっている。安貞三年三月九日の条に「先年栽えし下し枝同じく僅かに開く」とあるのは八重桜で、各種の梅は観賞用にもなっていたようだが、ウメ・ミカンといった果樹類を主に挿していたように見える。おそらく古代からの果樹園の技術が伝わったものなのだろう。

接ぎ木については、嘉禄二年(一二三六)正月二十七日に庭前の桜に八重桜を接ぎ、同年二月二十二日には梨木を行なっている。先の正月二十七日の条には「昨今庭前の小樹を剪り、八重桜の枝を續ぐ(五、六本)」と具体的に作業が書かれている。安貞三年四月二十七日の条に「先年繼ぐ所の枝すでに花樹となる」とあるのは、このサクラのことだろう。ナシを接いでいるところからすると、接ぎ木の技術もやはり果樹栽培から来ていると考えられる。

このように藤原定家のような貴族までが、観賞用の樹木の挿し木・接ぎ木を行なっていることは、鎌倉時代には農民の間にこれらの技術が広まっていたということではないだろうか。

(二) 移植技法

貴族だが蹴鞠を専門としていた飛鳥井雅有は、『春の深山路』の弘安三年（二二八〇）二月の項に、

九日、この飛鳥井のあばら屋の若木の桜掘りて、東宮へ持たせて参る。朝餉あさかじの御坪に植うべき由沙汰あれば、四方皆ふたがりたる御坪なれば、対の屋の上より越して植ゑぬ。〔略〕常に御慣らし（練習）のためなり。

と書いている。蹴鞠の練習用の懸りのサクラを中庭に植えるために、木を持ち上げて東宮御殿の対屋の屋根の上を越している。クレーンのない時代には、このようなことを人力でしていたことがわかる。

(三) 樹木の管理

覆い屋

樹木の管理については、『明月記』の嘉祿元年（二二三五）十月十六日の条に、「昨今、柑子・橘の樹に屋を造りて萱を葺く。霜結ぶに依るなり」とある。柑子と橘の霜除けのために覆い屋をつくったという。本来暖かい地方の植物なので、寒さを防ぐ必要があったのだらう。寛喜二年（二二三〇）十月十九日の条に「橘の樹に竹屋を作る」と書かれているから、材料はチガヤあるいはススキ、タケだったと考えられる。これは庭園用の樹木のためというよりも果樹栽培のためだが、外来種や貴重な植物に同様のことを施していた可能性が考えられる。

剪定技法

鎌倉時代に剪定が行なわれていたことは、蹴鞠の懸りから間接的に知ることができる。懸りの木は自然のままでは鞠が引つ掛かってしまうために、形を整える必要があったらしく、飛鳥井雅有著『内外三時抄』に懸りの仕立て方が書かれている。²⁸⁾

木の面裏を見ることよくよく沙汰すべし。〔略〕枝のいきたるかた(多い方)を面とす。枝一切つればたと面かはりする事あり。

今日でも樹木については、葉の茂り具合や枝振りから形が整っている方を表、悪い方を裏としている。懸りの植栽する際にも見栄えが良く、毬が面白く転がり落ちる面を表として、内側に向けるのが決まりになっていたらしい。庭園に樹木を植栽する時の見方や、茂った樹木の枝葉を剪定する際の技法を、懸りにも応用したものなのだろう。

樹木の外科的手術

また『内外三時抄』には、懸りのシダレヤナギの外科手術的なことが次のように記されている。

数十年懸を植かへ植かへして見るに、古木の大柳を切かぶにして立れば、其切口より雨水入て中朽、虫食て幾ばくならず損ず。切口に枝を打付て、そばよりも雨入ざるやうにして、蛭灰の壁をぬりたるは、はるかに久しく朽ちざるなり。能々水入ぬやうにすべし。〔原漢文混じり〕

シダレヤナギは特に腐りやすいために、幹の切り口に牡蛎の殻を碎いて石灰をつくり、漆喰のように塗っている。これも樹木に対しての多くの治療経験がなくてはできないことだろう。当時、果樹や庭木に対して行なっていた技法の応用ではないだろうか。

四 鎌倉時代の特徴

鎌倉時代の植栽を全体的に眺めると、閑院にはサクラ・カエデ、高陽院にはシダレヤナギ、中御門殿にはマツ・キリ・サクラがあり、鎌倉の大倉御所にはサクラ・シダレヤナギ・ウメ、比企尼の邸にはシラギク、北条泰時邸にはウツギといった植物が植えられていて、平安後期とそれほど変化がないように見える。しかし、藤原定家の一条京極第には、マキ・ヒノキ・マツ・ツバキ・コウジ・ミカン・ナンテン・ウメ・サクラ・カエデ・シダレヤナギ・コナラ・ハゼノキ・ナシ・モモ・リンゴ・ヤマブキ・ツツジ・ハギ・ウツギ・ボタン・シユロ・タケ・キク・ナデシコ・フジバカマ・ススキ・キキヨウ・カルカヤ・オミナエシ・アサガオなどが存在しているというように、植物の種類はかなり多くなっている。

鎌倉後期の人びとの植物の知識については、吉田兼好（一二八三頃—一三五三頃）の『徒然草（第一三九段）』によってその詳細を知ることができる。

家にありたき木は、松、桜。松は五葉もよし。花（サクラ）は一重なる、よし。〔略〕八重桜は奈良の都にのみありけるを、この頃ぞ世に多くなり侍なる。〔略〕

梅は、白き、薄紅梅。〔略〕

柳、又おかし。卯月ばかりの若楓は、すべてよろづの花紅葉にも勝りて、めでたき物也。橘、桂、いづれも、木は物古り、大なる、よし。

草は、山吹、藤、杜若、撫子。池には、蓮。秋の草は、荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、吾亦紅、刈萱、竜胆、菊、黄菊も。葛、朝顔、いづれもいと高からず、さゝやかなる、垣に茂からぬ、よし。

これらの植物は『作庭記』や『明月記』などに挙げられているから、鎌倉時代の庭園植栽としては、こうした植物が普及するようになったということなのだろう。藤原定家のように園芸好きな人間は多くの種類を植えているが、三条白川房・称名寺・三島神社などの絵図からすると、普通の場合には植栽は簡素なものだったということは注意しなくてはならない。

ウメ・サクラなどに一層多くの品種が出現していることも、平安時代と相違している。また、新たにコウシンバラや鎌倉の僧坊で問題となったバショウのような植物が渡来し、ナンテン・ビャクシンのような樹種が利用されるようになっていく。鎌倉に幕府が置かれたことから国内の往来が盛んになって、これまで以上に植物の伝播が早くなったということだろう。三条白川房には西行が持参したという宮城野萩があり、亀山殿では吉野山のサクラが対岸の嵐山に植えられ、京都の北野神社のウメが鎌倉の永福寺まで運ばれているというように、樹木の遠距離輸送も行なわれるようになっていく。

植物に対する人びとの意識に変化があったことも、また重要な点になる。兼好は先の文章の中で、

花は一重なる、よし。〔略〕八重桜は異様ことようの物なり。いとこちたく（しつこく）、ねぢけたり。植へずともありなむ。

と述べているが、ヤエザクラは平安中期頃から出現し、平安後期には流行しだして、鎌倉初期には藤原定家も数多く栽培している。兼好の考え方はまったく古代の考え方を否定していると言える。ナンテンや建長寺に植えられたビャクシンが、平安時代に愛好された植物とは感じが異なっているように、鎌倉時代の人びとは平安時代の貴族たちとは違った美意識を持ち始めていたように感じられる。こうした意識の相違は貴族社会だった古代が終わって、武家社会となる中世が始まったことを示しているのではないだろうか。

第三章 註

- (1) 河原武敏『平安鎌倉時代の庭園植栽』信山社出版、一九九九年。
- (2) 吉永義信「藤原定家と彼の建築・園芸・作庭」『造園雑誌』(一五一一) 日本造園学会、一九五一年、一一二頁。
- (3) 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館、一九八七年、五三八―五五五頁。
- (4) 太田静六、前掲書、六六九―六七六頁。
- (5) 太田静六、前掲書、七〇〇―七〇四頁。
- (6) 太田静六、前掲書、六八九―六九九頁。
- (7) 桐樹(元久二年「一二〇五」九月二十日条、梅・桜(建暦二年「一二二二」二月十六日条、欽冬(建暦二年二月二十七日条、梅・松(建保元年「一二二三」十月一日条)、鶏冠木(建保元年十月九日条)。
- (8) 諸橋轍次『大漢和辞典(縮写版、六)』大修館書店、一九七六年、六頁。
- (9) 宮澤文吾『花木園芸』養賢堂、一九四〇年、二八〇頁(復刻、八坂書房、一九七八年)。
- (10) 塚本洋太郎『花卉総論』養賢堂、一九六九年、六頁。
- (11) 飛田範夫「蹴鞠についての造園的考察」『造園雑誌』(五二一五) 日本造園学会、一九八九年、七一―一二頁。
- (12) 川上貢「法然上人絵伝に見える建築」『日本絵巻物全集(一二)』角川書店、一九六一年、四五頁。
- (13) 森蘊『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所、一九六二年、六〇―六二頁。
- (14) 飛田範夫「青蓮院の庭園と建築の変遷」『造園雑誌』(五三一五) 日本造園学会、一九九〇年、四三―四八頁。
- (15) 和歌森太郎『花と日本人』草月出版、一九七五年、五七―六四頁。
- (16) 瀬田勝哉『木の語る中世』朝日選書(六六四)、朝日新聞社、二〇〇〇年、一二二頁。
- (17) 神奈川県民部県史編集室編『神奈川県史(各論編四)』神奈川県、一九七八年、四一九頁。
- (18) 三浦勝男編『鎌倉の古絵図(一)』鎌倉国宝館図録(一五)、鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館、一九六八年。
- (19) 松山宏『武者の府鎌倉』柳原書店、一九七六年、四五頁。
- (20) 太田静六、前掲書、七二八―七三四頁。
- (21) 太田静六、前掲書、七三九―七四六頁。
- (22) 鎌倉市教育委員会編・発行『国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書』、一九八四―一九九三年。
- (23) 前掲『国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書(平成四年度)』一九九三年、二九―四四頁。
- (24) 関口欣也『五山と禅院』名宝日本の美術(二三)、小学

館、一九八三年、一二八一—四〇頁。

(25) 牧野富太郎著、小野幹雄・他編『改訂増補牧野新日本植物図鑑』北隆館、一九八九年、一八頁。

(26) 宮内泰之・田畑貞寿「遺存植物体の分析に基づく鎌倉期建長寺庭園の植栽に関する考察」『ランドスケープ研究(六五—五)』日本造園学会、二〇〇二年、四三一—四三四頁。

(27) 横浜市教育委員会編・発行『史跡称名寺境内庭園苑池保存整備報告書』、一九八八年。

(28) 飛田範夫、前掲論文「蹴鞠についての造園的考察」

III

枯山水と露地の時代

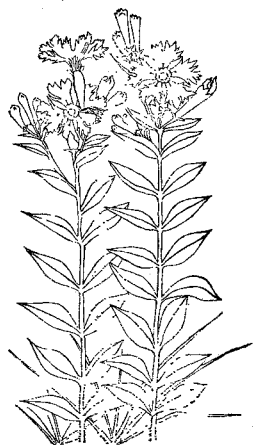
管領細川邸の庭園植栽
（上杉本『洛中洛外図屏風』より）

第四章 室町時代の庭園植栽

庭園史では戦国時代を合わせて室町時代としている場合が多いので、鎌倉幕府滅亡の翌年の建武元年（一三三四）から、室町幕府が滅亡する前年の元龜三年（一五七二）までを室町時代としておきたい。室町時代の庭園植栽史の研究としては、吉永義信が針葉樹が使われたことが特色だったと指摘している^①。また、個々の邸宅の庭園状況を明らかにするという目的で、どのような樹種が植えられていたかを外山英策が述べている^②。今まで調べられていない他の庭園にも言及することで、室町時代の植栽はどのようなものだったかを全体的に説明してみたい。

一 針葉樹の使用——室町前期の庭園

庭園史ではこれまでいわゆる戦国時代も含めて、室町時代として一括している。しかし、応仁の乱（一四六七—一四七七）によって京都は壊滅状態になったために、消滅したり荒廃した著名な庭園は少なくないので、建武元年（一三三四）から文明九年（一四七七）までを室町前期として扱うことにしたい。



センノウ
（『草花絵前集』より）

(一) 足利將軍邸の庭園

「等持寺絵図」の植栽

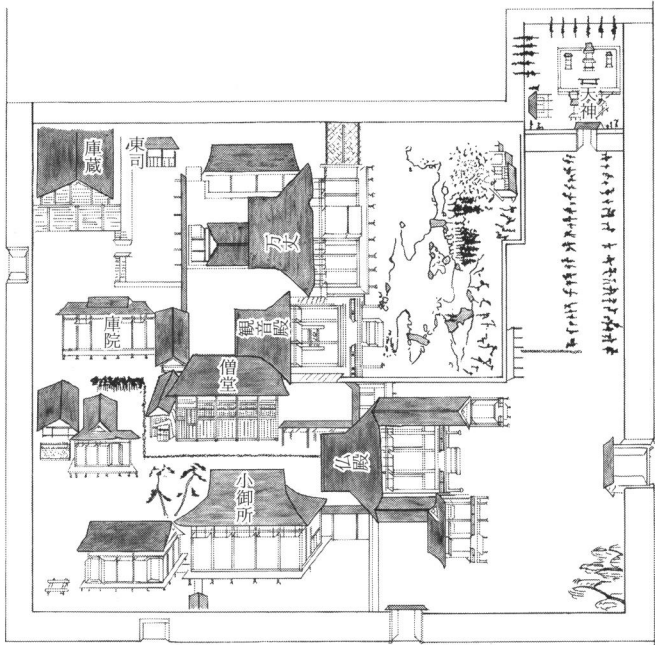


図4-1 等持寺の庭園植栽（『等持寺絵図』〔1352年頃〕模写）

等持寺は現在の京都市役所の西方に位置し、押小路・三条坊門小路・万里小路・高倉小路に囲まれた一町四方を占めていた。足利尊氏（一三〇五—一三五八）は、暦応二年（一三三九）から康永二年（一三四三）までここを邸宅として使用し、のちに寺としたと考えられている。^③ 等持寺の全景を描いた『等持寺絵図』（図4-1）は、土地の所有を認めた尊氏以下歴代の將軍の花押があり、作成年代は裏書に示されている文和元年（一三五二）頃とみられる。東側を正面として仏殿が建てられ、その背後に小御所と僧堂があり、北側の一面に方丈と観音殿が置かれている。配置形態からすると禅宗寺院というよりも私的な持仏堂に近い。方丈が東向きで前面に園池がつくられているのは、東山を眺望するためだろう。

園池の石組については、『蔭涼軒日録』の長享二年（一四八八）六月晦日の条に、「滝つぼの石は、開山国師（夢窓疎石）これを立てらる」「原漢文、以下同様」と記されている。

図の植栽を見ると、東門の南横にシダレヤナギが数本、東北部分の天神社の背後にスギあるいはヒノキと考えられる針葉樹があり、前面にはマツ並木が設けられている。園池の東側にはマツが多数植えられ、東北隅にある亭の近くには針葉樹が密植されている。年代的に見てこれらの植栽は、尊氏の邸宅だった頃からのものではないだろうか。『陰涼軒日録』の文明十九年（一四八七）正月二十四日の条には、この庭園には尊氏が愛好して鎌倉まで持ち運んだという「杜鵑（ホトトギス）の松」という名称の五葉（ゴヨウマツ）が植えられていたが、応仁の乱で庭園も焼失したために、再び姿の似たマツを植えたという話が記されている。

足利義満の室町殿

第三代將軍義満（一三五八—一四〇八）の時代になると幕府の基礎も定まり、永和四年（一三七八）三月に北小路室町に新たに「花の御所」とも呼ばれた室町殿を造立している。「花の御所」という名称は、義満がサクラを植えたからではなく、以前に存在していた崇光院御所に付けられていたものという。寢殿を中心に西に公卿座・中門廊・中門などの晴向き敷設、東の園池の周囲に小御所・観音殿・泉殿・会所などの奥向き敷設の建物が配置されていたと推測されている。建築は寢殿造の形態をとっているものの、会所がつくられるなどの新しい傾向が見られる。

園池は広大なものだったらしく、『さかゆく花（上）』に「水のおもて一ちやう（町）にもあまりて」と記されている。植栽については『永徳元年（一三八二）行幸詩歌』の中に、「池辺の松を詠ず」「原漢文」と題した関白二条師嗣の詩序がある。この時の他の和歌には、「池水にうつるも久し小松原」とか「立ちならぶみぎはの松」と歌われているから、汀には松原がつくられていたと推測される。おそらく先の『等持寺絵図』と類似した情景だったのだろう。また、「春日、室町第の行幸に待し、花池上に景を添うを賦す」と題した詩には、「水池塘に満ち花影新し」などとあることから、園池の周辺にはサクラも存在していたことがわかる。この行幸の時には蹴鞠が行なわれているが、その懸りの樹木については、『愚管記』の永和四年二月二十八日の条によると、近衛道嗣（一三三二—一三八七）邸から「糸桜（シダレザクラ）の小木・大樹」「原漢文、以下同様」を進呈さ

せている。

北山殿（鹿苑寺）の植栽の変化

義満は応永四年（二三九七）に、西園寺実永（一三八七—一四三二）から西園寺（北山殿）を譲り受けて、現在の鹿苑寺の基になった北山殿を造営している。二町半四方程度と推測されている敷地には、室町殿と同様に北御所と南御所があり、北御所内に寝殿・小御所などが設けられていた。この寝殿の西方に大池が掘られ、舍利殿（金閣）・天鏡閣・泉殿などが建てられていた。舍利殿は天鏡閣と高廊で結ばれていて、天鏡閣の北に泉殿が設けられていたという。

当初の植栽については、応永十五年三月八日の後小松天皇の来訪を記した『北山殿行幸記』に、

そう門のうち一町あまりのぼくには、西東わけてひまなくひしとうへならべたる桜、やへひとへこぎまぜて、〔略〕

と、総門内の馬場の両側に一町にわたってサクラを列植したことが述べられている。義満の没後、応永二十六年に主要建物は他所に移され北山殿は荒廃していくが、その後の庭園の状況については、『臥雲日件録』の康正元年（一四五五）三月十一日の条に次のように書かれている。

東岳引導し、前園に遊ぶ。桜花六株、皆盛んに開く。この鹿苑相公（義満）の栽える所、往時天子（後小松天皇）御遊し、殊にこれを愛す。今榛棘（しんきよく 雑木の茂み）の中にあり。惜しむべし。〔原漢文〕

義満は邸内にかなりサクラを植えていたと考えられる。

また、『蔭涼軒日録』の寛正三年（一四六二）十月十五日の条に、季瓊真蕊（きけいしんずい）（二四〇一—一四六九）は金閣に登って周囲を眺めた感想を、「四面皆山、楓葉錦の如くなり」と記している。西園寺の時代は周辺の山にアカマツが多かったが、義満はカエデを数多く植栽したらしい。しかし、応仁の乱後の文明十七年（一四八五）十月十五日には、足利義政（一四三六—一四九〇）と蔭

涼軒主だった亀泉集証（一四二四—一四九三）の間で、次のような会話が交わされている。

愚白^{もく}す。前年の乱中楓樹の大半これを斫^きる由白す。「略」遂に閣上（金閣）に登る。「略」相公^{いみ}曰く、池の南辺にかつて一イ（イチイガシ）の大樹あり。今これなし。乱中これを斫るか。愚答えて曰う、乱中これを斫ると。また「相公曰く」、泉水の中島にかつて楓樹あり、乱中これを斫るか。両島皆楓樹ありしが皆これなし。愚曰う、乱中これを斫ると云々。

応仁の乱中に周辺の山のカエデは切られ、南岸にあったイチイガシと二つの中島のカエデも伐採されたという。義満が造営した際には中島にはカエデが多かったようで、現在のようにマツが主になったのは後世のことらしい〔図4-2〕。

義教の室町殿

第六代將軍義教^{よしゆき}（一三九四—一四四一）は、父義満が建てた室町殿を再興して、永享三年（一四三一）に移り住んでいる。管領・諸大名が経費を分担して造営したもので、義満

図4-2 鹿苑寺庭園の植栽（『築山庭造伝』1735年）

時代に劣らない邸宅だった。永享四年の儀式の有様を示す「室町殿御亭大饗指図^{たいきようしず}」を見ると、寢殿の前面には園池が存在していない。鴨川の支流から水を引き入れていた園池は東側に位置していて、その周辺に奥向の施設として常御所・小御所・会所・観音殿・持仏堂などが建てられていた^⑦。

植栽に関しては、『看聞御記^{かんもんぎ}』の永享五年十月二十日の条に、室町殿に献上する梅を運んだ黒田の者が、途中で梅の枝を折ったことで義教が激怒して、切腹を命じたという話が記載されている。また、同書によると翌十一月二日には、伏見の大明寺が小松五本と海石（海で採れた石）を三個献上している。マツと石を運ぶのに地下人（人夫）を四〇ないし五〇人を使っているから、かなりの大木だったのだろう。『蔭涼軒日録』によると、永享十一年八月二十五日に義教から雑木を庭に植えることを山水河原者の虎菊が命じられ、翌九月二十三日には相国寺蔭涼軒から「楓・椿・柏・躑躅」が献じられている。柏は『蔭涼軒日録』の他の記事の表記からすると、カシワではなくてカヤあるいはビャクシンの可能性がある。

烏丸殿の樹木収集

第七代將軍義勝が急逝したために、宝徳元年（一四四九）に將軍となった義政（一四三六—一四九〇）は幼少だったことから、居住していた日野資任の烏丸殿^{からすまどの}をそのまま御所^{ご所}にしている。その位置は北小路南、武者小路北、万里小路西、高倉小路東で、一町四方の規模だった^⑧。義政は長祿二年（一四五八）に烏丸殿の十境を選定しているが、それ以前に庭園の改修を始めている。樹木は京都ばかりではなく、奈良の興福寺内の大乗院などからも河原者を使つて収集している。『大乗院寺社雑事記^{だそうじんき}』と『蔭涼軒日録』から記事をまとめると、表4-1-1のようになる。

興福寺蓮華院のウメは人夫五〇人で運んでいることからすると、かなりの大木だったことになる。ナンテンは京都嵯峨の諸寺院から四日間^{しににちかん}にわたって献上されていることからすると、数は多かったと考えられる。表4-1-1を合計したものが以下のもの、マツ・ビャクシン・マキなどの針葉樹が非常に多いことが特色と言える。

表4-1 烏丸殿の植栽

年 月 日	進 呈 者	植 物・本 数	出 典
長禄2年(1458)閏正月3日	興福寺大乘院	糸桜1本・白檜1本・ 檜1本	大乘院寺社雑事記
閏正月5日	興福寺靈山院 阿弥陀院 文殊院 成就院 明王院 窪院 知足院 普賢堂 池坊 永久寺円光院 世尊院 西養院	岡松4本・五葉1本 岡松4本 岡松4本・柿1本 白檜2本 南天笠カフ1本・岩躑 躑1本 五葉1本 富士松2本 岡松2本・白檜1本 松1本 五葉1本・南天笠 檜1本 蓮花ツ、シ1本	同上
閏正月9日 11月15日～18日	興福寺蓮華院 嵯峨諸寺院	梅1本 南燭	同上 蔭涼軒日録

岡松一四本、白檜(ジャクシン)四本、五葉(ゴヨウマツ)三本、檜(マキ)・富士松各二本、糸桜(シダレザクラ)・柿・岩躑(サツキ)・松・蓮花ツ、ジ(レンゲツツジ)・梅各一本、南天笠「南燭」(ナンテン、笠は笠の誤り)株数不詳。

岡松は言葉からすると先にみた「浜松」に対するもので、アカマツに該当するのだろう。富士松は名前からすると富士山の近くに生えていたもので、カラマツと考えられる。^⑨ おそらく鎌倉との行き来から京都にもたらされたものだろう。

義政の室町殿

足利義政は烏丸殿の改修が終わる直前の長禄二年(一四五八)十一月二十七日に、義満・義教の御所だった室町殿に移転することと突然決定し、諸大名に築造を命じている。長禄三年十一月までに寝殿を中心とした表向き施設が完成し、翌寛正元年(一四六〇)十二月には園池の周辺に奥向きの建物である観音殿・会所・小持仏堂・仏護堂・泉殿などができている。^⑩

『碧山日録』の応仁二年(一四六八)十一月六日の条には、この庭園を見ての感想が次のように述べられている。

南面より見る所の山水を築くの境、華亭を青松の塙に置き、画

表4-2 室町殿の植栽

年 月 日	進 呈 者	植物・本数・植え場所	出 典
寛正元年(1460) 3月11日	相国寺連輝軒	松	蔭涼軒日録
4月3日	同 蔭涼軒	当帰草一叢(北面花壇)	同 上
5月9日	同 勝定院	白蓮(持仏堂前の壺)	同 上
閏9月16日	東福寺永安院	梅樹5本	同 上
	禅仏	松樹2株	同 上
閏9月17日	東福寺芬陀利華院	蘇木1本	同 上
寛正2年(1461) 4月11日	同 永明院	白藤	同 上
7月11日	建仁寺	松樹	同 上
10月3日	慶雲寺	椿樹9本	同 上
10月7日	陽明軒	白藤根(西殿の下)	同 上
10月9日	龍雲寺	檜樹3本	同 上
10月22日	祥雲院	松樹	同 上
10月27日	不二庵	拍樹5本	同 上
10月29日	相国寺蔭涼軒?	千葉椿樹	同 上
11月3日	相国寺蔭涼軒	千葉八重一重接ぎ山茶(泉)	同 上
12月4日	興福寺大乘院	柘榴1本・柏真1本	大乘院寺社雜事記
	成就院	柏真1本	
12月6日	永久寺上乘院	五葉1本	同 上
(発送は寛正3年2月)	中院	白楓1本	
	阿弥陀院	白楓1本・口無1本・柘榴1本	
	薬師院	白楓1本	
	円光院	口無1本・平木1本	
	正暦寺一心院	白楓1本	
	宝蔵院	白楓1本	
	宝光院	白楓1本	
12月8日	興福寺成就院	五葉1本	同 上
	窪院	桃1本	

舳(屋形船)を白沙の洲に繋ぐ。奇花珍石、鳧雁(ふがんえん)鳶(とび)を遊ぶすの資、以て数うべからず。「原漢文、以下同様」

ここでの植栽工事を年代順に並べると表4-2のようになる。年代からすると持仏堂・泉殿一帯の修景のための植栽だったのではないかと考えられる。植栽を種類ごとに分類すると次のようになる。

椿樹九本、柏真「白楓」(ビャクシン)八本、梅樹・拍樹(柏樹「カヤ」の誤りか)各五本、松樹四本以上、檜樹(ヒノキ)三本、柘榴(ザクロ)・五葉(ゴヨウマツ)・口無(クチ

ナシ)各二本、平木(ヒイラギ)・桃・蘇木(ソテツ)各一本、当帰草(トウキ)・白蓮(白色のハス)・白藤(シラフジ、ヤマフジの変種)・千葉椿樹(ツバキの一種)・千葉八重一重接ぎ山茶(サザンカ)各数量不詳

ビヤクシン・マツ・ヒノキ・カヤ?などの針葉樹がやはり多いが、ザクロ・ヒイラギ・ソテツというようなこれまで見られなかった植物も出現している。ツバキは九本と多く、「千葉椿樹」というような品種も現れている。サザンカは「千葉八重一重接ぎ山茶」という名称から、接ぎ木によって繁殖させていたことが窺える。室町時代にはツバキ・サザンカも流行していたと言えるかもしれない。

場所別に見ると、会所北側の花壇にトウキ、持仏堂前の壺庭の池の中には白ハス、西殿に白フジ、泉に接ぎ木したサザンカが植えられている。なお、樹木を集めることは、幕府役人の千秋形部少輔が担当している。

(二) 内裏の庭園

南北朝時代の土御門内裏

北朝方の光明天皇は建武四年(二三三七)九月二日に土御門東洞院殿に移り、応永八年(二四〇一)二月二十九日に焼失するまで、ここを内裏として使用していた。現在の京都御所はこれが基になったもので、建築史ではこの時期のものを南北朝時代の土御門内裏と呼んでいる。敷地は高倉通・東洞院通・正親町通・土御門通に囲まれた、一町四方の北半分を占めたものだった。寝殿を中心にして、その東南部に小御所が建てられ、延文五年(二三六〇)六月二十七日に小御所の北に泉殿がつくられていた。^①

植栽に関しては、『門葉記(巻五十一)』の応安元年(二三六八)五月三日の条の「土御門内裏指図」に、南殿正面の左右に「桜木」「橘木」と書かれている。これは「左近の桜、右近の橘」という伝統に従って植えたものだった。このサクラの植え替え

については、『愚管記』の延文三年十月二十二日の条に「左近の桜、大将を奉行となし今日植え替えらると云々」とある。『仲光卿記』によると応安四年三月二十一日の親王宣下の際には、「左大将階前に渡り、桜樹の南頭に立たしめ給う」「原漢文」ということをしているので、南殿のサクラは儀式の際の目安になっていたことがわかる。

私的な奥向の部分の植栽については、近衛道嗣がマツを献上したという次の記事が、『愚管記』の貞治七年（一三六八）七月二十五日の条にある。

庭前の仮山（築山）の松三本を掘り進む。禁裏に栽えらるる為なり。泉殿の御前に栽うと云々。

戦乱が続いた時代だったために内裏の規模が小さかったことから、この泉殿は常御所として利用されることもあったらしい。この時代の泉殿は平安時代とは違い、湧泉がある所という意味ではなく、園池近くにある建物を指すようになっていく。泉殿の規模が大きかったために多くの樹木が必要になり、近衛家からもマツを徴発することになったのだろう。

応永度内裏の泉殿

後小松天皇は応永九年（一四〇二）十一月十九日に、再興された土御門殿に遷幸している。この内裏は嘉吉三年（一四四三）九月二十三日に焼失するまで使われ、造営年代から建築史上は応永度内裏と呼ばれている。敷地は南側に土御門通まで拡張され、一町四方になっている。初期の状況は、『福照院関白記』所収の「応永内裏指図」〔図4-3〕によって知ることができ^⑫る。紫宸殿を中心にして北西に常御所、北東に小御所が設けられ、紫宸殿の正面にはサクラとタチバナと思われる樹木が植えられている。

この「応永内裏指図」には描かれていないが、応永十三年（一四〇六）には小御所の北方に泉殿が造立されている。また、嘉吉三年に焼失した際のことについては、『康富記』の同年九月二十七日の条に、「御泉水の山中亭ちん一字わづか纔に焼け残る」「原漢文」に書かれている。泉殿に接する園池は大きなもので、背後の築山の上には亭が建てられていたと推測される。泉殿の植栽

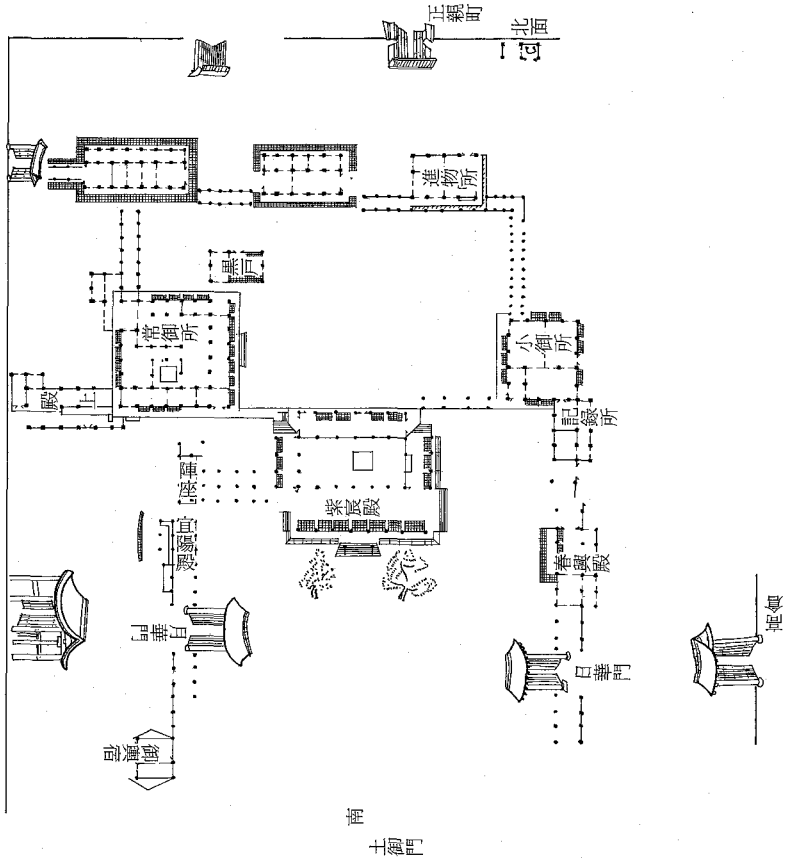


図4-3 応永内裏の植栽（『福照院関白記』の指図模写，一部名称省略）

については、『看聞御記』の永享十年（二四三八）二月一日の条に、後花園天皇が泉殿においてウメを見て、「九重や軒端の梅の花さかり」と詠じたことが出ている。

『看聞御記』の応永三十一年（二四二四）十一月二十六日の条には、伏見の寺院などが内裏に献上した樹木として次のものを載せている。

- | | |
|-------|--|
| 伏見宮貞成 | 梅木一本 |
| 前宰相 | 庭松二本 |
| 大光明寺 | 椿一本 |
| 蔵光庵 | 白樺（ビヤクシン）
一本・羅漢樹（ラカンマキ） ^⑬ 二本 |
| 行蔵庵 | 梅一本・岩躑躅（サツキ）一本 |
| 退蔵庵 | 松三本 |
| 静隠庵 | 松一本 |
- マツなどの針葉樹が多いことが目に

つく。六台の車で運んでいることからすると、高木類が多かったのだろう。具体的な植栽場所は不明だが、これだけの樹木を入れるのは泉殿周辺だろうか。

(三) 貴族邸宅の庭園

『看聞御記』の庭園

■伏見殿の植栽

室町前期の貴族邸宅としては、『看聞御記』の著者である伏見宮貞成親王（後崇光院）、一三七二—一四五六の邸宅がよく知られている。この邸宅は京都の伏見に存在していたもので、伏見殿あるいは伏見御所と呼ばれていた。平安時代に橘俊綱が造営した伏見殿はいく度か再建されているが、応永八年（一四〇一）に焼失したために、貞成親王の時代には跡地内に建立された大光明寺の塔頭大通院を住居としていた。その位置は御香宮（ごかうぐう）の東南の現在の桃山町泰長老・本多上野辺と推定されている。¹⁴

この時期の建築と庭園に関してはすでに詳しく研究されているので、それらを参考にして植栽についてまとめてみたい¹⁵。『図4-4』。『看聞御記』の記事から場所別に植樹や開花の記事を区分すると、表4-3のようになる。親王が居住した主殿内には、南側に常御所と客殿、南東側に殿上、北東側に御湯殿上、北側には学文所などの部屋がつくられていた。主殿は仕切られて各部屋に分かれて機能分化していたことが、寝殿造の寝殿とは大きく違っている。

この常御所の前面部分は、日記の中では「庭前」あるいは「南庭」と呼ばれていて、親王にとっては最も身近なものだった。応永二十五年に小島が築かれ、同三十二年と永享二年（一四三〇）には改修工事が行なわれている。しかし、池には水を入れていた形跡がみられないので、枯山水の可能性がある。樹木の補植は絶えず行なわれていて、山松（アカマツ）を少なくとも四〇本以上加えている。その他、建物近くには梅（紅梅）・桜（八重桜）・梨が植えられていたようで、サクラの開花時の三

図4-4 伏見宮貞成の伏見殿推定間取復原図（川上貢『日本中世住宅の研究〔新訂〕』より）

月初旬頃には毎年花見の宴が催されている。

東庭の方は、常御所からも眺められるようになっていて、殿上とは透垣^{すいがき}で遮断させていた。ここは永応二十八年から翌年にかけて工事が行なわれ、園池がつくられている。植栽はやはり松が多いが、小松が主になっていた。池の周辺には薔薇^{そうび}（バラ）が植えられ、草花を植え付けた花壇も別に築かれている。北側の庭は建物に囲まれた壺庭になっていて、平安時代風の野筋がつくられ、仙翁花（センノウ、ナデシコ科）などの秋咲きの草花が植えられていた。永応二十九年五月十二日の条ではここを「草壺」と呼んでいる。仙翁花は当時流行していたもので、この時代に中国から入って来たのではないだろうか。西側の庭はあまり鑑賞されることはなかったらしく、以前は栗木があり、躑躅や桜が植えられている。御湯殿上は風呂の意味ではなく、茶などを飲んでくつろぐ場所、石や木を型どおりに置いた庭園がつくられたりしている。

■ 一条東洞院邸の植栽

貞成親王は長子彦仁が天皇（後花園）になったことから、永享七年（二四三五）十二月には洛中の一条東洞院に転居している。この邸には立派な園池が造営されていたようで、『看聞御記』の

表4-3 伏見殿の植栽（『看聞御記』より）

場 所	年 月 日	植栽植物〔（ ）は庭園改修など〕
南庭 (庭前)	応永25年(1418)	2月1日 松山の松数本を移植する。
		2月7日 松山の松を掘り取り、数本を植える。
		2月21日 山松数十本を石立の者などが植える。
		2月28日 (小弓場をつくる)
		2月29日 蔵光庵主を呼び、小島を築かせ石を立て梅を植える。
		3月6日 (御所跡の石4・5個を運び立てる)
		10月11日 梅の小木を1本植える。
		10月13日 即成院の梅1本をもらい、庭の梅1本を贈る。
	26年(1419)	2月17日 木幡の松5・6本を掘り取って植える。
		2月29日 梅花を賞翫する。
		3月9日 サクラの花盛り。
		8月2日 梨の実を取る。
		12月19日 梅2本・白榛1本を青蓮院に進呈する。
	27年(1420)	2月18日 梅を賞翫する。
		2月26日 サクラの花盛り。
		6月4日 (山石を1個立てる)
	28年(1421)	2月29日 山松7・8本を植える。
		2月30日 サクラの花を賞翫する。
		3月10日 松山の松2・3本を移植する。
	29年(1422)	8月5日 梨の実がなる。
	30年(1423)	2月18日 サクラの花を賞翫する。
		2月23日 山松を掘り取り植える。
		2月26日 松・秋草等を植える。
	31年(1424)	2月4日 松を植える。
		2月11日 松山の小松を少々掘り取り植える。
		2月21日 小松を少々植え直す。
		3月6日 サクラの花盛り。
		7月19日 梨の実がなる。
		11月26日 梅木1本を内裏へ進上する。
	32年(1425)	2月4日 梅・桜を植え直す。山松2・3本を掘って植える。
		2月26日 桜の古木を南西へ移す。(蔵光庵主を呼び、石を立てる)
		2月27日 松4本をもらう。(蔵光庵主来て石を立てる)
		4月13日 山の松を掘り取らせ植える。
	永享2年(1430)	閏11月18日 (珠蔵主が竜頭石等を立てる)
		閏11月25日 (立石完了)
	4年(1432)	8月9日 梨の実を禁裏へ進上する。
	5年(1433)	3月6日 八重桜の花が盛り。

場 所	年 月 日	植栽植物〔()は庭園改修など〕
	10月30日	庭者が松の笠を結う。
	11月1日	松1本を室町殿へ進上し、替わりに松1本を植える。
6年(1434)	2月13日	紅梅の花が盛り。
	3月5日	サクラの花を賞翫する。
7年(1435)	3月1日	山松ともらった松1本、馬場の桜1本を植える。
	3月3日	桜と松1本を植える。
	3月4日	サクラの花を賞翫する。
9年(1437)	2月29日	八重桜の花が盛り。
東庭 (東面)	応永25年(1418) 2月28日	花壇を築き草花を植える。
	28年(1421) 10月27日	(改修、善基が石を立てる)
	11月15日	(改修完了、前栽のまわりに沙を撒く)
	29年(1422) 2月12日	善基からもらった梅1本を植える。
	2月21日	梅の花が盛り。
	2月22日	東山の小松4・5本を掘り取り植える。
	2月29日	権現山の小松数十本を掘り取り植える。
	3月1日	小島を築き、松数本を植える。
	3月6日	権現山の小松を掘り取り植える。
	3月18日	山の小松4・5本を掘り取り植える。
	9月21日	東山の小松4・5本を掘り取り植える。
	9月23日	山の小松を掘り取り植える。
	30年(1423) 9月5日	山の小松4・5本を掘り取り植える。
	32年(1425) 2月22日	山の小松を少々掘り取らせ植える。
	永享3年(1431) 4月14日	池辺の薔薇の花が盛り。
	4年(1432) 3月9日	権現山の小松2・3本を掘らせ、池に植える。
	5年(1433) 10月30日	山の小松1・2本を掘り、池に植える。
	6年(1434) 4月25日	薔薇の花が盛りなので賞翫する。
	7年(1435) 5月17日	薔薇を賞翫する。
北面小壺 (北向庭)	応永29年(1422) 4月14日	野筋を築き、秋草を植える。
	4月22日	掃除をして秋草を植える。
	5月12日	(掃除をして沙を撒く)
	永享3年(1431) 7月4日	仙翁花を賞翫する。
西庭 (西面・西向)	応永25年(1418) 2月8日	以前は栗木があったという話。
	永享5年(1433) 4月7日	躑躅の花が盛り。
	7年(1435) 3月8日	南庭から桜を移植する。
殿上前	永享7年(1435) 2月26日	北庭から梅を移し植える。
御湯殿 上庭	応永28年(1421) 10月21日	東側に小山を築き、石を置き木を植える。

永享八年二月二十一日の条によると、將軍足利義政は庭者の扇菊に命じて参考のためにここを見させている。

貞成はよほど植物が好きだったらしく、伏見の邸宅と同様につきつぎに植樹を行なっている。植栽について『看聞御記』の記事をまとめると、表4-4のようになる。寢殿の正面階段の所に桜、東側に梅と桜が数本、西側には当初躑躅や梅・柳があり、北側の壺には松が植えられていた。嘉吉三年（一四四三）には、西側の堀中門内の松・桜（不言堂「フゲンソウ」）・柳（シダレヤナギ）・鶏冠木（カエデ）が、蹴鞠のための懸りとして北側の壺内に移植されている。また、寢殿の北方に位置していた常御所の北側には、花壇が築かれ草花が植えられているが、拡張されるなどしている。主に寢殿の東・西・北側に植栽が行なわれているのは、園池が寢殿の南側に存在していたからだろうか。樹木のいく本かを伏見の旧邸から取り寄せているが、これは単なる愛着からではなく、ウメ・サクラ・マツといった伝統的な植物を貞成は愛好していたためと考えられる。

二条殿のフジ

太政大臣を務め、和歌・連歌にもすぐれていた二条良基（二三〇―一三八八）の邸宅だった二条殿は、二条御池殿・押小路殿とも呼ばれていた。押小路殿烏丸小路に位置していて、敷地は南北二町あるいは方一町と推測されている⁽¹⁶⁾。庭園については良基の『おもひのまゝの日記』に、

山のすがた、水の心ばへいとおもしろし。ひんがしに高き松山あり。山のふもとよりわきいづる水のながれ、松のひゞきをそへていとすゞし。水のうへに二かいをつくりかけたれば、やがて座（庭？）の中をながれ行く石間の水、さながらそでうつばかりなり。ながれの末の池のすがた、入江々々しまじまのたゞずまひ、いとおもしろし。

と描写されている。東側の築山にはマツが数多く植えられていたことがわかる。建物の二階が池に張り出していたというから、風情がある庭園だったのだろう。

堯恵の『下葉集』（明応七年「一四九八」成立）の歌「一〇五」の題詞に「更衣（こぎ衣替え）のころ、二条前関白家御池の藤浪さか

表4-4 一条東洞院殿の植栽(『看聞御記』より)

場 所	年 月 日	植 栽 植 物
寢殿東面	永享8年(1436) 9月22日	伏見などからの梅3本を植える。
	9年(1437) 2月19日	築地の際に梅1本・桜2本を植える。
	10年(1438) 11月17日	伏見の梅1本・桜1本を植える。
寢殿西面 (西向)	永享8年(1436) 9月8日	菊を植える。
	9年(1437) 2月23日	梅2本(鶯宿梅・紅梅)を植える。
	3月5日	柳3本を植える。
	4月24日	商人が持参した躑躅を植える。
	10年(1438) 3月29日	躑躅の花を賞翫する。
	4月16日	商人が持参した躑躅を植える。
	嘉吉元年(1441) 4月10日	躑躅の花を賞翫する。
	3年(1443) 2月1日	北面の壺へ梅木・躑躅を、蹴鞠の懸りとして移し植える。
	4月7日	庭前から躑躅を移植する。
西面塀 中門内	永享10年(1438) 2月18日	紅梅の大木1本を植える。
	2月24日	梅の小木2本を植える。
	嘉吉3年(1443) 2月5日	松・桜(「不言堂」)・柳・鶏冠木を懸りの木として植える。
寢殿南階	嘉吉3年(1443) 3月9日	サクラの花が盛り。
寢殿北面壺 (北面)	嘉吉元年(1441) 2月13日	伏見の庭の松2本を植える。
	3年(1443) 2月1日	西面から梅木・躑躅を蹴鞠の懸りとして移し植える。
	12月8日	御興宿造立のために、柳・桐を北面に移植する。
常御所北向	永享9年(1437) 2月21日	草花を植えるために花壇を築き、籬を造る。
	3月3日	草花の種を花壇に植える。
	3月5日	草花をさらに植える。
	10年(1438) 2月5日	花壇を広くし、草花を植える。
御所中	嘉吉元年(1441) 6月4日	高くなった柳数本の梢を切る。

りにまゐりて」とあるので、園池の縁にはフジが存在していたことになる。『松下葉』の文明七年（一四七五）頃の歌「八〇三」には、

当初二条殿の御庭の藤躑躅を見るに、〔略〕

立田にもなほまし水ぞ岩つつじ紅こゆる春の藤浪

とあるから、フジの他にはツツジ類が多く植えられていて目についたらしい。『応仁記（卷七）』にも「北ハ藤波咲時ハ、〔略〕錦ヲ晒ス八重躑躅、〔略〕冬ハ千年ヲ松ノ雪」と書かれている。

応仁の乱で焼失し、『実隆公記』によると文明九年十一月十一日にも再び焼けている。¹⁷『宣胤卿記』の文明十三年三月三十日の条には、「烏丸西の御新造において一献あり。〔略〕藤辺においてまた御酒あり」「原漢文」というように、建物の新築のこゝと花盛りのフジの近くで宴が催されたことが述べられている。『蔭涼軒日録』の長享二年（一四八八）三月十三日の条にも、「二条殿に往く。藤花・躑躅盛んに開く。花を看了んぬ」とある。フジ棚のことがどの時代の史料にも書かれていないことからすると、棚はつくられていなかった可能性が強い。

その後のことについては、『実隆公記』によると二条殿から庭に咲いたものとして、大永七年（一五二七）二月十七日に梅の枝、翌年五月十三日には杜若を実隆はもらっているから、園池にはカキツバタが植えられていたことになる。景観年代は一六世紀中頃と見られている上杉本『洛中洛外図屏風』には、「二条殿」と書き入れられた部分に、園池に臨む二棟の建物といく本ものマツが描かれているが、フジは見当たらない〔図4-5〕。平成十四年（二〇〇二）には竜躍池りゅうやく池と呼ばれた園池部分と護岸石組が、京都市中京区両替町通御池上る金吹町で発掘されているが、建物跡は発見されていない〔写真4-1〕。

図4-5 二条殿の建物と庭園（上杉本『洛中洛外図屏風』より）



写真4-1 二条殿園池の出土状況（2002年撮影）

(四) 寺院の庭園

西芳寺と夢窓疎石

西芳寺は暦応二年（一三三九）四月に、藤原親秀が夢窓疎石（二二七五—一三五二）を住職として招いて再興したものだ。『夢窓国師年譜』によると、仏殿（西来堂）を中心に南に二階建ての瑠璃殿をつくり、その南に湘南亭^{しょうなんてい}、北に潭北亭^{たんぼくてい}を建て、背後の山頂には縮遠亭、山腹に指東庵、登り口に向上閣という建物が設けられていた〔図4-6〕。仏殿のある下段部分には黄金池という名称の園池がつくられたと同書は説明しているが、上段の指東庵横の洪隠山石組にはまったく言及していない。現在では苔寺と呼ばれているように、樹木が鬱蒼^{ふさふさ}としていてコケが美しく繁茂しているが、当初はマツ・サクラ・カエデが多い明るい感じの庭園だった。『蔭涼軒日録』によると、第六代將軍足利義教（在位一四二九—一四四二）及びその子の義政（在位一四四九—一四七三）は毎年のように、二月下旬から三月中旬にかけて花見を行ない、十月初旬には紅葉を見物している。サクラについては『夢窓国師年譜』の暦応二年四月の条に、

堂（仏殿）前に旧大桜花樹あり。春時花敷くに稠密^{ちゆうみつ}（こみあう）殊妙にして、洛陽の奇観をなすなり。

とあるから、以前から大木が存在していたのだろう。『蔭涼軒日録』の寛正五年（一四六四）二月二十七日の条に、「花皆老木にして、花稀^{まれ}なり」と数多くの老木の存在が述べられていることからすると、夢窓の時代にサクラを植栽したと考えられる。『夢窓国師御詠草』の光厳上皇の来訪のことを詠んだ夢窓の和歌に、

猶も又千とせの春のあれはとや御幸もまたて花の散らむ^{ちる}

とある。夢窓はサクラとカエデが好きだったらしく、『空華日用工夫略集』の永和二年（一三七六）三月十四日の条によると、

図4-6 西芳寺庭園の全景（『築山庭造伝』1735年）

彼が開いた鎌倉の瑞泉寺境内には「観花の会」が催されるほどサクラが数多く植えられている。

応安七年（一三七四）十月七日の条によると、山頂の一覽亭周辺はカエデ林となっていたことがわかる。西芳寺のカエデについては、『蔭涼軒日録』の寛正三年十月十一日の条に、「（義政）舍利殿御登覽並に御焼香。満林青松にして、翠木（緑の木）の間、楓樹錦の如し」と書かれている。応永二十七年（一四二〇）六月十六日に西芳寺を訪れた朝鮮使節の宋希環^{ソンギヒョウ}は、その著書『老松堂日本行録』に「満山松竹なり」「原漢文、以下同様」と記している¹⁸。境内周辺はマツ林あるいは竹林で、その間にカエデが植栽されていたのだらう。また、「一島は青松を種え白沙を舗き亭を作る。」「略」池の三面は花木叢薈として、剪りて二層と作す」とも書かれている。園池の島にはマツが植えられ、池の周囲の花木は生垣のように二層に剪定されていたことがわかる。『蔭涼軒日録』の寛正三年六月十九日の条によると、園池にはハスがたくさん植えられていたらしく、開花時に義政は見物に訪れることを希望している。

なお、応仁の乱の際には、池の水を落としたために草が生い茂り、園池は荒廃し、庭木が盗まれることもあったら

しい。『蔭涼軒日録』の文明十九年（一四八七）六月十三日の条に、「相生（一つの根から二本の幹が出たもの）の湯吹（イブキ？）」を盗んだ人間から一〇〇銭で買った者が、夢のお告げて西芳寺に返したことが記されている。乱後については、同書の長享二年（一四八八）二月十二日の条によると、「西芳寺瑠璃殿、舍利殿、その前に無影樹あれど、柳なり。機縁（因縁）あるか」と義政は尋ねている。このことからすると、瑠璃殿と舍利殿前の園池の岸には、シダレヤナギが植えられていたことになる。

仁和寺常光院の名物

頼阿（二二八九—一三七二）は足利尊氏の和歌の師だった人物で、庭園をつくることが好きで、晩年に仁和寺の常光院に庭園を築造して、蔡花園と名付けている。¹⁹『満濟准后日記』の永享三年（一四三二）十月二十五日の条には、この蔡花園のことが次のように述べられている。

竜田山の紅葉東面の庭にあり。〔略〕吉野の桜、北向きの池より北の水際にあり。宮城野の萩、井手の蛙等に至るまで所々の名物、堯孝の高祖父頼阿の時より此の在所に移し置けり。

各地の名所の樹木を収集していたわけだが、『太平記（巻第二十六）』に描かれている高師直（一二三五年没）の一条今出川邸の植栽も同様だったらしい。

樹ニハ月中ノ桂・仙家ノ菊・吉野ノ桜・尾上（兵庫県）ノ松・露霜染シ紅ノハシホノ岡ノ下紅葉・西行法師ガ古枯葉ノ風ヲ詠タリシ難波ノ葦ノ一村・在原中将ノ東ニ露分シ字津ノ山辺（静岡県）ノツタ楓、名所々々ノ風景ヲ、サナガラ庭ニ集タリ。

『太平記』のこの一節は誇張ではなく、鎌倉時代の亀山殿や青蓮院などの伝統を受け継いで、室町初期には名所の植物を庭園内に植えることが流行していたと言えるだろう。

東福寺の靈隠軒と靈雲院

一五世紀中頃の禅宗寺院の植栽は、『碧山日録』から知ることができる。著者である大極だいごく（二四二—一四七八頃）は、東福寺内に靈隠軒を開きとどまった。ただし、長禄三年（二四五九）九月から寛正二年（一四六一）三月頃まで、一時的に同寺内の靈雲院に居住している。彼は園芸趣味があつたらしく、さまざまな植物を植えている。

靈隠軒のことについてまとめると、表4-5のようになる。靈雲院から戻つてからは、大極は熱心に庭の手入れを行なっている。長禄三年五月二日の条に、「南榮（屋根の裾）の下に小池を開き、江山（山河）の容を作る」とあり、また、同九日の条に「石を曳き南面の小阜せうぶ（小さな丘）と為す」と記されている。「南榮の下」とあるので南庭に池を掘つたように思えるのだが、寛正二年十月九日の条には「蓮根を東面の池に種うう」と書かれているから、南東側から東側にかけて園池を設けていたのだろう。築山を築いて石組を置くというかなり本格的な庭園を、大極はつくつていたのではないだろうか。

庭園の植栽について見ると、北庭側には桐・楓があり、南庭には小金菊（？）・竜胆草りゅうたんそう（リンドウ）などを植え、下僕に命じて梅樹を移植している。もらった白薔薇を挿し木したもの、紫杜蘅しとこう（カンアオイ）を植えたのも南庭だろうか。東庭では池中に白蓮を植え、柳樹の根を池辺に挿し、長さ二丈（六メートル）あまりの枇杷樹を移し、垣根で牽牛花けんぎゅうか（アサガオ）を栽培している。草花をかなり植えているところからすると、明るい感じの庭園を大極は好んでいたように思える。薬苗を植えたというのも東庭だろうか。当時は薬用植物は必需品だったのだろう。また、東側の地を切り開いて細竹数本を植えている。園に「紫瓜（植物不明）」の種を蒔いているが、畑が後方に設けられていたということだろうか。

短期間居住した靈雲院での植栽状況は、まとめると表4-6ようになる。後園は果樹園になつていて梅・梨・柿・栗が植えられ、一部に小松の苗などがあつた。西園には高荳わきよ（チサ、レタス）を栽培した畑が存在していたことがわかるのだが、寛正元年閏九月九日の条に「春公来たりて「略」共に西園に遊び柿・栗を嘗す」とあるので、後園は西園のことだと考えられる。南庭は築山が設けられた庭園で、石榴（ザクロ）が植栽されている。ザクロは一〇世紀初頭にはすでに中国から渡来していたも

表4-5 霊隠軒の植栽（『碧山日録』より）

年 月 日	場 所	植栽植物〔（ ）は庭園改修など〕
長禄3年(1459) 4月10日	北	窓から桐花を見る。
5月2日	南	（池を掘り、山河の形をつくる）
5月9日	南面	（石を置き、小さな丘をつくる）
寛正元年(1460) 9月19日	北	谷の楓の紅葉を窓から眺める。
寛正2年(1461) 10月2日	（南？）	柳樹の根を池辺に挿す。
10月9日	前庭	前庭に小金菊・竜胆草を移す。
	東面	蓮根を東面の池に植える。
3年(1462) 2月11日	南地	梅樹を南地に移す。
3月17日	東面	白蓮を東面の池に植える。
5月12日	（南地？）	白薔薇を挿す。
6月8日	（前庭？）	（旧房を壊す。南面の小廊を造る）
4年(1463) 2月8日	東面	枇杷樹を東面に移す。長さ二丈余り。
応仁2年(1468) 2月21日	東	牽牛花の種を東の籬に植える。薬苗数品を移す。
5月13日	園	紫瓜の種を植える。
5月21日		白薔薇・紫杜の花盛んに咲く。
6月19日	東地	東の地を開き、細竹数本を植える。

表4-6 霊雲院の植栽（『碧山日録』より）

年 月 日	場 所	植 栽 植 物
長禄3年(1459) 11月13日	庭前？	金銭花の種を蒔く。
寛正元年(1460) 正月24日	後 園	梅を見る。
3月22日	庭 前	紫荆盛んに開く。
8月23日	後 園	梨実を拾う。稚松をめでる。
閏9月10日	西 園	春公と柿・栗を取って味わう。
寛正2年(1461) 2月20日	後 園	果樹を植え、花木を接ぐ。
3月6日	西 園	兎が蒿苣を食べるため、竹籬を直す。
3月9日	庭 前	山（築山）の石榴が盛んに咲く。

ので、当初は薬用とされていたが、鎌倉時代には果実が食用になって²⁰いる。南庭には紫荆（ハナズオウ？）も植えられているが、金銭花（トウキンセンカ）の種を蒔いたのもここなのだろう。貝原益軒の『花譜』（元禄七年〔二六九四〕）に登場していることなどから、ハナズオウは江戸初期に中国から渡来したとされているが²¹どうなのだろう。

二 枯山水の発展——室町後期の庭園

応仁の乱後には、京都ではつぎつぎに邸宅や寺社が造営されて、新たな庭園が誕生している。また、京都の文化が各地に伝わったことから、一乗谷朝倉館（福井県）や北畠国司館（三重県）の庭園などが出現している。こうした状況から、応仁の乱後の文明十年（一四七八）から室町幕府が滅亡する前年の元亀三年（一五七二）までを、室町時代後期と呼ぶことにしたい。庭園形態が室町時代前期と後期ではどのような相違があるかを、植栽を通して見ていきたい。

（一）武家邸宅の庭園

東山殿の植栽工事

室町後期の代表的な庭園としては、足利義政が造営した東山殿がある。現在慈照寺として残存しているが、詠まれた詩歌からすると当初は舟遊びができるほど園池は広かったように見える。園池の石組の調査結果からすると銀閣前面の石組は小振りの石を積んだ粗雑なものだが、他は角礫（小石）の上に大きな石を一つ置くという方法がとられている。こうした状況からすると、江戸時代になって庭園の改修を行なった際に、園池を縮小して全面的に護岸石組を築き直したと考えられる〔図4-7〕。

応仁の乱が終結すると同時に、義政は念願の山荘を造営しようとして、岩倉や嵯峨の土地を物色している。文明十四年（一四八二）一月には現在の浄土寺山の地を山荘として定め、東山殿の造営を開始している。翌十五年六月には常御所が竣工して、義政は移り住んでいる。しかし、この時にすべての建築が完成したのではなく、義政の死去まで八年間にわたって徐々

図 4-7 慈照寺庭園の全景（『都林泉名勝図会』1799 年）

につくられて行く。文明十七年に西指庵、翌十八年には持仏堂である東求堂も完成している。東山殿は全体が西芳寺を模してつくられているが、西指庵は西芳寺の指東庵に相当するもので、その位置は東求堂の北側奥⁽²³⁾だった。東求堂については『山城名跡巡行志（第二）』に、「この堂、もと方丈の南、閣の東にあり。後にこの所に移す」「原漢文」とあるから、後世に現在の所に移されたものらしい。

この時期の植栽については、『蔭涼軒日録』の文明十六年十一月十九日の条に、等持院から庭の松をいくどか献上させたと記されている。また、近衛政家（二四四—一五〇五）の日記『後法興院記』の文明十七年二月十一日の条には、

東山殿より御庭の榎高さ一丈（三メートル）の木甘本、信樂^{しがらぎ}へ仰せ付け掘り進むべきの由その命あり。明日河原（河原者）彦三郎を罷り下すべしと云々。〔原漢文、以下同様〕

とあり、同十六日の条には信樂の榎をさらに七本献じたと述べられている。文明十八年になると、『大乘院寺社雜事記』の三月二十七日の条によれば、長谷寺（奈良県）から檜が六本、四月五日に再び檜が三本、九月十二日にも檜が五本進上されている。マキやヒノキは、庭園の背後か西指庵の周辺に植えたものだろう。『東寺百合文書』に見られるように、同年六月二十日には東寺に蓮を進呈するように命じていることからすると、園池はすでにできていたと考えられる。⁽²⁴⁾

主要な建物だった会所は、一年を費やして長享元年（二四八七）十一月七日に

完成している。泉殿も同じ頃に竣工したらしい。この時期の植栽については、『蔭涼軒日録』の長享二年二月二十一日の条に、仙洞御所の庭の松を朝倉衆が一〇〇〇人で引いたとあり、同月二十三日の条には仙洞の別な松を朝倉衆が三〇〇〇人で運んだと記されている。『実隆公記』の同日の条にも「その体（状況）目を驚かす者なり」「原漢文、以下同様」とあるから、二本ともかなりの大木だったことから大きな騒動を引き起こしたのだろう。

『大乘院寺社雑事記』によると、同年十月十三日には大乘院から「松一本・椿一本・白真（ビャクシン）一本」を献上している。『実隆公記』には延徳元年（一四八九）三月三日に室町殿跡の松二本を細川氏が運び、『大乘院寺社雑事記』には翌四日に興福寺の西南院が松の大木一本、大乘院が三月九日に梅を一本、九月十六日には松一本を献上したとある。これらの樹木は会所あるいは泉殿の近くに植えられたものだろう。

義政は延徳二年一月に没したために、観音殿（銀閣）は前年に竣工していたらしいが、寝殿は途中で取り壊されて庭園も未完のままで終わっている。飛鳥井雅親（栄雅、一四一六—一四九〇）は義政の亡きのち、次の歌を詠んでいる。⁽²⁵⁾

心とめし君はと問へば石も水もこたへぬ庭に松かぜぞ吹く

園池の周辺に松の大木が数多く植えられていたのが、印象的だったのだろう。

その他の武家邸宅

武家邸宅の庭園の例としては、『蔭涼軒日録』の長享二年（二四八八）九月十六日の条に大内邸について、

興文首座話して云う。大内の庭にそてつと云う草あり。高麗こうらいより来たる。かぶより葉出でて、一間にははかるほどなり。ぜんまいの大なるような者なり。

とある。大内氏は山陽・山陰の西部一帯を支配していた守護大名だったから、交易を通して南方産のソテツを入手したのだ

ろう。ソテツは先に述べたように、すでに室町前期に義政の室町殿に植えられているが、人びとが珍しがっているのは広まっていなかったためだろう。広まるまでソテツはさまざまな経路で入って来たのではないだろうか。

また、細川（典應^{てんおう}）邸については、『蔭涼軒日録』の長享二年二月十四日の条に、

まず先に典應下の屋形に往く。諸老相集して花を見る。糸桜・信州桜同時に盛んに開く。天下の壯観なり。

と記されている。同書の延徳二年（一四九〇）三月九日の条にも、同様の記載がみられる。信濃桜は信州桜とも呼ばれていて、室町時代に流行した種類なのだが、現代の何に該当するかは判明していない。サクラの愛好者はこの時代も多くて、新たな品種を求めていたように感じられる。

（二）貴族邸宅の庭園

康正度内裏の庭園

康正二年（一四五六）に造営された内裏は、応仁の乱中は使用されなかったため、文明十一年（一四七九）に修復されて利用が始まる。この康正度内裏は先の応永度と同じ場所に再興されたもので、建物の配置形態もほぼ同様だったらしい。庭園と建築についてはすでに詳しく研究されているので、庭園を植栽の面から見ることにしたい。

紫宸殿の東北に位置した小御所の東側には、応永度内裏時代につくられた園池が残っていて、文明十七年から明応四年（一四九五）頃まで毎年改修されている。文明十八年につくられた築山はこの庭園の一つの特色となったようで、築山から外を眺めたというような記録もある。ここに植栽されていた植物「表4-7」を分類すると、次のようになる。

《常緑針葉樹》

松〔松木〕・五ようのまつ（ゴヨウマツ）・檜樹

表4-7 康正度の小御所の植栽

日	時	植栽植物〔()は庭園改修など〕	出典
文明17年(1485)	12月24日	榕樹が献上される。	実隆公記
18年(1486)	3月28日	(築山をつくる)	お湯殿の上の日記
	8月22日	(庭園改修)	同上
	9月8日	槐の小樹が献上される。	実隆公記
長享元年(1487)	9月21日	(庭園改修)	お湯殿の上の日記
延徳元年(1489)	正月23日	(庭園改修)	同上
	正月24日	東山殿より梅の木が贈られる。	同上
	正月26日	(亭設置)	同上
2年(1490)	正月24日	檜樹を1株除去する。	実隆公記
	10月1日	(庭園改修)	お湯殿の上の日記
3年(1491)	11月17日	(庭石搬入)	同上
明応2年(1493)	正月22日	(小御所修理)	同上
	4月18日	(庭園拡張)	同上
		五ようのまつを植える。	同上
	10月21日	(庭園改修工事完了)	同上
3年(1494)	3月9日	つゝしの花盛り。	同上
	9月7日	(庭園改修)	同上
	10月3日	(庭園改修工事完了)	同上
4年(1495)	2月18日	(庭園改修)	同上
	2月30日	亭で花見を行なう。	同上
5年(1496)	2月19日	梅の花が盛りになる。	同上
	8月19日	賀茂社からの松を植える。	同上
文亀3年(1503)	3月12日	桜の花が盛りになる。	実隆公記
永正元年(1504)	3月28日	信濃桜が花盛りになる。	同上
5年(1508)	2月29日	(庭園改修)	同上
大永7年(1527)	2月28日	大原野という桜が盛りになる。	言継卿記
天文13年(1544)	8月29日	藤の花を詠む。	同上
永禄2年(1559)	10月7日	こけを張る。	お湯殿の上の日記
6年(1563)	4月21日	梅の木の笠を摘む。	言継卿記
	7月20日	松木を剪定する。	同上
	12月18日	大原野のさくらを植える。	お湯殿の上の日記
7年(1564)	2月17日	菊を植える。	言継卿記
	9月2日	菊の籬を作る。	同上
	10月26日	菊を皆刈る。籬を少々置く。	同上
9年(1566)	3月21日	菊を植える。	同上
	6月10日	桔梗の籬作る。	同上
10年(1567)	8月22日	松1本を剪定する。	同上

《常緑広葉樹》 榕樹(アコウ)・つつじ

《落葉広葉樹》 槐(エンジュ)・信濃桜・大原野桜・梅「梅木」・藤

《草本類》 菊・桔梗(キキョウ)

園池の周辺にはさまざまな樹木が植えられ、小御所の近くには花が眺められるようにウメ・サクラが植栽されていたと推測される。『言継卿記』の記載から、キクは二月ないし三月に植えられ、十月には刈り取られているが、キクを囲む垣は竹でつくっていたことがわかる。また、蹴鞠の庭も設けられていて、懸りとしてはマツが少なくても二本植えられている。

紫宸殿の西北には清涼殿がつくられていたが、この建物の中には西側に議定所、北側に常御所、東側に清涼殿といった部屋が設けられていた。これらの部屋の前面には庭園があり、各部屋の名前で呼ばれていた。清涼殿周辺の植栽をまとめると表4-8のようになる。常御所の庭は北側に位置していたもので、文明十八年以降しばしば改修工事が行なわれている。ここにはシバを張った築山がつくられ、樹木としてはかなりの数のマツが植えられている。信濃桜・五葉松・杜若(カキツバタ)も添えられているが、「ひやくたん」はビヤクシンの誤写だろうか。

清涼殿の庭は紫宸殿の北側に当たる所で、花見が行なわれているところからすると、サクラが主に植栽されていたのだろう。サクラの一種の「ふけんさう」(普賢像。普賢堂ともいう)は、鎌倉の普賢菩薩を安置した堂の前にあったことから名付けられたもので、鎌倉時代頃から流行し出した種類とされている。議定所の庭は位置的に見て、西向きの庭と同じものなのだろう。この庭は当初は「こうはい(紅梅)・ひの木」などの樹木が植えられていただけだったが、天文十二年(一五四三)には池が掘られ、醍醐寺三宝院から運んだ九山八海石が置かれている。のちには「こうはい・ゆの木」が植えられたりしているが、弘治二年(一五五六)にこの池は埋め立てられている。小御所の東庭のような広い場所にはさまざまな樹木を植栽し、清涼殿東庭や常御所の西庭のような狭い場所には、サクラあるいはマツなどの特定の種類を植えることで、各庭園の特色をつくり出そうとしたのだろう。

表4-8 康正度の清涼殿の周辺の植栽

場 所	日 時	植栽植物〔()は庭園改修など〕	出 典
＜北側＞ 常御所の庭	文明17年(1485) 3月10日	信濃桜が花盛りになる。	実隆公記
	18年(1486) 2月13日	(庭園改修) こけを張る	お湯殿の上の日記
	長享元年(1487) 9月23日	「ひゃくたん」を植える。	同上
	2年(1488) 11月3日	(庭園改修)	同上
	延徳元年(1489) 11月11日	松の木を植える。	同上
	明応元年(1492) 12月19日	(庭園改修)	同上
	4年(1495) 9月14日	松を植える。	同上
		10月28日	同上
	5年(1496) 8月19日	松を植える。	同上
	9年(1500) 2月12日	(庭園改修)	同上
	天文8年(1539) 3月10日	(庭園改修)	お湯殿の上の日記
	永禄3年(1560) 4月7日	築山に「しは」を張る。	同上
	6年(1563) 4月13日	杜若の籬を修理する。	言継卿記
	7年(1564) 5月9日	庭の木を剪定する。	同上
	9年(1566) 5月28日	五葉松を剪定する。	同上
＜東側＞ 清涼殿の庭	文明13年(1481) 3月9日	花見	お湯殿の上の日記
	永禄3年(1560) 2月12日	桜3本を植える。1本は「ふけんそう」。	同上
西向の庭	明応5年(1496)閏2月10日	(庭園改修)「こうはい」を植える。	お湯殿の上の日記
	6年(1497) 2月8日	(庭園改修)	同上
	7年(1498) 9月17日	(庭園改修)	同上
	天文4年(1535) 10月3日	ひの木を植える。	同上
＜西側＞ 議定所の庭	天文6年(1537) 2月4日	(庭園改修) 杉なりの檜木が献上される。	言継卿記
	12年(1543) 8月12日	(庭園改修)	お湯殿の上の日記
		10月16日	同上
	13年(1544) 4月23日	(池を拡張する)	言継卿記
		4月25日	同上
	弘治2年(1556) 11月13日	(池を埋立てる)	お湯殿の上の日記
	永禄7年(1564) 2月17日	こうはい・ゆの木を植える。	同上
	9年(1566) 5月9日	梅木の枯枝を切取る。	言継卿記

表4-9 三条西邸(武者小路)の植栽(『実隆公記』より)

日	時	植栽植物[()は庭園改修など]
文明8年(1476)	4月1日	藤花一枝を禁裏へ進上する。
9年(1477)	3月4日	藤の下で蹴鞠を行なう。
10年(1478)	正月25日	小庭に小樹を植える。
	正月27日	梅花一枝を禁裏へ進上する。
11年(1479)閏	9月12日	松樹3本を買い植える。
12年(1480)	8月24日	西面に蹴鞠の懸りの木として、鶏冠木2本と桜2本を植える。
	9月6日	懸りとして柳を植える。
15年(1483)	2月18日	頭右中弁が来て梅樹を接ぐ。
	3月9日	小庭の草の垣を構える。
	11月29日	西庭に柳を植える。
16年(1484)	3月4日	小庭の樗木2本を2ヵ所の鎮守に移植する。
17年(1485)閏	3月24日	小庭に薔薇の棚を作り、下草を取る。
	12月12日	庭前の紫竹を禁裏へ進上する。
	12月24日	小庭の榕樹を禁裏へ進上する。
18年(1486)	6月16日	庭樹を剪定する。
	9月3日	庭樹を禁裏へ進上する。
	9月8日	東隣の小樹を禁裏へ進上する。
	12月14日	庭樹を植える。桜木1本を勸修寺に遣わす。
	12月15日	庭の榎木を焼き物用の薪として、禁裏へ進上する。
長享元年(1487)	2月17日	庭樹を植える。
	2月21日	庭樹を植え、蒲萄[ブドウ]棚をつくる。
2年(1488)	5月7日	庭前の薔薇を東方南面に移して、もらった松樹・梅樹を植えて苔を張る。
	6月19日	庭前の樹を剪定し、草を払わせる。
	12月6日	庭前に花壇を築く。
延徳元年(1489)	8月5日	庭前の蒲萄を初めて禁裏へ進上する。
	8月8日	(築地外の南に堀を掘るように庭者に命じる)
	11月3日	庭の松樹を藤中納言入道に贈る。
	11月9日	梅樹1本を藤中納言入道よりもらい植える。
	11月21日	庭の榎木の薪3束を禁裏へ進上する。

日 時	植栽植物 [() は庭園改修など]
	庭の桜1株を冷泉亭に遣わす。
2年(1490)	正月24日 小御所の庭の檜樹1株を所望し、庭に植える。
	2月10日 桜1株を左大臣藤原実淳邸に掘り贈る。
	2月15日 南・東・西等の庭に小樹を植える。
	4月5日 (庭前の柴垣を結う)
	8月5日 庭前の蒲萄を禁裏へ献上する。
	10月6日 南庭に芝を張る。入江殿へ海棠樹を1株贈る。
	10月7日 (南庭に砂を敷く)
3年(1491)	2月16日 懸りの葦垣を結わせ、庭樹等を植える。
	3月30日 南庭の梅山を掃除する。
	4月2日 (庭者2人を呼んで西南庭を掃除する)
	4月26日 以量朝臣を呼び、懸りの松樹を剪定する。
	5月18日 徳大寺より百合花をもらい植える。
明応元年(1492)	11月19日 西面の庭松1株を源重相に贈る。
	12月8日 南庭にもらった梅樹を1本植える。
3年(1494)	2月4日 庭樹を植える。
4年(1495)	2月30日 檜樹を植える。山水等を掃除する。菊苗を分ける。
	4月22日 蹴鞠の懸りの樹を剪定する。
	8月5日 蒲萄を禁裏へ献上する。
5年(1496)	4月8日 宗聞法師からもらった百合花3本を庭に植える。
	9月28日 勸修寺所望の懸りの樹としての桜樹を贈る。
	11月20日 (南東の堀の上の垣を新たに造る。藪の垣も造る)
7年(1498)	7月8日 庭者を呼んで樹の梢等を剪定させる。
	10月13日 小將という白色の小菊を1本、禁裏よりもらい植える。
	10月23日 南庭の南東に山を築き、伏見殿からもらった檜樹を10本植える。
閏10月6日	大津よりの石楠花1本を植える。
	11月16日 (東庭の普請を行なう)
	～18日
	11月28日 (南東に山を築く)

三条西実隆の園芸趣味

『実隆公記』の著者である三条西実隆（一四五五—一五三七）は、中流貴族の出だったが、有職故実に通じていて歌人でもあり、室町後期の代表的な人物だった。²⁸ その邸宅の庭園についてはすでに詳しく述べられているので、場所別に分けて植栽の特色を見ることがしたい「表4-9」。

明応九年（一五〇〇）六月まで居住した武者小路の北側に位置していた邸宅は、四方を堀で囲んで防御を固めたもので、家屋は中心からやや西に片寄って配置されていたらしい。主殿の南庭には『実隆公記』によると、長享元年（一四八七）二月二十一日に「葡萄（ブドウ）の架（棚）」が設置され、以後その果実は禁裏に献上されている。他には紫竹（クロチク）・薔薇・百合花（ユリ）・松樹・梅などが植栽されていた。梅は延徳三年（一四九二）三月三十日の条に、「南庭の梅山」という表現があるから、築山上にはウメが数多く植えられていたのだろう。長享二年十二月六日の条に「庭前の花壇等を沙汰す」とあるように、南庭には花壇も築かれている。明応七年（一四九八）十月二十三日には南庭は改修され、南東側に築山がつくられ、檜樹が一〇本植え付けられている。

西側の庭には柳・松・信濃桜などが植栽されていたが、蹴鞠の庭も置かれていて、懸りの木として文明十二年（一四八〇）八月二十四日には、鶏冠木（カエデ）と桜が二本ずつ植栽されている。小庭と呼ばれるものは位置が不明だが、ここには樗木（セングン）や内裏に献上された榕樹（アコウ）が植えられていた。具体的な場所は不明だが、邸内には榎木（エノキ）をもらい、この枝を薪にしたものが、「御焼火の葉（柚葉?）」として禁裏に進呈されている。延徳二年十月六日の条によると海棠樹（カイドウ）をもらい、明応七年閏十月六日には滋賀の太津から石楠花（シヤクナゲ）が一本送られて来ている。

明応九年の類焼後は、室町通りに面した所に移っている。この新邸の西北隅には矢倉が設置され、南と東には堀が掘られていた。文亀元年（一五〇二）から永正元年（一五〇四）にかけては、邸内の植栽工事が行なわれ、松や檜樹が植えられている「表4-10」。主殿南側の前庭には石組が置かれ、卯花（ウツギ）・躑躅・蜜柑・柿が植栽されていた。大永六年（一五二六）九月

表4-10 三条西実隆邸(室町通)の植栽(『実隆公記』より)

日	時	植栽植物〔()は庭園改修など〕
文亀元年(1501)	4月20日	(庭者を呼び東側を普請する)
2年(1502)	9月6日	雲竜院から送られた松・檜等を植える。
3年(1503)	2月18日	雲竜院から送られた松・檜樹等を植える。
永正元年(1504)	3月22日	雲竜院から送られた檜樹4、5株を植える。
2年(1505)	10月11日	覚城入道が持参した藜蘆1本を植える。
4年(1507)	7月15日	早朝に公音朝臣と伊長等が来て、槿の花を見る。
5年(1508)	10月12日	(門前に土橋、水門等を造る)
6年(1509)	4月15日	禁裏より石6個をもらい、北庭の西方に立てる。また、中將に前庭に砂を敷かせる。
7年(1510)	10月15日	梅花を始めて見たので、禁裏へ進上する。
8年(1511)	7月29日	早朝に槿の花を摘み、和歌を読み宗碩に遣わす。
	12月22日	(庭先の葦垣を結う)
9年(1512)	4月17日	庭者が楓・檜等を持ってきたので植えさせる。
	閏4月6日	庭前に卯花・躑躅等を移植する。
17年(1520)	3月8日	夜、月下に庭前の花を賞翫する。
	5月16日	(庭者を呼び、庭を直させて砂を敷く)
大永元年(1521)	10月27日	庭前の蜜柑を取る。
3年(1523)	10月2日	庭の卯花・躑躅等を三条実香に、柚を正親町実胤に贈る。
	10月15日	(南庭の塀として板垣を築く)
4年(1524)	3月5日	昨日九条尚経からもらった柳を、庭者岩に植えさせる。
	10月26日	(南面の庭石を立て直す)
5年(1525)	4月13日	甘露寺に竹15本、水無瀬英兼に雑木3荷を送る。
	4月16日	水無瀬英兼より雑木2荷(6本)が到来。
	11月4日	庭前の蜜柑・金柑を道了に贈る。
	12月30日	(庭者が来て砂を入れ掃除をする)
6年(1526)	4月21日	庭樹を剪定する。
	8月22日	庭前の柿の枝を禁裏に進上する。
	9月3日	庭を掃除し柳を植え、角屋に松・躑躅等を植える。
7年(1527)	3月1日	御室より松木4本をもらい、2本を角屋に植える。
	3月2日	賀茂為平に桃・柳を送る。
	3月17日	松下式部に躑躅・藤・蕨などを送る。
	5月30日	庭の樹を剪定する。
享禄2年(1529)	10月12日	庭者を呼び石を立て、樹を植え替える。南天竹を昨日真光院よりもらい、今日植える。
	11月21日	庭の蜜柑をすべて取る。今年は500個ばかり。
3年(1530)	11月2日	庭前の蜜柑を御所に進上する。
4年(1531)	7月26日	(西室の庭の水門に石を置く)
天文2年(1533)	5月13日	庭者に紫竹を掘らせ、九条の南方に植えさせる。西室の亭の梅樹の枝を剪定させる。

三日には、角屋に松・躑躅を植えている。その他この邸宅には、藜蘆（レイロ）・梅樹・槿（アサガオ）・柳・棗（ナツメ）・藤・蕨（ワラビ）・黄梅（オウバイ）・楓（カエデ）・竹・金柑・桃・南天竹（?）・紫竹などがあつた。藜蘆はおそらく薬用だろう。

山科言繼邸の渡来植物

実隆が元服の烏帽子親となつた山科言繼（一五〇七—一五七九）の邸宅の植栽については、その日記『言繼卿記』によつて知ることができる。公卿だつた言繼は皇室経済の維持に尽くしたが、装束・故実・音曲・歴史にも通じていたという。

宅内の主屋の周辺には、梅・しゅ呂（シユロ）・南天（ナンテン）・栗・枇杷の木・柿などが植えられていたが、彼には園芸趣味があつただけに特殊なものが栽培されている。天文六年（一五三七）二月四日には、「杉なりの檜木」が内裏に進上されているが、同十七年四月二十七日の条にも同名の樹木が邸内にあると記されている。おそらくこれはヒノキにスギが着生したものではなく、ヒノキの変種なのだろう。天文十三年五月七日の条には「仏笑花」、同二十三年四月十六日の条に「仏桑花」とあるのは同一のものだろう。表記からするとブツソウゲ（ハイビスカス）ということになる。ブツソウゲは江戸時代頃に日本に入つて来たとする説もあるが、室町時代と考えていいのではないだろうか。また、天文二十二年七月五日と翌年二月六日に、「木せい「木犀」の枝を挿木のためにもらつてゐる。これはキンモクセイのことだろうか。

なお、この邸内には後園があり、桃木・梅・唐葵（タチアオイ）などの苗木がつくられている。内裏などに献上された桔梗（キキョウ）・仙翁花（センノウ）・鶏頭花（ケイトウ）・小車草（オグルマ）は、この後園で栽培されていた可能性もある。

（三）寺院の庭園

『蔭涼軒日録』の植栽記事

蔭涼軒は永享七年（一四三五）に將軍足利義教によつて、相国寺の鹿苑院内に造立されたものだった。『蔭涼軒日録』はこの

蔭涼軒主の公用日記だが、蔭涼軒の庭園のことも詳しく記されている。⁽³¹⁾ 応仁乱後の蔭涼軒の植栽についてまとめると、表4-11のようになる。蔭涼軒内には雲沢軒と松泉軒というものが存在していて、これらの周辺も植樹が行なわれている。

表4-11では「庭間・庭前」と「南庭」が、同一の場所かどうかが問題になる。文明十九年（一四八七）二月二十二日の条に、「左近四郎来たる。庭間に松を栽え、梅を南庭に移す」とある。庭に松を植えたので、邪魔になった梅を南庭に移したということだろう。また、それ以前の永享十一年（一四三九）十一月二十五日の条には、「蔭涼書院造営の事並びに南庭に水を引くべきの旨命あり」と書かれているので、南庭は蔭涼軒の本堂（客殿）の正面の庭で、「庭間・庭前」は付属的な建物だった書院の前面を指していると考えられる。

表4-11からすると蔭涼軒書院の前庭には果実が多く、榴樹（ザクロ）・越桃（モモの一種）⁽³²⁾・枇杷・杏（アンズ）が植えられている。低木類としてはツツジの類として、杜鵑花・紅躑躅が見られる。針葉樹としては松が多く、檜木も少し植えられている。その他はサトザクラの変種である普賢堂、薬用とされた梔子（クチナシ）、挿木がされた白薔薇がある。本堂前の南庭の平坦部分には何十本という松と、梅・五葉（ゴヨウマツ）・緋桃・躑躅などが植栽され、築山上には大小の松と榴樹とツツジの一種の映山紅が存在した。

雲沢軒と松泉軒の植栽は、種類からすると松・梅・躑躅というような類似したものだった。この他、場所は不明だが、蓮華躑躅（レンゲツツジ）・岩躑躅（サツキ）・庭桜（ニワザクラ？）・丹松（アカマツ？）・紅白接梅・碧桃（モモの一種）⁽³³⁾・信濃桜・柏葉（カシワ）・海棠（カイドウ）・銀杏（イチヨウ）などが存在していた。この時代には、樹木の種類はかなり豊富なものになっていたことがわかる。コケもしばしば使われていたらしく、明応元年（一四九二）二月十二日には「彦六父子、南庭の苔を伏す。苔は中山（岡崎付近）よりこれを取る」というように、自生のものを利用している。

表4-11 蔭涼軒の植栽(『蔭涼軒日録』より)

日	時	場 所	植栽植物〔()は開花・作庭など〕
文明17年(1485)	12月13日	雲沢軒庭	松・梅
18年(1486)	2月17日	雲沢軒庭	松7本
	3月19日	庭前	(杜鵑花が花盛り)
	4月26日	庭	白薔薇7枝を挿す。
	11月22日	門前左辺	稚松42本
	11月26日	小門以南	松30本
長享元年(1487)	2月22日	庭間	松13本
		南庭	梅
	2月27日	(不明)	松大小5株
	9月19日	庭前	(榴実る)
	9月27日	庭前	越桃数根
2年(1488)	2月18日	(不明)	松・躑躅
	3月18日	庭間	(杜鵑花を見る)
	3月26日	(不明)	蓮華躑躅4本・岩躑躅2本・庭桜1本
	3月28日	(不明)	松樹2本・接梅1本・杏花1株
	9月8日	(不明)	丹松50本
延徳元年(1489)	2月19日	庭前	榴樹
2年(1490)	3月4日	(不明)	紅白接梅1株
	6月2日	門の左右	松数本
		松泉軒庭前	躑躅10本
	6月3日	松泉軒	(造作を見る)
	9月30日	松泉軒庭	榛栗5株
	10月29日	松泉軒書院前	(泉川を作る)
		(不明)	紅梅2株
3年(1491)	3月4日	庭前	緋桃1株
	4月2日	松泉軒・雲沢軒	(躑躅の手入れ)
	8月10日	庭前	(榛栗実る)
	9月4日	庭前	普賢堂1株
	11月9日	南庭	松12株

日	時	場 所	植栽植物〔()は開花・作庭など〕
明応元年(1492)		南庭?	松1株, 杏1株, 梅1株
	11月10日	(不明)	松4株, 杏・碧桃・緋桃・信濃桜各1株
		(不明)	梅2株・松2本
	11月11日	(不明)	榴・柏葉各1株
	11月15日	庭前	躑躅1本, 枇杷1株
	11月19日	庭前	松3本
		(不明)	大松2株, 五葉・海棠・銀杏各1本
	11月22日	松泉軒	苔(白沙入れる)
	12月24日	同上	(新寮完成)
	2月11日	南庭	躑躅
		南庭?	五葉1本, 躑躅6・7本
	2月12日	南庭	苔
	2月15日	南庭築山	映山紅6本
	3月9日	南庭	(緋桃花盛り)
	3月29日	庭前	(紅躑躅を見る)
	4月12日	庭間	(枯れ松2本, 枯れ榴1本を切る)
	5月5日	庭前	(梔子を葉種とする)
	5月11日	庭前	(枯れ松7株, 枯れ榴木1株を切る)
	6月14日	南庭築山	(大松・小松各1本, 枯れ榴1株を切る)
	8月3日	庭前	(枯れ檜木を切る)
	11月29日	(不明)	松4株
		意足軒前庭	中松3本
	12月1日	(不明)	松樹16本
		庭前?	紅梅1株
		意足軒前庭	大松3本, その他の松23本
	12月2日	(不明)	苔
2年(1493)	4月6日	庭間	(躑躅花盛り)
	4月7日	庭間	(杏花の枯枝を切る)
	9月17日	松泉軒南庭	松4本

(四) 地方の武士の館と寺院

この時代は地方の武士も勢力を持つようになり、防備を備えた館を構えるようになって、邸内には庭園をつくる所も増加している。この時代の残存する庭園で有名なものとしては、福井県の朝倉氏一乗谷館、三重県の北畠氏館、滋賀県朽木の旧秀隣寺庭園などが知られている。

武家館の植栽

朝倉氏の一乗谷館の庭園については、『朝倉始末(巻之四)』の「義昭公南陽寺の糸桜を見る事」「原漢文」の項に、

君カ代ノ時ニ相逢イトサクラ最モ(別本、いとも)賢キ今日ノ言ノ葉

という朝倉義景の歌があり、南陽寺にシダレザクラが存在していたことがわかる[写真4-2]。シダレザクラを植えたのは京都の流行を追ったからだろう。

聖護院門跡だった准后道興の『廻国雜記』の文明十九年(一四八七)の記事には、甲州の武田氏のことについて「武田が館に梅あまた侍り」とある。また、連歌師宗祇(二四二一―一五〇二)の『筑紫道記』の文明十二年十月九日の記述には、山口県美祢市大嶺町にあった杉美作入道(重道)の庭園について、

庭には梅桜を尽し、色草(種々の草花)を集て心をやれる様、都にもかゝる所侍らむやは。霜置迷ふ菊の籬、まして此頃盛なれば見所多きに、散まがひたる木の葉の色も艶なり。

と書かれている。京都に負けないほどの、キクなど数多くの草花を植栽した庭園がつくられていたことがわかる。



写真 4-2 一乗谷南陽寺庭園の現況

毛利元就（一四九七—一五七二）の歌集『春霞集』の歌の題詞「二三」には、「前栽の梅を見侍りて」とあり、同じ場所かどうか不明だが歌「三二」の題詞に「永禄十一年（一五六八）三月の比中ひなの丸にて」とあり、「独ひとりみるわが家のさくら」と歌われている。「中の丸」と書かれているから、城塞化した館だったのだろう。

寺院の庭園植栽

先の『廻国雜記』は石川県金沢市に存在した時宗の庵について、「庭に残菊の黄なるを見て」と記している。伊勢貞仍ていじようの『下つふさ集』（文亀三年「一五〇三」頃）には、周防国山口の法泉寺の庭について、「吉野山の花のたねとて大なる桜の侍りける」とある。³³『筑紫道記』の文明十二年九月十六日の項には、九州の太宰府天満宮の境内について、

地広く松杉数添ひて、さらぬ常盤木や、繁し。「略」池めどの廻りには千万株の梅の林を成せり。

と述べられている。境内にはマツ・スギや常緑広葉樹が繁茂し、池の周囲には菅原道真に因んでなのか、大規模な梅林がつくられていた。同書にはまた、博多の竜宮寺の庭園につい

て、「庭の草木見所有^{あり}」と記されている。鎌倉時代よりも庭園をつくることが全国的に一層広まって、珍しい植物が集められていたことが推測される。

(五) 枯山水の植栽

庭園形態については、枯山水が独立した形になっていることが室町時代の特色の一つだが、一六世紀の京都の景観を描いた『洛中洛外図屏風(歴博甲本)』には枯山水のある邸宅や寺院が見られる。寺院の庭園としては、大心院に落葉広葉樹の高木と草本類、南御所(大慈院)に高木のマツ二本と落葉広葉樹、常盤院^{とぎわいん}に落葉広葉樹一本と数本のウメ(白)と常緑広葉樹の高木、曇華院^{どんげいん}に落葉広葉樹と下草が描かれている。また、武家の邸宅である三好邸には高木のマツと落葉広葉樹、典厩邸には常緑広葉樹と落葉広葉樹、武衛^{ぶゑ}(斯波^{しば})邸にはマツとスギのような針葉樹が数本と常緑広葉樹や草本類が見られる。貴族の邸宅では飛鳥井殿に落葉広葉樹が二本、三条西殿にはかなりの数のウメ(白、紅)と常緑広葉樹が描き込まれている〔図4-18〕。屏風絵であることから省略された部分も多く、植物の種類まで識別することはできないが、枯山水にはマツやその他の針葉樹、ウメなどの落葉広葉樹、そして常緑広葉樹や下草として草本類が植えられていたことがわかる。針葉樹が植えられていることから、室町後期の書院庭園の植栽の影響を強く受けていると言える。

図4-8 三条西殿の庭園植栽（歴博甲本『洛中洛外図屏風』より）

三 室町時代の植栽技法

(一) 植木の入手と運搬方法

販売業者の出現

室町時代には植栽樹木を入手するのに、寺院などから強引に収集することがしばしば行なれているが、樹木を販売する業者も出現している。『看聞御記』の永享九年（一四三七）四月二十四日の条に京都の伏見宮（後崇光院）邸について、「商人躰躑を持参す。西向にこれを植う」とある。また、翌年四月十六日の条にも同様の記載がされている。さらに同書の嘉吉三年（一四四三）二月一日の条には、

（懸りの）桜木は得難き間、千本に商買の木ありと云々。隆富朝臣・重賢朝臣検知に羅り向ふ。八重桜数本あり。その中の一本を取る。但し遅桜なり。

と述べられている。京都の千本通りには樹木を販売する者がいたことになる。遅桜というヤエザクラの変種まで扱っていたことからすると、かなりの種類の樹木を販売していたのではないだろうか。五〇年ほどのちのことだが、『後法興院記』の明応十年（一五〇一）二月十九日の条に、「この亭に懸りの松を栽う。千本よりこれを召し寄す」とある。こうした業者が存在したことから、さまざまな種類の植物が広まるようになり、庭園植栽が豊かなものになったと考えられる。

樹木の運搬方法

寺院などから樹木を掘り取って来る場合の運搬方法を見てみよう。『大乘院寺社雜事記』の文明十八年（一四八六）四月一日の条によると、大和の長谷寺から京都の東山殿に檜六本が献上されたが、掘り取り方が悪くて三本が「一向根これなし。或いは土付かず」という状況だったために、再度送ることを命じられている。根を十分に残さなかったり、根に土が付いていないと移植した際に活着しにくいことを、当時の人びとも経験的に知っていたのだろう。この時の掘り取り作業は、同年三月二十七日の条によると「人夫二人」だったが、この二人は専門家ではなかったように見える。

掘り取った樹木を目的地まで運搬するのに、どれだけの人数が必要だったのだろう。『大乘院寺社雜事記』によると長祿元年（一四五七）十一月二十日に、梅一本を大乘院に運び込むのに六人かかっている。また、翌年閏正月九日には、梅の太木を奈良から山城国の木津まで運搬するのに五〇人を使っている。だが、『蔭涼軒日録』によると、延徳元年（一四八九）三月三日に室町殿から東山殿に松の太木を移すのに五〇〇人近くが動員され、明応元年（一四九二）十一月二十七日には洛中の伊勢備中守邸から蔭涼軒まで松を四株運ぶのに河原者を一六人雇っている。樹木の大小や距離に寄って相違があるようだが、松一本に五〇〇人もかけるといいうのは示威行為だろう。

運搬に使用した道具に関しては、『大乘院寺社雜事記』の長享三年（一四八九）六月の「東山殿御庭樹木間事」の項では、東山殿に庭木を運ぶのに「修羅・綱」が必要とされている。修羅は石を運ぶために古墳時代から使用されているが、室町時代のものが近年京都の鹿苑寺境内から出土している³⁵。二股になった太木を利用したもので、大きい方がケヤキ材で全長四・七メートル、小さい方はクリ材で全長三・五メートルだった[写真4・3]。数カ所に綱を通すためのほぞ穴があり、荷を縛り付けるのと前方に引くために利用したものと考えられる。年代は同一層から出土した土器から、一五世紀頃のものとして推定されている。庭園で樹木や石を運ぶのに使用していたものらしいが、この修羅の下に丸太をいく本も置いて引けば、大型の荷の場合には効率が上がっただろう。

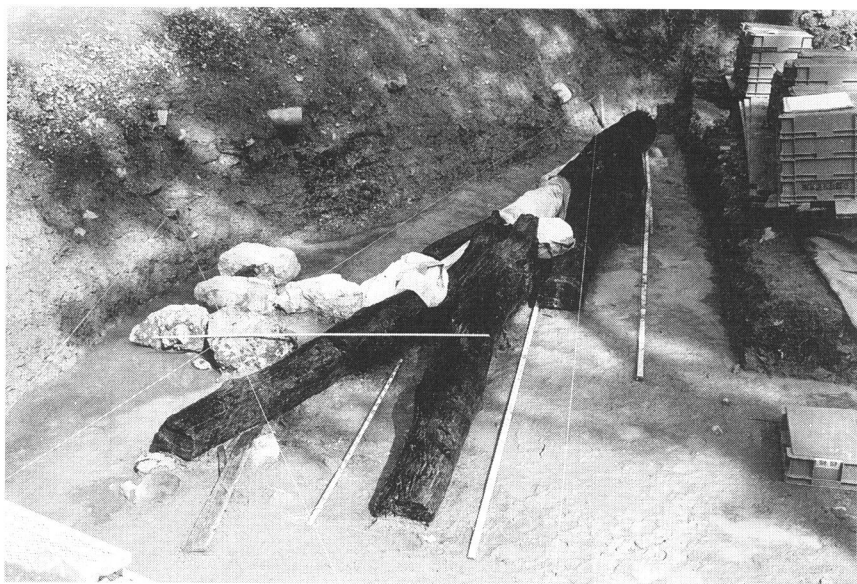


写真 4-3 鹿苑寺境内から出土した修羅 (1989 年撮影)

また、同年三月九日の条には、奈良から梅一本を東山殿に運ぶのに人足三〇人を使っているが、その道具として「六本持二荷(二つ)・ケタ木二本・大綱四丈余・コシ(興)・ニワ筵・ナワ以下」を用意している。舟に載せるために使う道具も入っているように思うが、六本持は丸太を三本ずつ縦横平行に組んだものを意味するのだろうか。樹木の運搬に車を使っていたことは、『厳助往年記』の永禄二年(一五五九)十一月の条に、

庭樹公方様え進上の五葉松一本、楨二本これを進むるなり。
御庭者多数く下されこれを掘さげるなり。御車差し下されこれを引かるるなり。〔原漢文〕

とあることからわかる。

(二) 配植の仕方

植栽する場合には、庭園のどこに何を植えるかという配植の仕方が問題になる。当時の配植についての考え方は、この時代の作庭書『山水並に野形図』によって知ることができる。その原則というのは、「木、草ヲ植ン二本所ヲマナブト云リ」ということだった。

「本所」を尊重するということは、

深山ノ木ハ深山、野山ノ木ハ野山、水辺ノ草木ハ水辺、海辺ノ草ハ海辺、カヤウニ心得テ草木ヲウユルニマヨハズ。

ということを意味している。つまり、本来植物が生育している場所と類似した、築山・平地・園池・流れなどの庭園内の場所に植えなくてはならない、とする考え方だった。

例としてはマユミ・ザクロについて、

真弓ハ紅葉シテ殊更面白者也。是ハ野山ヲムネトスル也。惣シテ真木、檜原ノ中ニモ植テ面白。〔略〕

柘榴、此木ハ里木也。山水ニハ里ノ山ヲ体トシタラン所ニ植ベシ。

と書かれている。この本所という考え方は、植物の性質に合わせて立地条件を考えるとということでは、自然科学的な見方とすることができ、庭園という狭い場所であることからすると、写実的と言う方が近いだろう。先に挙げたような針葉樹をはじめとして、さまざまな植物を入手できる時代になったからこそ、本所に従って配植することも可能になったのだろう。

(三) 移植の技法

移植の際の注意としては、同書に次のように述べられている。

木ノ根ヲ切スカス時ハ、ネ(根)ノキリ口ニヤキ金ヲアテ、松ヤネ(脂)ヲスリテユワウ(硫黄)ニマゼ合テ、根ノ切口ニトリトリモチ⁽³⁶⁾キ(鳥取りもち)ヲヌリテ、サテ其上ニサキノ合葉ヲ付ベシ。

根の切り口に焼金を当てることと硫黄を塗ることは、殺菌をして防腐効果を高める役割が実際にあると考えられる⁽³⁶⁾。また、

植え付ける時の注意としては、

木ヲ植ニモ木ノ在所ノ土ヲ穴ニ入テ、木ヲ植テ水ヲカケテ能フミツクベシ。

と記されている。本来木が生育していた場所の土は、その木に合っているという意味でこれも合理的だろう。根の活着をよくするために、水をやり土をよく突き固めるという技法は、江戸時代の人びとにも継承されて現在に至っている。

こうした移植や庭作りについての専門的な知識を持った人びとが当時は活躍していて、「山水河原者」と呼ばれていた。³⁷⁾『蔭涼軒日録』の明応元年（一四九二）十一月二十九日の条に、

河原者来たりて庭松を栽う。善阿他に適く故、左近四郎来たりてこれを栽う。河原者十六人、その外力僕数輩これに加わる。とあるような作業風景が、この時代にはよく見られるようになった。河原者は下層の人びとだったが、作庭作業に従事するようになったことから次第に知識を集積して、専門的な技術者になっていく。

（四）樹木の剪定

『実隆公記』の明応七年（一四九八）七月八日の条に、「庭者を召し樹の梢等これを洗せしむ」という文章がある。問題になるのは「洗す」という言葉で、例えば『言継卿記』の永祿六年（一五六三）五月二十二日の条に、「懸りの木少々これを洗す」とある。木の幹や葉の汚れを落とすために、水をかけて洗うようにも感じられるのだが、そうではない。『碧山日録』の寛正元年（一四六〇）九月二十八日の条に、「東隣的主人竹を洗す。以て予に山を見せんと欲するなり」とあるから、「洗す」は木を切ること、すなわち剪定することを意味している。「洗竹」という語句は唐詩に使われているので、³⁸⁾これを借用したものであるに違いないだろうか。

「洗」は音読みが妥当だとすると、日常は何と言っていたのだろう。『言繼卿記』の天文二年（一五三三）九月四日の条には、「庭梢つませ」とあり、同書の永禄八年（一五六五）四月十四日の条には「新緑これを摘み了んぬ」とある。また、『山水並に野形図』の中では「スカス」という言葉も、

木ノ枝ヲスカスコト、先、ヲモテ（表）ノ方ヲムネトシテ木スガタヲ能々ミルベキ也。

という具合に使われている。

剪定の仕方だが、『お湯殿の上の日記』の永禄七年五月九日の条に、「山しな（言繼）つねの御所こみはさまるゝ」とあるように、鋏ではさみ込んで樹木を刈り込んでいた。刈り込んだ木という意味で、「こみ（籠・籠木）」という言葉を使っていることになる。剪定の道具としては小刀も考えられるが、『言繼卿記』の天正七年（一五七九）六月九日の条に「一条殿より木鋏借用の間」「原、片仮名混り文、以下同様」と述べられている。生け花の一派である池坊は室町時代の中頃に生じているが、この流派の鋏は鍛冶が用いていた金切り鋏（かなはし）を改良したものという³⁹。生け花の鋏を改良して、丈夫な樹木専用の「木鋏」をつくったのだろう。剪定作業を山科言繼のような公家が行なっているのは、当時流行していた盆栽や生け花で修得した技術を応用しているのではないだろうか。

「スカス」も「こみ」も剪定ということでは同じように感じられるのだが、現代のこれらの言葉の用法からすると、透かすということは余分な枝を切って樹木の葉の量を少なくすることを意味し、刈り込むということは樹木の表面の葉を刈り取って樹形を整えることを指しているのだろう。現在、京都では庭木に対して「透かし」が行なわれているが、大阪・奈良では「刈り込み」が主流になっている。透かすと空氣の流通が良くなって日光も当たりやすくなり、病虫害にかかりにくくなるという利点があるのだが、刈り込む方が作業が容易で工賃が安価ということがあるために、刈り込みが多く見られるようになってきている。

室町時代の樹木の手入れの仕方を見ると、籠木をつくる他にマツなどの「笠」を結うこともしている。『言繼卿記』の永禄

九年七月五日の条には「五葉松笠十六」という表記がある。マツの枝葉を偏平な笠状に仕立てたものだったらしい。同書の永祿六年四月二十二日の条には、「梅木の笠」と書かれているから、ウメも笠が結われていたのだろう。また、「蔭涼軒日録」の延徳三年（一四九二）四月二日の条には、「躑躅の花の心これを取る」と書かれている。これは地方によっては今日でも行なわれている方法で、ツツジの花が咲いた後に結実しないように、花の中の子房を取り去ることを意味している^⑩。

マツに対しては同書の同年六月八日の条にあるように、「庭松の古葉を摘む」ということがされている。昨年の古い葉を取り去って、新しい葉の美しさを引き立たせる作業で、江戸時代の『馬琴日記』の文政十一年（一八二八）十二月二十四日の条にも、「うへ木や治左衛門・同金治来る。『略』松のふる葉むしり等、兩人にて終日也」と書かれている。この技法も現在に伝わっていて、実際に個人庭園などで行なわれている。現代の剪定技術の基本が、室町時代にはすでに生じていたことは注目すべきだろう。

四 室町時代の特徴

（一）針葉樹の愛好

建築様式は書院造へと次第に移り、庭園形態も植栽を含めて大きく変化し始めたのが、室町前期だった。足利義教の室町殿や応永度内裏などでは、園池は寝殿の前面ではなくて、小御所・会所といった私的な場所につくられている。寝殿が公的儀式にだけ利用されるようになったことから、主人や家族が居住したり来客に接する建物の近くに、憩いのために園池を設けるようになったのだろう。

庭園の配置に変化が生じたばかりでなく、等持寺ではマツとスギあるいはヒノキと思われる針葉樹を使用し、応永度内裏

でビヤクシン・ラカンマキが見られ、足利義政は烏丸殿や室町殿で、アカマツ・ビヤクシン・ゴヨウマツ・カラマツ・マキ・カヤ・ヒノキといった多くの針葉樹を集めている。鎌倉時代に使われ始めたビヤクシンが次第に流行するようになり、マツ以外の針葉樹も主要な植栽樹種になったというのが、室町前期の特徴と言える。後期になると、足利義政が造営した東山殿ではマツ・マキ・ヒノキ・ビヤクシンが使われ、康正度内裏ではマツ・ゴヨウマツ・ヒノキが植栽されているというように、針葉樹の使用が一般化している。

この時代の代表的作庭書である『山水並に野形図』にも、常緑針葉樹としてマツ・マキ・ヒノキ・スギなどの利用が記載されていることから見ても、針葉樹が多用されるようになったことは間違いない。『洛中洛外図屏風』を見ると、この時期に発展した枯山水にもマツ以外の針葉樹も使われていることがわかる。座禅によつて自己を鍛錬する禅宗を選び、温和な大和絵よりも気迫に満ちた水墨画を愛好した当時の武家の心情からすると、庭園形態としては穏やかな池庭よりも枯山水を選び、植物としては穏やかな感じの落葉広葉樹よりも鋭い葉を持つ針葉樹を植栽するようになったのは、ごく自然のことだったのではないだろうか。

(二) 植物の種類の増加

植物としては針葉樹が愛好されるようになったわけだが、もう一つ見逃してはならないこの時代の特色として、植栽植物の種類の増加がある。これまで室町時代の庭園植栽を調べるのに、各庭園の状況を見てきたために植物としては漏れたものが多いので、ここで補っておきたい。

『尺素往来』の植物

一条兼良(一四〇二—一四八一)が編集したとされる『尺素往来』^{せきそわらい}に、前栽の植物として名を挙げられているものをまとめる

表4-12 『尺素往来』(15世紀)の庭園植物

季節等	植 物	現代名	季節等	植 物	現代名
春	庭桜	ニワザクラ	夏	海棠花	カイドウ
	庭柳	ユキヤナギ?		岩藤	ニワフジ
	紫藤	フジ		卯花	ウツギ
	金銭	キンセンカ		停春	?
	金態	?		芍薬	シャクヤク
	玉態	?		薔薇	バラ
	躑躅	ツツジ		防葵(あすさゐ)	アジサイ
	款冬	ヤマブキ		下野花	シモツケ
	堇菜	スミレ		萱草(くわんそう)	カンゾウ
	春菊	シュンギク		蜀葵(からあふひ)	フユアオイ
	牡丹	ボタン		藕(はすの)花	ハス
	杜若	カキツバタ		夏菊	夏咲きのキク
	沈丁花	ジンチョウゲ		夕顔	ユウガオ
	花躑躅	ケマンソウ		鳳尾花(からすあふき)	ヒオウギ
	水仙花	スイセン		菖蒲	ショウブ
	鵝尾花	イチハツ?		宝珠花	?
	白梅	ハクバイ		岩躑躅	サツキ
	紅梅	コウバイ		和瞿麦	ナデシコ
	緋桃	モモの変種		唐瞿麦	セキチク
	碧桃	モモの変種		早百合(さゆり)	サユリ
	糸柳	シダレヤナギ		姫百合	ヒメユリ
	玉柳	シジミバナ		晚桜	遅咲きのサクラ
	一重桜	一重のサクラ			ラ
	八重桜	八重のサクラ		蘆橘	ナツミカン
	梨花	ナシ		桐花	キリ
	奈花(はななし)	リング?		梔花(くちなし)	クチナシ
	杏花(からもも)	アンズ		木瓜(ぼけの)花	ボケ
	李花(すもも)	スモモ		石榴(さくろの)花	ザクロ
	山(さ)茶花	サザンカ			

と、表4-12のようになる^①。この表からは、周辺の野山から採集した植物や外来種や改良品種を積極的に利用していることがわかる。春から冬までの項には花木・草花類をまとめ、雑草木の項に目立たない常緑樹・針葉樹・草本類などを収録している。カツラの花は春だから、秋の項の最後の「桂花^{かつら}」はモクセイを指していると考えべきだろう。モクセイ類を中国では桂と呼んだことが日本にも伝わって、文学的表現として用いられてきたものらしい^②。室町時代にモクセイが渡来していた可能性は強い。天正十二年(一五八四)に書写された『幻雲稿』の詩題にも「木屋八月の露を含み」「原漢文」と書かれている。

季節等	植 物	現代名	季節等	植 物	現代名
秋	蘭 (ふじはかま)	フジバカマ		竹	タケ
	萩	ハギ		篠 (ささ)	ササ
	萩	オギ		忍 (しのふ)	シノブ
	苳萱	カルカヤ		忘 (わすれ)	ヤブカンゾウ
	草香 (くさのこう)	クサノコウ		山菅	ヤブラン
	紫園 (しおん)	シオン		山橘	ヤブコウジ
	龍胆 (りんたう)	リンドウ		苔松	?
	芙蓉 (ふよう)	フヨウ		岩檜 (いはひば)	イワヒバ
	桔梗	キキョウ		芭蕉	バショウ
	水蓼 (すいりょう)	ヤナギタデ		兼葭 (あし)	アシ
	槿花 (むくげ)	ムクゲ		木賊	トクサ
	牽牛 (あさがほの) 花	アサガオ		姫葦 (ひめあし)	?
	鳳仙花	ハウセンカ		石菖蒲	セキショウ
	仙翁花	センノウ		師子鬘 (ししのひげ)	?
	女郎花	オミナエシ		一夏 (げ) 草	イチリンソウ
	鶏頭花	ケイトウ		万年草	マンネングサ
	鼠尾 (みそはき) 草	ミソハギ		金微 (き) 草	キンキソウ
	秋 (ぎ) 法師	ギボウシ		吉祥草	キチジョウソ
	我毛香 (われもかう)	ワレモコウ			ウ
	真 (まな) 菊	キク		松	マツ
	野菊	ヨメナ		栢 (かや)	カヤ
冬	槐 (えんす) 花	エンジュ		檜	ヒノキ
	桂 (かつら) 花	モクセイ		杉 (すぎ)	スギ
雑草木	霜 (さ) 菊	カンギク		被 (まき)	マキ
	寒梅	ウメ		椿	ツバキ
	苔	コケ		檀 (まゆみ)	マユミ
	芝	シバ		朴 (ほうのき)	ホオノキ
	葛 (くず)	クズ		鶏冠 (かいて)	カエデ
	蔦 (つた)	ツタ		銀杏 (いちやう)	イチヨウ

『大乗院寺社雜事記』の植物

『大乗院寺社雜事記』の文明十年(一四七八)三月の項には、「庭前ノ木草花」として正月から三月までのものが記されている[表4・13]。『尺素往来』とは同時代であるために、共通したものが多し。桜草(サクラソウ)・木カンヒ(キガンピ)・スワウ(スオウ)・カシワ(カシワ)は、『尺素往来』には記載されていない。また、明応六年(一四九七)九月の項にも、「年中花」として庭園の植物が正月から七月までの分が書かれている[表4・14]。この年に見た花を書きとめたものだろうか。黄梅(オウバイ)・長春(コウシンバラ)・仏せう花(ブッソウゲ)・カンヒ(ガンピ)・ムク

表4-14 『大乗院寺社雑事記』の庭園植物
(明応6年[1497]9月)

月	植 物	現代名
正月	一重白梅	一重のハクバイ
	水山花	スイセン
	飛白花	?
二月	紅梅	コウバイ
	白梅	ハクバイ
	黄梅	オウバイ
	馬連	?
三月	桃	モモ
	白桃	ハクトウ
	山吹	ヤマブキ
	ツ、シ	ツツジ
	桜	サクラ
	仙人草	センニンソウ
	金仙花	キンセンカ
	藤一へ	一重のフジ
四月	カキツハタ	カキツバタ
	長春	コウシンバラ
	仏せう花	ブッソウゲ
	唐アヲヒ	タチアオイ?
	卵花	ウツギ
	花昌補	ハナショウブ
	岩ツ、シ	サツキ
	宝殊花	?
五月	下野	シモツケ
	アツサヘ	アジサイ
	カンヒ	ガンピ
	ムク花	ムクゲ
	キヤウ	?
	ヲグルマ	オグルマ
六月	夏キク	夏咲きのキク
	藤	フジ
	仙ヲウ花	センノウ
	ヲミナヘシ	オミナエシ
	フヨウ	フヨウ

表4-13 『大乗院寺社雑事記』の庭園植物
(文明10年[1478]3月)

月	植 物	現代名
正月	梅	ウメ
	椿	ツバキ
二月	沈丁花	ジンチョウゲ
	花桜	サクラ
	信乃桜	サクラの変種
	岩柳	ユキヤナギ
	庭桜	ニワザクラ?
	桜草	サクラソウ
三月	全躰	?
	梨	ナシ
	海道	カイドウ
	ス桃	スモモ
	桃	モモ
	藤	フジ
	ツ、シ	ツツジ
	山吹	ヤマブキ
	木カンヒ	キガンピ
	仙人合花	センニンソウ?
	宝臙花	?
四月	定春	?
	馬連	?
	スワウ	スオウ
	石南	シャクナゲ
	スマレ	スマレ
	ヒホネ	?
	一ハツ	イチハツ
	カキツハタ	カキツバタ
	カシワ	カシワ

花(ムクゲ)・ラクルマ(オグルマ)が、『尺素往来』には見られない。しかし、ほとんどが共通している。「岩ツ、シ」は何を意味するか問題となるが、三月にツツジが出ていて、これは「五月」の項にあるから、サツキと考えていいだろう。

『山水並に野形図』の植物

文安五年(一四四八)の奥付を持つ室町時代の代表的作庭書である『山水並に野形図』によって、さらに補ってみることにしたい。この本の中の植物をまとめてみると次のようになる。

《常緑針葉樹》松・あやすき檜(スギ)・真木(マキ)・檜木(ヒノキ)

《常緑広葉樹》椿・躑躅「ツツジ」・シキノ木(シイ)・ユツリハ(ユズリハ)・ヤドメ(イヌツゲ)⁽⁴³⁾・ヒサカキ(?)⁽⁴⁴⁾・枇杷(ビワ)・柑子(クネンボ?)・橘(タチバナ)・柚(ユズ)

《落葉広葉樹》山吹・萩・梅・桜・柳・藤・真弓(マユミ)・桃・柘榴(ザクロ)・梨ノ木(ナシ)・鶏冠木「カイデ」・桐・栢木(カシワ)・山ウルシ(ヤマウルシ)・栗ノ木

《タケ・ササ類》竹・小篠(ササ)

《草本類》石菖(セキシヨウ)・杜若「カキツバタ」・シオン・白菊・エビネ・ワサビ(ワラビの誤り?)・百ナン草(?)・キンキ草(?)・ネクサ(?)

《不明》ニホヒノ木(?)

このように作庭書からも、室町時代には針葉樹や果実類が多く用いられていたことがわかる。三条西邸・山科邸・蔭涼軒でも明らかなように、主要建築の前庭に果樹類を植栽するのが一般化していることも、室町時代の特徴の一つになっている。古代から果実は愛好されて植えられてきているが、果樹園とか裏庭といった場所で栽培されるのが普通だった。珍しい果樹が出現したことや、花と実の美しさと果実を味わうことの楽しさから、庭園に植えることが流行しだしたのではないだろう。

か。

『山水並に野形図』の成立年代は不明瞭なのだが、『大乘院寺社雑事記』に記載されているカシワや、『尺素往来』に出てくるマユミ・キンキソウが挙げられていることは、同時代の書物であることを示しているように思う。

江戸時代との相違

江戸時代になってから多種類の植物が栽培されるようになったと一般には考えられているようだが、『尺素往来』や『大乘院寺社雑事記』『山水並に野形図』などの記載からすると、基本的な庭園用植物はすでに室町時代に出現していることは明らかだろう。新しい時代が始まるたびに外国の植物が入ってくるのが日本の特色なのだが、中国(明)や朝鮮や琉球との貿易が盛んに行なわれていたためか、高麗産のソテツや中国原産のカイドウ・モクセイ・ブツソウゲなどが渡来して、植物の種類を一層豊富なものにしている。

園芸品種もかなりの程度まで見出されていることも注目すべきだろう。すでに見たようにツツジ類としては、『杜鵑花紅躑躅・映山紅・蓮華躑躅・岩躑躅(サツキ)』などの品種が出現している。庭園内に低木を植えることはこれまで少なかったのだが、ツツジ類の流行と合わさってこの時代から始まりだしたように思う。サクラとしては「普賢堂・信州桜」、モモは「越桃・緋桃・聖桃」などが見られるというように、変種の数が増加している。突然変異で生まれて各地で栽培されていた変種が、商業活動が活発化するにつれて、京都に運ばれて来るようになったのではないだろうか。

キクの園芸品種について見ると、『尺素往来』には総称として真菊・野菊・霜菊が挙げられているだけだが、『蔭涼軒日録』の明応元年(一四九二)十月八日の条には、「菊花の黄白紅紫、数十茎を両度これを恵まる」と記載されている。赤色系もすでに広まり、キクの種類はかなりの数に達していたのだろう。『言継卿記』の永禄九年(二五六六)十一月二十九日の条には、「菊の種十三色」という表現があるから、当時キクは一三種類以上が存在していたことになる。室町時代にはキクが流行していて、種類も増

大していたと考えられる。

江戸時代になって貝原益軒が書いた『花譜』には、季節順に植物が列挙されているが、その多くは室町時代にすでに出現している。江戸時代の特色は植物の種類が多いというよりも、変種が多く生まれているということだろう。そうした基礎をつくったのが室町時代だったことを忘れてはならない。

第四章 註

- (1) 吉永義信「室町時代の庭樹に就いて」『造園雑誌』(七一)「日本造園学会、一九四〇年、一一一二頁。
- (2) 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店、一九三四年(復刻、思文閣、一九七三年)。
- (3) 川上貢『日本中世住宅の研究「新訂」』中央公論美術出版社、二〇〇二年、三一六―三二五頁。
- (4) 川上貢、前掲書、三三五―三四〇頁。
- (5) 外山英策、前掲書、五〇―一五〇五頁。
- (6) 川上貢、前掲書、三四〇―三五二頁。
- (7) 川上貢、前掲書、三六四―三八一頁。
- (8) 川上貢、前掲書、三八二―三九〇頁。
- (9) 上原敬二『樹木大図説』有明書房、一九八五年、(二)二九〇・二九五頁。
- (10) 川上貢、前掲書、三九一―四〇四頁。
- (11) 川上貢、前掲書、(一)二五三―二七一頁。
- (12) 藤岡通夫『京都御所』彰国社、一九五六年、一四四―一四八頁。
- (13) 上原敬二、前掲書、(二)七九―八二頁。
- (14) 下中邦彦編『京都市の地名』平凡社、一九七九年、四一九頁。
- (15) 川上貢、前掲書、一七四―一八三頁。外山英策、前掲書、五三三―五四一頁。
- (16) 前掲『京都市の地名』七五八頁。
- (17) 外山英策、前掲書、四六一頁。
- (18) 『老松堂日本行録』宋希璟著、村井章介校注、岩波書店、一九八七年、一二九、一三〇頁。
- (19) 外山英策、前掲書、四五五―四五七頁。
- (20) 城山桃夫『果物のシルクロード』八坂書房、一九八三年、一三〇、一三一頁。
- (21) 麓次郎『四季の花事典』八坂書房、一九八八年、七七頁。
- (22) 飛田範夫・他『銀閣寺(慈照寺)園池の調査結果について』

て『庭(四八)』建築資料研究所、一九七九年、三四—四〇頁。

(23) 西田直二郎「銀閣寺西指庵遺趾」京都府史蹟名勝天然記念物調査報告(一二)、京都府、一九三二年、三二—三三頁。

(24) 吉永義信「慈照寺(銀閣寺)庭園」『名勝調査報告(二)』文部省、一九三五年、五一頁。

(25) 外山英策、前掲書、五九四頁。

(26) 川上貢、前掲書、二七七—二九〇頁。重森三玲『京都皇居の御庭園』晃文社、一九四二年、一—四六頁。

(27) 外山英策、前掲書、六六八・六六九頁。

(28) 原勝郎『東山時代に於ける一縉紳の生活』講談社学術文庫(二五〇)、講談社、一九七八年(初版、創元社、一九四一年)。

(29) 外山英策、前掲書、七〇八—七一頁。

(30) 上原敬二、前掲書、二二—一四七—一五二頁。

(31) 外山英策、前掲書、六一—六二—六三頁。

(32) 上原敬二、前掲書、(一)六七〇—六七二頁。

(33) 米原正義『戦国武士と文芸の研究』桜楓社、一九八〇年、六四五頁。

(34) 飛田範夫「洛中洛外図屏風(歴博甲本)のなかの枯山

水」『日本美術全集(一一)』講談社、一九九三年、一八三—一八八頁。

(35) 京都市埋蔵文化財研究所編『特別史跡・特別名勝鹿苑寺(金閣寺)防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』鹿苑寺、一九九七年、二七—二九・五六・五七頁。

(36) 上原敬二編『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、一九七四年、三三頁。

(37) 『大乘院寺社雜事記』の文明十年(二四七八)十一月十五日条など。

(38) 諸橋轍次『大漢和辞典(縮写版、六)』大修館書店、一九五七年、一〇九〇頁。

(39) 岡本誠之『鉄』法政大学出版局、一九七九年、九六—九八頁。

(40) 藤原武二氏(元、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館長)の御教示による。

(41) 植物の現代名については、次のものを参考にした。木村陽二郎監修『図説 草木名彙辞典』柏書房、一九九一年。

(42) 前掲『樹木大図説』、(三)六七—六七七頁。

(43) 前掲『解説山水並に野形図・作庭記』、三三頁。

(44) 前掲『解説山水並に野形図・作庭記』、二二頁。

第五章 安土桃山時代の庭園植栽

時代区分については諸説があるが、室町幕府が滅亡した天正元年（一五七三）から、江戸幕府が成立する前年の慶長七年（一六〇二）までを、安土桃山時代とすることにした。

戦国時代から築かれている山城や平山城には、城主や武将の居館が山麓や山上に建てられ、安定期に入ってから平城では本丸や二の丸内に居館が設けられるようになっていく。これらの居館に付属して庭園はつくられているが、その植栽はどのようなものだったのだろうか。また、この時代には茶道の流行から茶室が建てられ、その周辺に露地がつけられているが、露地は書院の庭園形態にも大きな影響を与えていくようになる。露地については堀口捨己や田中正大の研究があつて、植栽についても各種の茶書を引用して詳論されている^①。また、寺院の庭園については醍醐寺三宝院については有名だが、作庭過程と植栽樹種については吉永義信の研究がある^②。安土桃山時代の庭園植栽を考えてみるために、これまでの研究を参考にする^③とともに、より多くの事例を挙げることによって全体的に探ってみることにしたい。

一 城郭庭園の植栽

（一）織田信長の庭園

岐阜城の天守庭園

織田信長（一五三四—一五八二）と庭園との関係を考えるのには、岐阜城から見ていく必要がある。ポルトガルの宣教師ルイ

ス・フロイス（一五三二—一五九七）は、『日本史（第一部八九章）』の中の一五六九年七月付けの手紙に、天守閣の周囲の庭園について次のように書いてある。^③

庭と称する極めて新鮮な四つ五つの庭園があり、その完全さは日本においてはなほだ稀有なものであります。それらの幾つかには、一パルモ（約二センチメートル）の深さの池があり、その底には入念に選ばれた鏡のように滑らかな小石や眼にも眩い白砂があり、その中には泳いでいる各種の美しい魚が多数おりました。また池の中の巖の上に生えている各種の花弁や植物がありました。

さらに詳しくは、文禄三年（一五九四）に来日したイスパニアの商人アビラ・ヒロンが、『日本王国記（第四章）』に、

庭庭にもまた見るべきものが多々あったが、「略」ごく細かい葉のもの、あるいはいつも水をしたたらせているもの、あるいは自然の霧に煙っているもの、あるいは果実を实らせているもの、さては種々様々な花を付けたものなど、幾千という緑の木々が趣向をこらして、これに配されている。それは緑も鮮やかな小さな松、曲がりくねった小さな杉、あるいはまっすぐで、決して大きくならない小さな木々、あるいはこんもりした木々であったが、こういう木々も、その他の木々も、牛、馬、孔雀その他の鳥や獣の形に刈りこんであった。

と記載している。^④ 植栽樹種としては、果樹類・マツ・スギなど多くのものが存在した。外国人には幹が曲がった木は珍しかったようだが、特に目を引いたのは数多くの動物の形に刈り込んだ樹木だった。西洋ではこの技法をトピアリー（Topiary「装飾的刈り込み法」）と呼んでいるのだが、ポルトガルやイスパニアなどとの貿易を通して、日本に伝わったものなのだろうか。

松永久秀の多聞山城

なお、山城の庭園に関しては、永禄八年（一五六五）に大和国の松永久秀（一五〇一—一五七七）の多聞山城（多聞城）を訪れ

た、アルメイダ修道士の次の書簡が『日本史(第一部六〇章)』に載せられている。

この宮殿内の庭園と樹木に見られる技巧については、この点ではこれ以上優雅なものはありません。なぜならば、私は都みやこにおいて、眼を楽しませてくれる、はなはだ美しく珍しい事物に接しましたが、これに比べれば、すべては劣っているからなのです。

久秀は東大寺の大仏殿を焼いたことから、当時の人びとからは極悪人とされているが、京都よりも美しい庭園を山城内につくっていたことになる。戦国時代だったからこそ、各地の武将は自己の権勢を示すために城館を美しく飾っていたのだろう。「樹木に見られる技巧」というのは、室町時代に流行していた「籠こみ(刈り込み)」が多くの樹木に施されていたことだろうか。

將軍義昭の二条城

こうした状況だったことから、永禄十二年(一五六九)に信長が將軍足利義昭よしあき(一五三七—一五九七)のために造営した二条城の庭園は、贅を尽くしたものになっている。この二条城は現在の京都御所の西側に位置していたもので、安土城築造の際に解体、移築されている。

『信長公記(巻二)』には造営時の状況について、

御殿の御家風尋常に金銀をちりばめ、庭前に泉水・遣水・築山を構へ、其の上、細川殿御屋敷に藤戸石とて、往古よりの大石候。是れを御庭に立て置かるべきの由にて、信長御自身御越しなされ、彼の名石を綾錦を以てつゝませ、色々花を以てかざり、大綱余多あまた付けさせられ、笛、大鼓、つゞみを以て囃はやしし立て、信長御下知なされ、即時に庭上へ御引付け候。「略」其の外、洛中洛外の名石・名木を集め、眺望を尽くさる。



写真 5-1 安土城の現況（整備後）

と述べられている。名石ばかりでなく、名木をかなり集めたようだが、具体的な植物名については書かれていない。馬場については、「桜をうへ、桜の馬場と号し」とあることから、サクラ並木を設けていたことがわかる。

安土城の庭園

天正四年（一五七六）に信長が築城した安土城は、五層七重の天守閣を持った当時としては画期的な城郭だった〔写真5-1〕。荒廃したために現在では庭園の形跡はまったく見られないが、『日本史（第一部八四章）』にフロイスは、次のように安土城の庭園について述べている。

多種の灌木がある庭園の美しさと新鮮な緑、その中の高く評価されるべき自然のままの岩塊、魚のため、また鳥のための池、〔略〕

庭園の植栽は低木を主としたもので、池もつくられていて美しいものだったらしい。

二条殿の改造

信長が京都に持っていた二条屋敷は、室町時代の項に述べ

たようにかつては二条良基の邸宅で、室町時代には名園として名高いものだった。⁽⁵⁾この屋敷のことについては、『信長公記（巻九）』の天正四年（二五七六）四月一日の条に、

二条殿御屋敷 幸空地にてこれあり。泉水・大庭の眺望、面白くおぼしめされ、普請の様子条条々、村井長門守に仰せ聞かせらる。

と信長が入手した時の状況が書かれている。『言経卿記』の天正四年九月十三日の条には、「右大将家（信長）の新造見物に罷り向う。言語道断見事なり」「原、平仮名混じり漢文」とあるから、建物が新築されて庭園も一層美しく改修されたのだろう。植栽については、『兼見卿記』の天正六年十月三日の条に吉田神社から杉木を二、三本進上したとあって、スギが補植されたことがわかる。

（二）豊臣秀吉の庭園

『大坂夏の陣図屏風』の大坂城

織田信長が没した天正十一年（一五八三）に豊臣秀吉（一五三六―一五九八）は、大坂城の建造を開始している。庭園についてフロイスは、『日本史（第二部十六章）』に次のように述べている。

この新城には、日本語で庭と呼ばれる内庭があるが、それらは我らヨーロッパの技巧をこらした庭園をいくらか想起させるに足りるし、自然石、樹木、草木など、その新鮮さは自然のままのものを多く採り入れているので、一年の四季にあやかるものがある。

城内には室町時代の伝統を引き継いだ庭園が存在していたようで、『大坂夏の陣図屏風』（大阪城天守閣蔵）には本丸部分に

スギ、他の郭にはマツ・シダレヤナギが描かれている〔図5-1〕。

聚楽第の園池

天正十四年（一五八六）に秀吉は、京都の旧大内裏跡に聚楽第を造営している。『言経卿記』の同十六年四月十四日の条では「聚楽亭」と呼んでいるが、『鹿苑日録』の同十九年十二月二十三日の条などでは「聚楽城」と記しているように、邸宅というよりも城郭に近いものだった。造営時のことについては、『多聞院日記』の天正十五年三月一日の条に、

京都より内野（^{うちの}聚楽第）御庭の用とて、在家の植木、にはの石取に奉行人下ると云々。人足のやつかい沈思々々。〔原、片仮名混じり漢文、以下同様〕

とあるように、植木や庭石を奈良からも徴収している。天正十六年四月には聚楽第に後陽成天皇の行幸があつて、織田信雄（一五五八—一六三〇）の次の歌が『聚楽第行幸記』に収録されている。

亀のうへの山（蓬萊山）なりけりな庭ひろき池のしまねの松の木ふかさ

聚楽第内には広大な園池が存在したらしい。園池の中島にはマツが繁つていたということだが、他の歌もマツだけを詠んでいるから、園池の周辺はマツが数多く植栽されていたのだろう。『聚楽第図屏風』（三井文庫蔵）には聚楽第の半分ほどが描写されているが〔図5-2〕、庭園部分にはシュロなどが見られるものの全体的にマツが多かつたようで、『宗湛日記』の天正十五年十月十四日の条にも「松原二御茶屋アリ」と記されている。

聚楽第周辺には武将の屋敷がつくられていたらしく、『日本史（第三部一六章）』は次のように語っている。

いずれの屋敷にも中庭や空地が設けられ、その場に跳え向きのさまざまな形の石や花や樹木が配される習わしである。これ

図 5-1 大坂城の植栽（『大坂夏の陣図屏風』より）

図 5-2 聚楽第の植栽 (『聚楽第図屏風』より)

らの樹木には何らの果実もならないが、どこかの景色を象つて自然の姿を再現している。そこには自然の池や泉が配されて驚くほどの新鮮味があり、それらが人工的につくられたものとはとても考えられない。これらの池には人工的な外見をもたず、自然に似ているほど喜ばれ、彼らが庭と呼んでいる庭園には食用の实の生る草木がないほど珍重される。彼らはそのようなものをすこぶる卑しみ、ふさわしからぬものと見なしているのである。

武將の邸宅の園池は、伝統に従つた自然的な風景描写をしていたらしい。庭園内に果樹を植えることを避けていたということは、注目すべき点だろう。これまで見てきたように、室町時代には果樹を植えることが流行していたのだが、ここではまったく否定されている。フロイスは『ヨーロッパ文化と日本文化(第十一章)』(二五八五年「天正十三」)の中でも、⁽⁷⁾

われわれはわざわざ庭に果物のなる木を植える。日本人はその庭(circus)にただ花を咲かせるだけの木を植えることをむしろよぶ。

と書いている。

伏見城の山里丸

朝鮮出兵後の文禄元年（一五九二）八月に、秀吉は隠居所として伏見城の造営に着手している。この指月しげつの城は慶長元年（一五九六）に大地震によって倒壊したため、東北寄りの木幡山に翌年再興されている。指月時代の造営については、『多聞院日記』の文禄三年十月十八日の条に、

なら中僧坊ちゅうそうぼう 悉く以て柑子の木を伏見へ取らるとて震動すなり。負寺の大なる石船並に大仏の西のこけら堂の前の石灯呂も取ると云々。種々の事尽し了ぬ。

とある。柑子は伏見城の近くにまとめて植えて、ミカン山をつくろうとしたのだろうか。石は城の石垣に使用するものだろう。城内の植栽については、『駒井日記』の文禄三年二月十四日の条に次のように記されている。

十三日昼時分より山里において北政所様（秀吉の正室）、二の丸様（淀君）、其外御女房衆悉く御花見の由。〔原、平仮名混じり漢文〕

山里丸には『太閤記（卷十六）』によると、沈香の長木を使った四疊半と二疊半の茶室が設けられていたというが、庭の一部にはサクラが植えられていたことになる。

木幡山時代のことについては、『太閤記（卷二十二）』の中に引用されている慶長三年の「学問所記」に、「大城を築き、華第を営みて松竹を栽え深林を作り」〔原漢文、以下同様〕と記されているから、城の全域にマツやタケを植えていたのだろう。

『太閤記（卷十六）』の本文は、



写真 5-2 御土居の現況（北野天満宮内）

山下の河辺に二十丈に山を筑上^{つきあがり}、諸木を植ならべ、枝を争ひ深山のごとし。松柏生茂^{おおい}りし中に、堂塔伽藍を立並べ、学園所と号し、「略」

と、六〇メートルほどの山を築いた頂上に学園所を設け、周辺にマツや常緑広葉樹などを深山のように植栽していたことを述べている。

御土居のタケ

秀吉が行なった大土木工事に京都の御土居がある。御土居は京都を防衛するために築いたもので、総延長は五里二六町（約二二・五キロメートル）にも及ぶ「写真5-2」^⑦。庭園ではないのだが、植栽が行なわれているので見ておきたい。

『三藐院記』^{さんみやくいんき}に、

天正十九年壬（閏）正月ヨリ、洛外二堀ヲホラセラル。竹ヲウヘラル、事モ一時也。二月ニ過半成就也。

と記述されているように、天正十九年（一五九二）に着工したもので、土手にはタケが植栽されていた。『駒井日記』によると、着工四年後の文禄四年（一五九五）四月九日には、枯れたタケの

処分が行なわれている。

京惣廻枯竹佐野請取分東寺よりすい坂海道迄、合一万六千百拾三本〔略〕

京廻枯竹杉山半左衛門・堤大三請取分、合一万二千百五拾八本〔略〕

という状態だったという。御土居には何万本というタケが植栽されていたことになる。

方広寺のマツの苗木

天正十六年（一五八八）に秀吉は、京都東山に方広寺大仏殿を建立することに着手している。この周辺の植栽については、『北野社家日記』の文禄四年（一五九五）四月八日の条に、次のように記されている。

松苗二万本前年かゝり申し候を、三分一にて御ゆるし達すべしと仰せられ候故、礼状遣はさるゝなり。〔原、仮名混じり漢文〕

前年には大仏廻りに植える松の苗を、二万本用意することを北野神社は命じられているが、今年はその三分の一で良いことになったらしい。当時京都の周辺の山にはアカマツ林が多くなっていたようなので、マツの苗木を集めることは比較的簡単だったと思うが、二万本ともなると容易ではなかっただろう。この年と前年を合わせると、大仏殿の周囲には二万六〇〇〇本ほどのマツの苗木が植えられたことになる。これは御土居と考え合わせると、大規模な建築・土木工事が行なわれる時代になり、大量に樹木を使用するようになったということだろうか。

醍醐寺三寶院のサルスベリ

醍醐寺座主だった義演（一五五八—一六二六）の『義演准后日記』によると、慶長二年（一五九七）三月八日に、秀吉は伏見城に近い醍醐寺を訪れて、馬場と金剛輪院南庭のサクラを見物している。醍醐寺のサクラは室町時代にも名高かったらしく、

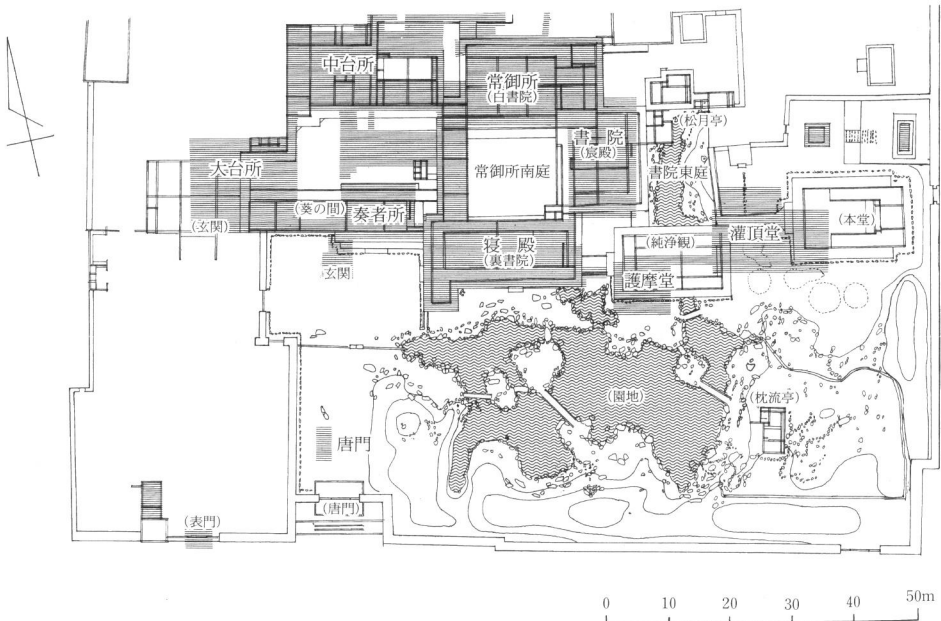


図5-3 三宝院建築変遷図 [黒色は義演時代の建物、() は現代の名称、川上貢の推定図などを基に作成]

『満濟准后日記』によると、將軍足利義教も永享二年（一四三〇）三月十七日に來寺している。慶長三年二月九日に秀吉は再び醍醐寺を訪れて、北政所と秀頼が花見を楽しめるように、奉行に東側の「やり山」に御殿を建てることと、サクラを植えることを命じている。『義演准后日記』の同年二月十三日の条によると、次のような具合だった。

桜植うる奉行來たる。当門馬場よりやり山に至りて、左右にこれを植う。其の間三百五十間これ有り。桜七百本を植うべしと云々。江州・河州（河内）・和州（和泉）・当国の四ヶ国の桜ほりてこれを植うべし。吉野を移さると云々。〔原、片仮名混じり漢文、以下同様〕

畿内からサクラを集めて吉野をまねて植えたようだが、片側一間あたり一本植栽したということはかなりの密度になる。同年二月十六日に秀吉は金剛輪院の敷地を拡張することを決定し、二十日には園地の構想を述べている。三月十五日には花見が盛大に催されているが、翌年には後陽成天皇の花見の来訪を計画して、金剛輪院の整備は続行されていく。慶長三年八月に秀吉が逝去したために、行幸のことは中止になるが、規模を縮小することで金剛

輪院は完成し、のちに三宝院と改称されるに至る。

義演は作庭の面白さに魅せられたのか、晩年まで盛んに庭園の改修を行なっている。植栽を中心にその状況を吉永義信の研究からまとめると、表5-1のようになる。また、建築と庭園については、明和六年（一七六九）作成の図を基にした川上貢の建築復元図に^⑩、森蘊の庭園実測図を合わせて、図5-3を作成した。現在、中央に位置している表書院は当初からのもので、以前は寢殿と呼ばれていた。表書院の東側の純浄観は、明和の図によると東側に位置していた灌頂堂^{かんじょうどう}を移設したもので、本堂は寢殿東側にあつた護摩堂を移築・拡張したものと推定されている。当初の書院は一七世紀半ば頃に撤去され、その後現在の宸殿^{しんけん}が造立されたと見られる。白書院は門跡の居住場所で、かつては常御所と呼ばれたものに該当している。表5-1からすると、慶長三年に寢殿前面の庭園がつくられ、翌四年には常御所の南庭が整備されて、慶長七年に灌頂堂の西庭がつくられている。慶長七年正月十九日の条に、「泉水灌頂堂の西へ掘り入れたんぬ」とあるのは、現在の茶室松月亭の園池に相当するもので、書院の東庭でもあつたのだろう。慶長十三年と十五年には、寢殿の南庭の蓬萊島が改修され、植栽などが行なわれている。

植栽を場所別に見てみると、寢殿南庭については中島に梅の古木、南岸に杉・躑躅など、東岸に刈り込んだ椿、瀧頭に彼岸桜（八重、白色）、寢殿の南西角に大松二本が存在していた。その他、具体的な場所は不明だが、南庭に伊勢桜・百日紅（サルスベリ）・柳・牡丹が植えられ、塀際には杉が二〇〇本挿し木されている。サルスベリは中国南部が原産地で、この時代に日本に入ってきたのではないかと思う。慶長七年二月六日に、一日で熟すという高麗^{こうらい}の柿が植えられているが、安土桃山時代には海外貿易が盛んになり、大陸からも珍しい樹木が渡来するようになったのだろう。

常御所の南庭は中庭となっていたが、ここには富士山の形をした築山が設けられて、山頂には雪を表す白苔が張られている。樹木としては、高さが八尺（約二・四メートル）ある刈り込まれた柏楨（ビャクシン）と、樺（ツガ）・檜があつた。草花としてはのちに紫蘭（シラン）が一本植えられている。灌頂堂の西側部分には築山がつくられ、その上に梅木が二本と柏木（カヤ）が三本植えられ、苔が張られている。菊などが植え付けられていた花壇は、寢殿の南庭に設けられていたのだろうか。

表5-1 三宝院庭園の植栽(『義演准后日記』より)

年 月 日	植 栽 植 物〔()は関係記事〕
慶長2年(1597) 3月8日	(秀吉が馬場と金剛輪院の花見を行なう)
3年(1598) 2月9日	(秀吉が花見の用意に訪れる)
2月16日	(秀吉が金剛輪院の拡張を決定する)
2月20日	(秀吉が金剛輪院の庭園構想を述べる)
3月15日	(秀吉によって花見が盛大に行なわれる)
4月7日	(金剛輪院の泉水の縄張りが行なわれる)
4月27日	泉水に木を植え、築山に苔を伏せる。
5月7日	方々より植木来る。
5月9日	成身院の梅を泉水の蓬萊島に運ぶ。
5月13日	(泉水完成)
11月8日	小庭の泉水を壊し、植木を大泉水へ移す。
11月17日	(常御所立柱)
11月22日	(客殿立柱)
11月23日	(書院立柱)
12月21日	(金剛輪院御殿が完成し門跡が移る)
4年(1599) 正月18日	泉水の桜木を植え直す。花壇に草花を植える。
2月29日	南庭の島に梅古木を植える。
閏3月4日	(常御所の南庭に石を運ぶ)
閏3月7日	常御所の庭石ほぼ完了し、木を植える。
閏3月9日	山上の教蔵の庭木を移し植える。
閏3月12日	常御所の庭へ柏楓のコミ8尺程のものを1本、榎・檜各1本を教蔵の庭から移す。
閏3月28日	常御所の南庭完成し、白砂を入れる。築山を富士山の形に築き、雪として白苔を伏せる。
6月7日	寢殿の南西角の大松2本の下に塀中門を設ける。
5年(1600) 2月2日	石田郷の北の堂の梅木を泉水の庭に移す。
2月9日	桜馬場に桜木を植える。滝頭の彼岸桜(八重、白)のつぼみ咲く。
2月29日	馬場の桜、泉水の八重桜花盛り。
3月5日	庭前の伊勢桜落花する。
6年(1601) 2月23日	桜を南の広庭に植え、花壇を取り除く。

年 月 日	植 栽 植 物 [() は関係記事]
3月14日	(花見に伏見・京より人々が来て、泉水を見物する者が絶えない)
3月15日	随心院から菊の苗をもらい、花壇に植える。
5月23日	堯政律師が進上の紫蘭1本を常御所の庭に植える。
6月2日	芍薬の株分けを行なう。
7年(1602)	正月13日 普賢像を泉水の庭の桜に接ぐ。紅梅も旧冬以来数本接ぐ。 正月19日 (灌頂堂の西へ泉水を掘り入れる) 正月23日 (灌頂堂西庭の泉水普請始める) 南の泉水に杉を200本程挿す。 正月24日 (石を引き寄せる。) 弥三に糸桜8本を接がせる。 正月25日 (泉水縄張り) 正月28日 (灌頂堂の西の庭に石を立て始める) 正月29日 (泉水ほぼ完成する) 正月30日 泉水の築山に梅木2本を並べて植える。柏木3本も植える。 2月4日 泉水の築山に苔を伏せる。 2月6日 (護摩堂と寝殿の間に泉水を掘り入れる) 2月7日 1日で熟すという高麗の柿を植える。
8年(1603)	2月13日 (泉水の石組完成する) 2月21日 白椿を掘り、家康に献上する。 10月25日 大野治長に柏木12本を献上する。
9年(1604)	2月17日 宝池院の梅の大木を植える。 3月1日 百日紅の大木を光台院よりもらい、南庭に植える。
13年(1608)	9月27日 (泉水の蓬萊島を縮小する) 10月11日 泉水東岸の椿共の枝を伐ってコミをつくる。
15年(1610)	11月16日 (蓬萊島と寝殿正面の築山の改修終わる) 11月27日 松の古木2本を植える。 11月29日 日野村の梅木3本と西の川の柳2本を庭に植える。
16年(1611)	正月23日 台所に接した西側の庭の桜を植え直す。
17年(1612)	8月28日 池の南岸に杉・躑躅等を移植する。 9月20日 常御所南庭の牡丹を株分けし、寝殿の南庭と書院の東庭に移植する。

図 5-4 吉田神社の境内（『都名所図会』1780 年）

三宝院庭園は『義演准后日記』によるとその後、元和元年（六一五）と同九・十年にかなりの改修が行なわれていて、植栽についても別な種類が加えられて様相が変化している。

（三）その他の庭園

吉田兼見邸の果樹

京都の吉田神社の神主だった吉田兼見（一五三五—一六一〇）の邸宅と吉田神社「図5-4」の植栽について、その日記である『兼見卿記』から信長の時代の分を見ると、表5-2のようになる。兼見の邸宅の主殿正面が「面の庭」と呼ばれる所なのだろう。ここには紅梅と桜を植えている。小座敷の庭には梅木があり、檜柑（ミカン）を植栽している。また、どちらかの庭か不明だが、橘（タチバナ）・柑（クネンボ）¹²・金柑（キンカン）を植え付けている。くつろぐ場所だった小座敷の方には、果樹園が多かったのではないだろうか。「籠古木」（刈り込んだ古木）が存在していたのは、おそらく主庭だろう。天正十一年（一五八三）六月四日の条に、「周超庭之木コミヲツム」とあるように、中低木類の葉を刈り込むことが、この時代には流行している。

また、吉田神社境内には馬場があつてマツが植栽されていたら

表5-2 吉田兼見邸と吉田神社の植栽(『兼見卿記』より)

年 月 日	植 栽 植 物
元龜4年(1573) 6月8日	足利義昭が馬場の松木5本を所望。
天正4年(1576) 2月21日	曇華院殿が松木20本を植木として所望。
6年(1578) 8月5日	近衛殿(前久)が庭の籠古木を所望。
10月3日	信長の二条屋敷に杉木2, 3本進上する。
7年(1579) 9月8日	近衛殿が松木3本を所望。
10月4日	勧修寺(晴豊)が松の木7本を所望。
10月16日	表の庭に紅梅・桜を植える。小座敷の梅木を表の庭に移す。
10月18日	小座敷に蜜柑, その他の樹木を植える。
8年(1580) 11月19日	山科貴門(言経)が塀の柱用として松木5本を所望。
11年(1583) 6月4日	周超が庭の木のコミをつむ。
9月12日	鉢の松かさを結うことを賀茂に依頼する。
9月17日	去年植えた茶園の枯れた分を植え直す。
10月4日	松楽庵より橘・柑をもらい庭に植える。檜以下を植え直す。庭に金柑を植え、土居前の石を直す。
11月1日	庭に小石を入れる。
11月3日	中間どもに梅を植えさせる。
12月7日	神壇の東を開き竹を植える。
12月27日	南の藪の立木を切る。

しい。これを材木として所望する人間も多かったようで、神社側も苦慮している。境内の山林内にはマツ林があったことから、庭木としてしばしば進呈している。信長の二条屋敷に進上した杉木は庭園ではなくて、境内のものかもしれない。天正十一年十二月には、神壇の東側の山を切り開いて竹を植えている。兼見邸の近くには茶園も存在していて、茶の枯れたものの植え直しが行なわれている。

山科言経の薬草栽培

安土桃山時代に生きて植栽についての記録を残した人物としては、山科言経(一五四三—一六一一)がいる。山科言経の二男だった言経は、父親の影響を受けたのか、園芸に興味を持っていた。言経は貴族だったが、徳川家康や豊臣秀次の扶持を受け、日常は医師としての活動を行なっている。彼の日記である『言経卿記』からその邸宅の植栽を調べてみると、表5-3のようになる。天正十三年(一五八五)まで居住していた京都の室町小島町麩屋の邸宅では、花菖蒲(ハナショウブ)・瞿麦(ナゲシコ)・蘇木(ソテツ)・菊・益母草(メハジキ)を栽培している。益母草は野原や道ばたに生えているものだが、漢方薬として使われているから薬草として育てていたものだろう。

表5-3 山科言経邸の植栽(『言経卿記』より)

年 月 日	植 栽 植 物 [() は関係記事]
天正 7 年(1579) 5 月 2 日	四条隆昌に花菖蒲を贈る。
5 月13日	高辻に瞿麦・花菖蒲等を贈る。
10年(1582) 4 月 7 日	冷泉に蘇木を贈る。
9 月 8 日	後園の菊に綿を着せる。
12年(1584) 10月 6 日	盛運に益母草を贈る。
文禄 2 年(1593) 8 月22日	(堀川の末の新屋敷に移る)
3 年(1593) 2 月 8 日	藤井宗珍より当帰・馬鞭草等の苗をもらい、庭に植える。
2 月21日	宗恕より桜草の苗を10本ばかりもらい、庭に植える。
4 年(1593) 12月22日	金福寺より竹を10本もらい、後園に植える。
慶長元年(1596) 2 月22日	東寺金剛寿院より高さ1間ほどの桐の木2本をもらい、後苑の井戸近くに植える。
3 月22日	高麗の人参の苗を5本をもらい、庭に植える。
7 月25日	真性院より竹をもらい、後園に植える。
8 月 8 日	日用1人を雇い、後苑の畠をさせる。
9 月15日	トクサ・岩ヒハ等をもらい、後園に植える。
9 月25日	方庵が庭の菊を所望したので、1本を与える。
2 年(1597) 2 月11日	金光寺の比丘尼より枇杷木・槿・山吹、その他小木をもらい植える。
3 月 7 日	岩鶴がタウノ芋の苗を持ってきたので、後苑に植えさせる。
3 月28日	金光寺の比丘尼より柳の木をもらい、庭前に植える。
10月 4 日	岩鶴が柿ノ木を持ってきたので、庭前に植えさせる。
3 年(1598) 正月11日	道晰が山吹花を所望してきたので、少し贈る。
4 年(1599) 9 月 8 日	庭の菊に綿を着せる。
5 年(1600) 11月	(今出川通の原長頼の屋敷跡へ移る)
7 年(1602) 3 月26日	(一乗寺村の新屋敷へ移る)
8 年(1603) 正月23日	持明院へ山榊木を1本贈る。
正月25日	持明院へ南天木を贈る。
10月13日	(持明院より庭石〔海石〕を所望してきたので贈る)
9 年(1604) 正月29日	一乗寺の伝介を呼んで、木を接がせる。
閏 8 月 6 日	大聖寺殿へ赤色の芙蓉木を進上する。
10年(1605) 8 月24日	鵜頭花を六宮へ進上する。

天正十三年に言経は勅勘を被り摂津国に出奔したが、天正十五年に帰京している。文禄二年（一五九三）八月に、堀川末の家に移って慶長五年（一六〇〇）十月まで過している。ここでの植栽を場所別に分けると次のようになる。

《主庭》当帰（トウキ）・馬鞭草（クマツヅラ）・桜草（サクラソウ）・高麗の人参（チョウセンニンジン）・枇杷木・槿（ムクゲ）・

山吹・柳の木・柿ノ木・菊

《後園〔こうえん苑〕》竹・桐の木・トクサ・岩ヒハ（イワヒバ）・タウノ芋（唐芋、サトイモ）

トウキ・クマツヅラ・チョウセンニンジンを庭園の一部に植えていたのは、医者でもあったからなのだろう。後園は畑として利用している場合が歴史的には多いが、ここではタケ・キリ・イワヒバを植えるなど庭園的要素が見られる。トクサは物を磨くために利用したものであろうか。具体的な場所は不明だが、慶長七年三月から同十一年七月まで過した一乗寺村の邸宅では、山榲木（サンショウ）・南天木（ナンテン）・芙蓉木（フヨウ）・鶏頭花（ケイトウ）を植えている。サンショウは調味用あるいは薬用を兼ねていたものだろうか。

興福寺多聞院の植栽

奈良の状況については、興福寺の子院多聞院たもんいんの僧英俊らが書いた『多聞院日記』によって知ることができる。この日記の中から安土桃山時代の庭園植栽の記事をまとめると、表5-4のようになる。天正十二年（一五八四）に普請が行なわれた広庭は、客殿（本堂）の南庭かと思うのだが、ここにはのちに「サンショノ木」が二本植えられている以外よくわからない。境内には見物人が来るほどウメが多かったらしい。社頭の若宮殿のウメもその一部なのだろうか。興福寺内の大乘院や一乗院において花見が催されているように、サクラを植栽することは当時流行していたらしい。多聞院内でも「やうきひ（楊貴妃）桜」や「ヒカン（彼岸）桜」を植えている。境内には「アセホ（アセビ）」もかなり多かったらしい。社頭東の回廊中程には、スギが三本生えていたという。

表5-4 多聞院境内の植栽(『多聞院日記』より)

年 月 日	植 栽 植 物 [() は関係記事]
永禄11年(1568) 7月9日	社頭東回廊の大杉が3本倒れる。
天正5年(1577) 3月17日	キンカン2本・カキ2本を妙光院に依頼する。
8年(1580) 2月27日	当坊の梅盛り。
2月30日	キンカン2本を如春が接ぐ。
10年(1582) 2月4日	(西京の花を見に人びとが出る)
11年(1583) 2月11日	法隆寺より生駒の継木の上手来て、柿5本・キンカン5本・朝倉サンシヨノ1本・リンシ梅1本を接ぐ。
2月24日	当坊の梅盛り。見物に人びとが来る。
3月4日	(貴賤花見)
12年(1584) 10月10日	(広庭普請。一坂の人夫3人を使う)
14年(1586) 2月15日	木継の善四郎がミカンとウシユキツを接いだものを植える。
2月26日	当山のアセホの花が一向につかない。
15年(1587) 2月11日	アセホの花が盛んに開く。木継の善四郎が手鞠のような花を接いだ桜木を持ってきて植える。長柿2本を接がせる。
2月19日	生駒の善四郎にキンカン2本、長柿2本を接がせる。
16年(1588) 4月27日	クコの葉を摘む。
5月15日	(大仏のキチヤウノ木の西に井が湧く)
19年(1591) 閏正月28日	社頭若宮殿の南に米谷宗慶が梅を植える。既に10年に及ぶ。
2月9日	「やうきひ桜」の垣が仕上がる。
文禄元年(1592) 2月15日	ヒカン桜1本を植える。
2月29日	(大乘院において花見)
3月29日	(一乗院において花見)
2年(1593) 7月28日	やぶの竹を南70本、北40本切る。
4年(1595) 2月30日	(大門の庭石を小座敷へ曳く)
慶長4年(1599) 12月10日	サンシヨノ木を2本、広庭に植える。

「キンカン・朝倉サンシヨ・リンシ(繪旨)梅・長柿」などの果樹の接ぎ木がしばしば行なわれているが、これらが植えられた場所とは後園と呼ばれていた裏庭の畑だろうか。「ミカン」に「ウシユキツ(温州ミカン?)」を接いだものや、「クコ」なども後園の可能性が高い。クコの葉を摘んでいるのは、「兼見卿記」の天正十二年四月十日の条に、「クコノ葉ヲツム。桑葉・五ヶ葉(ウコギ)、三色茶ニ仕義」とあるから、茶にするためと考えられる。

二 露地の植栽

安土桃山時代には露地が出現したことが、庭園史上の特色になっている。千利休(一五二一—一五九二)によって侘茶が確立されたが、茶室に至る露地もたんなる通路ではなくて、茶室と同様に重要視されるもの

になった。当時の露地の状況については、すでに述べたように、『駒井日記』に伏見城に山里と呼ばれた曲輪が存在したと記されている。博多の豪商だった神谷宗湛（一五五三―一六三五）の『宗湛日記』によると、大坂城や秀吉が朝鮮出兵のために築いた名護屋城（佐賀県東松浦郡）にも、「山里」がつくられている。山里曲輪は風雅を楽しむ場所として城内に設けられたもので、茶室が置かれることが多かった。

「山里」を邸内につくることは、室町時代から流行していて、都市の中で田舎の気分を味わおうとするものだった。山里風の露地については、『宗湛日記』の文禄二年（一五九三）正月二十二日の条に、名護屋城の前田利家（一五三八―一五九九）の陣屋のことが、次のように述べられている。

山を切りぬきて、路地にして、（秀吉の）御目に懸けられ候なり。〔略〕深山の体など御らんじられて、〔略〕

山里風の路地は「深山の体」をしていたわけだが、実際の植栽の状況はどうだったのだろうか。千宗左（一六二三―一六七二）の『江岑夏書』の寛文三年（二六六三）の七月八日の条に、

古の路地には松・かしの木・かなめ（カナメモチ）・ひさゝ木（ヒサカキ）・すゝき、か様の木のたぐひ、竹・もみ（モミ）は織部より植申候。

とある。古田織部（一五四三―一六一五）より古いとすれば、利休の時代にマツ・カシ類・カナメモチ・ヒサカキ・ススキなどが好まれていたことになる。深山の状況をつくるのに、主として常緑広葉樹を使用していたことがわかる。樹種からすると、利休は関西に見られるアカマツ林とシイ・カシ林をイメーシして、露地の植栽をしていたことになる。

また、『細川三斎（忠興）（一五六三―一六四五）御伝受書』には、

樹に桃・枇杷、利休は嫌ひ候。盧路には、松・榿・山ぐみを植候と仰せられ候。

とある。深山らしい雰囲気を出すために、利休は里の感じがするモモやビワを避けている。¹⁵『茶譜』によると「利休ハ冬枯ノ木ヲ嫌フ」というように、落葉樹も嫌っている。『織部聞書』に「内外の路地に、花の咲く木惣て植うべからざるなり」「原、片仮名混じり漢文」とあることからすると、利休も花木を使うことを嫌っていたのだろう。花木を植えることは、茶室内に花を生ける意味を失わせることになるので、避けたのが直接的な理由のようだが、落葉樹も花や四季の変化を強く示すことから、侘しさを表現する上でふさわしくないと利休は考えていたらしい。¹⁵

しかし、利休好みの深山の感じの露地を否定する動きもすでに見られる。『宗湛日記』の慶長二年（一五九七）二月二十四日朝の条には、伏見城での茶会の様子について、次のように述べられている。

御座敷 五畳敷 此入ノ次第ハ、先ク、リヲハイ入テ松原有、御スキヤトノ中ノ間ニ、ス戸ノハネキト有、是ヲ通テソテツ斗ノ路地アリ。是ヨリ御数寄屋ニハイ入候也。

伏見城にはソテツばかり植えた露地があったという。桂離宮の待合前の蘇鉄山のような感じだったのだろうか。『織部聞書』の中にも「内外の路地に、棕櫚（シュロ）・蘇鉄植うべきなり」とある。古田織部の時代には、「唐木」（中国産の樹木）を使うという¹⁶こともされているように、視覚的に面白い派手な植栽が好まれるようになった。

三 安土桃山時代の植栽技法

（一）接ぎ木の技術者

『多聞院日記』によると表5-14に見られるように、多聞院の後園ではいろいろな接ぎ木を育成している。天正十一年（二五

八三)二月十一日の条には「生馬(いこま)(奈良県生駒市)の継木の上手」が「柿五口・キンカン五口・朝倉サンシヨ一口・リンシ梅一口」を接いだと記されている。翌十二日の条に「木つぐ、生駒の善四郎」と名前が明らかにされている。天正十四年二月十五日にはミカンとウシュキツを接いだものを持参し、翌十五年二月十一日には手鞆のような花を接いだという桜木を持って来て植え、同十九日にはキンカン二本・長柿二本を接いでいる。

また、『言経卿記』の慶長九年(一六〇四)正月二十九日の条には、「一乗寺(京都市左京区)の伝介これ呼び、木どもつがせ了んぬ」とある。「生馬の」とか「一乗寺の」と地名を付けて呼ばれているのは、その土地に住む農民を指していると考えられる。接ぎ木の技術を熟知した農民が各地に存在していて、貴族や寺院の求めに応じて接ぎ木の作業を行っていたということだろう。これまでの時代も同様だったのだろうが、依頼仕事が多くなって、莊園の農民という身分を離れて職業化していくような気配が感じられる。

(二)トピアリーの流行

織田信長が築いた岐阜城には多くのトピアリーがつけられていたわけだが、その後の歴史をたどってみると、井原西鶴著『西鶴名残の友(巻五)』(元禄十二年「二六九九」)の「入歯は花のむかし」の項に、

津の国の野田といふ里に、藤の咲比(こら)「略」楽坊主に約束して、「略」草庵にたづねしに、見越の松・杉、さまざまに枝ふらせ、びやくしん竜に作り、つゝじの帆かけ舟、こでまり・山吹の、おのれと咲し外は、皆兼好が嫌ひたる庭木、「略」

と書かれている。樹木の枝を整えて竜や帆掛け舟の形にする「つくり木」を、ビヤクシンやツツジでしていたことがわかる。西鶴は「子細の過て、氣のつまる物好なり」と批判しているが、『山城名所寺社物語(卷之三)』(宝暦七年「一七五七」)も、「興(きよう)聖寺(宇治市所在)「略」庭に竜虎のつくり木あり」と述べているから、江戸前期・中期には好まれていたのだろう。

肥前平戸藩主だった松浦静山（二七六〇—一八四一）は『甲子夜話（巻十八「七」）』で、宋濂（一二三〇—一三八二）著『鐘山（中国江西省分宜県の山）に遊ぶ記』の詩を引用した後に、「念仏寺の庭に多く茂樹を獸形等に剪むあり。明初（一三六八—一六四四）にも既にありしと見ゆ」と述べている。一四世紀後半頃の中国では、すでにトピアリーが存在していたことになるわけだが、これが日本に入ってきたという可能性が考えられる。

明治七年（一八七四）に來日したロシア人、メーチニコフ（一八三八—一八八八）は『回想の明治維新』の中で、

花も樹木もきちんと刈りこまれ、丹精のあとがしのばれたが、こういうものを見慣れぬわたしの目は、ここでもいたずらに、竜や舟や奇怪な鳥の形などに刈りこまれた灌木はないかと探しもとめるのだった。だが中国の庭園でよく見かけるそうした灌木は日本にはめつたにない。

と書いている。^① 明治初期には日本ではトピアリーをほとんど見られなかったことと、中国の庭園には動物をかたどったトピアリーが存在していたことがわかる。安土桃山時代に日本でつくられていたトピアリーは、中国から渡ってきたものだったと考えるのが妥当だろう。

四 安土桃山時代の特徴

安土桃山時代は戦乱の続いた時代だったが、各地の城館や寺院の庭園は美しく飾られていた。松永久秀の多聞山城や織田信長の岐阜城・二条城・安土城などには、樹木や草花を用いた優美な庭園がつけられている。豊臣秀吉の大坂城にはスギ・マツ・シダレヤナギなどが植えられ、聚楽第にはマツやシユロが植栽されている。また、代表的な寺院庭園としては醍醐寺三宝院があるが、ここにはマツ・スギ・ビヤクシン・ヒノキ・ツガ・カヤ・ツツジ・ツバキ・ウメ・ヒガンザクラ・イセザ

クラ・サルスベリ・シダレヤナギ・ボタン・キク・シランなどが植えられていた。植物の種類からすると、これらは室町時代の庭園植栽を継承したものと言える。

この時代の庭園植栽の大きな変化は、関西のアカマツ林やシイ・カシ林内に生育しているカシ・カナメモチ・ヒサカキなどの常緑広葉樹を、露地を深山の雰囲気にするために使用するようになったことだろう。現代でも地方では貧乏臭いと言って、付近の山に生えている植物を庭園に植えることを嫌うが、おそらく室町時代まで同様だったと思う。茶の流行がなくては生じなかった庭園植栽の変化と言えるだろう。

このこととは逆に、茶の流行によって庭園には果樹類を植えることが否定されるようになっていく。奈良時代から庭園に果樹を植栽することは始まっていて、室町時代には主要建物の前庭に、ブドウ・ナツメ・クリ・ヒワ・カキ・ザクロ・モモ・ハシバミ・アンズなどを植えていた。花と果実の美しさを観賞することと、果実を味わう楽しみがあることが、好まれてきた理由なのだろう。ところが安土桃山時代になると、露地は深山の風情を味わうものだから、果樹を人里の植物だとして嫌うようになった。今日、観賞用の庭園に果樹が少ないのも、このことが原因ではないかと考えられる。

サルスベリ・高麗のカキ・チョウセンニンジンなどが渡来しているのは、豊臣秀吉の政策によって海外貿易が盛んになったためだろう。また、サクラの種類として「彼岸桜・伊勢桜・楊貴妃桜」などが現れている。彼岸桜は『二水記』の大永七年（一五二七）二月二十四日の条などにすでに出ていることからすると、この時代に広まったのだろう。秀吉による天下統一によって、全国から生産物が集積されるようになったからではないだろうか。方広寺に二万本というマツの苗木を植えたり、三宝院の庭園に二〇〇本もスギの挿し木が行なわれているのは、栽培技術が進歩したことにもよるのだろうが、安定した社会が到来したから可能になったことなのだろう。こうしてみると、政治・経済といった社会の動きが庭園植栽に与えた影響は、個人的な趣味を越えるほど大きなものだったのではないかと思えてくる。安土桃山時代には、接ぎ木の技術を熟知した農民が各地に存在していて、貴族や寺院の求めに応じて接ぎ木の作業を行なっていることからすると、古代以来、農業技術と庭園樹木の栽培は密接に結び付いていたのだろう。庭木の大量消費時代に備えての技術的基礎は、できつつあったように

感じられる。

第五章 註

- (1) 堀口捨己『利休の茶室』鹿島出版会、一九八七年(初版、鹿島出版会、一九四五年)。田中正大『日本の庭園』鹿島出版会、一九七一年、九四―一二七頁。
- (2) 吉永義信『醍醐寺三寶院庭園』『名勝調査報告(三)』文部省、一九三七年。
- (3) 松田毅一・川崎桃太訳『日本史(一―五)』中央公論社、一九八一年。
- (4) 岩生成一注・他訳『大航海時代叢書(一一)』岩波書店、一九六五年。
- (5) 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店、一九三四年、四五八―四六三頁(復刻、思文閣、一九七三年)。
- (6) 岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波書店、一九九二年、一五四頁。
- (7) 京都市編『京都の歴史(四)』京都市史編さん所、一九八〇年、二九四―三〇一頁。
- (8) 小椋純一『室町後期における京都近郊山地の植生景觀』『木野評論(二二)』京都精華大学、一九九〇年、一〇九―一二五。
- (9) 吉永義信、前掲論文『醍醐寺三寶院庭園』、五一―一一〇頁。
- (10) 川上貢『三寶院の建築』『障壁画全集(醍醐寺三寶院)』美術出版社、一九七二年、七三―八六頁。
- (11) 森蘊『庭園』日本史小百科(一九)、近藤出版社、一九八四年、二三―四頁。
- (12) 日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本農業技術史(新訂版)』野間科学医学研究資料館、一九八〇年、二八二頁。
- (13) 牧野富太郎著、小野幹雄・他編『改定増補牧野新日本植物図鑑』北隆社、一九八九年、六四五頁。
- (14) 堀口捨己、前掲書、五六九、五七〇頁。
- (15) 堀口捨己、前掲書、五七〇、五七一頁。
- (16) 堀口捨己、前掲書、五七一・五七二頁。
- (17) 渡辺雅司訳『回想の明治維新』岩波文庫(青四四一―一、二〇〇一年、一二七頁)。
- (18) 山田孝雄『桜史』講談社学術文庫(九一六、一九九〇年、一八一・一八二頁(初版、桜書房、一九四一年))。

IV 回遊式庭園と洋風庭園の時代

水戸藩徳川家の下屋敷

(現、小石川後樂園、『江戸図屏風』より)

第六章 江戸時代の庭園植栽

近世の庭園植栽については、慶長八年（一六〇三）の江戸幕府開設から明治維新前の慶応三年（一八六七）までを江戸時代とし、一七世紀を前期、一八世紀を中期、慶応三年までの一九世紀を後期と区分することにした。これまでの研究としては、龍居松之助が江戸時代の庭園を概観して植栽のことにも触れ、流行した樹種や技法について述べている⁽¹⁾。また、著名な庭園について歴史的な考証を行ない、植栽にまで言及している研究も少なくはない。近年では小野佐和子が民家の庭園植栽について論証している⁽²⁾。本稿では個々の庭園の植栽状況と植物愛好の流行から、江戸時代の庭園植栽の特色を明らかにしてみたい。

一 大規模回遊式庭園の出現——江戸前期の庭園

(一) 武蔵国の植物

江戸の自然環境はどのようなものだったのだろうか。鎌倉時代の武蔵国の自然状況については、源雅忠の娘一条の日記」と



テッセン
（『草花絵前集』より）

はずがたり(巻四)』には正応三年(一二九〇)八月の条に、武蔵国の浅草観音堂に参詣した道筋のことが次のように述べられている。

野の中をはるばると分け行くに、萩、女郎花、萩、薄よりほかは、また混じる物もなく、これが高さは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば、推し量るべし。三日にや、分け行けども、尽きもせず。ちとそへ行道にこそ宿などもあれ、はるばる一通りは、来し方行く末、野原なり。

関東一带は常緑広葉樹林帯に属しているのだが、鎌倉時代には草原が広がっていたらしい。徳川家康(一五四二―一六一六)が江戸に移った時の状況については、『武江年表』(嘉永三年「二八五〇」)に、

今年(天正十八年「二五九〇」)八月一日、台駕(家康)はじめて江戸の御城へ入らせ給へり。そのころは御城の辺、葦沼汐入等の地にして田畠も多からず、農家寺院さへ所々に散在せしを、慶長(一五九六―一六一四)に至り始めて山を裂き地をならし、川を埋め溝を掘り、土民の所居を定め給ひしより、万世不易の大都会とはなれり。

とある。家康が江戸城を造営したことによって、山は削られ川は埋められるなどして、江戸は大きく変貌していったことがわかる。

その頃の江戸にはどのような樹木が存在していたかは、『江戸鹿子』(貞享四年「二六八七」)によって知ることができる。⁽³⁾源頼朝(一一四七―一一九九)が奥州征伐の時に鞍を懸けたとされる代々木(渋谷区)の鞍懸松、天正年間(一五七三―一五九二)に植えたという麻布(港区)の一本松、親鸞上人(一一七三―一二六二)が挿したと伝えられる麻布の「杖いてう(イチヨウ)」と楊枝杉「江都(江戸)に此木にならぶべき花なし」と言われたものの二代目である四谷(新宿区)の衛門桜など、由緒ある樹木が多くあった。それらの歴史が正しいかどうかは別として、江戸時代以前から存在していたことは間違いない。マツ・イチヨウ・スギ・サクラは大木になるもので古木も多かったから、それぞれが由緒を持つようになったのだろう。

『徳川実紀』（嘉永二年「一八四九」成立。以下『実紀』と略す）によると、寛永二年（一六二五）二月十八日に、第三代将軍家光（一六〇四—一六五二）は河越（埼玉県川越市）で狩りを行なっているが、この時に養竹院という寺を訪れている。

枝垂桜一株、梢五六丈（一丈は一〇尺）、合囲八尺（一尺は約〇・三メートル）許なるが、今を盛に開ければ、「[略]

境内はシダレザクラが満開だったことから、将軍は酒宴を催している。このシダレザクラも古いことがわかるように、武蔵国は辺境の地だったが、珍しい樹木も江戸時代以前からすでに入っていたと考えられる。

（二）江戸城の庭園

江戸城はかつては太田道灌（一四三一—一四八六）の居城で、その後は北条氏が支配していたものだが、家康が入城した当時はかなり荒廃していたという。以後、次第に改修・拡張されて、家光の時代になって寛永十三年（一六三六）に総曲輪がつくられてほぼ完成する。本城として本丸・二の丸・三の丸があり、これを核として渦巻状に拡張して、西城と呼ばれる部分に西の丸・紅葉山もみじやまが設けられ、その北側には吹上ふきあげ・北の丸が付け加えられている。さらにその外側には、大名・旗本・御家人などの屋敷が置かれて、防備を固めていた〔図6-1〕。

江戸城の庭園及び植栽に関しては、『実紀』を見ていくと元和四年（一六一八）三月四日の条に、「西城の北鷲の森にいて、御宮構造せらる。これ今の紅葉山なり」と記されている。ここは庭園ではなくて、代々の将軍の廟が建てられた所だが、「紅葉山」という名称や古図からすると、自然に近い植生が残された場所だったのではないだろうか。

第二代将軍秀忠（一五七九—一六三二）は隠退後に西の丸に移っているが、『実紀』によると寛永六年六月二日には、西の丸の「山里」と呼ばれた部分の露地が改修され、古田織部（一五四三—一六一五）の旧宅にあった手水鉢や飛石が据え付けられている。また、同月六日には小堀遠州（一五七九—一六四七）が召し出され、山里内に園池をつくることが命じられているが、こ

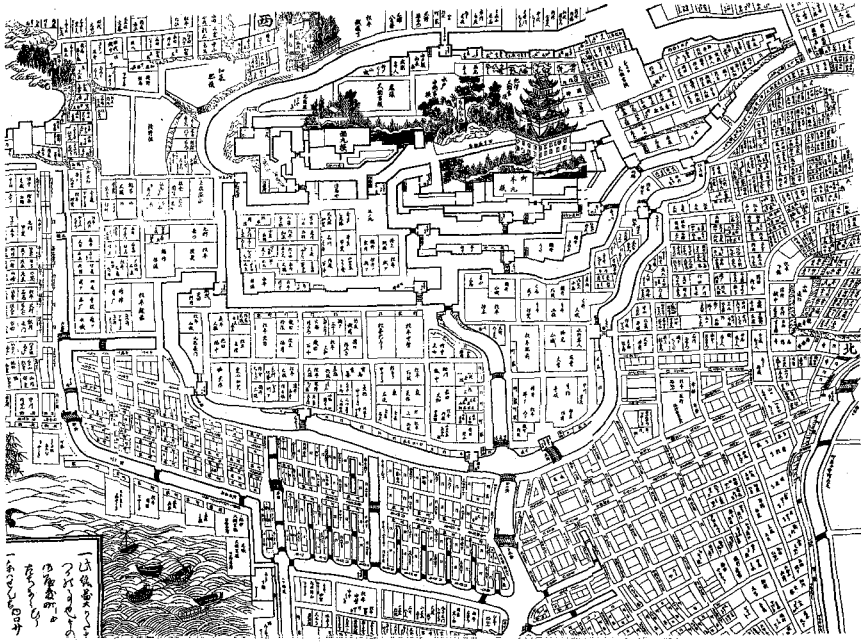


図6-1 江戸城と城下（「寛永江戸図」17世紀）

の時には植栽も行なわれたに違いない。この山里の茶室からの眺望は良かったらしく、同年十月二十二日には秀忠は二人の弟、紀伊徳川家藩主の頼宣（一六〇二—一六七二）と水戸の徳川頼房（一六〇三—一六六二）を招いて、富士山の眺望を楽しんでいる。

『実紀』によると寛永五年三月二十四日には西の丸の奥の庭で、秀忠は頼宣に咲いた牡丹を見物させている。秀忠は花卉を愛好していたようで、『実紀（台徳院殿「秀忠」御実紀付録巻五）』には、

花卉を殊に愛翫し給ひしゆへ、各国より種々の珍品ども奉りける内に、広島しほりといふ花卉に斑の入たる椿を、接木にして献りしものあり。殊に御けしきにかなひ、後園にうへしめられ、いつしか咲出んと月日をかぞへて待しめ給ひ、〔略〕

とツバキのことが述べられている。將軍在職中のことならば、本城内でツバキが栽培されていたことになるが、おそらく引退後だろうから、この後園は西の丸に存在していたものと考えられる。

次の家光の時代には、『実紀』によると寛永七年四月二十

二日に、二の丸に園池と築山と茶亭が造営されている。『実紀（大猷院殿「家光」御実紀付録卷五）』に、

二丸の御庭に花・紅葉あまた植させられ、そが前に茶亭をかまへ、紅葉の御茶屋と号す。

とあるのも、この工事の際のことだろう。同書に「二丸園池成功して、諸大名より種々の樹木を献ず」とあることからすると、献木が多かつたらしい。この時に形の悪い木を、目立たない露地口に植えているのを家光が見つけ、献上者に対して礼儀に欠けると叱責したという。正保元年（二六四四）に再び二の丸は整備され、竣工時の七月四日に「大工頭、植木奉行等へ銀、時服（その季節の服）賜はる」ことが行なわれている。植木奉行が置かれていたのは、植栽が重視されていたからだろう。家光の長男だった家綱（一六四一—一六八〇）は、慶安四年（二六五二）八月に第四代将軍になっているが、就任前の同年三月十日に、彼が居住していた西の丸の御殿前庭の園池が改修されている。植栽については『実紀』の翌日の条に、「諸老臣躑躅を献ず」とある。同書によると、承応元年（二六五二）三月十二日には、本丸御殿の將軍座所の庭前に園池がつくられた。この時にも同月二十三日に、紀伊徳川家から那智石などとともに「躑躅若干」が贈呈され、尾張徳川家からも小松が献上されている。

明暦三年（一六五七）一月に大火によって、江戸城の本丸・二の丸・三の丸まで焼失した。『実紀』によると同年八月十四日には二の丸が再建され、植栽を行なった樹木奉行に褒賞が与えられているから、庭園も同時に改修されたと考えられる。寛文四年（一六六四）六月四日の条によると、二の丸庭園はこの頃にも改修が行なわれている。大田南畝（一七四九—一八二三）の『竹橋余筆』にある、四〇種類ほどのサクラを一四五本植えたという記事は、この時のものらしい。高さは三間（約五・四メートル）以上のものが多かつたから、花の時分には壮観だっただろう。同書には翌五年六月に本丸の庭園に、一七種類のサクラを七五本、カエデを二〇本と表6-1の樹木を植えたと記されている。ミズキ・ホオノキは江戸周辺の山地で入手しやすかつたものだろう。モッコク・モチノキ・サカキなどの常緑広葉樹の出現と、オモト・クマザサなどの利用は、新しい傾向と言える。

表6-1 江戸城本丸庭園の植栽(寛文5年[1665]、『竹橋余筆』より)

樹 種	寸 法	本数	金 額
みつ木(ミズキ)		5本	合79匁4分4厘1毛
ことう桐(アオギリ)		3本	合34匁8分3厘2毛
ほうかしわ(ホオノキ)		3本	合48匁3分3厘2毛
杉		30本	合125匁1厘
いふき(イブキ)		1本	以下、合507匁9分
もみ	2尺	7本	
同上	3尺	8本	
もつこく(モッコク)	3尺	12本	
山つゝじ		30本	
大まき(マキ)	4尺	2本	
くちなし	4尺	10本	
さつき	2尺—3尺	15株	
おもと	3尺, 2株	3株	
なんてん	2—4尺, 20本立	7株	
もち		12本	
同上	4尺	13本	
同上	2尺	10本	
さざん花(サザンカ)	2間	5本	
同上	1間	5本	
同上	4尺	5本	
同上	3尺	5本	
榊(サカキ)	4尺	3本	
同上	3尺	2本	
楸(キササゲ)	3尺	2本	
同上	2尺	10本	
熊笹	50本立	23株	
山ぶき	50本立	15株	

第五代將軍綱吉(一六四六—一七〇九)の時代には、明暦の大火後に防災のために大名屋敷を他へ移して造営した吹上の庭園が、よく利用されるようになった。『実紀』によると、天和三年(一六八三)八月二十七日に「尼公(綱吉の生母)」、貞享四年(一六八七)二月十二日には「台のうへ(綱吉夫人)」などが訪れている。「吹上花圃」という呼称からすると、ここには花木と草花が主に栽培されていたのではないだろうか。

第六代將軍家宣(一六六三—一七一三)の時代の吹上庭園については、『実紀(文昭院殿「家宣」御実紀付録巻上)』に、

吹上の御園も、ふるきにこえて作りひろげさせ給ひ、泉石の趣はさるなり。草木あまた植そへ給ひける中に、こと木はなくて紅葉のみ

多く植給ひける所は、「略」今も紅葉の茶屋と称せられ、秋ごとに幾本となく染出て、立田山もかくやとおもひやらるゝ「略」と書かれている。園池をつくつて草花と樹木を植え、紅葉の茶屋と名付けられた場所にはカエデだけを植栽していたという。

(三) 江戸の大名庭園

回遊式庭園の形態

江戸に存在した大名屋敷の庭園について見てみたい。寛永元年（一六二四）四月五日に、將軍家光は松平下野守（蒲生）忠郷（二六〇三―一六二七）の邸を訪問し、庭園を散策している。

池には樋をもつて玉川の水をせきいれしかば、波広くして大河かうたがふ。山路には樵徑（しやうけい）をつくり、鹿の足あとなどありて、其幽邃（ゆうすい）のさま深山の如し。深林の下にかりの茶店をかまへ、「略」

と『実紀』は述べている。

同書によると寛永七年一月二十六日には、家光は酒井雅楽頭忠世（二五七二―一六三六）の邸宅を訪れているが、ここには茶亭・池亭・書院などがあつた。翌八年六月二十一日には、浅草川での船遊びの帰りに家光は稲葉丹後守正勝（二五九七―一六三四）の別荘に寄り、楼上に登つて食事をしてから、邸内の瓜畑の中の茶亭で酒を飲んでいる。この時代の大名屋敷は、広大な敷地内に園池や築山をつくり、所どころに茶室を設けるといった形態が多かつた。庭園内を巡つて楽しむようにしたこのような形式を、今日では回遊式庭園と呼んでいる。この回遊式庭園の植栽はどのようなものだったかを、次に見てみよう。

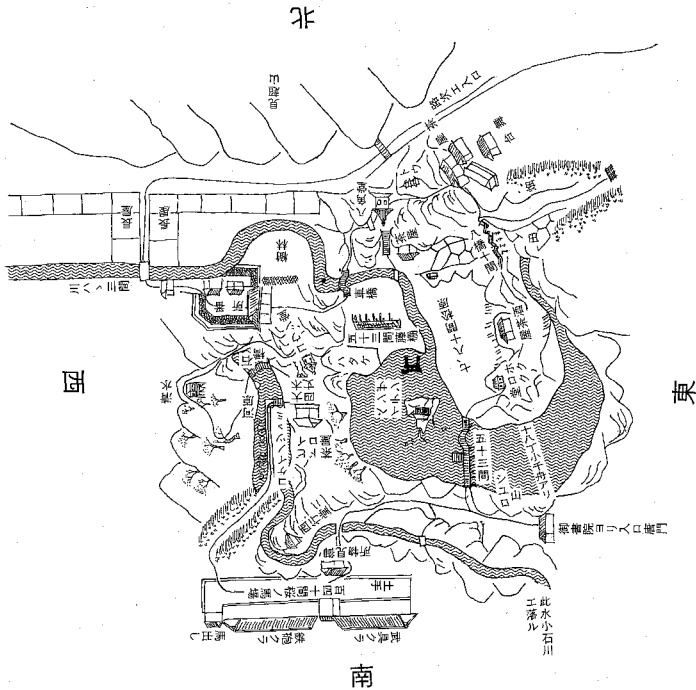


図6-2 江戸時代の小石川後樂園（「水戸様江戸御屋敷御庭之図」〔1703年以前〕模写）

小石川後樂園の特色

小石川後樂園は、寛永六年に水戸初代藩主徳川頼房が秀忠から与えられたもので、面積は七六、六八九坪（二五・三五ヘクタール）だった。当時の庭園の状況を知るのには、元禄十六年（一七〇三）以前の作成と推定される「水戸様江戸御屋敷御庭之図」〔図6・2〕が参考になる。^⑤この図の五三間の藤棚は現在の藤棚の原形かと考えられるのだが、大園池に架かっている五三間の橋は、現在は残存していないという相違がある。

源信興が元文元年（一七三六）に書いた『後楽紀事』^⑥は、造営当初の有り様ではないが、享保年間（一七一六―一七三五）の改修以前の状況も対比して記載している。享保年間の改修以前の状況をまとめると、表6・2のようになる。この表からすると後樂園の植栽の特徴は、竜田川にカエデ、棕櫚山にシュロ、桜馬場にサクラ並木、西湖堤にハス、琉球山にリュウキュウツツジ、松原にマツ、八ツ橋にカキツバタというように、一カ所に一種類の植物を大量に植えていることにある。さまざまな種類の植物を少しずつ全体的に植えると、ど

表6-2 小石川後樂園の植栽(享保年間[1716~1735]以前、『後楽紀事』より)

場 所	植 栽 植 物
＜大泉水＞	
中の島	ひむろ(ヒムロスギ)・きやら木(キャラボク)・ひやくしん(ビャクシン)
＜東方＞	
林	松・杉・樅(モミ)
＜南方＞	
竜田川	楓の太木・肉桂樹(?)
棕櫚山	しゅろ(シュロ)・松・杉・樅・木犀
桜馬場	両側にさくら
＜西方＞	
一松	辛崎の松を模した松
硝子御茶屋	亭前に糸桜(シダレザクラ)
西湖堤	白蓮
琉球山	白きつゝしの木(リュウキュウツツジ)
樹木林	菓木(果樹)
＜北方＞	
松原	数百本の松
八ッ橋	杜若紫白とりどり
遠山	頂上に松の古木

表6-3 六義園の植栽(元禄15年[1702]頃、『六義園の記』より)

植栽植物	名 称・場 所
マツ(単植)	風雅松・心種松・古風松・詞林松・掛名松・事問松・妹松・青松・吹上松・擲筆松・布引松
マツ(群植)	和歌松原・新玉松(「七本の松」)
ウメ	裾野梅・雲香梅
サクラ	吟花亭・掛雲峯(「桜の咲たるを雪のかゝるによそへたる」)
クヌギあるいはコナラ	時雨岡(「ならの木のわきなる岡なれば」)
フジ	藤里(「藤の棚近きわたりなれば名付し」)
タケ	万世岡(図3-3では万代岡。「竹あるわたりなれば」)
アシ	芦葉
ハス	水香江(「はすの花ある入江なれば」)

こも同じような光景になってしまうので、回遊式庭園の場合は大面積の敷地にさまざまな変化を付けるために、植栽も印象的なものにする必要があったと考えられる。

六義園の単純化

柳沢吉保（二六五八—一七一四）は、第五代將軍綱吉の側用人そばうにんとなり、老中にまで出世した人物で、拝領した駒込の四万五八六二坪の地に、元禄十五年（二七〇二）に六義園を造営している。吉保の文芸趣味が生かされて、著名な和歌や漢詩などから題材をとって、園池・築山・石組・橋・流れ・四阿などがつくられている。完成時に吉保が書いた『六義園の記』（樂只堂年録らくしどう所収）から、植栽に関連した事項をまとめると表6-3のようになる。マツの単植が非常に多いのが特色で、園池の汀に松原があり、築山にはサクラ・ウメ・クヌギないしコナラ類・タケなど、園池にはアシやハスが植え付けられ、平地には藤棚も設置されていた。これらの植栽の具体的な位置については、当時の庭園の状況を描いた『樂只堂年録』元禄十五年十月二十一日条の付図「図6-3」によって知ることができる。この図をみると、築山が多いことが目につく。植栽はマツとウメが見られる程度にすぎない。非常に簡潔な形になっているのはなぜなのだろうか。各部分に名称を付けたことから、それを際立たせるためには周辺を単純化する必要があったからではないかと思う。

ところで、小石川後樂園の樹木は享保年間（二七一六—一七三五）に、大々的に伐採されたと言われている⁽⁸⁾。安土桃山時代の遺風が残っていた寛永年間に造営された後樂園は、豪快な作風だったことから植栽も華やかなものになり、さまざまな種類が植えられたのだろう。明暦三年（一六五七）の大火後には、六義園のような簡潔だが華麗な庭園が、人びとには好まれるようになったのではないだろうか。

浜御殿（浜離宮）のマツ

第六代將軍家宣はしばしば浜御殿（浜園・浜殿ともいう。現在の浜離宮恩賜庭園）を訪れている。ここは万治元年（二六五八）に

第四代將軍家綱が弟の甲府藩主徳川綱重（一六四四—一六七八）に与えたもので、敷地は寛文四年（一六六四）に増給されて、四万四五五坪になっていた。第五代將軍綱吉のあとを受けて、綱重の子が第六代將軍になったことから、浜御殿は將軍家の別邸になった。

『実紀（文照院殿「家宣」御実紀付録卷上）』には浜御殿について、

御代つがせ給ひし後にぞ修理加へ、御庭の山水の景をもつくりそへ、〔略〕御庭に田面ひろくかまへ、四五月頃は、関東村々農家の婦女を、代官よりえらびまいらせ、それにて早苗を植しむ。

とある。先の小石川後楽園の図にもあるように、庭園内に田を設けることは当時の流行だった。続けて宝永七年（一七一〇）九月に京の公卿たちが浜御殿に遊んだ際につくった次の歌も掲載されている。

うつし絵もかきやは及ぶ百つ島こゝにみぎはの岩根松影

他の歌からも、園池の汀にはマツが多く植栽されていたように見える。『実紀』の正徳三年（一七一三）四月九日の条からは、「池の中島の茶亭」や「清水の亭」が設けられていたことがわかる。おそらく園池の形状や施設の配置や植栽は、現状のように雄大で簡潔なものだったのだろう。形態的には六義園とは異なるが、簡潔だった点では共通しているのではないだろうか。広大な海に対応するように、大胆な構成にしたものと言えるだろう。

（四）京都の寺院庭園

吉田神社神竜院のシャクヤク

吉田兼見の弟の梵^{ぼんしゅん}舜（一五五三—一六三二）は神道家で、豊国神社の神宮寺の別当になった人物だが、彼の日記『舜旧記』

には、住職を勤めた吉田神社の神竜院の庭園のことが書かれている。元和四年（二六一八）閏三月二十四日の条によると、「西の花芍薬雨覆^{おほい}申し付くなり」「原漢文、以下同様」というように、シャクヤクの花が雨で散らないように覆いを設けるように命じている。シャクヤクが植えられていた場所は、同五年四月十二日の条に「後園の芍薬花盛りにより」とあるので、裏庭だったことがわかる。寛永元年（二六二四）三月十四日には「芍薬マセ垣」略^{りやく}申し付くなり」というように、シャクヤクの周囲に垣を設けている。シャクヤクに対する梵舜の興味は早くから始まっていたようで、慶長十七年（一六二二）四月二十一日には、六条神家大膳所と三条衣棚町でシャクヤクを見ている。元和四年閏三月二十五日には北野近くの「芍薬花作りの所」に出かけ、翌二十六日には白川在所の中山宗貞家の芍薬花を見物、同八年十月二十六日には金山寺からシャクヤクの種をもらっているの、梵舜はかなりシャクヤクの収集・栽培に熱心だったことがわかる。

公家の舟橋秀賢^{ひでかた}（二五七五—一六一四）が記した『慶長日件録』の慶長八年五月二十日の条にも「庭前の芍薬これを分け種^う」^{（原漢文、以下同様）}、同十年四月十三日の条には「芍薬の花等これを贈る」と書かれている。このようにシャクヤクを栽培する人が多かったことからすると、京都では慶長年間（一五九六—一六一四）にシャクヤクが流行していたのではないかと考えられる。しかし、『舜旧記』の元和八年正月十五日の条には、「ツキ木椿来るなり」（割注）ウス色・玉・イセ椿。三色なり。予別して秘蔵なり」とあるように、梵舜は流行を追ってツバキの収集を始めている。

鳳林承章と鹿苑寺庭園

鹿苑寺（金閣寺）の住職だった鳳林承章（一五九三—一六六八）は、樹木や草花が好きだったらしく鹿苑寺内に多くの種類を栽培し、しばしば庭園の樹木の剪定などを行っていたことが、彼の日記『隔^{かく}莫^{もく}記^き』に詳しく述べられている。『隔莫記』は寛永十二年（一六三五）から寛文八年（一六六八）までの分が現存している。承章が植栽したものや鹿苑寺内の既存の植物について、『隔莫記』の記事をまとめると表6-4のようになる。元和・寛永年間（二六一五—一六四三）は、ツバキの収集・栽培の流行が最高潮に達した時期だったとされている^{（9）}。この表を見ると、寛永十三年から慶安四年（一六五二）頃までツバキの記事

が多い。承章も流行を追ってツバキの収集に熱中していたことになる。鹿苑寺内にはツバキの種類として、

諫早^{いさはや}・大村・白腰蓑・吉田・町・白雲・五郎左衛門・等安・炭屋・大白玉・豊田・元和・飛入・宇佐・立分・桜重・大諫早

などが集められている。寛永十六年九月十一日の条に、「久円より、町椿を恵まるるなり。即ち花壇に栽うるなり」「原漢文、以下同様」とあることからすると、ツバキは花壇で栽培したものが多かったのだろう。この花壇はツバキばかりではなかったらしく、ケイトウ・ツツジ・ムクゲなども植えている。珍しい草本類や花木を、この花壇では栽培していたのだろう。

正保元年（一六四四）から寛文七年頃にかけて、承章は今度はツツジの収集・栽培に専念している。ツツジをもらったり贈ったりしているところからすると、この時期京都ではツツジが流行していたのではないだろうか。ツツジは花壇にも植えているが、鉢に植えて「盆石・盆山・盆山石」などと呼んでいた盆栽をつくることも多かった。寛文七年十月六日の条に、「能寛を招き、南庭に躑躅四本を栽うるなり。舟（鉢）を地に移すなり」とあるように、成長したものは鉢から庭園に移植することもあった。承章が集めたツツジとしては、

千重赤^{せんえあか}・万葉・雲禪^{せんぜん}・千葉四季・美女・風車・曙・薩摩・赤熊「シヤグマ」・故蝶・益鏡・羅漢

がある。ツツジのうちに入るが、五月（サツキ）としては「千重・紀州・青山・金四手・銀台」などの名が挙げられている。「雲禪（仙）・薩摩」という名前からすると、九州からも盛んにツツジが京都に入っていたと考えられる。平和な安定した時代になったということなのだろう。

承章は盆栽としては、ツツジの他に五葉松・岡松（アカマツ）・伊吹（イブキ）も育てているが、数の上では五葉松が最も多かったように見える。寛永十九年十二月十七日の条に「舟の五葉松の笠を結う（枝葉を笠状に仕立てる）」と記されているように、盆栽の手入れもかなり入念に行なっている。ゴヨウマツの盆栽の成長したものも、やはり庭園に移し植えている。このようにツバキ・ツツジ・ゴヨウマツの栽培を、承章は園芸的な趣味から始めているのだが、それらが庭園に移植されたこと

表6-4 鹿苑寺の植栽（『開葉記』より）

年月日	植 栽 植 物	年月日	植 栽 植 物
寛永13年(1636)	諫早椿寄木	7月10日	四季の杜若〔池〕
8月16日	菊苗・金銭花の種	慶安4年(1651)	車百合〔既存〕
寛永14年(1637)	9月19日	2月17日	菊苗
10月14日	楓木10本〔既存〕贈る	2月23日	薄柿色の五月躑躅・万葉躑躅
寛永15年(1638)	クラヤウ・ユズリハ・八手・コノデカシハ	3月9日	千葉四季の躑躅
9月24日		4月4日	美女躑躅〔既存〕
寛永16年(1639)	2月20日	4月10日	風車躑躅2本
3月5日	鶏冠花の種・側柏葉の種〔花島〕	4月12日	躑躅(万葉2本、曙1本)
3月8日	菊苗(伊勢紅・椿・実盛)	7月28日	薩摩躑躅小本
5月13日	椿3本(大村・白腰蓑・吉田)	8月21日	五月躑躅26本
8月5日	真竹〔既存、門前〕	8月27日	シヤブヅ躑躅
9月2日	岡松5本〔花島〕	10月21日	千重栴樹・町椿・梅モトキ〔既存〕贈る
9月9日	躑躅・源氏木犀・台木の椿〔花壇〕	10月28日	辛密の木
9月11日	鉄線花(紫色)	11月11日	
9月18日	町椿〔花壇〕	承応元年(1652)	3月9日
寛永17年(1640)	松〔既存、中島〕・夏菊	3月9日	菊苗5種
2月3日	千様菱・鶏頭花・鉄銭花	4月16日	風車躑躅〔既存〕贈る
2月5日	秋菊〔豊前・風車・天竜寺・伏見常盤・実盛・深江・広島〕	8月26日	冬青樹3本〔既存〕贈る
2月8日	黄薔〔花壇、接ぐ〕	10月12日	正木〔既存〕
2月9日	長白藤3本〔既存、闇の路・大栗木の北方〕・大栗木〔既存〕	承応2年(1653)	梅モトキノ木13本〔既存〕贈る
2月11日	諫早椿〔接ぐ〕	3月2日	桜(ロウヤ・糸ヨリ・常真・塩籠)〔既存〕
2月22日	五葉松5本	3月9日	躑躅(シヤブヅ・曙)・未開紅梅〔接ぐ〕
3月17日	五葉松4本	3月20日	秋菊
5月11日	常島芋・黒島芋〔池〕	3月26日	胡蝶の躑躅
5月20日	梅古木〔既存、庭上〕	6月2日	百合(相良・姫)〔既存〕贈る
5月23日	椿5〜6本〔接ぐ〕	6月10日	躑躅
5月26日	水仙花の種根	7月20日	水仙
8月11日	白牡丹	8月16日	梅モトキ3本〔既存〕贈る
8月29日	紅梅・一重梅	8月18日	柿(木練)〔既存、庭前〕
9月3日	夏菊	9月19日	
寛永18年(1641)	9月3日	承応3年(1654)	水路
正月23日	青梨2本〔闇前、接ぐ〕	1月14日	梅〔接ぐ〕
2月12日	草花の種	1月19日	南天
3月8日	3月8日	2月11日	梅モトキ3本〔既存〕贈る
寛永19年(1642)	3月7日	2月20日	白蓮20根
3月7日	秋菊	3月13日	燈の桃木2本
6月28日	沙羅双樹・舜・梅〔接ぐ〕	2月20日	青桜〔接ぐ〕
7月9日	椿(白雲・諫早・腰蓑・五郎左衛門・等安・炭屋・大白玉)〔既存〕	3月8日	曙躑躅2本
9月15日	五葉松の小木24本	5月27日	朽葉色の榴〔接ぐ〕
10月19日	五葉松〔既存、作り庭〕	明暦2年(1656)	未開紅梅〔接ぐ〕
12月16日	男松〔既存、中島〕	3月13日	躑躅2本
寛永20年(1643)	正月24日	4月10日	益鏡の躑躅
正月26日	法輪寺桜・越中梅〔接ぐ〕	9月26日	茅
2月4日	白横3本	11月11日	
2月11日	一ヒ・葵・菟香・唐無の種	万治元年(1658)	五月躑躅(青山・金四手・銀台)
2月23日	秋菊の苗	7月2日	
3月11日	豊田椿〔接ぐ〕	万治2年(1659)	白蓮30茎
6月4日	椿7本〔接ぐ〕	2月29日	銀台躑躅1本
8月10日	五葉	4月24日	寒竹〔既存〕贈る
正保元年(1644)	2月11日	5月13日	蘭〔既存〕・松・躑躅〔既存、庭上〕
2月19日	柚木14、15本〔接ぐ〕	9月10日	伽羅木の種
3月12日	秋菊	12月6日	
3月13日	紅躑躅〔既存〕・千重赤躑躅2本〔接ぐ〕	万治3年(1660)	白木蓮華2本〔接ぐ〕
3月25日	赤千重躑躅1本	3月2日	躑躅
7月3日	椿4本〔接ぐ〕	3月7日	白蓮20茎
8月11日	梅木〔既存、作り庭〕	3月11日	五月躑躅〔接ぐ〕
8月21日	蜜柑・石楠花・楓各1本	4月13日	梅樹〔既存、庭前〕
正保2年(1645)	2月3日	7月7日	五月躑躅(紅白)3本
3月14日	椿〔接ぐ〕・秋菊	10月20日	寒菊
6月3日	元和椿	11月6日	
正保3年(1646)	2月10日	寛文元年(1661)	白蓮20茎
4月11日	菊苗・玉牡丹	3月8日	彼早桜〔既存〕贈る
4月26日	万葉の躑躅小本	3月10日	椿(立分・校重)〔接ぐ〕
6月28日	八重藤2本〔接ぐ〕	3月29日	
正保4年(1647)	5月17日	寛文2年(1662)	大諫早椿2本〔接ぐ〕
9月17日	五葉松	2月23日	椿・五葉松・山茶花・木櫛各1本・山松3本〔既存〕贈る
10月3日	岡松	3月8日	楊梅〔既存、庭前〕
慶安元年(1648)	2月17日	2月23日	山形百合の根玉1ヶ
3月10日	菊15茎〔闇前の池〕	3月20日	蓮20根
10月15日	飛入椿〔既存〕	6月8日	大諫早椿2本〔接ぐ〕
慶安2年(1649)	3月16日	9月3日	鳳仙花の種
寛安3年(1650)	藕10本〔池〕	10月15日	羅漢躑躅
3月24日	宇佐椿・諫早椿〔既存〕	寛文4年(1664)	芭蕉
3月25日	石南花5本	5月21日	楊梅〔庭前〕
4月2日	藤木3本〔既存〕	閏5月18日	
4月18日	姫ユヅリハ・姫石楠花	寛文5年(1665)	柿2本・沙羅双樹2本・夏栴1本〔接ぐ〕
4月23日	薄色蕙・白蕙各1茎	2月13日	岡松〔既存、庭前〕
5月24日	紅菱2本	4月28日	南天1根
6月11日	楊梅〔既存、庭前〕	10月29日	
6月18日	楓木〔既存〕・紀州五月躑躅	寛文6年(1666)	桜・沙羅双樹・青梨〔接ぐ〕
6月27日	雲梯躑躅	2月23日	藕根10本
		2月24日	大白玉椿3本・大諫早1本〔接ぐ〕
		6月17日	松・楓木〔既存、庭〕
		9月18日	
		寛文7年(1667)	躑躅4本
		10月6日	
		寛文8年(1668)	
		2月9日	椿〔接ぐ〕、青梨3本〔花島、接ぐ〕

によつて、その色彩や形状が庭園植栽に与えた影響は少なかつただろう。

また、承章は草本類として次のものを植栽している。¹⁹⁾

金錢花(トウキンセンカ)・鶏冠花(ケイトウ)・鉄線[銭]花(テッセン)・千樣葵(タチアオイの一種)・秋菊・水仙花・夏菊・一ヒ(イチビ)・琉香(ルコウソウ)・薄色蕙(ランの類?)・白蕙(ランの類?)・蘭(フジバカマ)・紅葵(タチアオイの一種)・車百合・相良百合・寒菊・山形百合・鳳仙花

このうち秋菊としては、「伊勢紅・櫓・実盛・豊前・風車・天竜寺・伏見常盤・深江・広島」がある。「豊前・広島」という名称から、キクも各地から集まつて来ていることがわかる。中国原産であるテッセンの渡来年代については、『地錦抄付録(卷之三)』(享保十八年「一七三三」)に寛文年中(一六六一―一六七二)と書かれているが、『実紀』の寛永七年(一六三〇)四月二十一日の条にも「御茶事あり。御花(百合花。鉄線)」とあるから、最初の渡来は寛永七年以前だろう。ルコウソウについても、『地錦抄付録(卷之三)』は天和・貞享年中(二六八一―二六八七)の渡来と記しているが、『隔蓑記』から寛永二十年以前とすることになる。これらの草花が存在した場所だが、寛永十六年二月二十日の条に「鶏冠花の種・側栢葉の種、今日南の花畠に栽うるなり」と述べられていることからすると、境内の南側に設けられていた花畠だったと考えられる。おそらく花壇もこの花畠の中に存在していたのだろう。

鹿苑寺内に植栽されていた植物としては、以上の他に次のものがある。²⁰⁾

《針葉樹》コノテガシハ[側栢葉](コノテガシワ)・男松(クロマツ)・白楨(ビヤクシン)・伽羅木(キヤラボク)
 《常緑広葉樹》タラヤウ(タラヨウ)・枇杷・柚木(ユズ)・蜜柑・木斛(モツコク)・楊梅(ヤマモモ)・山茶花(サザンカ)・正木(マサキ)・ユズリハ・姫ユズリハ(ヒメユズリハ)・八手(ヤツデ)・石南花(シヤクナゲ)・姫石楠花(シヤクナゲの一種)・冬青樹(アオキ)・南天(ナンテン)

《落葉広葉樹》楓木(カエデ)・栗木・紅梅・一重梅・未開紅梅・越中梅・青梨(アオナシ)・沙羅双樹(ナツツバキ)・槻(ケヤキ)・法輪寺桜・ロウマ桜(楼間桜)・糸ヨリ桜・常真桜・塩電桜・青桜・彼岸桜・木練柿・夏柿・源氏木舜(ムクゲの一種)・黄薔(ムクゲの一種)・梅モトキ(ウメモドキ)・千重榴樹(ザクロの一種)・朽葉色の榴・燈の桃木(ヒトウ)・唐無(カリン?)・白木蓮華(ハクモクレン)・白牡丹・玉牡丹・長白藤・八重藤

《その他》真竹(マダケ)・寒竹(カンチク)・常烏芋(クワイの一種?)・黒烏芋(クワイの一種?)・藕「蓮藕・蓮」(ハスの地下茎)・白蓮・四季の杜若(カキツバタ)・水蓴(オニバス)・芭蕉(バショウ)

樹木・草本類ともに種類が増え、変種が増加している。これが江戸時代の一つの傾向と言える。ツバキ・ムクゲ・ナツツバキ・ウメ・サクラ・ハクモクレン・ザクロ・ナシ・ユズ・カキ・ツツジ・フジなどで、接ぎ木が行なわれていることが示すように、栽培技術が進んだことから一層全国的に植物が広まるようになったのだろう。コノテガシハは何を指すのが問題になるのだが、「側栢葉」という表記もあることからすると、現代に言うコノテガシワではないだろうか。キャラボクは、山形から種と葉が贈られていることからみると、当時京都では珍しかったのだろう。タラヨウは経文を書いたという多羅樹、ナツツバキは釈迦が没した時に傍らにあったとされる沙羅樹に対応するものとして、寺院であることから植えたと考えられる。江戸城の本丸庭園には常緑広葉樹として、ツバキ・ツツジ・モッコク・クチナシ・ナンテン・モチノキ・サザンカ・サカキなどが植えられているが、鹿苑寺内にも数多くの種類の常緑広葉樹が植栽されている。これは安土桃山時代の深山の雰囲気をかもし出そうとした、露地植栽の影響を受けたものだった。その結果として、針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹が一通り使用されるようになっていく。平安時代にはマツの他は主として落葉広葉樹が使われ、室町時代になると針葉樹が流行しだし、安土桃山時代には常緑広葉樹が使用されているのだが、江戸時代になってこれらすべてが好みに従って利用されるようになったと言える。

クロマツの手入れについては、寛永十九年十二月十六日の条に「久永来たりて、中島の男松の笠を直すなり」とある。室

図6-4 江戸時代の鹿苑寺庭園（『都名所図会』1780年）

町時代前半には園池の中島にはカエデが多かったが、応仁の乱で伐採されたのちには、クロマツが主になったように見受けられる〔図6-4〕。また、園池に承章はクワイ（？）・ハス・カキツバタ・オニバスなどを植えているが、特にハスを繰り返し植栽している。寛永十八年三月八日に八百屋から買った蓮根を植え付けているが、繁殖しなかったらしい。慶安元年三月十日には、「当夏蓮の花咲かずば、則ち代銀を取らざるの由なり」という条件で別の者から購入しているが、これも失敗したらしく翌年三月に植えたものが七月によく白い花を咲かせている。

（五）庶民の行楽地

京都の行楽地

先に触れたように『多聞院日記』によると、安土桃山時代に奈良ではすでに庶民の間で花見が行なわれている。京都では平安時代から貴族の間では、寺社のサクラを見物することが一般化しているが、庶民の記録となると時代が下がる。『冷泉町記録』^{ぜいちやう}には、次のような町衆の行動が見られる。

慶長 四年（一五九九）三月二十七日 双林寺（東山）の花見

十二年（一六〇七）三月二十日 醍醐の花見

十三年（一六〇八）三月十七日 鞍馬の花見

十月十六日 東福寺の紅葉

十五年（一六一〇）閏二月二十八日 豊国神社の花見

十八年（一六一三）三月 大善院里坊（愛宕山？）の牡丹

二十年（一六一五）三月二十三日 豊国神社の花見

十月十六日 東福寺の紅葉

元和 三年（一六一七）三月二十三日 霊山の花見

九年（一六二三）三月十八日 双林寺の花見

醍醐や慶長四年（一五九九）に造営された豊国神社の花見は、いかにも安土桃山時代らしいが、京のいたる所遠近をとわず、花や紅葉を求めて人びとは出向いている。江戸時代になると平穏な時代になったことから、人びとは盛んに寺社の参詣を行なうようになる。これは宗教心からばかりでなくて、娯楽を兼ねたものだった。名所案内書として万治元年（一六五八）に『京童』が発刊され、つぎつぎに新しい本の出版が続いている。植物については、貞享二年（一六八五）に刊行された『京羽二重』^{はぶたえ}になって、巻一に「名木」の項が登場している。

西行桜（西山大原野・東山双林寺・墨染桜（深草墨染寺）・小督桜（天竜寺近く）・独鈷松（東寺）・棺掛松（嵯峨釈迦堂）・紫雲松（西山光明寺）・影向松（北野経堂）・御太刀松（四条通猪熊西）・未開紅（誓願寺鎮守）・軒端松（嵯峨二尊院）・鶯宿梅（京極通誓願寺下ル試心院）・登天松（広沢の池）・千貫松（西笹屋町筋大宮西）・影向棕（洛北七野神社）・七本竹（嵯峨臨川寺）・馬繫松（宇治）・四派松（妙心寺）・光明松（西山光明寺）

図 6-5 仁和寺のサクラ (『都名所図会』より)

これらは珍しいというよりも、歴史的由来を持ったものが多い。寺社見学の一環として、名木を挙げたものと言える。

四年後の元禄二年(一六八九)の『京羽二重織留』^{おどりどめ}には、巻之四に「名樹」の項もあるが、巻之二に「奇観地」という項が設けられていて、物見遊山の場所の状況を知ることができる。

音羽桜花「清水寺四時の風景筆舌のをよぶ所にあらず。〔略〕」^{おとわのさくら}

仁和寺桜「当山は西方寒冷の地なり。此故に花の開ことおそし。〔略〕」〔図 6-5〕

未開紅「誓願寺鎮主春日明神の前の紅梅はいまだひらかざる時、其色濃紅あざやかなり。〔略〕」^{じょうがん}

壇躑躅「上賀茂南の山を壇と云。春の末夏はじめつゝじの花咲乱れ、其景象又たぐひなし。〔略〕」^{だんのつづじ}

真性院藤「建仁寺の後にあり。堂前仮山(築山)の紫藤春末繁延し花ひらくの時、都人群集す。〔略〕」^{しんしょういん}

高尾楓葉「毎秋高尾地藏院の溪間楓葉くれなるを染る。〔略〕」^{かうぶ}

〔略〕

通天楓葉「東福寺通天橋下の楓葉又絶品たり。〔略〕」〔写真 6-1〕

西山楓葉「勝持寺世に花の寺と号す。此山楓樹多し。秋に



写真 6-1 東福寺通天橋の紅葉

表6-5 京・伏見の寺社等の植栽(『堯恕法親王日記』より)

年 月 日	場 所	植 物
寛文8年(1668)	3月8日 豊国古廟前	桜花見
	3月14日 新日吉社	花(サクラ)盛り
11年(1671)	2月29日 新日吉社・豊国山辺	花見
	3月17日 禁裏	花見
12年(1672)	3月24日 禁裏清涼殿前	桜盛り
延宝2年(1674)	3月13日 伏見里	桃花盛り
6年(1678)	2月28日 東岩倉真性寺	桜盛り
	3月11日 青蓮院	花壇の牡丹盛り
	9月28日 修学院離宮	紅葉見物
8年(1680)	3月7日 新院御所	彼岸桜盛り
	3月11日 妙覚寺	糸桜見物
	3月19日 東山	花盛り
	安井・祇園・知恩院	花見
	3月20日 妙法内客殿の庭	花盛り
	4月2日 青蓮院	花壇の牡丹花盛り
	4月23日 妙法内積翠園	芍薬・「かきつはた」盛り
天和2年(1682)	10月14日 高雄地藏院	紅葉見物
	大沢の辺・天竜寺	紅葉見物
貞享元年(1684)	3月23日 青蓮院	牡丹見物
	黒谷可入亭	牡丹見物
	3月25日 安井	藤花盛り
	4月1日 豊国山	「つゝし」盛り
3年(1686)	3月25日 伏見	桃花見物
	醍醐菩提寺	糸桜花見
4年(1687)	3月8日 仁和寺	桜花見
元禄元年(1688)	3月13日 伏見	桃花見物
	3月26日 仁和寺	花見
	10月21日 高台寺	紅葉見物
2年(1689)	3月8日 青蓮院	牡丹開花
4年(1691)	3月15日 東山	花見物
5年(1692)	3月3日 高台寺・知恩院	花見
	5月11日 内府邸	花壇の百合盛り

至て紅を染。^{そむ}〔略〕

こうした場所に洛中の人びとは、季節ごとに遊びに出かけていたらしい。樹木としては、サクラ・ウメ・ツツジ・フジ・カエデということになるが、サクラとカエデが特に好まれていたように感じられる。

当時の庶民が書いた記録ではないが、妙法院（京都市東山区）の住職だった堯恕（二六四〇—一六九五）の『堯恕法親王日記』が、遊覧の場所を知るのに手掛かりになる。堯恕が花や紅葉などを見物した状況をまとめると表6-5になる。妙法院に近いこともあって、豊国古廟や新日吉社の名が現れている。東山一帯の寺社のサクラ、伏見城跡につくられたモモ畑、高雄地藏院のカエデなどが名高く、これらは庶民の憩いの場所だったのだらう。寺院・神社は樹木見物に人びとが集まると収入が増加することもあって、植栽には気を配っていただろうが、参詣する人びとの好みが寺社の植栽の種類を左右していたとも言えるだろう。

大坂の行楽地

大坂の花の名所については、井原西鶴著『好色二代男（巻三）』（貞享元年「二六八四」）の「敵無の花軍」の項に次のように述べられている。⁽¹³⁾

北面の長椽に、花桶をならべけるに、春の名残の藤は野田（福島区）・東洞寺（天王寺区）の葉末をもとめ、生玉の若楓、佐太の宮の芍薬、浅沢（住吉区上住吉）のかきつばた、中津川の花菖蒲、御堂の白牡丹、野里（西淀川区野里町）の美人草（ヒナゲシ）、玉造（天王寺区）の二重芥子、木津（浪速区敷津町）の大手毬、長町（中央区堺筋の日本橋以南）の薄花葵（？）、今市の橋（セリダン）、中島の昼顔、天満の五月躑躅、安部野の風車（カザグルマ）、森の早百合、三津寺の夏菊、十三川原の撫子、ひがし高津（天王寺区東高津町）の橘、下寺町の卯の花、釈迦誕生ましますも、かゝる花園にての事とや。

場所が不明確なものもあるが、生玉は天王寺区の生国魂社いくたま、佐太は守口市の佐太の宮、中津川は西成区了徳院、御堂は中央区の東本願寺難波別院、天満は北区の天満天神、森は東区・城東区の森之宮、三津寺は中央区の大福院、下寺町は天王寺区下寺町の寺院のことを指しているので、大坂市中や近郊の寺社境内にはフジ・カエデ・シャクヤク・ハナシヨウブ・ボタン・サツキ・ユリ・夏咲きのキク・ウツギなどが咲いていたことになる。今市は旭区今市町辺の淀川堤のことで、ここにはセングンの並木があったことから、花時には人が集まっている。東淀川区・西淀川区あたりの中島のヒルガオや、十三川原（淀川区）のナデシコのような自生の植物も喜ばれている。玉造のケシは切り花として栽培していたものだろうか。大坂のような都会でも多くの花の名所があり、人びとが季節の移り行きを楽しんでいたことがわかる。

(六) 藩による規制

行楽地で各種の植物を植栽していることからすると、農家などでは屋敷内の樹木を自由に処分できたように見えるのだが、かなり規制があったらしい。熊本藩では寛文十年（一六七〇）七月に次のような指示を出している。¹⁵

一、百姓屋敷廻りの木、その百姓植え候分は植え立て候者、心の儘に剪り申すべく候。前々よりこれある大木は〔割注〕三尺廻り以上の由〕剪り申す間敷く候事。〔原、平仮名混じり漢文〕

農家の周囲の樹木については、以前からある幹周り三尺（約九〇センチ）のものは、伐採を禁じている。

また、『膳所藩郡方日記』の享保八年（一七二三）十二月七日の条によると、¹⁶近江の別保村の李兵衛が屋敷周りの植え込みだった「椿二本・榎木三本・松木四本・柿木一本」、壽右衛門が「柿木一本」を伐つて、年貢米に当てることを郡方役所に願ひ出て許可を得ている。江戸後期のことになるが、文政五年（一八三二）正月に越後高田藩の代官に庄屋組頭が出した「五人組改帳」の前書には、

一、田畑居屋敷に至^{いたる}迄、少も荒申間敷候。面々居屋敷苦しからざる所は竹木を植付、連々鄉村能く相見へ候様仕るべく候事。

と、屋敷内の竹木を植え付けて美観を保つようにすることを代官に誓っている。江戸時代には農民の屋敷内外の樹木に対してまで、藩役所の規制が厳しかったことがわかる。

二 社会政策としての行楽地——江戸中期の庭園

(一) 吉宗と植栽

元禄十四年(一七〇二)から寛政十二年(一八〇〇)までの江戸中期の庭園植栽の状況はどうだったかを見てみたい。享保元年(一七二六)に第八代將軍になった徳川吉宗(一六八四—一七五二)は、幕府中興の英主とされているように、幕府の支配体制の立て直しを図っている。政策の一環として実学の奨励を行なっているが、これが庭園に与えた影響は大きい。上に立つ者の考え次第で庭園が変わるという例だろう。

『徳川実紀(有徳院殿「吉宗」御実紀付録)』(以下『有徳院』と略す)の卷十八には、

公(吉宗)ことに林園、泉石の観をもてあそばせ給ふ事もなく、一草一木の微にいたるまでも、みるものゝ用にたつべきものをうへさせ給へり。

と述べられている。江戸城内の吹上の庭園利用も吉宗の時代には、鷹の訓練や刀剣の制作を見るといのように変化している。

享保三年に櫨（ハゼノキ）は蠟（ろう）をつくるのに役立つとして、紀伊国から櫨の実を大量に運搬させて、吹上の庭に植えて繁殖させてから、品川御殿山や芝の新設の堀のほとりに移植している（『有徳院巻十七』）。吉宗は紀州藩主としてハゼノキの栽培を奨励していて、その実績があつたことから身近な吹上の庭園で大量に生育させたのだろう。

また、吉宗は吹上の「田舎」と呼んでいた茶亭を取り壊して、その跡に真竹（マダケ）を六〇〇株を植え、享保十年に繁殖したものを江戸城の周辺に移している（『有徳院巻十八』）。これは戦時のタケの使用を考えたものだったのだろう。享保十年代後半には、長崎から来た者に命じて甘藷（サツマイモ）を、吹上の庭で試験的に栽培させている（『有徳院巻十七』）。吹上の庭園には薬用のチョウセンニンジンも植えていたようで、大田南畝の『半日閑話（巻十九、吹上）』の収録記事に、元文元年（一七三六）のこととして次のように記されている。

御山のすそに唐の人参植置せ給ふ、珍らしき事と行て見れば、葉は柿のやうにて五ツづゝならびて有。みのりたる色美しう能き朱の色あひにて、実数多（おおく）つぶつと見へたり。御大事のよし御礼の付たれば、細かには見えざる也。

築山の裾に実験的に、少量だがチョウセンニンジンも植えていたらしい。さらに『実紀』によると、元文三年十一月十八日には、足立郡芝村の三俣の竹は箭幹（せんかん）（矢の幹）に適しているとして、吹上の園中に移し植えている。吉宗にとって吹上の庭園は、身近な自由に使用できる植物栽培の実験場だったのだろう。

庭園とは異なるが、今日の公園のような場所を吉宗はつくっている。飛鳥山（東京都北区）はその代表で、吉宗がサクラを植えてから庶民の行楽地になった「図6-6」。この植栽については、『有徳院巻十六』に詳しく書かれている。

吹上の御庭に桜、楓の苗多く叢生したるを御覧ありて、小納戸松下専助当恒に、よくやしなふべしと命ぜられしにより、別に花欄（えんらん）を設け、懇（ねんろ）につちかひ、水そゞぎけるに、いくほどなく其苗五六尺ばかりになりしかば、広尾、墨田川のほとり、または飛鳥山に植られし。其中にも飛鳥山は享保五年九月より植はじめて、凡桜（およ）二百七十株、楓百本、松百本植られしに、桜

図 6-6 飛鳥山のサクラ（『江戸名所図会』19世紀前半）

はわきて年を逐て枝葉しげり、花の時は燦爛^{さんらん}として美観をなせり。

同書によると、飛鳥山はもと御家人の所領だったが、吉宗は元文二年に熊野権現の分社の王子権現に与えている。故郷の神社をまつり、庶民がそこで憩うのを見ることは、為政者である吉宗にとって満足のいくものだったに違いない。『有徳院卷十七』によると、この他に吉宗は、神田川の堤に柳、御殿山に「はじ（ハゼノキ）・ぬるで」、中野に桃、隅田川の堤に桃・桜を植えている。吉宗がこうした善政を行なった背景には、幕府の財政が危機状態にあったために緊縮政策がとられ、下層民の生活が困窮していたという事情がある。悪化した江戸の町の環境改善を行なわないことには、下層民の不満を抑えきれない状況になっていたからだと言われている¹⁷。

（二）江戸の名木と行楽地

『続江戸砂子』の名木と行楽地

享保二十年（一七三五）に刊行された『続江戸砂子温故名跡志』（以下『続江戸砂子』と略す）には、巻之五に「名木類聚並拾遺」という項目がある。これは、享保十七年の『江戸砂子温故名跡志』の寺社等の名木をまとめたもので、当時の植栽の状況がわかる。武家屋敷に所在した名木としては、

斑女が衣懸松^{きぬかけ}

向が岡（文京区）松平雲州館の内。

図6-7 亀戸の梅屋敷（『江戸名所図会』より）

御言葉の松
つなごまつなぎ
 綱駒繫松
 兼平松
 泰山府君桜
たいざんふくん
やしおのかいで
 八入楓
 青葉の紅葉
 虎の御門（港区）、内藤備州候屋敷にあり。
 大くぼ（新宿区）、内藤大和守殿やしき。
 三田（港区）、松平隠州候館内。
 小日向新坂（文京区）峰谷氏やしきの内。
 三田、松平主殿頭殿御館にあり。
しゅめいのかみ
 同右。

などがある。武家屋敷には、マツ・サクラ・カエデが多かったと想像される。『武江年表』の「享保年間（一七一六―一七三三）記事」の項に、「染井植木屋伊兵衛、百種の楓を養ふ」と述べられているが、これらのカエデはその流行の先駆なのではないだろうか。

武家屋敷以外では、亀戸（江東区）の地主喜右衛門の屋敷が載っている〔図6-7〕。「梅屋敷」と呼ばれるほど名高く、樹齢一〇〇年を越える臥竜梅という古木があった。『実紀』によると、元文元年（一七三六）九月十三日に將軍吉宗もここを訪れている。地主階級は広大な敷地を所有していたので、庭園植栽も見るべきものがあつたと考えられる。

また、『続江戸砂子（卷之五）』には「四時遊覧」の項が加えら

れ、四季の変化を求めて庶民が訪れていた場所が示されている。京都では同様の内容の『京羽二重織留』が出版されてから、すでに五〇年近くたっている。京都と江戸との差は、これだけ存在していたということなのだろうか。植物だけをまとめると次のようになる。

梅 亀戸梅屋敷

椿 牛込門口（文京区）椿山

花（サクラ） 東叡山（寛永寺、台東区）・大窪（新宿区）法善寺の七面の花・浅草寺（台東区）の千本桜・朝香山（飛鳥山）

躑躅 染井（豊島区）伊藤伊兵衛家

藤 亀戸天満宮・佃島（中央区）住吉社・上野（台東区）山王社・根岸（台東区）円光寺

蓮 篠輪津の池（不忍池、台東区）

紅葉 下総市川村（千葉県市川市）弘法寺・海晏寺（品川区）・正燈寺（台東区）・明王院（目黒区）

吉宗がサクラを植えた飛鳥山が、早くも名所になっているのは面白い。染井の伊藤伊兵衛は代々植木屋で同名を名乗っている。『武江年表』の「正徳年間（一七一―一七一五）記事」の項に「染井植木屋伊兵衛、霧島躑躅を多く育す」とあるのは、この時代の植木屋を継続したものなのだろう。

『四時遊観録』の行楽地

安永五年（一七七六）には『四時遊観録』が出版されているが、書名からも『続江戸砂子』の影響を受けていることがわかる。樹木について場所ごとにまとめると次のようになる。

梅 梅屋敷（本所亀井戸邑）・芝増上寺境内茅野天神・杉田邑

桃 中野桃園(四ッ谷)

桜 東叡山(寛永寺)・飛鳥山・王子権現・品川御殿山・品川大井・柏木右衛門桜(四ッ谷延宗寺)・金王桜(渋谷八幡宮)

牡丹 西ヶ原牡丹屋太左衛門園中花壇

躑躅 染井植木屋伊藤伊兵衛園中・大塚護国寺石階左右・寛永寺忍が岡稻荷石階の左右

藤 寛永寺山王社前・坂本円光寺園中・佃島住吉社前・亀戸天神・品川鈴ヶ森八幡社内・逆井村百姓嘉右衛門園中
燕子花 葛飾郡三囲稻荷社前・根津権現御手洗

蓮 下谷不忍池・赤坂溜池

萩 本所亀戸柳島竜眼寺園中・浅草正燈寺

菊 巢鴨植木屋園中

紅葉 品川鮫洲海晏寺境内・品川東海寺境内たくあん沢庵和尚碑前・目黒不動滝・浅草田甫正燈寺境内・根津権現社内・下総弘法寺

この中には吉宗が植えた、中野の桃・飛鳥山の桜・品川御殿山の桜が挙げられている。年月がたつて十分に成長したということなのだろう。農家では先の梅屋敷の他に、逆井村(江戸川区)の嘉右衛門邸の藤が見られる。西ヶ原(北区)の牡丹屋太左衛門については『武江年表』の「寛政年間(一七八九—一八〇〇)記事」の項に、

いつの頃より始まりしか、西が原に湯島の牡丹屋太右衛門やうゑもんの別荘ありて、花壇に紅白の牡丹英えい(美しき)をあらさふ。盛りの頃貴賤群集せり〔割注〕文化の始めに絶えたり」。

とある。太左衛門という商人の別荘の庭園には、数多くのボタンが花壇で栽培されていたことがわかる。

なお、ボタンについては『田村藍水・西湖公用日記』の明和二年（一七六五）十一月の条に、將軍に藍水が「牡丹花百品」を献上したことが記されている。ボタンは本来、葉草として栽培されていたものだが、花が美しいことから改良されて種類が増えている。京都で一七世紀中頃に流行していたのが、江戸に伝わって一八世紀後半に盛んに栽培されるようになっていく。

ところで、『四時遊観録』には冬の部の菊の項に、植木屋として伊藤伊兵衛の他に次の名が見られる。

すかも通の中「座敷、花だんともよし」

保坂四郎右衛門

同

植木屋八五郎

同「座敷、花だん広し」

斎田弥三郎

いなり小路

植木屋佐太郎

五軒町「うへ木鉢もの」

植木屋市左衛門

すりばち山

植木屋佐兵衛

すべて六軒、道法みちのり十余町也。

巢鴨の加賀守（前田家）中屋敷の前に一キロメートルほどにわたって、これら六軒の植木屋が並んでいた。大名屋敷からの需要が多かったことから、植木屋が増加したのだろうが、その園中が人びとの遊覧の場所になっていた。人びとはここでは花を眺めるだけでなく、購入する楽しみも味わったのだろう。

表6-6 京都近郊の名所(『都花月名所』[1793年]より)

植 物	所 在 地
看花 (はなみ)	御室 (仁和寺)・嵐山・華頂山 (知恩院)・醍醐・花寺 (洛西勝持寺)・大覚寺・長岡天神・鞍馬・太秦 (広隆寺)・北吉野 (玉水神童寺金剛院)・岩屋山 (洛北金峰寺)・双林寺・金閣寺・八幡山・寂光院・栗田神明・西芳寺・智積院・平野・清水寺・北白川 (志賀山越)・善峰 (西山小塩)・法輪寺・長楽寺・日野薬師 (法界寺)・銀閣寺・清涼寺・車折社・氷室 (洛北小野郷)・花山・高台寺・赤山 (洛北修学寺村)・幻桜 (洛東新熊野芳春寺)・直指庵・歆修寺・曙桜 (上京鞍馬口間臥庵)・金福寺・祇園・安祥寺 (山科)・時雨桜 (月輪寺)・東大谷・泰山府君 (東漸寺)・墨染桜 (深草墨染寺)・大仏 (洛東)・小督桜 (下嵯峨)
丹楓 (もみじ)	高雄山 (神護寺)・通天橋 (東福寺)・正伝寺・八塩岡 (洛北長谷邑)・小倉山 (二尊院)・長岡 (洛西)・稻荷山 (洛東)・戸難瀬 (嵐山)・貴布禰 (洛北)・真如堂・巖崎丹楓 (永観堂)・御製紅葉 (修学寺邑林丘寺)・九重丹楓 (清閑寺)・御室九所社前 (仁和寺)・笠置山 (南山城)・羽束師社 (城南久我)
梅	尋来梅 (上賀茂西行庵)・鶯宿梅 (相国寺)・かゞしまの梅 (祇園社前)・桜紅梅 (梅宮)・臥竜梅 (五条西洞院大泉寺)・鴛鴦梅 (洛南聖廟)・基盤梅 (竹田安楽寿院)・冬至梅 (聖護院)・相国寺浴室・五条御影堂・勾紅梅 (北野聖廟)・簾梅 (北野東門)・萼緑梅 (北野東門)・垂糸梅 (等持院前千寿院)・八房梅 (東本願寺)・未開紅 (誓願寺)・軒端梅 (京極泉式部墓上)・悲田梅 (禅林寺)・飛梅 (高辻菅大臣社前)・甚兵衛開 (洛北紙屋川の上)・梅溪 (伏見)・舟岡山・野色山 (小野の南)・明王寺 (山科陵邑)・笠取 (醍醐の東)
桃	城山 (伏見)・瓶原 (綴喜郡)・蜘蛛塚 (北野)・本圀寺・島邑 (鳥羽の西)
欽冬 (やまぶき)	玉川 (南山城玉水)・小倉山 (嵯峨二尊院)・山吹瀬 (宇治川)
藤	安井 (観勝寺光明院)・金閣寺・円通寺・歆修寺・桂宮院 (太秦広隆寺)・双岡・藤杜 (洛南)・月輪 (東福寺)・祇園・上善寺 (上京鞍馬口)・竹田里 (城南)・山内邑 (洛西)・北野 (聖廟)
燕子花 (かきつばた)	浄瑠璃寺・臨川寺・日野 (法界寺)・等持院・杜若里 (北山)・大仏 (蓮華王院)・東寺・円山 (洛東)
蓮 (れん)	平等院・広隆寺・万福寺・大覚大池・八宗論池 (嵯峨清涼寺)・思園池 (東福寺)・功德池 (相国寺)・綾戸池 (南禅寺)・神宮寺池 (八幡)・枳殻館 (東六条東殿)・東寺・極楽橋 (黒谷)・本圀寺
萩	大覚寺・御栗栖野 (西賀茂)・雲母坂・高台寺・芳春院 (新熊野)・淨石越
松	雪江松 (妙心寺)・四派松 (妙心寺)・軒端松 (嵯峨二尊院)・陵松 (御室)・袖摺松 (山崎妙喜庵)・影向松 (北野)・松子房松 (東寺)・三鈴松 (東寺西之院前)・懸鑑松 (黒谷)・御館松 (四条猪熊)・降松 (洛北一乗寺村)

(三) 他の地方の状況

京都での流行

本居宣長（一七三〇—一八〇一）の『在京日記』に、宝暦六年（一七五六）三月十九日のこととして、

知恩（京都知恩院）の花は、馬場ははや青葉に成し。山門のまへ、山上鐘樓のほとり、方丈のわたりなど盛なり。

と書かれていて、また翌七年三月二十日の条に、

安井（京都市東山区安井神社）の内の藤を見侍るに、大かたさかり也。こゝはかきつはたもはやさきたり。

とある。京都でも人びとは花の時期に、さまざまな場所を見物して廻っていたらしい。

江戸中期の京都の花の名所については、寛政五年（一七九三）に出版された秋里籬島著『都花月名所』によって知ることができる。花鳥風月を楽しめる名所を記したもののだが、その中に植物としては、「看花・丹楓・梅・桃・欵冬・藤・燕子花・蓮・萩・松」の項がある。これをまとめると表6-6のようになる。

サクラに関しては、由緒のある単木よりは数量的に多いところが選ばれている。知恩院については本文中に、「洛東第一の花界也。〔略〕殊に八重多し」と記されている。各寺社のサクラは八重桜と山桜の区分も示されているが、半々ぐらいだろう。カエデは対象地が南は笠置山まで広がって、日帰りの範囲を越えている。ウメは単木が多いが、洛北の甚兵衛開・伏見の梅溪・笠取（京都市伏見区）などは、ウメの実を採るために栽培していたものだった。モモも果樹園が対象となっていて、遠方の瓶原（京都府相楽郡加茂町）まで名所とされている。ヤマブキは、奈良時代から玉川（京都府綴喜郡井手町）が有名なように、河川の岸に自生したものが好まれている。

図6-8 円通寺のフジ棚（『拾遺都名所図会』1787年）

図6-9 高台寺境内のハギ（『拾遺都名所図会』より）

フジについては、円通寺の項に「庭中の景勝真妙にして紫藤の棚あり」と説明されている。この情景は天明六年（一七八六）に刊行された『拾遺都名所図会（巻三）』に示されているものだろう〔図6・8〕。双岡・祇園・竹田里・山内邑・北野などのフジは、茶店のものを指している。休息場所として、茶店の傍らに藤棚を置いたものと考えられる。藤棚は江戸初期頃から盛んにつくられるようになり、中期には神社や街道の茶店にまで設けられるようになったことがわかる。カキツバタについては、浄瑠璃寺（京都府相楽郡加茂町）の名まで見られる。当時カキツバタは流行していたのだろう。ハスの項では、江戸初期に造営された東本願寺の枳殻館（渉成園）が挙げられている。ハスの花の色については、場所によっては紅白の別が記されている。ハギについては、高台寺のように「昔より萩名所也。世に高し」といった所もあるが〔図6・9〕、御栗栖野（北区・雲母坂（左京区）・湊石越（東山区）のような自生地も選ばれている。

このように神社詣での枠を越えて、遠方の畑地のウメ・モモ、山中のカエデ、自生のヤマブキ・ハギにまで対象は広がっている。江戸で堤のサクラや畑のモモが対象とされているのと、同じ傾向のように見える。京都の人びとが自然を求めたのは、日常生活を忘れて気晴らしをするためだったのだろうが、経済的に見れば生活水準が上昇して、物質的には余裕ができたということなのだろう。人びとの関心が反都市的な自然に向いたということは、明治時代に自然風の庭園が流行する下地をつくったようにも考えられる。

大坂での流行

大坂での植物の流行については、浜松歌国（一七七六—一八二七）著『摂陽奇観』によって知ることができる。年代と流行した植物の記載を、江戸時代全体を通してまとめると次のようになる。

寛永年間（一六二四—一六四三）

大坂にて大菊流行す

元禄年間（一六八八—一七〇三）

百椿流行（一一五種の椿名を掲載）

享保年間（一七一六—一七三五）

京・大坂 大菊流行（三六九種の花の寸法と金額を掲載）

寛政年間（一七八九—一八〇〇）

橘（カラタチバナ）流行（七一種の番付表を掲載）

文化年間（一八〇四—一八一七）

牽牛花流行（八八種と所蔵者名を掲載）おもと万年青・石菖蒲せきしょうぶ流行

近 年（一八一八—一八二七）

竹蘭流行

ツバキの流行は江戸や京都よりも遅れているが、一一五種類も集められているのは、商業の中心地だった大坂ならではのろう。大菊の品種が三六九種にものぼったということからも、大坂の繁栄が読み取れる。江戸後期にはアサガオが江戸でも流行しているが、大坂とどちらが早かったのだろうか。

伊勢国での流行

京都・大坂以外のことでは、伊勢国（三重県）のことが『宝暦はなし』に述べられている。これは文化八年（一八一二）に刊行されたもので、著書は伊勢国松坂の葉屋山村壺仙だった。「はやり事、奇談」と題した項に、植物に関しては次のように書かれている。

宝暦二（一七五二）・三〔年〕

菊の大輪〔略〕

明和四（一七六七）・五

紅花うへる事時行（流行）〔略〕

六（一七六九）・七

中菊よれはやる〔略〕

安永三（一七七四）・四

花菖蒲〔略〕

寛政十（一七九八）

草花ふ入もの時行〔略〕

享和元（一八〇一）

あい植、撫子大時行

文化元（一八〇四）

立ち花大はやり、中菊〔略〕

三(一八〇六)

「略」菖蒲、おもと「略」

七(一八一〇)

朝顔「略」

江戸中期にはキク・ベニバナ・ハナショウブ・斑入り草花、その後はアイ・ナデシコ・タチバナ・ショウブ・オモト・アサガオが、伊勢で流行していたことがわかる。武家屋敷や裕福な商家・農家では、こうした植物を鉢に飾ったり、庭園に植えたりしていたのだろう。菊の大輪の流行などからすると、これらは京都・大坂・江戸で流行していたものが伝播したと考えられる。『武江年表』には「文政年間(一八一八—一八二九 記事)」の項に、「盆種の松葉蘭、万年青^{おもて}行はれ、数金を以て売買す」とある。年代からすると大坂の流行が、伊勢や江戸まで伝わったということだろうか。平穏な時代で植物収集に熱中できる余裕があり、流通機構も発展していたと考えられる。

三 個人経営の庭園の増加——江戸後期の庭園

(一) 松平定信の海荘

松平定信(一七五八—一八二九)は文化九年(一八一二)に隠居してから、海辺であることが気に入って、江戸の深川入船町(江東区古石場二丁目)に、抱屋敷を入手して庭園を造営して「海荘^{はまやしろ}」と名付けている。面積は四六二〇坪(約一・五ヘクタール)という広大なもので、南側が海に接していた。

岡本茲^{しづ}熒の『深川御別荘の記』は、ここの眺望について次のように書いている。

東南の隅に望嶽台あり。海岸山上に芝を植ゑ、御腰掛を居え、こゝに登れば、西は永代橋より築地、品川より、南は羽田ま

で見ゆ。西南の間、富岳（富士山）突出して間近く見へぬ。南より東へ顧れば、房相の境限りの山より、上総まで見えわたり、眺望極りなく、〔略〕

定信は以前からあつた池を拡張して、その土を盛つて海岸べりに築山をつくり、頂上部分に望嶽台と名付けた腰掛を建て、前面の東京湾だけでなく房総半島から富士山までの山岳の眺めを楽しんでいる。

この庭園の植栽については、同書に「御亭榭の山、東南は白花の琉球躑躅、西北は松樹を植ゑたまふ」と記述されていて、築山の東南側にはリュウキュウツツジ、西北側にはマツを群植していたことがわかる。

池岸御座の前、茨の垣根、蘇鉄、千入の楓、小松、東北は百日紅、極めて遅き品種の桜を並植させたまふ。

とも書かれている。海際の座敷の前にはイバラの生垣が設けられ、ソテツ・カエデ・小マツ・サルスベリ・サクラなど、葉の形が面白いものや紅葉が美しいもの、花が人の目をひくものなど、かなりの数の植物が植えられていたらしい。サクラについては、

春の花は、築地浴恩園つきじより咲初め、大塚六園りくえんに移り、此御園は、よその青葉あざ茁さかるころに、盛なるべき遅おそざくらを撰えらびうゑたまひて、年々桜狩したまひき云々。

と説明されているように、定信は所有していた浴恩園と六園も合わせて、花の季節には順に訪れることができるように、サクラの品種を選択している。

東北部分には柑子の多くの品種を、房州（千葉県の南部）竹が岡から取り寄せて植え、西側部分には「和肉桂（ヤブニッケイ?）」を数多く植栽していた。また、その近くには「難波の木きの部べ」（大阪府池田市木部町）より召寄せたまひし奇品芍薬の花壇あり」というように、大坂から取り寄せた珍しいシャクヤクの品種を植えた花壇を設置して、回遊路の途中に立ち寄つて

見物できるようにしていた。庭園の中にさまざまな風景をつくるのが回遊式庭園の特徴なのだが、江戸後期にも庭園のそれぞれの部分の特色を出すために、植栽が重要な構成要素になっていたことが窺える。

(二) 滝沢馬琴の園芸趣味

江戸の町屋の例としては、『椿説弓張月』や『南総里見八犬伝』を書いた作家滝沢馬琴(一七六七—一八四八)の家がある。この庭園の植栽については、日常生活を記録した『馬琴日記』によって知ることができる。すでに調べられている部分もあるが、植栽の詳細を見てみたい[表6-7]。天保七年(一八三六)に移転するまで、馬琴の家は神田同朋町にあつて、土地は隣家の杉浦清太郎から借りていた[図6-10]。彼はこの庭に長さ五メートル、幅二メートルほどの園池を掘っているから、それほど狭い敷地ではなかったのだろう。場所別に植栽をまとめると、次のようになる。

《南の庭》「南東」椿・柳・豊後梅「南」朝がほ・えんど(エンドウ)「南手前」野梅「池周辺」芝・小松四本・五葉松二本「池の背後」合歡(ネムノキ)・ねずみもち・木斛(モツコク)「客間手水鉢前」小ざくろ「西側入口」木樺(モクセイ)「池跡」八重白梅二本・唐梅(ロウバイ)

《奥庭・東の庭》「東の門」黒松一本・赤松二本「東の築山」小松・もみぢ・梔子(クチナシ)「東北」梨の木・大林檜・あした草(アシタバ)・小ざくろ「東の境」大豊後梅

《北の庭・裏庭》「北の庭」梨子・大柿・柳・朝鮮柘榴(ヒメザクロ)「北の手水前」さんご樹(サンゴジュ)「杉浦家との境」柿・李(スモモ)・梅二本「橋本家との境」大柿「北角」松・梅木

《門・玄関(前庭)》「玄関」柳・柿「大門」大松・もちの木

《花壇・菜壇》菊・桔梗・藤袴・われもかう(ワレモコウ)・女郎花・野菊・鋸草・紫苑・秋海棠(シユウカイドウ)

表6-7 滝沢馬琴邸の植栽 (『馬琴日記』より)

年 月 日			植 栽
文政9年 (1826)	4月8日	北の梨子の木と傍らの柿木等には、虫除けにウナギの頭を埋める。	
	7月18日	ぶどう (アドウ) を400房採る。	
文政10年 (1827)	11月24日	植木屋、楨を持参する。大楓・山茶花・中梨子・中豊後梅・小梨子等を移し替える。	
	正月18日	大豊後梅を内庭の東側に移植する。	
	正月22日	大楓、南東の椿、西の庭口の木樺、池の対岸のねずみもち・木料等が大雪で枝が折れたために、手入れを行なう。	
	2月24日	花壇を動き返して肥料を入れ、菊・桔梗などを植える。東中口の戸袋の陰に小花壇を作り、藤袴・われもかう・女郎花・野菊・銀草などを植える。	
	2月25日	新花壇の垣を結う。紫苑の新株を移植する。	
	2月27日	玄関脇の合歡の実生5、6本を移植する。山午房、北の庭の柳のさし木、東の築山の小松・もみぢを移植する。魚肥を西菜園に入れる。	
文政11年 (1828)	3月8日	旧冬に梅ということを買った大木2本映く。彼岸さくらあるいは李と思われる。	
	3月16日	朝がほ・なでしこ・そてつ菜などを播種する。朝がほは池の縁と山ぶきの前、菜園の北の垣際などに播く。	
	3月30日	庭の東方の青軸梅・紅梅などにも毛虫がわいたので取り捨てる。つりがね草が他の所に芽を出したので花壇に植えつける。	
	4月11日	梅木の毛虫を取る。百日紅に障る李の枝を切る。花壇の桔梗1株を移植する。	
	4月23日	植木屋に朝鮮さくら1本を300文で売る。	
	5月13日	糸すき・小老母草を移植する。	
	5月16日	もみぢの葉を刈り込む。	
	5月25日	裏の柳が昨夕の大風で折れる。	
	5月27日	大風でひかえ縄が切れた、梅3本・りんご1本・木刻・柿の木2本を直す。	
	5月28日	玄関脇の柳の下枝を切る。	
	5月29日	朝がほの垣を直す。夕方、上野広小路に行き、へちま苗を買う。	
	6月2日	野梅・豊後梅の実を採る。もちの木の花を結ぶ。紅梅9本、青ちく2本、鶯宿梅2本の実も採る。	
	6月4日	朝がほ (るり八重・茶台) の花咲く。	
	6月14日	池の縁の芝を刈る。	
	6月18日	九段坂上の植木屋に、木ばさみと芝かりばさみを借りる。	
	6月23日	朝鮮さくらのつぼみ出る。大門東の大松のひかえ釘を打ち直す。	
文政12年 (1829)	6月25日	池の背後の合歡を切りすかし、築山前の道を掃除する。花園の菊に支柱を付ける。	
	閏6月9日	林檎を採る。	
	閏6月22日	糞汁に入れておいた水仙の根を花圃に植える。	
	7月17日	葡萄を600房ほど採る。	
	7月26日	泡雪梨を1つ採る。	
	8月9日	朝貞 (アサガオ) の種を採る。	
	8月30日	上野広小路の植木屋で鶏頭1本を買う。	
	9月17日	門の左右の2本の松の葉を手入れさせる。	
	9月19日	表庭の黒松1本、東の門脇の黒松1本と赤松2本、池の淵の小松3本の手入れを植木屋にさせる。	
	9月20日	池の淵の小松4本、五葉松2本を手入れさせ、池の向かいの築山を掃除させる。また李1本、柳2本、玉垣の梅1本を移植する。	
	9月21日	小木の梅2本と櫻欄を移植し、柳に竹を添える。	
	9月22日	芝を刈らせる。	
	9月23日	李を抜き、梅を植え替えさせる。	
	10月2日	植木屋金治郎が持ってきた杜10本を植える。	
	10月3日	上野広小路で大もくこく (モッコク) 1本を購入する。	
文政11年 (1828)	10月4日	昨夕買った大もくこくを稲荷山の右、木厚の並びに植えつける。	
	11月4日	昨夕上野広小路で購入した楓1本・木こく2本を植えさせる。	
	11月8日	庭の植木の霜除けを設ける。	
	正月30日	正月19日に植木屋治左衛門が年始の挨拶に持参した養老梅1本を、庭に移し植えつける。	
	2月7日	花畑の植え替えをさす。	
	2月8日	注文した桜 (残黄桜・長崎なでん) を、梅・桜各1本を移したあとに植え付ける。	
	2月20日	白萩を植える。	
	5月15日	梅の実を採り漬ける。	
	6月3日	「あした草」を庭の東北側の大林橋近くに植える。	
	6月19日	菜園の秋海棠を所々に移植する。	
	6月23日	庭のゆりの花を取り、筒に生ける。	
	6月25日	庭の桔梗・とらの尾を取って生ける。	
	10月8日	隣の伊藤常貞より、玄関脇の垣際の小柳の枝の張り出した部分を切るように言ってくる。	
	10月30日	丁子・花さふらんなどに霜よけを掛ける。	
	11月19日	てまり・もみぢ・糸薄等を移植する。	
	11月29日	池の埋立を始める。	
文政12年 (1829)	12月1日	池の縁の木石等を片付ける。東の方より南西の方まで、小植木を仮植する。梅・百日紅・梨子・さんご樹の枝を切りすかす。	
	12月10日	池の埋立て完了。	
	12月24日	植木屋治左衛門と金次が来て、松のふる葉のむしりなどを行なう。	
	2月23日	南側の木石をすべて取り除き、小木を東側に仮植する。	
	3月6日	座敷正面へ植木を移植する。	
	3月8日	飛石を置き、大梅・百日紅・五葉松等を移植する。	
	3月11日	花壇修復。	
	3月13日	畑に仮植えていた木・岩ひばを南北の庭に移す。菜花を植え直す。	
	3月16日	山吹の垣根を結い直し、東地の建仁寺垣の修復を始める。	
	3月23日	南庭の「朝がほ・えんど」の手入れ、梅・松・さんごじゆ・柳の枝を直す。	
	5月11日	奥庭東方にある築山の梔子の枝に鶯が巢をつくる。	
	5月22日	豊後小梅を採り漬ける。	
	5月25日	玄関脇の柳の大枝を切り取る。	
	6月4日	池跡に植えた八重白梅2本が弱ったので、枝を切りつめる。	
	6月15日	春に植え替えた白八重豊後梅や、鉢から移した樹木・沈丁花が根腐れする。	
天保2年 (1831)	6月18日	南手前の野梅が枯れかかったので、枝を切り詰める。	
	7月11日	ばんど朝貞の花が咲きそろったので、種を採るために小札を付ける。	
	8月4日	梨の実を採り贈る。	
	8月11日	南東隅の柳が倒れたので起こす。	
	8月21日	大風雨のため、南東の楓、門かぶりの大松、北の手水前のさんご樹の支柱がゆるむ。	
	9月26日	杉浦家との境の椿に風がつく。	
	2月30日	奥の四目垣際の小さくろ1本を、客間の手水鉢前へ移植する。	
	4月6日	杉浦家との境の李の枝を切らす。	
	4月8日	庭の正面の唐梅が吹き倒れる。	
	7月21日	松と「ぶどうだな」の手入れをする。	
	7月22日	林檎の虫を塩水を吹き入れて駆除する。	
	8月4日	葡萄110数房を採る。	
	8月25日	桔榴の実を14、15個採る。すでに15、16個盗まれる。	
	8月27日	大りんごの虫の穴を鼠花火で燻す。	
	9月16日	さくろ・柿の実を採る。へちまの水を取る。	
天保3年 (1832)	9月27日	さくろと朝鮮さくろの実を採る。	
	11月13日	菜園等に霜よけをつくる。	
	2月24日	海棠1株を東三畳脇の小苗の角に植え付ける。	
	3月25日	賀重が来て前栽の浅黄さくらを写生する。	
	4月27日	杉浦家の方へ出ている梅2本の枝を切る。	
	5月27日	大風のために北角の松の後ろの榎木が折れ、櫓の若木が倒れる。百日紅・さくろに支柱を添える。	
	7月6日	林檎100余りを採る。梨子に鳥おどしの縄を張る。	
	8月18日	あは雪梨子の実を14個採る。	
	9月18日	強風により東界の山吹あたりの垣が倒れ掛かり、南の正面の庭の葉養老・若木の梅が西の方へゆがむ。	
	閏11月12日	西境の柳の枝を、常貞の方で切る。梅の木 (5本)・五葉松・朝鮮桔榴・額草等を移植する。	
	閏11月13日	植木屋の柳を移植する。また、合歡2本を移植する。	
	閏11月24日	植木屋、竹垣をつくり、ぶどうだなを修復する。	
	3月8日	浅きさくら・山吹・木蓮・梨子・李等、庭の花が盛り。	
	5月25日	南東の薄紅花の豊後梅等の実を採る。	
	8月1日	大風のために玄関前の建仁寺垣が百日紅とすれ合って破損する。若木の唐梅が2、3本吹き倒れる。淡雪梨の実が残らず落ち、古河梨も実が30個あまり吹き落とされる。	
天保4年 (1833)	9月5日	梨の実を採る。	
	9月25日	裏庭の大柿を隣家の榎本家の者に盗まれる。	
	12月24日	雪のため、表門脇のもちの木の花が折れ、庭前の唐梅の若木が倒れ、裏の朝鮮桔榴の大枝が裂ける。	
	7月19日	日照りで小木・赤松・霧島つじなどが傷む。	
	7月25日	日照りのため、椿・柿の類、額草・浅麻つじ・赤松等枯れかかる。	
	9月2日	御所柿を12個ほど採る。	
	9月29日	上野広小路で菊4株を買う。	
	冬	(移転)	
	5月15日	植木屋富蔵に松の緑を払わせる。	
	5月20日	母入草大株3株を畑に植えさせる。	
	8月23日	富蔵に枯竹・枯桜を切らす。	
	8月28日	富蔵に菜園などを掃除させる。	
	8月29日	富蔵、松2本を手入れする。	
	4月9日	藪の中の樺の大木を切り倒す。	
	5月13日	竹藪の竹150、160ほどの内、65本ほどを残して1両1分で売却する。	
	5月20日	藪の垣根をつくる。	
嘉永2年 (1849)	5月21日	植木屋富蔵が「かなめ」1本を持参する。132文払う。	

《常緑針葉樹》 槇・五葉松

《常緑広葉樹》 山茶花(ツバキ)・榊(サカキ)・かなめ(カナメモチ)・霧島つゝじ・浅麻つゝじ(?)・丁子

《落葉広葉樹》 林檎「りんご」・野梅・紅梅・青軸梅(ウメの栽培品種)・鶯宿梅・養老梅・葡萄「ぶどう」・泡雪梨・古河梨子・百日紅(サルスベリ)・浅黄桜(サトザクラの一種)・長崎なでん(サクラの園芸品種)・柘榴「ざくろ」・御所柿・木蓮(モクレン)・白萩・てまり(オオデマリ)・橡(トチノキ)・額草(ガクアジサイ)

《シユロ・タケ類》 棕櫚

《草本類》 なでしこ・そてつ菜(ソテツナ)・糸薄「糸すゝき」(イトススキ)・老母草(?)・鶏頭・へちま・ゆりの花・と

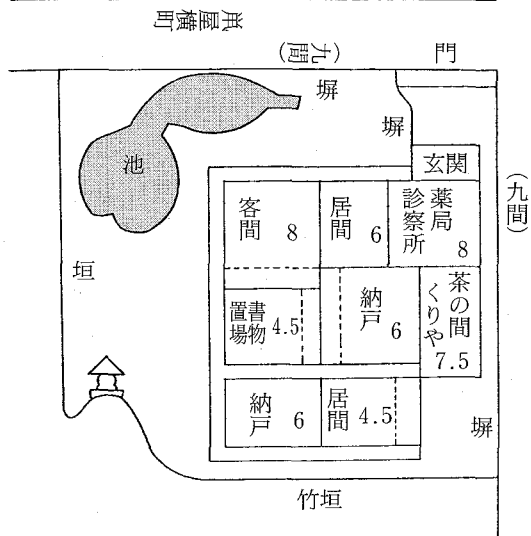


図6-10 滝沢馬琴邸の概略図(『真山青果全集(17)』講談社, 1975年)

《花園・花圃・花畑》 菊・水仙
《西境》 「常貞家との境」 柳

主屋は南面していて、その前面に園池を設けた主庭があり、東側にも庭は続いていて、奥庭と呼ばれる部分になっていたらしい。北側は裏で、ここにはカキ・ザクロ・スモモ・ウメ・ナシなどの果樹が主に植えられていた。門から玄関に至る前庭は南西側に位置していて、図では小面積だがシダレヤナギやマツが植栽されている。西側のことがほとんど書かれていないのは、図のように狭かったからと考えられる。東戸口の戸袋の陰に小花壇が設けられているが、大きい花園も東側なのだろう。この花園内には花壇も置かれていた可能性が高い。この他、所在場所は不明だが、以下の植物が植えられていた。

らの尾(オカトラノオ)・花さふらん(クロッカス)・岩ひば・葉蘭(ハラン)・山午房(ヤマゴボウ)

馬琴はこれらの植物を、絶えず場所を変えて移植している。庭園形態を一層美しくするよりも、庭いじりをしたくて仕方なかったように感じられる。花壇にはさまざまな草花を植え、垣根ではアサガオ(るり八重・茶台・ぱんど)を栽培し、採種も行なっている。ウメは実を漬けたりしているが、種類が多いのは花を楽しんだからだろう。ブドウは場所が不明だが、棚が設けられていて、天保二年八月四日には一一〇房あまりを収穫している。これを須田町の池田屋に二朱と一四八文で売っているが、毎年この慣例だった。こうしたことは、当時一般に行なわれていたことなのだろうか。

日記から見る限り、馬琴は気難しい上に吝嗇で偏執狂的な性格のようだが、一面気が弱いところがあった。地主杉浦氏との境界争いでは、その性格が現れている。天保二年四月六日の条に、垣外へ出ているスモモの枝が邪魔になるので切るように、杉浦氏から言ってきたとある。言い争うことも無駄なことと思って承諾したところ、杉浦の方で植木屋に言い付けて東側の枝を残らず切り捨ててしまった。「彼人々のいたし方、万事かくのごとし。嘆息々々」と馬琴は嘆いている。江戸の密集した町屋においては、こうした樹木に関連した境界争いが、少なくなかったのだろう。

天保七年の移転後の家では、馬琴はマツの手入れをし、畑に母人草(ハハコグサ)を植え、藪のタケの手入れをして枯れたタケや大木を切っている。竹林を一部切り開いたのは、庭園にするためなのだろうか。晩年、馬琴は眼病を患って視力を失っている、思い通りには作庭することができなかったのではないだろうか。

(三) 宿場本陣の庭園

地方の状況を見てみよう。街道の宿場に置かれた本陣は、大名などの貴人が宿泊するための旅館だった。備後国安郡神辺^{かみ}(現、広島県深安郡神辺町)の本陣である尾道屋菅波家の庭園については、『菅波信道一代記』によって知ることができる。

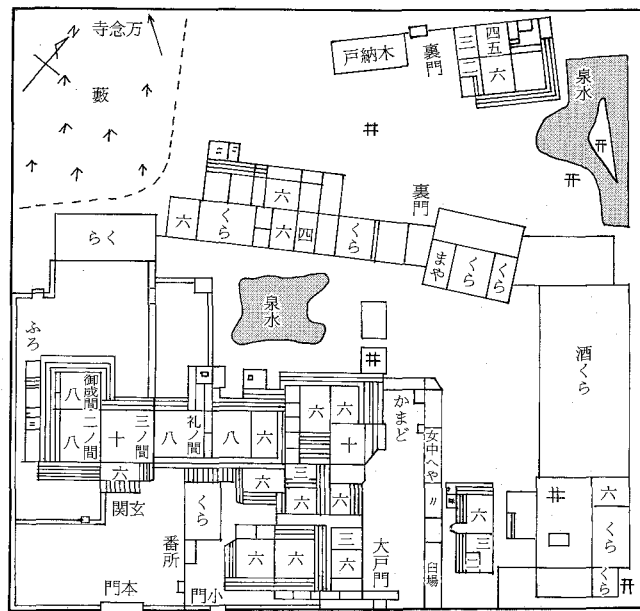


図6-11 菅波家配置図（「神辺本陣絵図」[1832年]模写）

これを場所ごとにまとめると、次のようになる。

《北の庭（御成間の北側）》マツ・モミ・ヒノキ・ソテツ・ヒイラギ・ビワ・ナンテン・ヤツデ・カツラ

信道は菅波家の第一代当主で、尾道屋の再興に尽力し、明治元年（一八六八）に七七歳で没した。尾道屋の建物配置は「神辺本陣絵図」（天保三年「一八三二」）によってわかる〔図6-11〕。街道に面した南側に本門（表門）があり、その正面が玄関で、玄関の左手が御成間になっていた。『菅波信道一代記（後編、巻之十四）』の「庭木の雑木往古より今に残る分有まし愛に記す」という項に、庭園の植栽のことが書かれている。

座鋪（座敷）上間の北の庭に造る、松・柊・南天・ハツ手・樅、次の庭なる梨子の木、猶又玄関の西南の松、本門東の松並杜島花、西に茶山、尤柊木等は、七祖吉郎兵衛植しものなり。上間の御湯殿、北の庭にて檜一本、枇杷一本、囲ひ外柿・榎、八世嘉平うへ置しもの。上間の北の庭樅一本、猶又次に桂一本、表の庭樅三本、十世信恕植置し。糸桜一本、裏表の蘇鉄の類、棒松二本、柳の類、信道是を植し。本門の西百日紅の木一本あり。〔略〕此樹三百年ながき歳霜を経るほと、立樹と思ふになむありける。

《礼の間の庭?》ナシ

《北の庭の囲い外側》カキ・エノキ

《表の庭(二の間の南?)》モミ・シダレザクラ・ソテツ・マツ・シダレヤナギ

《本門と玄関の間》「本門東」マツ・キリシマツツジ「本門西」ツバキ・サルスベリ

代々の家主が、貴人の使用する御成間の周辺の庭園と、本門から玄関までの庭園部分を、整備して植栽を行なっていたことがわかる。サルスベリは安土桃山時代頃に渡来したもののようだが、ここのはすでに三〇〇年近くたっているという。江戸初期に流行したキリシマツツジも、早い時期に入ってきている。日本の各地に植物が行きわたるのに、あまり年月がかかっていないように見える。

信道が庭園を改修したことについては、前編(巻之十二)の「当家旧代の古庭をさつて新に築直す事」と題した項に、「弘化午(一八四六)の春」のこととして経費を明記している。

蘇鉄の代金五両二歩、猶又庭の集め石、其代又もや十二両、猶又数多の植木代、三両一步二朱計り、庭師の手伝日雇賃、其代有増^{あまし}二両二歩、集め合して申すれば、二十三両一步二朱、

蘇鉄は当時「不老富貴の一種」として珍重されていたらしい。ソテツの代金が総人件費の二倍以上であることは、かなり高価だったことを示している。

(四) 江戸の行楽地

名所案内記によって、植物で有名だった江戸の行楽地の植栽について調べてみると、表6-8のようになる。享和三年(一

表6-8 江戸の名所案内記の植物 (19世紀)

書 名	植 物
増補江戸年中行事 (享和3年 [1803])	[2月] 梅 [3月] 桃・桜・摘草 [4月] 牡丹・きりしま・つゝじ・藤 [5月] 杜若 (カキツバタ)・花菱 (タチアオイ) [6月] 蓮 [8月] 萩・花野 [9月] 菊 [10月] 紅葉
江戸名所花暦 (文政10年 [1827])	[春] 梅・椿・桃・桜・彼岸桜・梨花・冬 (ヤマブキ)・堇草 (スミレ)・ 桜草 [夏] 藤・躑躅・牡丹・栲 (センダン)・杜若・卯花 (ウツギ)・ 橘・合歓木 (ネムノキ)・蓮 [秋] 牽牛花 (アサガオ)・七草・萩・菊・ 紅葉 [冬] 寒菊・水仙・寒梅・山茶花 (サザンカ)・枇杷・茶の花・楠・ 松
東都遊覧年中行事 (嘉永4年 [1851])	[1月] 梅 [2月] 彼岸桜・桃 [3月] 桜・きりしま・つゝぢ [4月] 牡 丹・藤・杜若花 (カキツバタ)・芍薬 [6月] 蓮 [7月] 秋草 [8月] 萩 [9月] 菊・紅葉
武江遊観志略 (安政6年 [1859])	[1月] 梅・柳 [2月] 彼岸桜・単衣桜・八重桜・桜草・椿・[3月] 桃・梨花・山吹・躑躅・霧島 [4月] 牡丹・燕子花 (カキツバタ)・藤・ 卯花・芍薬 [5月] 花菖蒲・合歓木・石竹 (セキチク)・撫子 [6月] 蓮・牽牛花 [7月] 秋七草 [8月] 萩・花野 [9月] 菊 [10月] 白膠木 (ヌルデ)・紅楓 [12月] 室咲梅・福寿草・ユキワリ草 (ユキワリソウ)

八〇三)の『増補江戸年中行事』では植物の種類が少ないが、文政十年(一八二七)の『江戸名所花暦』以後では増加している。物見遊山が盛んになるにつれて、さまざまな植物の名所を訪れたいという要望が強くなっていったからだろう。『武江年表』の文化十二年(一八一五)の項に、「今年より肇まり、朝貌(アサガオ)の異品を^{もてあそ}玩ぶ事行はる」とか、嘉永二年(一八四九)の項に、「近年花菖蒲(ハナショウブ)を愛する人多く、葛飾郡堀切村わけて多し」とあるように、植物には流行があった。これらの植物を栽培した場所が、つぎつぎに名所になっていったように感じられる。

江戸中期には、民間では亀戸の地主喜右衛門の梅屋敷が有名な程度だったが、後期になると個人が経営する庭園が数多く出現するようになる。屋敷・店名と栽培植物を調べてみると『江戸名所花暦』では、

梅屋敷(梅)・百花園(梅・牡丹・七草)・宇米茶屋(梅)・蒲田村
和中散(梅・杜若)・新吉原(桜)・南新川農家の新平園中(梨
花)・深山玄琳庭中(牡丹)・北沢邑村長園中(牡丹)

などがでている。

嘉永四年の『東都遊覧年中行事』では、

亀戸梅屋敷〔梅〕・百花園〔梅・牡丹・杜葛花^{かきつばた}・芍薬・蓮・秋草・萩〕・小村井村孫左衛門梅園〔梅〕・木下川名主次郎兵衛の梅園〔梅〕・吉原仲の町〔桜〕・王子深山氏〔牡丹〕・四ツ谷新町百姓の庭〔牡丹〕・上北沢鈴木氏〔牡丹〕

などの名が見られる。サクラやカエデを植えた個人の屋敷が少ないのは、これらは数が多いことが必要で、面積的に広くないと無理だからだろう。ウメやナシが多いのは、果実を採ることで採算がとれたからと考えられる。

安政六年（一八五九）の『武江遊覧志略』になると、

百花園〔梅・山吹・牡丹・燕子花^{かきつばた}・芍薬・牽牛花^{あきがお}・秋七草・萩・菊〕・亀戸梅屋敷〔梅〕・大森蒲田山本園中〔山吹〕・上北沢村鈴木某園中〔牡丹〕

というように、百花園が特に目立つ存在になっている。当時のこうした個人経営の庭園植栽がどうなっていたかを、百花園を例として見てみよう。文化十一年の序を持つ釈（津田）敬順の『十方庵遊歴雜記』（以下『遊歴雜記』と略す）の第三編之上（第二十二）には、「寺島本田新梅屋敷」として説明されている。所在地は向島の寺島村（東京都墨田区）で、規模は二町（二町は約一〇九メートル）四方ほどだったらしい。所有者は表向きは百姓平兵衛と名乗り鞠塙^{きくわ}とも号していたが、本当は仙台生まれの道具屋で、喜多平という名だった。

文化二乙丑年百姓地面二ツ三ツを一円にし梅園に植込しか、〔略〕年を追て人集ひ来るまゝに、文化六庚午年より春秋の草花を植込、〔略〕

最初は梅園をつくったのだが、次第に人が見に来るようになってからは、四季の草花を植えるようになったように見受けられる。『遊覧雜記』に書かれている植栽をまとめると、次のようになる。

藥草八百余种・萩・木槿^{もくぎ}（ムクゲ）・桔梗（キキョウ）・菫萱（カルカヤ）・女郎花（オミナエシ）・常夏（ナデシコ）・仙翁花^{せんのおうけ}（セ

図6-12 明治時代の百花園（『風俗画報第[162号]』1898年）

ンノウ）・観音草（キチジョウソウ）・ふじはかま・日々草（ニ
チニチソウ）・蝦夷菊（エゾギク）・益母草（メハジキ）・小車
の花（オグルマ）・灸花（やいとほなヘクソカズラ）・紫苑（しおんシオン）・水
引（ミズヒキ）・犬蓼（イヌタデ）・野菊・鳳仙花（ホウセン
カ）・白粉花（オシロイバナ）・葉鶏頭（ハゲイトウ）
また、園池には以下のものが存在していた。

紅白の蓮・杜若・河骨（コウホネ）・沢瀉（おもたかオモダカ）・花菖蒲・
花がつみ（マコモ）・萍の花（ウキクサ）

非常に植物の種類が多く感じられるが、明治三十一年（一八九
八）の『新撰東京名所図会』（『風俗画報第一六二号』所収）の百花
園の図を見ると、ほとんどの場所をウメが占めている（図6-
12）。わずかな隙間に草花が植えられていたのだろう。先の『江
戸名所花暦』と『東都遊覧年中行事』と『武江遊覧志略』の比
較でわかるように、その後も花の流行を追って、少しずつ種類
を増やしていったように思える。

鞠場が庶民に対して楽しめる場所を提供したと言えは聞こえ
は良いのだが、実際はそうではなかった。『歴遊雑記（三編巻之
上）』は次のように嘲罵している。

唯強欲に座敷借人のあれかし、花呉る客のあれかしと他出（外出）もせで、見物の人の風体を胸算用して渡世するは、隠者の贗にせものにして「略」

こうした状況は、上北沢村（世田谷区）の庄屋鈴木左内の牡丹園でも見られたようで、『歴遊雜記（五編巻の下）』に、内庭に秘蔵し造り置く絶品の牡丹を見たと問たねれば、料理申付て（注文）の上ならでは主（主人）不興のよし。とある。都市においては、人びとは金銭を払って風流を味わっていたことになる。

四 江戸時代の植栽技法

（一）樹木・草花の販売

京都の植木屋

江戸時代の庭園植栽について、樹木販売の点から見てみたい。江戸前期の京都での植木の入手方法については、『舜旧記』と『隔簾記』によって知ることができる。先に述べたように『舜旧記』の慶長十七年（一六二二）四月二十一日の条に「三条衣棚町の芍薬花」を見物したとあるから、同二十年五月三日の条に「京三の花作り三人来たる」と書かれていることを合わせると、三条衣棚町（中京区三条通り室町西入る）にシャクヤクなどを栽培・販売していた業者が存在していた可能性が考えられる。『舜旧記』の慶長十九年八月二十六日の条に「因幡町の花作り来たる」と述べられているが、因幡町は現在の中京区蛸薬師通り大宮西入るに当たっていて、三条衣棚町に近い。

また、梵舜は元和四年（一六二八）閏三年二十五日に、北野神社（京都市上京区）の参詣の帰りに「芍薬の花作りの所」に寄っている。北野神社の近くにもシャクヤクを栽培して販売する店が存在したと推測される。室町時代にすでに京都の千本には樹木を販売する者がいたが、地理的に見てこの後継者なのだろう。『隔笈記』の慶安三年（一六五〇）四月二十四日の条には、

善首座を召し連れ、北野菅神に詣でて、北野の草花屋・木屋を見物せしむるなり。

とあって、北野神社の近くに草花を売る草花屋と、樹木を売る木屋が登場していることがわかる。

貞享三年（一六八六）刊行の『雍州府志（六）』になると、さらに店の数は増加していて、

北野の種樹家、諸品樹木、高低大小好む所に応じてこれ売り、また、柿梨橘を接ぐ。およそ一切の果実あるいは花木、草部に至るまであらざるなし。〔原漢文〕

と説明されている。物見遊山が盛んになるにつれて、さまざまな植物の名所を訪れたりした後は、珍しい植物を栽培してみたいと思う人びとも多くなったのだろう。

近世、草花を上・中・下の三段に分け、百種に限り、価の貴賤に応じてこれ売る。

と、『雍州府志』は説明している。

『京羽二重^{はぶたえ}（巻一）』（貞享二年）は植木屋が存在していた場所として、「一条通 東はからす丸通より西へ北野七本松まで」と「七本松通 一条通のにしのはづれ川崎のくわんをんの前のとをり」があるとしている。北野の周辺の植木屋というのは、東西にはする一条通と南北にはする七本松通の北野神社に近い部分に、分布していたことなのだろう。江戸前期の京都には花木や草花を栽培・販売し、庭園の手入れまでする専門業者が何軒も出現していたことは間違いない。

大坂の植木屋

江戸前期の大坂の状況については、『人倫訓蒙図彙(巻四)』(元禄三年「二六九〇」)に、「植木や「略」大坂は道頓堀、天満天神の前」とある。また、中期については、志田垣与助編『難波丸綱目(四)』(安永六年版「二七七七」)に、

うへ木や 高津吉介・下寺丁・天満天神社内・同表門・同う
らもん・北野寺丁・新丁外口

と書かれている。後期については、晁鐘成(一八六〇年没)著『撰津名所図会大成(巻之四)』の「種樹屋花園」の項に、次のように記されている。

凡浪花に於て栽種うえきを粥ひきぐ家普あまねく下寺町及び天満等に集り、其
余北野・曾根崎或は難波の新地、尚諸所に有といへども、就中なかんづ
高津こうづの吉助を以て魁とす。

道頓堀(大阪市中央区)は芝居小屋がいくつも存在していて、人が集まる場所だったから植木屋も店を出すようになったものだろう。天満天神(北区)周辺の植木屋は天神の参詣者を対象としていて、江戸時代を通して繁盛している。ここの植木の仕入

図 6-13 大坂高津の植木屋(『撰津名所図会』18世紀後半)

先については、岡田倭志著『摂陽群談（巻第十六）』（元禄十四年「二七〇二」）に、「細郷谷樹 同郡木部・中河原・東山等山里に造り、大坂天満の植木屋に送る」「同（山本村）植木 同所より大坂天満の市店に荷出」とあつて、植木の生産地だった細郷谷（大阪府池田市）や山本（兵庫県宝塚市）から天満に出荷されていたことがわかる。

高津（中央区）の吉助については、『近世風俗志（守貞謄稿（巻之五）』（慶応三年「一八六七」）に、

樹木屋 染井村・巢鴨村に多し。〔略〕京坂同業の及ぶ所にあらず。ただ大坂高津の樹木屋吉助のみこれに比ぶか、あるいは及ばざるか。江戸は盛なる者数人。

と、江戸の染井や巢鴨の植木屋に劣らないほど大々的に商売をしていたことが述べられている。秋里籬島著『撰津名所図会（巻四）』（寛政六年「二七九四」・八年）の「二井」の図から、その状況を窺うことができる〔図6-13〕。図中に「諸州へ船にて積送る也」と記されていることからすると、全国的に植木の販売を行っていたと推測される。下寺町（天王寺区）の植木屋については同書に、

下寺西側に軒を列ぬ。平生に諸方より栽種をこゝに運送し、市を立て交易す。頗る繁昌なり。〔略〕石解・竹蘭の小さ鉢ものより、松・梅の大木まで庭にそだてゝもとめに応じてこれを粥ぐ。いづれも風流に饗堂をしつらひて客をもてなせり。

と書かれている。マツやウメを庭で育てていたということは、各店が植木を仮植しておく植溜を持っていたことになる。

北野寺町（北区）の植木屋については、白縁斎梅好著『浪花の梅（五之巻）』（寛政十二年）に、「同（常安寺）御社内少北、植木屋の牡丹の花は年毎に遠近の遊人群をなす」と記されていて、ボタンの覆いた屋や植木鉢を置いた座敷、植溜の樹木を描いた図が掲載されている。新町（西区）は幕府公認の遊廓で、江戸の吉原や京都の島原に並ぶものだった。『浪花青楼志（六）』（宝暦九年「二七五九」）には、

三月花市 瓢箪町東口より一丁目十字街^{つじ}左右両側とも、桜桃花・手まり花など、毎年花の市をなせり。凡明暦の比より例年三、四月の間売来れり。

とあるから、明暦年間（一六五五—一六五七）からすでに一〇〇年続いていた花市ということになる。難波新地（中央区）は江戸中期に開発された場所ので、『摂陽奇観（巻之三十五）』には安永七年（一七七八）に「植木・鉢植・細工の見せもの」などの店が出ていたと説明されている。

これらの植木屋が明治になって衰退していったのは、都市化のために植木を仮植えしたり、育成しておく土地が消失したためではないかと考えられる。

江戸の植木屋

大都市では発展するにつれて樹木の需要が高まっていったらしく、江戸でも同様の現象が見られる。元禄三年（一六九〇）刊行の『増補江戸惣鹿子名所大全（巻の五）』の「諸職諸商人有所」の項に、次のようにある。

植木や

一下谷池のばた 京橋長崎町広小路 神明前三島町 駒込そめ井 四谷伝馬町 其外方々に有といへども不計なり。

池のばた（台東区）は寛永寺のことで、神明前は神田明神（千代田区？）を意味している。同年に刊行された『人倫訓蒙図彙（巻四）』の「植木や」の項には、「江戸は下谷、本江^{ほんどう}、麻布にあり」と記されている。武家屋敷・町屋の庭づくりが盛んになり、植木屋も増加したということなのだろう。

江戸中期については『武江年表』によると、前に述べたように正徳年間（一七一—一七一五）に江戸では染井の植木屋、伊藤伊兵衛が霧島躑躅の栽培で有名になっている。三之丞伊藤伊兵衛が書いた『花壇地錦抄』（元禄八年）の序には、

ここに染井の畔、菴間ほとり（田舎）に耕夫のそれがし、農業なりわいのいとまから（唐）のやまとのくさぐさをあつめて、〔略〕

とあるから、伊兵衛は農業のかたわら、樹木や草花の栽培を始めたらしい。この本には牡丹・芍薬・椿・躑躅・さつき・桜などについてさまざまな品種が列挙されているが、彼が成功したのは、多くの華やかな園芸品種を育成した点にあったのではないだろうか。『公益地錦抄』（享保四年〔一七一九〕の序に伊兵衛は、

後年の今や孫苗芽まひなえめだちて花葉おかしく、苳ひこばえはすえ裔の異形になるもの或は所々より珍花といひておこせるもの積殖せきじやくして繁茂なれり。

と、多くの新品種が誕生していたことを記しているが、こうしたことがますます人びとの興味をそそり、店は繁盛していった。

江戸後期のことについては、『近世風俗志（巻之五）』に「樹木屋 染井村・巢鴨村に多し。各庭を広くし、珍花異樹を蓄へたり」とあるように、大規模な植木屋は江戸に多く、中でも染井・巢鴨は盛んだった。この頃の染井のことについては、万延元年（一八六〇）から翌年にかけて日本で植物採集を行なった、イギリスの園芸学者ロバート・フオーチュン（一八一二—一八八〇）が次のように印象を書き残している。²²

私は世界のどこへ行っても、こんなに大規模に、売物の植物を栽培しているのを見たことがない。植木屋はそれぞれ、三四エーカー（約一万二〇〇〇—一万六〇〇〇平方メートル）の地域を占め、鉢植えや露地植えのいずれも、数千の植物がよく管理されている。

染井の植木の生産は、質量ともに世界的に見ても一流の域に達していたことになる。

(二) 植木の価格

江戸時代の価格

江戸時代の植木の価格がどのくらいだったかを、まとめてみると表6-9のようになる。京都の鹿苑寺（金閣寺）の園池に植えられていたハスは、一根当たり銀三分（二分は一銀目^{ぎんめ}（匁）の一〇分の一）から一匁だったことがわかる。寛文四年（一六六四）の草花の種子は、ハス一〇根の価格に相当するから、珍しいか、あるいは量的に多かったのだろう。

『竹橋余筆』の寛文四年のものは江戸城の二の丸庭園に植栽された分だが、繁雑なので簡略化して記載した。その他の名桜としては、「わしの尾・水かみ・とうがんこし・しほかま・たいさんふく・やうきひ・あさぎ」など多くのものがある。これらは標準価格を、樹高が三間（約五・四メートル）のものを三〇匁と決め、一尺ごとに一匁六分六厘六毛ずつ上げている。現在では、樹高・幹周・枝張によって規格を統一しているが、江戸時代は樹高を基準にしていたように見える。価格は一番低い二間三尺五寸（約四・七メートル）の「しほかま」で二五匁八分三厘三毛、一番高い六間三尺（約一二メートル）の「わしの尾」で六一匁六分六厘六毛となっている。高さは五寸（約一五センチメートル）単位で測っていたらしい。天保十三年（一八四二）八月に、金一両が銭六貫五〇〇文（一貫は一〇〇〇文）と定められている。²³金一両を銀六五匁として換算すると、弘化三年の蘇鉄は銀三三五匁二分、嘉永二年の「かなめ」は銀一匁三分二厘となる。金額からすると、「かなめ」は小木だったと考えられる。

現代の価格との比較

平成十四年（二〇〇二）八月現在では、東京都での「こしひかり」の最低価格は一〇キログラムが四一五八円で、各地の標準値に近い。これを基準とすると、米一石（約一五〇キログラム）は、六万二三七〇円となる。元禄十三年（一七〇〇）まで金一両が銀五〇

表6-9 江戸時代の植木の価格

年 月 日	植 物	本数	金 額	出 典
寛永18年(1641) 3月8日	藕(ハス)	10本	白銀8錢目(匁)	隔蓑記
慶安元年(1648) 3月10日	藕	10茎	6錢目	同上
承応3年(1654) 3月13日	藕	10根	白銀3錢目	同上
寛文元年(1661) 3月8日	白蓮	20茎	白銀6錢目	同上
3年(1663) 3月20日	蓮	20根	6文目(匁)	同上
4年(1664) 3月22日	草花種	不明	3錢目	同上
6月	ふげんざう桜(樹高3間)	1本	23匁	竹橋余筆
	丸山・ごんべい桜(樹高3間)	1本	30目(匁) 5分	
5年(1665) 6月	みつ木(ミズキ)	5本	79匁4分4厘1毛	同上
	ことう桐(アオギリ)	3本	34匁8分3厘2毛	
	ほうかしわ(ホオノキ)	3本	48匁3分3厘2毛	
	杉	30本	125匁1厘	
10月29日	南天	1根	銀6文目	隔蓑記
6年(1666) 2月24日	藕	10本	10錢目	同上
文政10年(1827) 4月23日	朝鮮ざくろ(ヒメザクロ)	1本	300文	馬琴日記
弘化3年(1846) 春	蘇鉄	不明	5両2歩(分)	菅波信道一代記
嘉永2年(1849) 5月21日	かなめ(カナメモチ)	1本	132文	馬琴日記

匁で、米一石が一両という相場だったから、銀一匁は一二四七匁に換算できる。寛文四年のその他の名桜は、二間一尺(約四・〇メートル)で二一匁六分六厘六毛だから、二万七〇一七匁になる。『建設物価』(二〇〇二年八月号)では、樹高四・〇メートルのサトザクラが東京で二万二〇〇〇匁とされている。こうしてみると、サクラは現代に近い価格であると言える。他の樹木は寸法が不明なので比較は難しいが、現代と大差がないのではないだろうか。

ところで、賃金を調べてみると、『隔蓑記』の寛文三年(一六六三)五月二十一日の条では、樹木の剪定を行なう木作の吉左衛門に、一日の手間賃として銀子二匁が与えられている。『馬琴日記』では文政十年(二八二七)十一月四日に植木屋の手間賃が「四人分十二匁」、天保五年(二八三四)五月八日には値上げされて一人分が三匁五分になっている。江戸初期の一日の賃金二匁は、換算すると二四九四匁となり、かなり低い。現在、東京での造園工の賃金は一日一万七〇〇〇匁とされているから、労働賃金は現代の約七分の一というように、非常に低いことが江戸時代の特色だったことになる。

(三) 配植・移植・剪定技法

配植の仕方

江戸時代の作庭技法を知るのには、北村援琴が享保二十年（一七三五）に書いた『築山庭造伝』と、秋里籬島が文政十一年（一八二八）に北村の著書を補い、さらに自説を述べた同名の『築山庭造伝（前・後編）』が参考になる。庭園内の樹木の配置、すなわち配植について北村著『築山庭造伝』は「本所離別」を説く。「深山に生べき物を水辺に植、水辺に生ずる物を野山にうゆべからず」という、自然の生態に従った写実的な配植方法だが、これは室町時代の『山水並に野形図』にすでに述べられていることで、受け売りにすぎない。だが、秋里著『築山庭造伝（前・後編）』は生花・書道などにならって、築山・平庭様式の庭園のつくり方を、真・行・草の三段階形式に類型化する方法をとっている。「真の築山」の場合には、庭の中心になる正・真木、庭の景を養うという景養木、庭を物静かにする寂然木、滝の背後に植える滝囲、離れた所にあつて単独で景になる夕陽木、堀際に植える見越松、池に覗くように植える流枝松を植栽する〔図6・14〕。

この配植の仕方は正真木を中心に、これに釣り合った形に景養木・寂然木を植え、この三本に対抗するように夕陽木を置き、目立つ工作物に合わせて滝囲・見越松・流枝松などを添えるというものだった。「行の築山」だと、正真木・寂然木・夕陽木が主だったものになり、「草の築山」だと、中央奥に寂然木、右手に夕陽木を置く程度に簡略化した形になる。この配植の原理は、樹木の持つ雰囲気や形状を重視して、均衡のとれた形に配置するということなのだろう。

予算や敷地の広狭などに合うように、真行草の三形式に分けて図で規範を示したが、秋里著『築山庭造伝（前・後編）』が一般の人びとに好まれるようになり、後世まで強い影響を与えることになった理由だろう。しかし、類似したものがつぎつぎにつくられたために、江戸後期の庭園は独自性がないという結果になっている。

移植技法

北村援琴著『築山庭造伝』に追加した部分で秋里は、樹木の掘取り・鉢巻・植え付け方法について、当時行なわれていたことを詳しく述べている。それらはすべて今日でも行なわれている技法であり、根と土が分離しないように注意していることは、根と土が分離すると毛根が空気に触れて成育しなくなるので、科学的に見ても正しい。しかし、それらの技法は植木屋と呼ばれた人びとが考え出したことではなかった。『花譜(巻之上)』の中で貝原益軒(二六三〇—一七一四)は、

齊民要術曰、凡樹をうつすに、根の鬚をそこなふべからず。根盤を潤くほりて、根の宿土をさるべからず。

と、中国の北魏の時代(三八六—五三四)に賈思勰がまとめた『齊民要術』を引用している。鉢巻については、

農政全書曰、樹をうつすには、薦を以て、根をつゝみ、日にあたらしむべからず。車にのせてしづかにひく。

というように、技術的には未熟な方法だが現代と同様の仕方があったことを、明代に中国の農書を集大成した徐光啓著『農政全

図 6-14 真の築山の図 (『築山庭造伝 (前・後編)』1828 年)

書』(一六三九年)を貝原は引用して示している。

また、植え付けについては、

齊民要術曰、「略」まづあなをふかくほりてより、木をうへて水をそゞぎ、土を攪かきて薄泥のごとくにし、四方にうごかし、良久よくして泥土根の間に入て後土を下し、かたく築べし。

と、ほぼ秋里籬島と同じ説を紹介している。樹木の移植技法は、江戸前期にすでに確立していたと言えるわけだが、引用されている書名からわかるように、これらは農民が有用な樹木を移植するのに必要な技法だった。植木屋の出身に農民が多かったことから、技術が庭木に応用されたのだろう。

北村援琴は『築山庭造伝』に、「松の植やうの秘伝」として次のように書いている。

松は二月に植てよし。湿気を嫌ふ故に下へ炭の粉、木の葉を入、根へ蒟蒻こんじやくを入植べし。折々川芎せんきゆう(セリ科の多年草。薬用)を煎じ冷かけてよし。

これに対して宮崎安貞の『農業全書(巻之九)』(元禄十年「一六九七」刊行)の松の項は、

うゆる法、春二月初より半までの間をよしとす。此時節根の土をよく付けて深くうへ、きびしく踐付ふみくれば枯るゝ事なし。

殊更ことさら雨を見かけて栽ゆべし。

と簡単に説明している。川芎は効果がある薬だが、コンニャクは少々疑問がある。一本の木に対してさまざまな養生を試みるのは、庭園内の樹木が数少ないからできたことだろう。農書には多くの樹木について、移植や手入れの方法が詳細に述べられているが、その水準にまで作庭書は達していない。趣味的な技法にとどまってしまったのは、庭園というものの性格なのだろう。

剪定技法

樹木の剪定については、秋里が『築山庭造伝(前編)』に「木造りの事」の項を付記している。これによると、マツの手入れについては使用道具の違いから、「鎌割^{はきわり}、挟割^{はさみ}、指割^{さし}、葉刈^{はぎ}」があると述べている。指割は「指にて古葉をもぎ落し能念^{よき}を入れる」ことで、現在も継承されている。また「葉もの透^{すか}し」ということは、「木犀^{もくせい}・檜^ひの類」で行なうとあるように、常緑樹の混み合った枝を取り除くことで、現在も京都などでは行なわれている。この他聞き慣れないものに、「留葉^{とめは}」という技法がある。これは、「留葉に一枚二枚三枚^{なぞ}採^とり」と述べられているように、常緑広葉樹やマツの小枝の先の葉を、一枚から三枚残して、他の葉を取り除くことを意味している。

マツの指割や留葉という技法は、農業技術にはないもので庭木を美しい姿にしようとする努力から生まれた技法だった。非常に手間がかかる仕方のため、高木だと一本の木を仕上げるのに最低でも数人は必要になる。人件費の安い平穏な時代だったから可能だったのだろう。こうした技法も安定した閉鎖的な社会の風潮を示しているように感じられる。今日こうした技術が失われつつあるのは、人件費が高騰したことが大きな原因になっている。

五 江戸時代の特徴

(一) 植物の種類増加

植物栽培の流行

平穏な時代になって庶民の間でも物見遊山が盛んになり、京都や大坂では人びとは寺社を盛んに巡っているが、寺社の境

内に植えられた植物は、種類からすると庭園植栽の影響を受けているものが多い。次第に豪農や植木屋の園中や果樹園、飛鳥山のような郊外の行楽地までが対象にされるようになり、個人が経営する庭園も出現するようになっていく。尾張国でも同様だったらしく、『猿猴庵日記』の文政五年（一八三二）十月の項に、「先月、高須村に、菊をつくり、芸子と呼、客を慰る家賑合」と記されているように、高須（名古屋市中村区高須賀町）では客寄せにキクを飾った茶屋が出現して賑わっている。『尾張名所図会（巻之五）』によると、願成寺西側の薬師堂の傍らの農家が三〇〇種あまりのキクを植えていて、「数十間の花壇に植渡す。暮秋のころ遊人袖をつらね群をなして賞玩す」という状況だった。

庶民が植物に接する機会が増加したのは良いことなのだが、茶屋などで草花を過剰に飾り立てたり、投機のために栽培するという弊害も生まれている。そのために幕府が行なった天保の改革（一八四一—一八四三）では、歓楽地は規制を受けている。『鐘奇斎日々雑記（巻之一）』には、天保十三年（一八四二）七月二十三日に次のような御触が出されたとある。

一、草木・伐り花の類、季節に至らざる珍花を好み候義、増長致し候より多分の失費を掛け、室の内にて養ひ立て、世上え高価に売出し候様に成り行く。奢侈を導き候基に付き、今より珍花は勿論、仮令時節に候共、高料の切花類かたく売買致す間敷く候「原、平仮名混じり漢文」

町人の贅沢をやめさせようとして珍しい植物の収集や高価な花の売買を禁止しているが、水野忠邦によるこの天保の改革は失敗に終わり、嘉永・安政年間（一八四八—一八五九）には再び歓楽地は賑わっている。

新たに登場した植物

これまで個々の庭園や行楽地について、どのような植物が植栽されていたかを述べてきたが、江戸時代には全体的にどのような樹木や草花が出回っていたかを見ておきたい。江戸前期に一般的に知られていた植物は、貝原益軒の『花譜』（元禄七年「一六九四」）によって知ることができる「表6」¹⁰。安土桃山時代までに挙げてきた植物や、木村陽二郎監修『図説草木名彙辞

典』によつて、他の文献にでてゐる江戸時代より前の植物を除くと、以下のものが江戸時代に登場した新しい植物といふことになる。²⁴⁾

フクジュソウ・エドヒガン(ヒガンザクラ)・ヤマブキソウ・ヒメバショウ・オオデマリ・アラセイトウ・テツセン・ヒナゲシ・ダンドク・ビヨウヤナギ・ゼニアオイ・トロロアオイ・コンギク・レダマ・シユウカイドウ・チャラン・ミズアオイ・ルコウソウ・ヒマワリ・スイレン・オシロイバナ・センニチソウ・ロウバイ・オノマンネングサ・カラタチバナ・センリョウ・サボテン・ツルレイシ・トウガラシ・シュロチク・アオキ・ウメモドキ

この中で外来植物としては、

ヒメバショウ・アラセイトウ・テツセン・ヒナゲシ・ダンドク・ビヨウヤナギ・ゼニアオイ・トロロアオイ・レダマ・シユウカイドウ・チャラン・ルコウソウ・ヒマワリ・オシロイバナ・センニチソウ・ロウバイ・サボテン・ツルレイシ・トウガラシ・シュロチク

がある。室町時代までに基本的な庭園用の樹木や草花は出そろつていて、江戸時代に外来種がかなり加わつてゐることがわかる。珍しい植物を人びとがどれほど欲しがつてゐたかが想像できる。江戸初期の南蛮貿易や、その後の中国・朝鮮や長崎出島でのオランダとの交易によつて、新しい植物が輸入されたのだろう。

(二) 園芸品種の増加

植物を栽培することが盛んになつた理由の一つに、園芸品種の増加といふことがある。元和・寛永年間(一六一五—一六四三)は、ツバキの収集・栽培の流行が最高潮に達した時期だったとされているが、京都では慶長・元和年間(一五九六—一六二

表6-10 『花譜』の植物(現代名は主に貝原益軒著・白井光太郎考証『大和本草』によった)

区分	植 物
1月	梅・山茶花(ツバキ)・福寿草(フクジュソウ)・金盞花(トウキンセンカ)
2月	山躑躅(シンチョウゲ)・杏花(アンズ)・辛夷花(コブシ)・小桜(エドヒガン)・垂糸桜(シダレザクラ)・桜(ヤマザクラ)・李花(スモモ)・連翹(レンギョウ)・桜桃(ユスラウメ)・山桜桃(ニワウメ)・玉蘭花(ハクモクレン・シモクレン)
3月	桃花・海棠花(カイドウ)・檳(カリン)・梨・薔薇・月季花(コウシンバラ)・玫瑰花(ハマナス)・餘蔭花(トキンイバラ)・縷糸花(?)・芫花(フジモドキ)・胡蝶花(シャガ)・笑靨花(シジミバナ)・棣棠花(ヤマブキ)・草棣棠(ヤマブキソウ)・牡丹・躑躅・紫藤(ヤマフジ)・花臺(ケマンソウ)・檜樟(マルメロ)・鈴掛(コデマリ)・白乃(シラン)・燕子花(カキツバタ)・鳶尾(イチハツ)・石南花(シヤクナゲ)・美人蕉(ヒメバショウ)・粉団花(テマリバナ)・雪柳(ユキヤナギ)・茼蒿(シュンギク)・馬蘭(ネジアヤメ)・白頭翁(オキナグサ)・桜草(サクラソウ)・庭桜(ニワザクラ)・紫荊花(ハナズオウ)・蝦根(エビネ)・荒世伊登宇(アラセイトウ)・仙台萩・草牡丹(ヤマシャクヤク)・米蕪花(ケシ)
4月	菖蒲花(アヤメ)・錦帶花・鉄線花・石竹(セキチク)・虎耳草(ユキノシタ)・紅花・白丁花・芍薬・小藤(ナツフジ)・杜鵑花・仏桑花(ブッソウゲ)・下毛・卯花(ウツギ)・虞美人草(ヒナゲシ)・檀特花(ダンドク)
5月	橘(タチバナ)・金糸桃(ビョウヤナギ)・鼓子花(ヒルガオ)・紫陽花(アジサイ)・梔(クチナシ)・剪春羅(ガンピ)・萱草(カンゾウ)・夏菊・柘榴花(ザクロ)・蜀葵(タチアオイ)・錦葵(ゼニアオイ)・黃蜀葵(トロロアオイ)・五月菊(コンギク)・鷹爪(レダマ)・合歓(ネムノキ)
6月	蓮・百日紅(サルスベリ)・鳳仙花(ホウセンカ)・風蘭(フウラン)・百合・凌霄花(ノウゼンカズラ)・剪秋羅(センノウ)・秋海棠(シュウカイドウ)・牽牛花(アサガオ)・茶蘭(チャラン)・金沸草(オグルマ)・萍蓬草(コウホネ)・慈姑花(クワイ)・鉄色箭(ナツズイセン)・浮薔(ミズアオイ)・飛廉(ヒレアザミ)・玉簪花(トウギボウシ)
7月	蘭(ラン)・東蒲塞牽牛花(ルコウソウ)・桔梗(キキョウ)・鵝頭花(ケイトウ)・槿花

三)にはシャクヤクの流行があり、正保年中(一六四四—一六四七)にはツツジが流行している。

大坂では時代を追って、「大菊・椿・橘・牽牛花・万年青・石菖蒲・竹蘭」が流行しているが、菊あたりから鉢植えが始まって、庭園に植えて觀賞するよりも鉢植えを楽しむという傾向に変化している。ツバキ・シャクヤク・ツツジなどのさまざまな品種を収集・栽培することが流行したことから、多くの種類にわたって園芸品種の数が増加したように思う。平和な時代になって全国的に交易が盛んになったことなども、作用しているのだろう。

元禄八年(一六九五)に刊行された江戸染井の植木屋、三之丞伊藤伊兵衛の『花壇地錦抄』には、たとえば次のような植物に関しての園芸品種名が掲載されている。

区分	植 物
	(ムクゲ)・丈 菊 (ヒマワリ)・竜胆草 (リンドウ)・躑 桐 (ヒギリ)・紫 苺 (シオン)・ 睡 蓮 (スイレン)・白粉花・午時紅 (ゴジカ)
8 月	鹿鳴草 (ハギ)・木芙蓉花 (フヨウ)・木犀花 (モクセイ)・女郎花 (オミナエシ)・独頭蘭 (シュンラン)・附子 (トリカブト)
9 月	菊・秋牡丹 (シュウメイギク)・鬱 金 (ウコン)・通和 (ツワブキ)
10 月	寒菊・枇杷 (ビワ)・茶梅花 (サザンカ)・海 紅 花 (?)
11 月	水仙 (スイセン)・千日紅 (センニチソウ)・三波丁子 (センジュギク)
12 月	蠟梅花 (ロウバイ)・迎春花 (オウバイ)
草	蘭草 (フジバカマ)・菖蒲 (シュウブ)・石葦 (ヒトツバ)・石斛 (セッコク)・苔・景 夫 (ベンケイソウ)・仏甲花 (オノマンネングサ)・螺醫草 (マメツタ)・忍 草 (シノブ)・ 貫衆 (オニシダ)・茅 藤 葉 (カラタチバナ)・麦門冬 (ジャノヒゲ)・ヤブラン・吉祥 草 (キチジョウソウ)・珊瑚 (センリョウ)・細辛 (ウスバサイシン)・万年青 (オモト)・ 百 部 (キジカクシ)・霸王樹 (サボテン)・竹・籬 (ネザサ)・芭蕉 (バショウ)・錦荔枝 (ツルレイシ)・蕃 椒 (トウガラシ)・芒 (ススキ)・知風草 (カザクサ)・浜木綿 (ハマユ ウ)・木賊 (トクサ)・騰米紅 (ハゲイトウ)・蓴 (ジュンサイ)・苻 (アサザ)・浮萍 (ウ キグサ)・酸漿 (ホウズキ)・万年松 (オノマンネングサ)
木	松・栢 (カシワ)・檜・円栢 (イブキ)・落葉松 (カラマツ)・羅漢松 (ラカンマキ)・樅 (モミ)・柏子 (ビャクシン)・榲 (カヤ)・賢木 (サカキ)・佐和羅木 (サワラ)・杉・唐 杉 (ヤワラスギ)・楊柳 (ヤナギ)・鳳尾蕉 (ソテツ)・櫻欄 (シュロ)・櫻欄竹 (シュロチ ク)・機樹 (カエデ)・冬青樹 (アオキ)・衛矛 (ニシキギ)・梧 桐 (アオギリ)・梓 (キサ サゲ)・黄楊木 (ツゲ)・椎 (コジイ)・スダジイ)・梅茂登岐 (ウメモドキ)・椿 (チャン チン)・木国 (モッコク)・檉 (ダイダイ)・金橘 (キンカン)・多羅葉 (タラヨウ)・枸杞 (クコ)・讓葉 (ユズリハ)・平地木 (ヤブコウジ)

「何々の類」と書かれているので、現代の植物分類とは相違したものであるが、この品種数から見ても、ボタン・シヤクヤク・ツバキ・ツツジ・サツキ・ウメ・サクラ・キクには、収集の流行があったことが推測できる。平穩な時代だったことから園芸に熱中した人びとはあらゆる品種の交配を試みて、このような多くの品種を誕生させたのだろう。多くの園芸品種が庭園に持ち込

牡丹三〇四種(白一五〇種・紅一五四種
「筑前種を除く」)・芍薬一一六種・椿二〇
六種・山茶花三八種・躑躅一六二種・さ
つき一六二種・梅四八種・桃二〇種・桜
四六種・楓二三種・辛夷九種・木樨六
種・柿一四種・竹一二種・百合三七種・
桔梗九種・がんばり九種・瞿麥一一種・石
竹八種・葵七種・花菖蒲八種・朝顔一八
種・夏菊二〇種・杜若一二種・菊二三〇
種

まれて、植栽が一層華やかになったのが、江戸時代の特色の一つと考えられる。園芸品種の栽培を行なったり流通を促進したのが、各地の植木屋や花屋だった。大坂の場合のように樹木を栽培して、植木屋に出荷する農民も存在していた。京都・大坂・江戸以外の史料は少ないが、伊勢国での流行を考えると、地方の植木屋・花屋の活動は無視できないものがある。

第六章 註

- (1) 龍居松之助『近世の庭園』三笠書房、一九四二年。
- (2) 小野佐和子「駿河原宿植松家の帯笑園」『ランドスケープ研究』(五九―五)「日本造園学会、一九九六年、九―一二頁。
- 同「横岡山荘における普請について」『ランドスケープ研究』(六一―五)「日本造園学会、一九九八年、三七―三七八頁。
- (3) 『江戸鹿子』の植物関係の記事については、次のものに抄録されている。
- 今井金吾校注『江戸名所花暦』八坂書房、一九七三年。
- (4) 東京市編『東京市史稿(皇城篇)(二)』博文館、一九二二年、三〇五―三一二頁(復刻、臨川書店、一九七三年)。
- (5) 吉川需『小石川後楽園』東京公園文庫(二八)、郷学舎、一九八一年、一九―二二頁。
- (6) 吉川需、前掲書、二九―四五頁。
- (7) 森守『六義園』東京公園文庫(二九)、郷学舎、一九八一年、五三―八〇頁。
- (8) 吉川需、前掲書、二六、二七頁。
- (9) 森末義彰「椿ブーム(近世初頭の京都における椿愛好)」『植物と文化』(七)「八坂書房、一九七三年(初出「百合女子大学研究紀要(六)」、一九七〇年)。
- (10) 現代和名は次のものを参考にした。
- 加藤要校注『花壇地錦抄』東洋文庫(二八八)、平凡社、一九七六年。
- (11) 現代和名については、主に前掲・加藤要校注『花壇地錦抄』を参考にした。
- (12) 木村陽二郎監修『図説草木名彙辞典』柏書房、一九九一年、一五一頁。
- (13) 『好色二代男』の地名の注釈は次のものによった。
- 『好色二代男』富士昭雄校注、新日本古典文学大系(七六)、岩波書店、一九九一年、一〇〇・一〇一頁。
- (14) 農林省編『日本林制史資料(熊本藩)』農林省、一九三三年、九・一〇頁(復刻、臨川書店、一九七一年)。
- (15) 膳所藩史料を読む会編『膳所藩郡方日記(六)』膳所藩史料(一三)、滋賀県立図書館、一九九三年、四頁。

(16) 前掲『日本林制史資料(福井・松代・高田藩)』一七九頁。

(17) 辻達也『徳川吉宗』吉川弘文館、一九八五年、一四六―一五二頁。

(18) 龍居松之助『茶と家と庭』彰国社、一九四八年、九九―一〇七頁。川添登・菊池勇夫『植木の里』ドメス出版、一九八六年、一二二―一三三頁。

(19) 『広島県文化財ニュース』は次のものから転載した。
原田伴彦編『日本都市生活史料集成(八)』学習研究社、一九八一年。

(20) 前島康彦『向島百花園』東京公園文庫(一七)、郷学舎、一九八一年。

(21) 飛田範夫『大坂の植木屋と花屋』『ランドスケープ研究(六三―五)』日本造園学会、二〇〇〇年、三五七―三六〇頁。

(22) ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳『江戸と北京』広川書店、一九八三年、一〇九頁。

(23) 北島正元『日本の歴史(二八)』中央公論社、一九八〇年、四五六頁。

(24) 木村陽二郎監修、前掲書

第七章 明治・大正・昭和前期の庭園植栽

明治時代（一八六八—一九一一）の庭園植栽となると、江戸時代とは異なり欧米の影響を受けたことで、大きく変化したと考えられる。大正時代（一九一—一九二五）は民衆運動が高まりを見せた時代だが、庭園はどのように変わっていったのだろうか。昭和時代（一九二六—一九八八）には第二次世界大戦が起こり、戦後は社会の様相も激変している。戦前と戦後の庭園・造園の変化を比較することは興味深いことなのだが、昭和をすべて調べるのには、あまりにも資料が多すぎて整理が不可能なので、第二次世界大戦終了までを昭和前期として考察することにした。

一 「文人風」から「自然風」へ——明治・大正時代の庭園

（一）文人風の庭園

明治の初期には、どのような庭園植栽が流行していたのだろうか。庭園史家の小沢圭次郎（一八四二—一九三三）は「明治庭園史」に、^①



ヒマワリ
（『草花絵前集』より）

明治維新後は、東京に於ても、文人風の庭園、頻に流行して、「略」誰も彼も梧桐と寒山竹の寄植を作り、其脚跟粧点に、立石、若しくは臥石を以てせり。

と述べている。小沢によると文人風の庭園は、江戸時代に煎茶の流行にともなつて畿内で生まれ、江戸に伝わつたものといふ。

明治十年（一八七七）以前につくられた東京の招魂社（後に靖国神社と改称）の庭園はその事例の一つで、「梧桐・寒山竹・白木蓮（ハクモクレン）・百日紅（サルスベリ）・芭蕉・瘦松」が使われている。明治十一年八月十日発行の『東京曙新聞』の「庭園築造の趣味一変」という見出しの記事にも、

真の庭を作るには、松と槇を必ず用ふべき事なりなどといひし植木屋の昔し片氣も煎茶の流行より支那風に移り、此節は梧桐か百日紅か柘榴（ザクロ）がなくては庭にはならぬと、何れの植木屋も同じやうにいふとは、妙に変化するものなり。

と、文人風庭園の流行の激しさが語られている。

京都でもアオギリが流行していたらしく、歛修寺経雄は次のように言っている。

明治六、七年頃より梧桐非常に流行せり。梧桐は時に油布を以て其の幹を拭ひ、其の青色の美を賞し、甚だしきは支那より巨大にして短少なるものを輸入して、茶人者流に悦ばれしも、其の発生する虫の害に大に困難せし笑話も残れり。

サルスベリも同じ時期によく使用されていたようだが、明治十年頃にはどちらも廃れたという。その後京都では明治十年代に、北山丸太の生産に用いられていた「台杉」が庭木としてはやり、日清戦争（一八九四—一八九五）の前後には、ウバメガシの変種である「縮緬榿」が流行し、次には「鉄冬青樹（クロガネモチ）」が人気がでている。今日でも京都の民家の庭園で、チリメンガシの古木を見ることがあるが、この時期のものなのだろうか。

(二) 欧米の庭園の影響

明治の庭園

明治時代には欧米の文物を盛んに取り入れているが、庭園もその例外ではなかった。小沢圭次郎は明治九年（一八七六）に見た田中不二磨（ふじまろ）（一八四五—一九〇九）邸の庭園について、次のように記している。⁽⁴⁾

此庭園は、総べて西洋風の作方に倣ひしものとて、花壇と、樹木植溜うゑだめとを、混合したる光景を現出し、〔略〕円形、又は楕円形の芝原を置きて、其周辺を環行す可く、立石も有らず、臥石すていしも有らずして、〔略〕

この植栽形態は中央に樹木を置いて、その周囲に草花を植えるといった西洋風のものであったように思う。江戸時代には草花は花壇に植えていたため、奇妙に見えたのだらう。芝生広場が大面積を占めていて、そこには円形や楕円形に園路が設けられていた。ひろびろとした芝生広場と幾何学的模様の園路が、人びとの目を引いたのだらう〔写真7-1〕。こうした洋風庭園には外国産の草花が似合うわけだが、一般に西洋草花が流行し始めたのは、前田次郎（曙山）によると明治三十六年ないし三十七年頃からという。⁽⁵⁾ その種類は次のものだった。

シネラリア・プリムラ属・香堇（ニオイスミレ）・アネモネ・鬱金香（チウリツプ）・風信子・ランクユラス（ヒヤシンス）（ランキンユラス）・麝香連理（スウイートピー）・
ダアリア・麝香罌麦（カーネーション）

ダリアは天保十三年（一八四二）に日本に入ってきたとされているが、明治年間に非常に人気があったらしい。前田は「ダアリア程日本の天地を震撼した大勢力者は有るまい」と書いている。

洋風庭園のつくり方については、杉本文太郎が明治四十五年に『西洋庭造法図解』⁽⁶⁾を出版している。この中で杉本は、

写真 7-1 芝生広場を持つ欧米風の庭園（「明治庭園記」1915 年）

西洋的建築に対しては、是非西洋的庭園ならざれば調和いたしませぬ。されど我に純然たる西洋的庭園を造らんには、一には猶ほ未だ其材料を得るに易からざると、二には四圍の風物乃至地勢、習慣等の関係が、能く調節し得ざらしむるものがありますれば、爰には幾分か我邦趣味を斟酌して、試に本書を著し「略」

と、日本で西洋的庭園をつくる困難さを述べている。使用する植物としては、

松・禿松（かむろまつ。枝を少なく仕立てたマツ）・磯馴松（そなれ）
江戸わらび（？）・榧（カヤ）・犬榧（イヌガヤ）・樅（モミ）
柏（ビャクシン）・榲（ツガ）・杉・榲・檜・檜・みさき檜葉・山茶花（サザンカ）・椿・躑躅・岩躑躅（サツキ）・桜樹・楓・薔薇・根笹・蔦類・芝生

などを挙げている。サクラ・カエデは日本的趣味ということだろうか。ヒマラヤスギの名が見えないが、この木は明治十二年頃には渡来して、二十七年に新宿御苑で栽培している。^⑦明治時代にはヒマラヤスギは、一般に広まるまで至っていないのだから。

大正の庭園

大正時代（一九二一—一九二五）は年数の上では短いが、近代的造園学も日本において成立し、明治とは格段の差が生じている。『造園五十題』（昭和三年「一九二八」刊行）の中で、造園家本郷高德（二八七七—一九四九）は、^⑧

庭や其の他、大小の庭園的施設も亦明治時代から確に西洋の影響を受けましたが、大正に入ってから、一段と其の著しいものがあります。

と書いている。そして何が一番影響を受けたかについては、

郊外住宅の建築が所謂「文化住宅」と銘打った、バンガロー式マガヒの流行を見るやうになつてから、新しき庭の設計は自然簡素な洋風類似のものを多く見るやうになりました。

と、郊外住宅とその庭園の洋風化を指摘している。

このような洋風庭園にどのような植物が植えられていたのかについては、上原静子著『家庭園芸と庭園設計』（大正十三年刊）によつて知ることができる。^⑨この本は一般向きに書かれたものなのだが、アメリカの新しい「家庭造園（Home Landscape）」の知識をかなり採り入れている。例えば洋風の庭園細部については、パゴラ・アーチ・トレリス・泉池・時計・小鳥の水盤・小鳥の家などが説明されている。また、「家庭的草花の栽培法」の項には、花壇及び鉢植え用の草花類が数多く示されているが、この中には明治以降に渡来した種類が数多く見られる「表7-1」。

西洋建築にふさわしい樹木として「庭樹の選び方」の項では、

ヒムロ（サワラの園芸品種）・ソテツ・カウヤマキ（コウヤマキ）・シーダー（ヒマラヤスギ）

表7-1 大正時代の庭園草花（『家庭園芸と庭園設計』[1924年]より）

区 分	植 物
一年草	ホウセンクワ（ホウセンカ）・ジャノメソウ（ハルシャギク?）・クジャクソウ（コウオウソウ）・ヒマハリ（ヒマワリ）・チドリソウ（ヒエンソウ）・ハナビシソウ・エゾギク・テンニンギク・マツバボタン・ニハセキシヨウ（ニワゼキショウ）・スキートビー・ヤグルマソウ・ハゲイトウ・コスモス・マガレツト・キンギヨソウ・カーネーション・チヨチユウギク・キンレンクワ（ノウゼンハレン）・ヒヤクニチソウ・センニチソウ・ピジヨサクラ・ハルシアギク・オミナヘシ・サギソウ・プリムラ・シネラリア・ケシ・アラセイトウ・オシロイバナ・アサガホ
二年草	トレニア（ハナウリクサ）・ルカウサウ（ルコウソウ）・ツルレイシ・レンゲソウ・キンセンクワ（キンセンカ）・パンジー・ツクバネアサガホ・ツユクサ・カイザイク・オジギソウ
宿根草	フクジュソウ・ネモフィラ・ガマ・ヒナギク・テツセン・ブツコウソウ（オノマンネングサ）・スズレン・ジュンサイ・カウホネ（コウホネ）・ハス・キキョウ・シノブ・クリンソウ・オキナグサ・シヤクヤク・スギカヅラ・オダマキ・シグラメン・シオン・ススキ・テンニンギク・カンパニユーラ・ハナシヨウブ・カキツバタ・ペゴニア・ヒアフギ（ヒオウギ）・ユキノシタ・コウシヨクキ（トロアオイ）・フクシア（ヒヨウタンソウ?）・アヅマギク・クレマチス・イトラン・ランタナ・カラスウリ・スズメウリ・ツハブキ（ツワブキ）・サクラソウ・ミヅヒキソウ（ミズヒキ）・イカリソウ・スズラン・フロツクス・アルメリア（ハマカンザシ）・シユウカイドウ・トケイソウ・フジバカマ・キンチャクソウ（カルセオラリア）・ヂキタリス（ジギタリス）・キボウシ（ギボウシ）・セキチク・ワスレナグサ・アヅマギク・ヒルガホ・キク・ナデシコ・カーネーション
球根類	ヒアシンズ・フリージア・グロキシニア（オオイワギリソウ）・ガランサス・グラジオラス・スズセン・アマリリス・ダリア・チューリップ・クロツカス・オキザリス・アネモネ・カンナ・ユリ・ランタンキュラス

などの類が良いと述べている。また、その下木としては、

ハクチャウゲ（ハクチョウゲ）・ピラカンサス・ツツジ・サツキ・ヤマブキ・ユキヤナギ・シモツケ・ボタン・アヂササ（アジサイ）・ハシドイ・サンザシ・ヂンチャウゲ（ジンチョウゲ）

などを用いるべきだとしている。欧米産の樹木というよりも、むしろ雰囲気的に洋風建築に合うものを選んでるように見える。

（三）自然風の庭園

軍人であり政治家だった山県有朋（一八三八—一九二二）は、明治二十七年（一八九四）から三十年にかけて無隣庵庭園をつくっている「写真7-2」。伝統的な庭園とは違った明るい感じにしたいと思い、

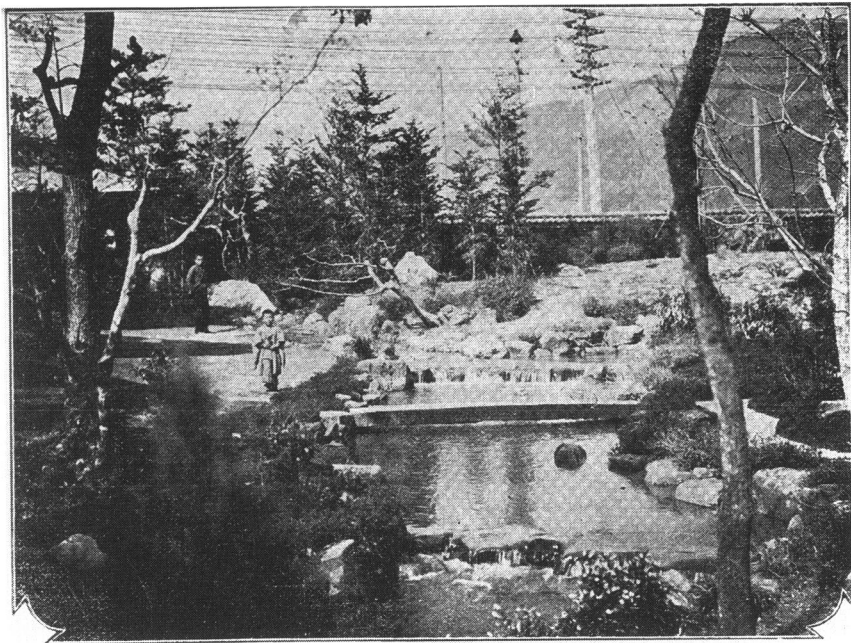


写真7-2 造営当初の無隣庵庭園（『造家と築庭』1900年）

自然的な流れを中心とした庭園にしたと山県自身は語っている。当時使われていなかったモミ・ドウダンツツジ・ヒイラギ・ナンテンなどを植えるように指図して、小川治兵衛を驚かせたりしている。^⑩

このような自然風の庭園をつくることは流行となっていたのだろうか、明治三十三年発行の竹貫直次著『造家と築庭』^⑪には、自然風の植栽の考えが述べられている。

庭園の石組や竹垣などの部分は、秋里籬島著『築山庭造伝（前編・後編）』などをそのまま引用したもののだが、「庭物草木一覧」の項は独自性がある「表7-2」。「柏・漆・欒・枳根・榛・楮・蠟木・槩木」などについては、本文中に「庭木と云ふ程のものにあらざれど」とか、「雑木なれども」と記されている。この項の最初に、

何も雑木なりとて強ちに捨てたものにあらず。雑草なりとて借てたものでもなし。「略」蓋し植物所は自然にあるなり。天理にだに適ひなば風致は自ら其所に生ぜん。

とあるように、自然の摂理に従って雑木・雑草を植えれば、風情があるものになるという考え方を竹貫はしてい

表7-2 明治時代の庭木(『造家と築庭』[1900年]より)

区 分	植 物
針葉樹	松・榧・力木(ナギ)
常緑広葉樹	南天・柃・南天・木樨・山茶花・茶山花(サザンカ)・黄楊・椎・冬青(モチノキ)・素馨・枳殼(カラタチ)・柃・躑躅・瑞香花(ジンチョウゲ)・薛(テイカカズラ)・梔子
落葉広葉樹	桜・蜆花・小米桜(ユキヤナギ)・小手毬(コデマリ)・柳・白楊(ドロノキ)・猿子楊(ネコヤナギ)・水楊(カワヤナギ)・梅・蠟梅(ロウバイ)・金梅蠟(キンシバイ?)・黄梅(オウバイ)・木蓮・天女花(オオヤマレンゲ)・更紗蓮花・辛夷・海棠(カイドウ)・木瓜・草木瓜・連翹(レンギョウ)・檣・錦帶花(ハコネウツギ)・梧桐・桐・柏(カシワ)・漆・櫟・榲桲(マルメロ)・枳椇(ケンボナシ)・榛(ハシバミ)・百日紅(サルスベリ)・合歡木・朴木・竈(ナナカマド)・沙羅双樹・花蘇木(ハナズオウ)・楮(コウゾ)・棕・蠟木(ハゼノキ)・根木・當神樂・紫陽花(アジサイ)・手鞠花(オオデマリ)・額花(ガクアジサイ)・錦鶏兒(ムレスズメ)・浜茄子・木槿・槿木・紫荊(?)・錦木・五架・萩・山吹・忍冬・秋海棠(シュウカイドウ)
シュロ類	棗・棕櫚(ナツメヤシ)・棕櫚・芭蕉(バショウ)
草本類	桔梗(キキョウ)・女郎花(オミナエシ)・稚子花(オキナグサ?)・鴨趾(ツユクサ)・虎年草(ユキノシタ)・龍鬚(リュウノヒゲ)・酢漿・美蔓草(?)・天南星(テンナンショウ)・萱・小杜若(コカキツバタ)・萱・雪割草(ユキワリソウ)・擬宝珠(ギボウシ)・昇麻(トリアシショウマ)・木賊・杜蘅(カンアオイ)・万年草・龍膽(リンドウ)・蓮・金銀蓮(?)・菖蒲(ショウブ)・杜若・蘆・沢桔梗(サワギキョウ)・菰・蒲・梅鉢草(ウメバチソウ)・河骨(コウホネ)・昼顔(ヒルガオ)

る。そうしたことから、これまで顧みられなかった多くの落葉樹を挙げたのだろう。

山県が自然主義の庭園の発案者というよりも、東京の文化人の間では自然に対する憧れが生まれていたのではないだろうか。こうした風潮を文学上の「自然主義」と同一のものと見ていいのが問題になる。文学上の自然主義は一九世紀後半にフランスを中心に起こったもので、現実があるがままに写しとろうとするものだった。日本にも明治二十年代に伝わり、四十年頃に盛んになって、島崎藤村や田山花袋の作品などが書かれている。年代的にみると庭園の方が早く広まっているので、別個な主張だったように見える。結果的には文学上の自然主義が流行するに従って、吸収されてしまったのではないだろうか。

日本の造園学の創始者の一人である田村剛(一八九〇—一九七九)は、『造園概論』(大正七年「一九一八」)の中で、

殊に自然主義の思想は決河の勢で侵入したので、瞬く間に我が思想界は自然主義に風靡されて了つたのである。「略」さうして五坪か十坪の庭に、自然の断片とも思はれる、一叢の林と下草に二つ三つの石を配置した様な小庭が、非常に歓迎されるやうになった。

と思想界の自然主義が庭園に影響を与えたことを批判しているが、明治以来の庭園上での自然主義については言及していない。

(四) 公園の植栽

明治の公園

明治の庭園植栽の状況をより一層明確にするために、当時の公園植栽と比較してみよう。明治六年（一八七三）の太政官布告によつて公園の設置が決定されている。しかし、それは東京では浅草寺・寛永寺、京都では八坂神社・清水寺・嵐山というように、江戸時代からの行楽地だった寺社の境内などが主なものだった。そのため公園の植栽工事を見ても、明治二十年三月に行なわれた東京の芝公園（旧増上寺境内）の場合では、「赤松樹八拾壹本・桜樹五拾本」が植えられているというように、江戸時代と変わりが¹³⁾ない。

公園が都市計画の一環として認識されるようになったのは、明治二十一年の東京市区改正条例によつてだった。これによつて明治三十六年に造営されたのが日比谷公園（千代田区）で、西洋の公園の模倣だったが、運動場・音楽堂・花壇などが設置された画期的なものになっている「写真7-3」。植栽は樹木が約三〇〇種二万四三五〇本、花卉類が約一三五種一万二〇〇〇株植えられている¹⁴⁾。植栽地は幾何学的な形の園路に囲まれていたが、樹木はマツ・カシ・サクラ・ヒノキが多く、特に洋風というわけではなかった。今日、日比谷公園にはクスノキが多いが、これは工業化が進んで煤煙のためにスギ・モミなどの



写真 7-3 日比谷公園の現況

巨木の枯死が起きていたことから将来のことを考えて、煙害に強いクスノキの苗木をシイとシラカシの下に植えるように、設計者だった林学者本多静六（一八六六—一九五二）が配慮したためという。¹⁵ 近代的造林学の知識が応用された植栽ということになる。

自然主義の影響

その一方、公園にも自然主義の影響が見られる。明治から大正にかけて公園の設計を行ない活躍した長岡安平（一八四二—一九二五）は、大正七年（一九一八）ないし八年の稿の中で、¹⁶

特別なる場合の外は、在来其地方に多い樹木灌木を植うるのが最も自然で、殊更に珍木（こしら）を取り寄せたとて、其土地に適さないものゝ栽培は困難であり、且つそれあるが為に風景を佳くするといふ場合は殆んどないのである。

と述べている。そしてさらに、適した良い場所に植えれば樹木は最も美しく自然的な美観を持つものだから、

凡ての樹木は枯枝、病枝、過密の枝葉、並に甚しく眺望を妨ぐるものゝ外は、一切伐採してはならぬ。

とまで言っている。自然樹形が最も美しいということは、江戸時代には主張されていなかったことで、自然主義の影響の強さが感じられる。自然樹形を保つというのは狭い庭園では無理なことで、公園という広い場所だったから可能になったことだった。

二 「実用庭園」の流行——昭和前期の庭園

(一) 実用庭園の植栽

実用庭園の流行

昭和前期（一九二六—一九四五）の庭園の状況を見ると、「実用庭園」というものが流行している。昭和三年（一九二八）に刊行された『造園五十題』の中で中島卯三郎¹⁷は、

従来の鑑賞本位の庭園は既に過去の遺物であり、庭園は須らく西洋のその如く実用主義の庭園たらざるべからずと近年盛に実用主義の庭園が主張されて居るが、[略]

と述べている。「実用庭園」というものが何を意味していたかは、大阪市の公園課に勤務していた椎原兵市（一八八四—一九六六）の『庭園の設計と其实例』（昭和三年刊）の中の次の文章から窺える。¹⁸

現代の庭園は慰安、休養、保健衛生を第一義に措いて教材娯楽実益を併有し、観賞を其次に措き、庭園をして全家族の樂園とするに非ざればその生命^{ほとん}殆どなしと思惟せられる様になつたのである。

実用庭園が実際どういうものだったかは、椎原が描いた設計図によって具体的に知ることができる〔図7-1〕。建築は応接室・居間・台所が洋風につくられていて、離れの茶室が和室になっている。応接間の前の庭園には花壇が置かれ、外来種のユリノキが隅に植えられている。茶室の周辺は和風になっているが、奥の広庭はパーゴラや花壇がある洋風のなものになっている。明るく広々としていて、休養の場所として使えるということが、「実用庭園」ということなのだろう。主庭の植栽樹木として椎原が挙げているのをまとめると、表7-3のようになる。「ヒマラヤシダー・タイサンボク・ハナアカシヤ・ア

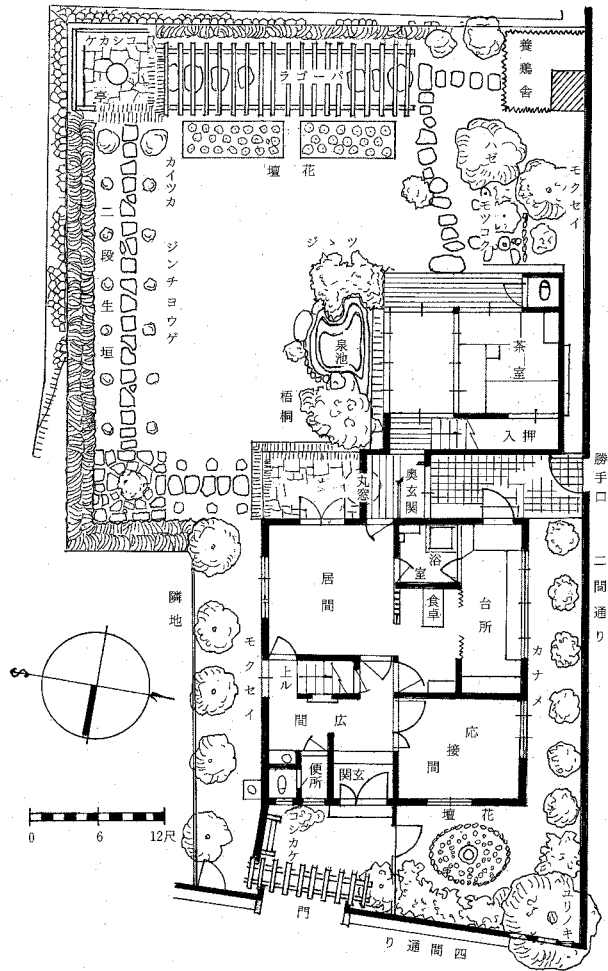


図7-1 昭和前期の庭園設計例 (『庭園の設計と其实例』1928年)

伝統的な日本の庭園は観賞を主としていたが、これからの庭園は直接生活に利用できるものでなくてはならないという。「最近に於ける住宅建築界の趨勢が自由明快なる点に於て目醒ましきものゝあるに對し」と書いていることからすると、欧米の影響を強く受けた住宅建築が出現しだしたので、それに対応して庭園も変革しようということなのだろう。

表7-3 昭和前期の庭園植栽（椎原兵市『庭園の設計と其实例』より）

用 途	植 物
1. 植ゑ込み用喬木 奥植ゑ	シイ・カシ・クス・マテバシイ・マツ・ヒバ・ヒマラヤシーダー・ タイサンボク
前植ゑの中木	ヤマモモ・モチ・ウバメガシ・カナメ・モクセイ・モクコク・ユ ヅリハ・サンゴジュ・ツバキ・サザンカ・ヒオクヒバ（ヒヨクヒバ）
落葉樹	サクラ・ケヤキ・イテフ（イチヨウ）・モミヂ・サンカクカヘデ（ト ウカエデ）・ハゼ
2. 独立樹	マツ・サクラ・モミヂ・サルスベリ・ハナアカシヤ（ギンヨウアカ シヤ）・アカシヤ・コブシ・ヤナギ・ヒマラヤシーダー・アラギリ・ カキ・クリ・タギヤウシヨウ・ラカンマキ・トラモミ・ウメ
3. 灌木類	ヤツデ・アラギ（アオキ）・アスナロ・クチナシ・ケフチクタウ （キョウチクトウ）・シヤクナゲ・ニシキギ・トベラ
4. 芝生地に植栽する小 灌木	ハギ・ヤマブキ・ピラカンサス・ボケ・エニシダ・ユキヤナギ・ ハヒビヤクシン・ダンチヨウゲ・ツ、ヂ・グミ・チャ・キヤラボ ク・ツゲ・タマイブキ・マメツゲ・コクタン・シヤリンバイ
5. 灌木花壇に群植する 小灌木	ボケ・アヂサイ・ユキヤナギ・アスナロ・ダンチヨウゲ・ツ、ヂ・ ベツコウマサキ（マサキの黄金葉種）・ナンテンアヲキ（?）・セン リヨウ・シヤクナゲ・ハギ
6. 生垣用樹木 常緑	ウバメガシ・カナメ・ピラカンサス・サマンクワ・ヒバ・カイズ カイブキ・マキ・スギ・アスナロ・イヌツゲ・チャ
落葉 蔓物	ドウダン・サンカクカヘデ・カラタチ・ハギ ビナンカズラ・テイカカズラ・ムベ・ツタ・バラ
7. 地被物 光陽地用 蔭地用	高麗芝・野芝・朝鮮芝 リュウノヒゲ・センリヨウ・マンリヨウ・ヒトツバ・ヤブコウジ・ ソナレ（ハイビヤクシン）・ブンゴザ、クマサ、

カシヤ」といった明治以降の外
来種が盛んに使われていること
がわかる。これらは大木になる
ものばかりで、小面積の住宅地
には不適当なのだが、設計事例
を見ると敷地は一〇〇—三五〇
〇坪となっていて、一五〇—二
〇〇坪のものが最も多い。これ
が当時の都市郊外の新興住宅の
標準だったのだろう。

樹木に関しては、当時東京で
流行していた庭木について、宮
内省技師中島卯三郎が昭和八年
に次のように述べている。¹⁹

其中には従来庭木としては
殆んど用ひられなかつたも
ので、近來盛に用ひられる
やうになつた、ケヤキ、カ
キ、トベラ等のやうなもの

や、或は外国から渡来したもので日本に適應するヒマヤンダーやピラカンサス等がある。又関西地方ではこれまで盛に庭木として使用されて居りながら、東京辺ではさっぱり用ひなかつたカイヅカが、数年前からポツポツ此處彼處に見られるやうになつて来た。

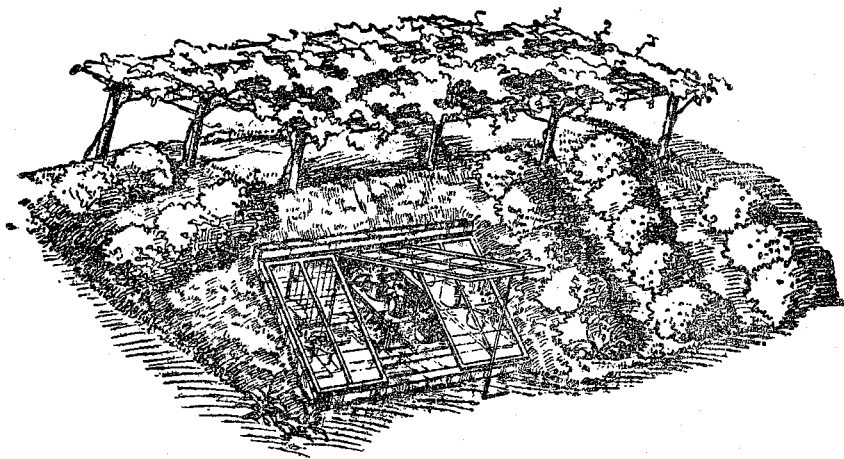
ケヤキ・カキ・トベラの使用は自然風庭園の影響と考えられる。ピラカンサス（ピラカンサ）は明治二十三年（一八九〇）頃に福羽逸人が、欧州から五鉢取り寄せたのが始まりだと中島は説明している。そのうちの三鉢が新宿御苑に植え付けられて、これを親木として挿し木で繁殖させたので広まったという。カイヅカイブキはイブキの一品種で、関西では生垣や庭木として用いられていたものだが、交通機関の発達で入手が容易になったということなのだろう。

なお、椎原は設計書を定義して、「設計図（平面図、立面図、断面図、詳細図、配景図〔鳥瞰図〕等を含む）、仕様書、見積書を総称したもの」としている。庭園規模が大きかったこともあって、公園と同様の本格的な設計がされるようになったのだらう。これは大雑把な図面と見積りだけで造庭を行なっていた従来の方法を、否定していることになる。

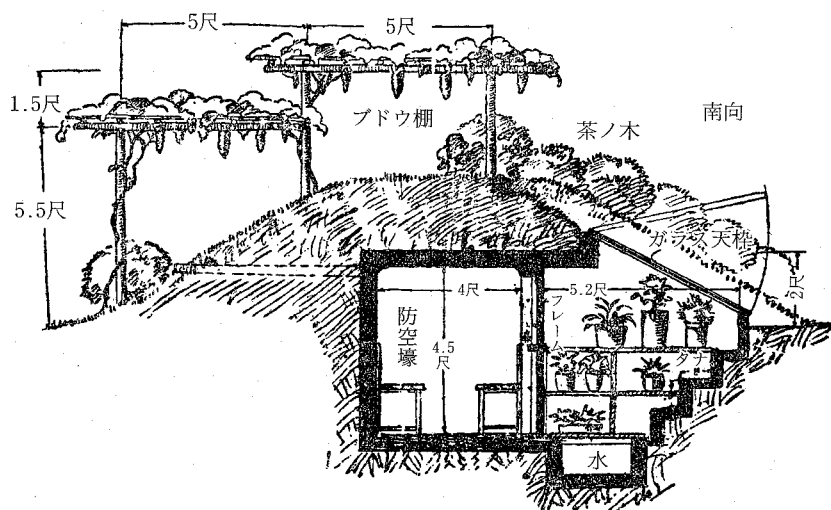
戦時の庭園植栽

昭和十二年（一九三七）になると蘆溝橋事件が起こり、日中戦争が始まっている。昭和十六年十二月に真珠湾攻撃によって太平洋戦争に突入するわけだが、その一か月前に出版された清水栄二編『小庭園の見方造り方』の序文には、「²⁰万々空襲でもあつた場合は、この大きな庭も大いに役立つと思ふ」とすでに本土爆撃が予測されている。本文中の「防空壕と畑をとつた庭の改造」の項を見ると、物資統制の不自由な状況にあつては、「吾人の住宅にあつては一坪の空地をも無駄に放置する事なく、生産と、保健と、防空等の為に、巧に利用されなければならない」と書かれている。まったく皮肉なことだが、これこそ本当の「実用庭園」だろう。

図7-2は家族一〇人を収容できる半地下式防空壕として紹介されている。風致的な配慮から防空壕の上には築山がつくら



見 取 図



断 面 図

図 7-2 防空壕と庭園植栽 (清水栄二編『小庭園の見方造り方』1941 年)

れ、その上部には食料生産をかねてブドウ棚が設けられて、周囲にはチャが植えられている。この他に庭木として、「ウメ・モ・ザクロ・ナツメ・アンズ・カキ・クリ・イチヂク・ミカン・ナシ・リンゴ・ビワ」などの果樹を植えることが奨励されている。また、「サンシヨウ・キイチゴ・ワラビ・ゼンマイ・ブドウ・アケビ・クズ・ヘウタン（ヒョウタン）・ユウガホ・ヘチマ・ハヤトリ」なども有用植物とされている。庭園植栽も食糧難を考慮したものへと変化していることがわかる。

（二）昭和前期の公共造園

都市公園から国立公園へ

昭和前期には庭園と公共造園の植栽とは、どのような相違が生じていたのだろうか。大正十二年（一九二三）の関東大震災後、都市計画及び公園の必要性が認識されたことから、数多くの公園が設置されている。昭和三年（一九二八）に出版された井下清著『公園の設計』を見ると、さまざまな種類の都市公園とその施設が、内外の事例や写真を交えて説明されている。公園の様式には、「自然式（自然風景的なもの）・建築図案式（整形的なもの）・施設本位（施設利用を主体としたもの）」の三つがあると述べられている。

植栽については東京市の例として、表7-4のものを挙げているが、外国産のものは「リキダ松・ストロブス五葉松（ストロブマツ）・ヒマラヤ杉・泰山木・篠懸（テラタナス）・イタリヤ白楊（ポプラ）」などで、それほど多くない。多量の樹木を求める場合は、商品として育成されているものを使うことを強調しているのは、新しい傾向だろう。従来の庭園用の手入れされた整った形の樹木よりも、自然樹形のものが好まれるようになり、それらが大量に生産される段階になったことを示している。

ところで、明治末期に日光・富士山などを公園として指定すべきだという運動があり、大正中期頃から世論となって昭和六年に「国立公園法」が制定されている。造園の分野は庭園だけではなく、都市公園から自然公園まで拡大することになる。

表7-4 昭和初期の公園植栽（井下清『公園の設計』1928年）

区 分	植 物
針葉樹	赤松・黒松・間黒松（アイグロマツ）・姫子松・五葉松・リキダ松（リギダマツ）・ストロブス五葉松（ストロブマツ）・榲（カヤ）・羅漢松（ラカンマキ）・篇柏（コノテガシワ）・花柏（サワラ）・ヒマラヤ杉
常緑闊葉樹	椎・赤桤・白桤・姥芽桤（ウバメガシ）・細葉冬青（モチノキ）・厚皮香（モッコク）・山茶（ツバキ）・茶梅（サザンカ）・山楠（タブノキ）・樟・柊（ヒイラギ）・木犀・珊瑚樹（サンゴジュ）・交譲木（ユズリハ）・泰山木（タイサンボク）
落葉闊葉樹	梧桐（アオギリ）・七葉樹（トチノキ）・白雲木（ハクウンボク）・厚朴（ホオノキ）・篠懸（プラタナス）・イタリヤ白楊（ポプラ）・桜・梅・木蓮・百日紅（サルスベリ）
常緑灌木	躑躅類・八手（ヤツデ）・青木・黄楊（ツゲ）・いぬつげ・矮檜（チョボヒバ）・きやらぼく・馬酔木（アセビ）・まさき・檜・くちなし・瑞香（ジンチョウゲ）
落葉灌木	雪柳・しもつけ・がくあじさい・金糸桃（ビョウヤナギ）・うつぎ

先に挙げた『造園概論（第八章）』の中で田村剛が、

従来の造園は謂はゞ箱庭であつたが、今日以後の造園は、或は市内公園といひ、市外公園といひ、天然公園といひ、何れも芸術よりも寧ろ科学の交渉が深くなつて来て、林学とか土木と云ふやうな方面の知識を必要とするやうになつて来た〔略〕

と言つてゐるように、技術的にもさまざまな分野の知識を応用しなくては、計画も施工も維持管理もできない時代に移つていく。

公園緑地系統という発想

昭和七年（一九三二）になると、日本において最初の本格的で総合的と言える「東京緑地計画」が立てられている。東京都の計画局公園緑地課長だった井下清は、「緑地」について次のように説明している。²²

都市緑地としては大小各種の公園、公私庭園を根幹とし、それが更に綱の如く延長して街路樹となり、郊外に出では風致林・自然緑地となつて、行楽地たると共に都市生活に必要な新鮮蔬菜の供給地となり、「略」所謂生産緑地として永久に存続を確保し、遠く地方の大自然に連結されることになるのである。

都市の庭園・公園と、郊外の風致林・生産緑地、さらには地方の自然公

園を一体化して、公園緑地系統をつくろうとする遠大な計画だった。庭園は単独なものではなく、都市緑地の一部として考えられるようになった。しかし、戦争が激化するとともに、緑地は空襲に備えて防火樹林地・防火水源・避難地等として考えられるようになり、系統化は達成できずに終わる。だが、「緑地」という考え方は、都市周辺の樹林や農地を保存しようとする新しい発想だったことから残り、現代にも引き継がれている。

三 明治・大正・昭和前期の植栽技法

(一) 江戸時代の栽培技法の継承

明治十一年（一八七八）八月十三日発行の『朝野新聞』は「外人好みで流行の柘榴、木犀、百日紅」という見出しで、次のような記事を掲載している。⁽²³⁾

当時（現在）柘榴、木犀、百日紅は外国人（中国人）の好むに従ふ故か日本人も頻りに是を愛し、少こし木振り善き大樹は、二十円から五十円位の売買なり。その中に百日紅は、外国から紫白花の二種を三、四年以前持ち渡り、高さ四、五尺の木にて十二、三円位なりしを、日本の植木やが早くも切継ぎの妙術を施こし、此比植木市にて一円位にて売る。此手際には外国人も驚きしといふ。

明治初期には文人風の庭園が流行していたわけだが、中国から持ち込んだ花の色が紫と白の二種類のサルズベリを、挿し木・接ぎ木の技術を使って繁殖させて、値段を一〇分の一以下にしてしまったという。江戸時代に盛んに行なわれていた挿し木・接ぎ木の技術は、明治時代も継承されていたことが窺える。



写真7-4 明治神宮内苑の現況

(二) 明治神宮内苑の植栽技法

大正四年(一九一五)から十年にかけて行なわれた明治神宮内苑(渋谷区)の造営には、造林学の知識が一層応用されて、今日の造園に大きな影響を与えている。明治神宮は明治天皇をまつるために創建されたもので、敷地は約二二万坪(約七三ヘクタール)あり、造営費として当時の金額で五二一万九〇〇〇円が投入されている。普通、神社の森林はスギ・ヒノキなどの巨樹を主木としたものだが、ここは高燥地で土質も合わないことと、煙害に強い樹木ということから、シイ・カシ・クスノキを主木とした森林をつくることが決定された。その方法として、五〇年後・一〇〇年後・一五〇年後の三段階に分けて、森林が変化していく姿を想定し、植栽する樹木の高さを調整する工夫がされた。まず第一代の森を形成するように六一・一三間(一間は約一・八メートル)のマツの高木が植えられ、その下に第二代の主木となる樹高四、五間のヒノキ・モミなど、さらに下に第三代となる二、三間のカシ・シイ・クスノキ、そして最下層に第四代となる三・六尺(一尺は約〇・三メートル)の第三代と同種の樹木が植え付けられ

表7-5 大正時代の園芸用具と価格（上原静子『家庭園芸と庭園設計』[1924年]より）

器 具	価 格
米国製ホーク	4円
レーキ	2円
手鋤	4円
庭園鍬	2円
シヨベル	2円
剪定鋏	3円
木鋏	1円
刈込鋏（垣根用）	3円
刈込鋏（芝刈用）	2円
剪枝鋸	1円
切出小刀	70銭
鎌	1円

た²⁴。
これは森林の自然的な遷移に合致するように、人工的に植物層をつくり出したもので、最近の植物生態学者の提唱する方法に近い。最初から人工的に森林をつくるのではなく、森林の自然な移り行きを手伝う形で植栽を行なうという画期的なものであった。現在では計画どおり、高木としてクスノキ・ケヤキ・ヒノキ、中木としてシラカシ・スダジイ・サカキ、低木としてヒサカキ・アオキなどが繁茂する自然林に近い樹林となり、多くの人に親しまれている[写真7-4]。

（三）家庭園芸用の道具

大正時代には郊外住宅が盛んに建てられるようになり、庭園も洋風化している。前に引用した上原静子著『家庭園芸と庭園設計』には、洋風庭園をつくるための「普通園芸用農具」として、表7-5のものを掲げている。また、備考には、

右の外脚立、梯子、水縄、大工道具、運搬用ホキールボール、如露（大小）、柄杓等の類が必要であります。灌水又は肥料用の桶は石油空缶を利用し上を突きぬいて、八番線針金で取手をつければ天秤で十分擔へます。

と書かれている。アメリカ産の道具などが加わって、江戸時代の秋里籬島著『築山庭造伝（後編・中）』（文政十一年「二八二八」）に示されている道具類とはかなり異なっていることがわかる。

表7-6 大正時代の生垣用樹種と価格（『家庭園芸と庭園設計』より）

樹種/寸法	大（3尺内外）	中（2尺内外）	小（1尺内外）
カナメモチ	10円	6円	5円
カラタチ	2円50銭	1円50銭	1円
サンゴジュ	8円	4円50銭	2円
マキ	10円	6円	5円
ネズミモチ	7円	4円	4円
サザンクワ	9円	6円	4円
イヌツゲ	11円	—	5円
ドウダン	21円	12円50銭	5円50銭
マサキ	10円	4円50銭	2円50銭
ヒノキ及びサハラ	10円	7円	3円
シラカシ	—	7円	2円50銭
ヒバ	10円	5円50銭	2円50銭

表7-7 現代の生垣用樹種と価格（2002年8月現在）

樹種/寸法	0.8m	0.5m
ベニカナメモチ	950円	550円
サンゴジュ	800円	460円
ネズミモチ	720円	430円
サザンカ	800円	500円
イヌツゲ	1,000円	650円
ドウダンツツジ	1,800円	850円
マサキ	600円	470円
ヒノキ	720円（換算）	450円
シラカシ	800円	450円

（四）生垣用樹木の価格

前掲の『家庭園芸と庭園設計』（大正十三年「一九二四」）には、大正時代の生垣用樹木の樹種と価格が表7-6のように示されている。備考には、大とは三尺内外、中とは二尺内外、小とは一尺内外のものと注記されている。カラタチは最近では使わなくなっているが、刺があるので防犯用になるということで、江戸時代から使われていた。北原白秋（一八八五—一九四二）作詞の童謡「からたちの花」（昭和四年「一九二九」）の中に歌われているように、明治以後もかなりカラタチの生垣がつくられている。サワラ・シラカシなどは、関西では最近でもあまり使用しないから、全体的に関東地方の生垣を言っていると考えられる。

これらの樹木の東京での価格を、『建設物価（二〇〇二年八月）』と比較してみると表

7・7のようになる。大正時代は樹高を一尺(三〇・三センチメートル)単位で計り、現代は五〇センチメートル単位で計って、一メートルとの中間を八〇センチメートルとしているために合致していないが、ドウダンツツジは他の樹木よりも常に高額であることがわかる。一般的な樹木の値段は、相対的には変化していないと言えるだろう。この表では大正十三年の一円は現代の約一〇〇円に当たることになるので、樹木で見る限り物価は約一〇〇倍に上昇していることになる。

(五) 外国への技術の伝播

日本の庭園技術がハワイに伝わった経過が、永井松三編『日米文化交渉史(第五巻移住編)』に次のように述べられている。²⁵⁾
 日本式造園技術が、ハワイの公園や邸宅の庭園に採り入れるようになったのは、さほど古いことではない。初め日本人労働者が公園や庭師に採用され、芝生刈りや、庭木の手入れに従事している中に、次第に日本式の枝葉の剪定からはじまり、芝生の起伏・岩石の配置・小路の布置・小池の設置・小川の導入などに、日本式の技術やスタイルが加味されて、庭の様相が整い、あるは一変するようになった。石燈籠や碑石や石像なども、比較的早く輸入されて、特殊の公園や家庭の庭にすえ付けられた。このようにして日本式造園師は一九三〇年代(昭和初期)には専門業の一つとなっていた。

日本庭園そのものがハワイで当初から受け入れられたのではなく、芝生や樹木の手入れから始まって、次に日本式の剪定技術が認められ、庭園までつくるようになったという経緯がわかる。

四 明治・大正・昭和前期の特色

明治・大正時代の庭園は、江戸時代の影響を受けた文人風なものから、西洋風あるいは自然的なものへと変化している。この時代の特色は、非常に外国の影響が強かったことだろう。庭園植栽に関しては、西洋風の庭園では新たに渡来したヒマラヤスギなどが使われているが、在来種の利用が主だった。一方、草本類はかなりの数の外来種が輸入されて、花壇は華やかなものになっている。樹木は大きくなるだけに自然環境の影響を受けやすく、外国産のものは生育が難しいということなのだろうか。

明治時代には公園が出現しているが、その植栽は自然主義や煙害のためか、外来種が用いられることはやはり少なく、在来の樹種が多く使用されている。しかし、技術的には林学分野の人びとが公園の設計に関与したことから、日比谷公園や明治神宮内苑の造営には、森林の遷移に関しての造林学の知識が植栽に応用されている。自然風あるいは自然主義の庭園では自然の外観を写して、同種の樹木を植えるだけだったが、造林学の応用は森林の変遷を人工的に生じさせるまでになった。現代の造園学はこうした技術を基礎に成り立っていると言える。

昭和前期には欧米の影響を強く受けた住宅建築が出現するようになり、それに対応して「実用庭園」が流行している。パティオや花壇があるひろびろとした洋風のなもので、休養の場所として使えるものだった。植栽としてはヒマラヤスギ・タイサンボク・アカシアといった明治以降の外来種が多く使われている。しかし、第二次世界戦争が始まると生産・保健・防空ためということで、庭園には防空壕がつくられ、植栽も食糧難を考慮したものへと変質していく。関東大震災後には数多くの公園が設置されているが、植栽は外国産のものはそれほど多くなっていない。多量の樹木を求める場合は、商品として育成されているものを使うことが提唱されているのが、新しい傾向だろう。国立公園が制定されるようになると、芸術的能力

よりも林学とか土木という科学技術の知識が必要と言われるようになった。さらに昭和七年の東京緑地計画では広域の公園緑地系統というものが考えられるようになり、庭園は都市緑地の一部と見なされるように変化していることがわかる。

第七章 註

- (1) 小沢圭次郎『明治庭園記』『明治園芸史』日本園芸研究会、一九一五年、二六〇・二六一頁（復刻、有明書房、一九七五年）。
- (2) 財政経済学会編・発行『新聞集成明治編年史（三）』一九三六年（再版、一九六五年）。
- (3) 歛修寺経雄「京都の明治維新後の変遷」、前掲『明治園芸史』所収、五六三頁。
- (4) 小沢圭次郎、前掲論文、三三四頁。
- (5) 前田次郎『明治年間花卉芸園私考』、前掲『明治園芸史』所収、五一九頁。
- (6) 杉本文太郎『西洋造庭法図解』建築書院、一九二二年、七頁。
- (7) 上原敬二『樹木大図説（二）』有明書房、一九八五年、三〇五―三一頁。
- (8) 本郷高德『洋化庭園』『造園五十題』雄山閣、一九二八年、一四六頁。
- (9) 上原静子著『家庭園芸と庭園設計』文化生活研究会、一九二四年。
- (10) 小野健吉『京都を中心にした近代日本庭園の研究』奈良国立文化財研究所、二〇〇〇年、七一―一九頁。
- (11) 竹貫直次著『造家と築庭』日用百科全書（四六）、博文館、一九〇七年。
- (12) 田村剛『造園概論』成美堂書店、一九一八年、二〇二頁。
- (13) 東京市役所編・発行『東京市史稿（遊園篇）』一九三六年、一二三―一二七頁。
- (14) 前島康彦『日比谷公園』東京公園文庫（一）、郷学社、一九八〇年、五三頁。
- (15) 田中正大『日本の公園』鹿島出版会、一九七五年、二五〇頁。
- (16) 井下清編著『祖庭長岡安平翁造庭遺稿』文化生活研究会、一九二六年、三三頁。
- (17) 中島卯三郎『都市の小庭園』、前掲『造園五十題』所収、一五九頁。
- (18) 椎原兵市『庭園の設計と其実例』造園叢書（一五）、雄山閣、一九二八年、二―五頁。
- (19) 中島卯三郎『流行の庭木』『庭園と風景（一五―一五）』日本庭園協会、一九三三年、一三四―一三六頁。

- (20) 清水榮二編『小庭園の見方造り方』、電建叢書(三)、一九四一年。
- (21) 井下清著『公園の設計』造園叢書(四)、雄山閣、一九二八年。
- (22) 井下清『緑地生活』羽田書店、一九四三年、一二頁。
- (23) 前掲『新聞集成明治編年史(三)』所収。
- (24) 前島康彦編『田阪美穂先生遺稿集』東京都公園協会内田阪美穂先生記念会、一九七〇年、一一―一一頁。
- 東京都造園建設業共同組合編・発行『緑の東京史』一九七九年、三七―四〇頁。
- (25) 永井松三編『日米文化交渉史(五、移住編)』洋々社、一九五五年、四一一頁。

V

花壇

禁忌

•

•

生垣

植物名

•

名古屋城二の丸庭園の花壇
（『御城御庭絵図』 19 世紀前半）

第八章 日本の花壇

これまで通史的に述べてきた日本の庭園植栽の歴史を、花壇・生垣・禁忌・植物名という個別的な角度から見ることによって、さらに探ってみたい。

花壇について花卉園芸や造園の辞典などは、水野元勝著『花壇綱目』（寛文四年「二六六四」序）が存在することから、日本においては江戸時代前期から出現したものとしている。しかし、これまで見たように室町時代の『看聞御記』『実隆公記』『蔭涼軒日録』には花壇の事例があり、福井県の一乗谷朝倉館跡では室町時代につくられた花壇が発見されている¹。文献上の花壇の事例としては他にどのようなものがあるのか、平安・鎌倉時代の前栽は花壇とは関係があるのか、また、江戸時代の花壇はどのようなものだったのか、などについて見直しをしてみたい。

一 花壇成立前の状況

花壇の歴史を探る上では花壇の定義が問題になってくる。『広辞苑』は花壇について、「土を盛りあげて草花を植えてある



ボタン

（『草花絵前集』より）

ところ。花壇⁽²⁾としている。中国の李建勲（生没年不詳。一〇世紀中頃に活躍⁽³⁾）の「判官雨を喜ぶ詩に和す」と題した詩には「高檻氣濃く柳郭を蔽し、小庭流れを擁き花壇没す」「原漢文」とあるので、花壇という言葉は中国でつくられたものと考えられる⁽⁴⁾。雨の流れに没したということからすると、『広辞苑』の説明と同様に、中国の花壇もわずかに土を盛ったものだったのだろう。しかし、最初に定義があつて花壇が築かれたのではないので、固定観念を捨てて見ていくことにしたい。

（一）花壇出現までの状況

大伴書持と草花

奈良時代には花壇が存在していたのだろうか。『万葉集』の編纂者の一人とされる大伴家持が、弟の書持^{ふみもち}の死を悲しんで天平十八年（七四六）九月二十五日につくった歌「三九五七」の中に、「萩の花にほへる屋戸を」という言葉がある。このことについては本文中の注に、

言ふところは、この人、人となり花草花樹を愛でて多く寢院の庭に植う。かれに（故に）花薫^かへる庭と謂^いへり。

と記されている。寢殿とは書かずに「寢院」という言葉を使っていることからすると、家持の死後あまり時代が下らない頃の注釈のように見える。書持は寢院の周囲に草花や花木を数多く植えていたのだろう。現代でも草花・花木という言葉が使われているように、花の咲く植物に対して「花草・花樹」という表現が古代にあったことがわかる。この植栽形態については、『万葉集』の歌の中では「やど」という語を「屋前・屋外」と意識的に表記しているだけで、特別な呼称は現れていない。これは次の平安時代の前栽の前身というべきもので、花壇ではなかったように思う。

前栽の草花

『続詞花和歌集』（永万元年「一二六五」頃成立）の肥後の歌「三五二」の題詞に、「賀陽院かやのいんのきたのつばに秋の花どうつされたりけるに、こそ（昨年）はなたれける松虫のなくををかしとて」とあることなどから、前栽は草花ばかりが植えられていたように見える。しかし、前にも述べたように、『後撰和歌集』

（天曆五年「九五二」頃）では、紅梅「二七」、呉竹・桜「五四」、山吹「一〇八」、女郎花「三四七」、棕櫚「二二九」などが前栽の植物として詠まれていることから、前栽には草花だけではなくて樹木も植えられていたことがわかる。『源氏物語（少女）』にも、

御前近き前栽、五えう、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅（サツキ）などやうの春のもてあそびをわざとは植へで、

〔略〕

というように、普通には前栽に多くの樹木が植えられていたことが示されている。植栽されている樹木と草花を合わせて、建物の前面に植えているものという意味で、「前栽」と呼んでいたことになる。

この前栽には垣を周りに設置するということが行なわれていたらしく、『春日権現験記絵（巻十八）』（延慶二年「一三

図 8-1 柵が設けられた前栽（『春日権現験記絵』1309 年）

〇九」に図8-1のような描写が見られる。庭園と前栽を分離する方が、人も立ち入ることがなく管理もしやすかったということなのだろう。庭園部分と花木・草花を植えた部分が、垣によって分離されていたことでは、花壇的な形態に近いものがつくられていたことになる。

花壇の登場

宇治平等院に鳥羽上皇が訪れた時のことが、『中右記』の長承元年（一一三二）九月二十四日の条に「本路を経て御車を小御所南に寄せ御覧、次に野路を経て花壇を御覧（御車ながらこれを観る）」と記されている。阿弥陀堂（鳳凰堂）の対岸に位置していた小御所からあまり離れていない所に、「花壇」が存在していたことがわかる。白川御所（福勝院）についても『兵範記』の仁平二年（一一五二）十二月十二日の条に「南庭花壇」、翌三年六月十三日の条に「正面東庭の花壇」とあるので、寝殿の南側と東側に花壇がつくられていたことになる。「花壇」という文字からすると、草花と花木がまとめて植栽されていた場所と考えられるのだが、土を盛った花壇かどうか明確ではない。

キクの栽培方法

キクについては前栽とは異なった植え方があった。『管家文草（巻第四）』所収の菅原道真の「官舎の前に菊苗を播^うう」と題した詩「二八八」では、「数畝^ほ斜なり」という方法でキクを栽培していた光景を詠っている。畝^{うね}をつくってキクを植えることは、畑で野菜を栽培するのと同様で、実際の育成法だったと言える。『延喜式（巻三十七）』に記載されているように、キクは平安時代には薬として各地で栽培されていたから、この影響を受けているのだろう。この場合などは「花壇」と呼んでも良いと思うのだが、漢詩が得意な菅原道真も使用していないことからすると、花壇という言葉は平安時代にはまだ中国から伝わっていなかったのだろう。

二 花壇の出現

(一) 室町時代の花壇

花壇の事例

室町時代も前栽という形態は継続していたようで、室町時代の『小男の草子』という書物に、「前栽のほとりを御覧ずれば、植木のいとけなき下に」と書かれている。しかし、この時代には先に述べたように花壇という言葉が現れていて、『看聞御記』によると伏見宮貞成親王は応永二十五年（一四一八）二月二十八日に、伏見殿の東庭に花壇を築いて草花を植えている。ここでは南庭が主庭だったが、東庭も重要視されていたことから、観賞のために花壇を設けたと考えられる。また、貞成は洛中の一条東洞院の邸宅でも、永享九年（一四三七）二月二十一日に常御所の北側に花壇を築いて、その周囲に垣根をつくっている。さらに同年三月三日には草花の種を花壇に植え、翌年二月五日には花壇を拡張して草花を植栽している。

足利義政が再建した室町殿では、『蔭涼軒日録』の長禄四年（一四六〇）四月三日の条によると、寝殿の北庭に設けた花壇にトキソウを移植し、『実隆公記』によると三条西実隆は、長享二年（一四八八）十二月六日に武者小路の邸宅に花壇を築いている。『都林泉名勝図会 卷之二』（寛政十一年「一七九九」）の「銀閣寺林泉」の図には、方丈の前面の銀沙灘ぎんしゃだんの中に葛石で囲まれた花壇が描かれているが「図8-2」、「万松院殿穴太記」は將軍足利義晴の天文十九年（一五五〇）五月二十一日の葬儀について、

朝天に慈照寺に渡さる。御道は嵯峨の間の西の方、南殿の花壇の通り成壁を二間切あけて、西の築地の際迄砂を蒔て、〔略〕

図 8-2 慈照寺庭園の花壇（『都林泉名勝図会』1799 年）

と、慈照寺には南殿近くに花壇が設置されていたことを述べている⁽⁵⁾。これが現在の石造りの花壇を指しているのか、あるいはのちに改修されてしまっているのかは、史料が少ないうえに判断できない。

福井県の一乗谷朝倉館跡では昭和四十三年（一九六八）の発掘調査で、常御殿・主殿・会所・茶室などに囲まれた中庭から、九・七七メートル×二・七五メートルの長方形の花壇跡が発見されている「写真 8-1」。花壇は中庭の中央に置かれていて、常御殿側の三辺が切石、南西側の一辺が自然石で囲われて、中心部分に自然石を二列に敷き並べた管理用通路が設けられていた。この花壇は朝倉氏の滅亡した天正元年（一五七三）まで存続していたとされている。

花壇の出現の理由

一条兼良（一四〇二—一四八二）編とされる『尺素往来』には、先に述べたように前栽の植物として春のものが三〇種類、夏二六種類、秋二四種類、冬二種類、その他三一種類が掲載されているが、室町時代の丹峯（生没年未詳）著『新撰類聚往来（上）』の「草花並美木者」項にも六八種類が挙げられている「表 8-1」。仏教に関連させたものや漢語を



写真 8-1 一乗谷朝倉館の花壇（16 世紀後半）

使った植物名が多くてわかりにくいが、平安時代よりも植物の種類は豊富になっている。室町時代に花壇を設置するようになったのは、花木や草花の栽培が盛んになったことから、小さなものや珍しいものを育成・観賞するためだったのではないだろうか。

（二）安土桃山時代の花壇

すでに見たように、山科言継の日記『言継卿記』の永禄八年（一五六五）三月十三日や、同年二月二日の条などによれば、彼の京の邸宅内には「後園」があり、キク・モモ・ウメ・タチアオイなどの苗木を栽培している。邸内の奥にモモやウメを植えた果樹園と、生育を楽しんだり切花とするための草花を植えた花畑が、つくられていたということなのだろう。この花畑は小規模なもので、畑のように畝を設けたものだったのではないだろうか。『義演准后日記』によると京都の醍醐寺三宝院では、慶長六年（一六〇一）二月二十三日条に南の広庭の花壇を取り除き、同年三月十五日には別な場所の花壇にキクを植えている。こうした広い邸内で主殿の南庭に花壇を設けた場合などは、観賞を目的としていた本格的な施設だっ

表8-1 室町時代の草花・花木（『新撰類聚往来（上）』より）

呼 称	現代和名	呼 称	現代和名
曼殊沙花	マンジュシヤゲ	石竹	セキチク
摩訶沙花	?	藿麥	カワラナデシコ
曼陀羅華	ムラサキケマン	萱草	カンゾウ
摩訶曼陀羅華	?	吉祥草	キチジョウソウ
勝曼花	?	一夏草	イチリンソウ
仏勝花	ブッソウゲ	菊花	キク
室幢花	?	麒麟草	キリンソウ
鬘花	カズラ	金芝草	?
勝花華	?	半夏草	ハンゲソウ
鳳仙花	ホウセンカ	蓼花	タデ
纓絡花	サラサドウダン	往来草	?
鶏頭花	ケイトウ	茱利花	マツリ
蓮花〔赤白〕	ハス	玉簪花	ギボウシ
凌霄花	ノウゼンカズラ	紫薇	サルスベリ
金仙花	キンセンカ	玉蘂含笑花	?
水仙花	スイセン	辛夷花	コブシ
芍薬	シャクヤク	麗春	ヒナゲシ
牡丹	ボタン	牽牛花	アサガオ
薔薇	バラ	金鳳花	キンボウゲ
長春	コウシンバラ	朱槿花	ムクゲ
芙蓉	フヨウ	桜花	サクラ
款冬花	ヤマブキ	蒸百合	?
仙翁花	センノウ	箭薄	?
岩菲	ガンピ（ナデシコ科）	海棠花	カイドウ
桔梗	キキョウ	梅草	?
葵花	タチアオイ	槐花	エンジュ
百合草	ユリ	桂花	モクセイ
味咄〔アヂサイ〕	アジサイ	檲花〔アツチ〕	センダン
女郎花	オミナエシ	梨花	ナシ
芝蘭	シラン	柳榴	?
紫苑	シオン	杏花	アンズ
龍膽	リンドウ	桃花	モモ
予甲〔ワレモカウ〕	ワレモコウ	玉椿	?
金帯	シャクヤク?	杜若	カキツバタ

たと見ていいだろう。

イエズス会編『日葡辞書』(一六〇三・一六〇四年)には「Quadan クワダン(花壇)」という項目があり、「草や花の花壇」と説明されている^⑥。宣教師が使う辞典に掲載されていることからすると、安土桃山時代には武家や貴族の屋敷に、花壇はかなりつくられていたのではないだろうか。

(三) 花壇の一般化

江戸時代の花壇

江戸時代になると、花壇という言葉は園芸関係の書名にしばしば現れていて、次のようなものが見られる^⑦。

- 水野元勝著・松井頼母増補『花壇綱目』寛文四年(一六六四)序
- 伊藤伊兵衛著『花壇地錦抄』元禄八年(一六九五)刊
- 志水閑事著『花壇養菊集』正徳五年(一七一五)刊
- 養寿軒雲峰著『花壇菊花大全』享保二年(一七一七)跋
- 華文軒風子著『花壇大全地錦抄』宝暦七年(一七五七)刊
- 著者不明『花壇叢木画譜』寛政元年(一七八九)刊
- 壺天堂主人著・森春溪画『花壇朝顔通』文化十二年(一八一五)刊
- 屋代通賢著『通賢花壇抄』文政十一年(一八二八)刊

このような書物が一般に売り出されたことから、花壇という言葉は一層広まるようになったのだろう。江戸時代には花壇の史料が多くなっているの、形態ごとに分類して見ていくことにしたい。

ツバキ・ボタン専用の花壇

小堀遠州（一五七九—一六四七）が寛永十九年（一六四二）頃に設計した、新院（後水尾上皇）御所の「花壇付近指図^{さしず}」には、方形の花壇が中庭にいくつも描かれている〔図8-3〕⁽⁸⁾。こうした花壇の配置は、西洋の影響も可能性として考えられるのだが、建築に接した場所だったので幾何学的になったのではないだろうか。この遠州の花壇が存続していたことだろうか、

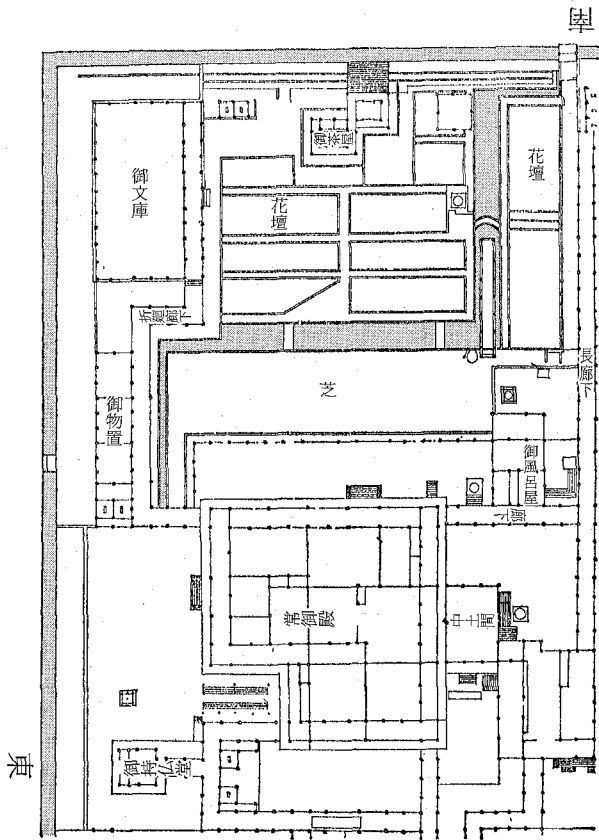


図8-3 小堀遠州設計の新院御所の花壇（17世紀）

仙洞御所の花壇について『隅莫記^{ぐもくき}』の慶

安三年（一六五〇）七月十二日の条に「御花壇の徒歩。珍しき百合花を拝見しむなり」、承応三年（一六五四）三月三日の条には「御花壇の椿花・牡丹花を拝覧しむなり」とある。元和・寛永年間（一六一五—一六四三）はツバキの収集・栽培の流行が、最高潮に達した時期だったので、ユリやボタンの珍しいものが集められただけではなく、流行に従ってツバキが植えられている。花壇は珍しい変種を集めて栽培するには、管理もしやすく観賞にも適した施設ということなのだろう。

青蓮院^{しょうれんいん}の花壇については、寛恕法親王^{きやうじやうしやう}の『寛恕法親王日記』の延宝六年（一六七

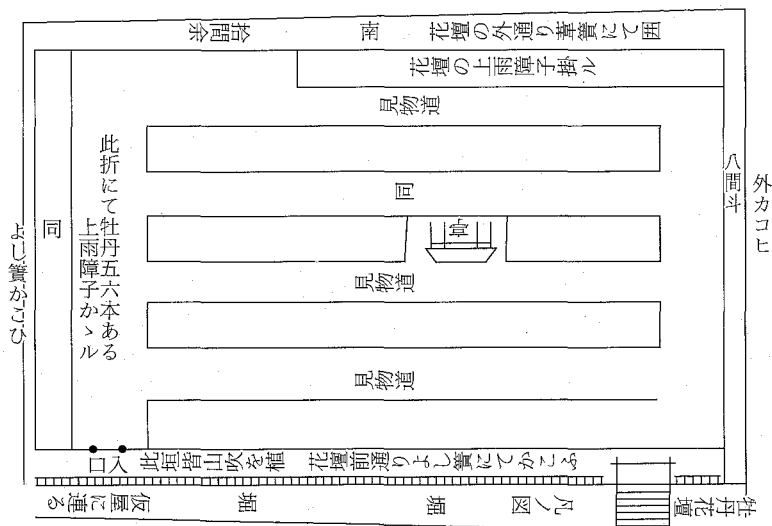


図8-4 江戸・上北沢村の牡丹園（『十方庵遊歴雜記』1814年）

八)三月十一日の条に「青門へ行、花壇ノ牡丹盛也」、同八年四月二日には「青門へ行、今日彼門主之花壇牡丹花さかり也、紅白淡濃^{すさて}都百余種、実二当時洛陽ノ壯觀也」と記載されている。ボタンばかり一〇〇種類ほどの品種を花壇に植え付けていたことがわかる。おそらくいくつも花壇が設けられていたのだろう。このことは江戸時代の前期後半に京都で、ボタンが流行していたことを示しているのではないだろうか。『武江年表』の「寛政年間（二七八九—一八〇〇）記事」の項に、

いつの頃より始まりしか、西が原に湯島の牡丹屋太右衛門の別荘ありて、花壇に紅白の牡丹英（美しさ）をあらさふ。盛りの頃貴賤群集せり（文化の始めに絶えたり）。

と記されている。年代的に見て京都のボタンの流行が、江戸まで伝わったと考えられる。

津田敬順は『十方庵遊歴雜記（五編巻の下）』（文化十一年「二八一四」序）で、江戸の上北沢村の名主鈴木左内の牡丹園について「図8-4」、

東西十三間・南北六間、中に一の花壇より第七の花壇まで、凡三百八拾五種の牡丹は、花みな別々にして一種といへども尋常ならず「略」

と述べ、各花壇のボタンの品種名を挙げている。この花壇の規模は「おのおの長さ十間、幅一間」だったという。

城郭と大名屋敷の花壇

吹上花畑（御庭・花圃ともいう）は第五代將軍綱吉（一六四六—一七〇九）の時代に、防災のために大名屋敷を他へ移して造営されたものだった。『明良帶録（続編）』の吹上奉行の項に「吹上御庭の事一切に關する御庭向、御花壇・築山・泉水〔略〕」というように、職務として花壇のことがあったと記されている。この係りについては寛政年間の編纂とされる『憲教類典（二）』に「御花壇方 四人」とあり、『吏徴（下巻）』（弘化二年〔一八四五〕）には「御花段方 七人」と述べられている。^⑧花壇係りが設置されているのは、「吹上御花畑」という名称が示すように、觀賞用として草花が多く栽培されていたからだろう。

名古屋城二の丸庭園の様子を描いた「中御座之間北御庭惣絵」（一七世紀）では、南西側の枯山水と東側中央の園池の間に、ボタンを植えた花壇が三列ずつ並んでいる状態が見られる〔図8-5〕。芝生の広庭の中に単独で置かれていることは、觀賞用だったことを示している。文政五年（一八二二）に大改修された後の二の丸庭園の姿が「御城御庭絵図」〔図8-6〕だが、花壇が庭のあちこちに設けられている。^⑩回遊式庭園では花壇が重要な施設となっていたということなのだろう。

尾張藩の下屋敷だった戸山荘は、寛文七年（一六六七）から土地の購入が始められ、八〇年近くにわたって拡張され、庭園も次第に整備されている。戸山荘の花壇の場所は、廬山寺と名付けられた建物の近くだったらしい。「戸山御屋敷花壇取広之図」にはかなり横長の花壇が五〇基ほど描かれているが、この花壇にはシャクナゲ・ハマナス・アジサイ・イバラ・チョウシュン（コウシンバラ）・ボタンなどが植えられていたという。^⑪これとよく似た例が、高松藩の栗林荘に見られる。弘化元年（一八四四）に描き改められた古図（松平公益会蔵）には、「百花園」というものが図の中央下部分に描かれている。^⑫長方形の花壇は一列八基で、二列通路を挟んで設けられている。囲いはなくて土を壇状に盛っているだけだから、平面的に書き表せば戸山荘の花壇のようになる可能性が強い。

東京都新宿区市谷本村町（いちがや）の尾張徳川家上屋敷跡からは、明和五年（一七六八）頃の「市谷屋敷平面図」に描かれている南北約一〇間（一間は約一・八メートル）、東西約三〇間の「御花壇」が発掘調査で検出されている。^⑬藤堂家の染井の下屋敷のキリ

図 8-5 名古屋城二の丸の花壇（「中御座之間北御庭惣絵」17 世紀）

図 8-6 改修後の名古屋城二の丸花壇（「御城御庭絵図」19 世紀前半）

シマツツジを植えた花壇も、長さ三〇―四〇間（一間は約一・八メートル）、幅は一〇間だったというから、大名屋敷の花壇としては標準的なものだったのだろう。市谷屋敷の花壇は図面では一区画だけだが、遺構としては幅八〇―九〇センチ、深さ三〇―四〇センチ、全長六・三四メートルの溝状のものが、南北一九・八メートルの間に二基ずつ東西に二列に並んでいることが確認されている。深さ三〇―四〇センチということは、耕していた深さで、実際にはこの上に土が二〇センチほどは載っていただろう。図の大きさからすると、九六基の木枠で囲まれた花壇が存在していたと推定されている。

『江戸御小納戸日記』によると、宝暦三年（一七五二）から明和元年（一七六四）にかけては花壇の植物として、

小杜若（ヒメシヤガ）・浅黄小杜若・黄小杜若・しるいし（？）・島藤・駿河桃・朝鮮さくら（ナンキンザクロ）・梅薄紅（ウメの一種）・蜜柑・源氏車なてしこ（ナデシコの一）種）・姫百合・さんさし・金桂（キンモクセイ）・茄子・峰谷柿

が見られる。¹⁵ ナスまで植えられていたことからすると、花壇は菜園の役割も果たしていたのだろう。

回遊式の大名庭園のこのような花壇は、全体を巡って観賞する際に少しばかり立ち寄って見るにすぎなかったもので、見る者に強烈な印象を与えるように、一基の花壇に一種類ずつ、あるいはいくつもの花壇に同一種の変種を植えるように考慮されていたと考えられる。

寺院・民家・植木屋の花壇

鹿苑寺（金閣寺）の住職だった鳳林承章の日記『隔莫記』によると、寛永十六年（一六三九）二月二十日の条には「鶏冠花の種・側柏葉の種、今日南の花畠に栽うるなり」、同年八月五日の条には「五本（岡松）を花畠に栽培するなり」と述べられている。境内の南側に花畠が設けられ、ケイトウやコノテガシワの種がまかれ、アカマツが植え付けられていたことがわかる。一方、同十六年九月二日の条に「躑躅・源氏木舜・台木の椿堀（堀）り取り寄せ、北山の花壇に栽う」、同月十一日の条に「町

椿「略」花壇に栽うるなり」、翌十七年二月八日の条に「黄薔（ムクゲの一種）接ぐなり。花壇にこれ在り」と花壇のことが書かれている。ツツジ・ムクゲ・ツバキなどの低木を植えているところからすると、花壇は先の花畠と同一場所を指しているのだろう。接ぎ木をして植えておくというのは養生をすることだろうから、境内に植える草花・樹木の苗畑として花壇を利用していたと考えられる。

前に述べたように江戸の滝沢馬琴邸の庭園では、『馬琴日記』によると文政十年（一八二七）二月二十四日に、「菊・桔梗其の外へ替。東の中口戸袋の蔭、「略」花壇に作る。藤袴・われもかう・女郎花・野菊・鋸草等せいたかき分うへつけ」することが行なわれている。戸袋のところの花壇は「三尺に二尺余」という小規模なものだった。翌二十五日には紫苑、同年三月晦日には「つりがね草」、同年四月十一日には桔梗を植え、同十二年三月十一日には花壇の修復を終えている。花圃・花畑という言葉もあって、同十年閏六月二十二日には「水仙之根、今朝、花圃之植付終」、翌十一年二月七日には「花畑植替」が行なわれているが、花圃・花畑はともに花壇を指しているように思う。

『武江年表』の弘化元年（一八四四）の条に、

十月より、巢鴨染井菊の造り物再び始まる（文化よりこのかた花壇のみにて造物は絶えたりしが、「略」

とあり、また、同書の安政元年（一八五四）九月の条に「千駄木の辺、菊の造物六軒程出来る。染井巢鴨は花壇のみなり」という類似した記載がある。江戸の植木屋ではキクを鉢で育て、秋の花の季節に売り出していたらしい。大輪の花を付けさせたり、懸崖（けんがい）のような形にしていたから「造物」と呼んでいたのではないだろうか。造り物を出さない時は、キクを花壇で栽培していたということなのだろう。

(四) 花壇の構造と管理

花壇の構造について見ると、石材で囲んだものが存在していた。葛石を高く積みあげば現在の慈照寺の花壇のようになるが、江戸時代に描かれた慈照寺の絵図のように葛石が一段だけのものもあつただろう。『毛吹草(巻第三)』(正保二年「二六四五」)の「か」の項には、「瓦 硯 樋 堂の土間 築地 花壇」と瓦から連想される品物が並べられていることから、周りを瓦で囲った花壇も存在していたことがわかる。また、『馬琴日記』の文政十二年(一八二九)三月十日の条に「丸太かひ取せ、歌壇修復、半分とり付」とあるので、丸太で縁取った花壇も存在していたことになる。『菊花壇養種』(弘化三年「一八四六」)にはキク栽培用の花壇としては、木槌で板を縦に打ち込んだものと、横に互い違いに板を並べたものが描かれている。¹⁶ 尾張徳川家市谷屋敷跡の花壇遺構では、数多くの金釘が出土していることから、木材を金釘でとめて枠としていたと推測されている。

花壇の管理については、『馬琴日記』の文政十年二月二十四日の条に、「庭の花壇鋤かへし、こやし入」が行なわれている。「こやし」については同年二月二十七日の条に「魚こやし両菜園へ掛」とあるから、乾かした魚を肥料としていたのだろう。魚肥に関しては、『花壇地錦抄(六)』の「草木に用いる肥の事」の項に、「田作〔略〕俗にごまめとも、ほしかともいう。水に入れて置きくさらしても用いる」と記されている。「ほしか(乾鱈)」は当時大量に獲れたイワシを乾したもので、窒素・燐酸分に富むことから畑でも使用されていた。肥料については、「すべての草花は冬中より二月中旬迄肥を用うべし」という説明も加えられている。

三 花壇とは何か

平安・鎌倉時代の前栽は樹木や草花を地面に直接植え付けたもので、庭園全体を飾ろうとしたものだった。平安前期の菅原道真の詩にあるように、前庭に畝をつくってキクを植えたのは、観賞よりも植物の成育を第一に考えたものだった。これを花壇の最初の例と考えることもできるが、土を盛って壇をつくって排水を良くし、植物が育成しやすいようにするという考え方が、花壇を生みだしていったのだろう。『看聞御記』の応永二十五年（一四一八）二月二十八日の条に、「東庭に花壇を築き」と書かれているのが、花壇という語の文献上の初見ということになる。室町時代に花壇を設置するようになったのは、花木や草花の栽培が盛んになり、小さなものや珍しいものを育成し観賞するためだったと考えられる。

江戸時代の花壇を分類してみると、さまざまな目的によって築かれていることがわかる。定義があつて花壇がつけられたのではなく、草花あるいは花木を植えるのに適した施設を、各自が工夫したことから、各種の形態が生じたと考えられる。明治末期に欧米の花壇形態を導入して以来、今日までいろいろな花壇がつけられているが、草花・花木の成育を主目的として観賞に耐えるように形を考慮すれば、特色のある花壇をつくることができることを、江戸時代までの歴史は示しているように思う。

第八章 註

- (1) 足羽町教育委員会編・発行『一乗谷朝倉氏遺跡(一)』一九六九年、五頁。
- (2) 新村出編『広辞苑(第四版)』岩波書店、一九九一年、四九九頁。
- (3) 近藤春雄『中国学芸大事典』大修館書店、一九八〇年、八〇三頁。
- (4) 諸橋轍次『大漢和辞典(縮写版、九)』大修館書店、一九六七年、五四六頁。
- (5) 重森完途『庭園歴史散歩』平凡社、一九八七年、一七一・一七二頁。
- (6) 土井忠生・他編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店、一九八〇年、五一六頁。
- (7) 国書研究室編『補訂版国書総目録(二)』岩波書店、一九八九年、一六三頁。
- (8) 森蘊『小堀遠州』吉川弘文館、一九六九年、一九三一—九六頁。
- (9) 神宮司庁編・発行『古事類苑(官位部三)』一九〇五年、九七四頁(復刻、吉川弘文館、一九七八年)。
- (10) 織茂三郎『名古屋城庭園の古絵図』『名古屋城の庭園』名古屋城振興協会、一九八〇年、二七—六三頁。
- (11) 岡畏三郎『戸山荘に就いて』『造園雑誌(七一)』、一九三九年、八三—九二頁。
- (12) 香川県栗林公園観光事務所復刻『栗林公園古図』一九七五年。
- (13) 新宿歴史博物館編『大名屋敷——儀式・文化・生活のすがた』新宿区教育委員会、一九九三年、二四・二五頁。
- (14) 川添登・菊池勇夫『植木の里』、ドメス出版、一九八六年、六三—六七頁。
- (15) 長谷部由紀『大名屋敷の花壇』、前掲『大名屋敷』、七六一—八二頁。
- (16) 前掲『大名屋敷』、二五頁。

第九章 生垣の歴史

竹や木材などでつくった柵を「垣・垣根」と言い、生きている樹木を植えた垣根を「生垣」と呼んでいる。出雲地方の「築地松^{ついでじ}」は、冬の北風を防ぐためにクロマツを刈り込んで高生垣としたものだが、生垣には地域に適した樹種を使うことから、その地方の特色を見ることができる。北陸・東北の多雪地帯では、庭に積もった雪を外へ出すために生垣や塀を設けない家も多いが、生垣はブロック塀やフェンスよりも地域に潤いをあたえるとして、現在、各市町村で設置が奨励されている。この身近な生垣について、歴史をたどってみることにしたい。

一 生垣の定義

日本の各地の民家などに一般的に見られる、刈り込んだ生垣の起源は古いように感じられるのだが、平安・鎌倉・室町時



アサガオ
(『草花絵前集』より)

代の絵巻物を調べていくと、この形態の生垣は見当たらない。額田巖著『垣根』では『万葉集』の時代にウツギの生垣があり、平安・鎌倉時代にはアサの生垣や下枝を切り落とした樹木を植えた生垣、篠竹の生垣などがつくられ、室町時代の枯山水の庭園では植物を刈り込むことが行なわれ、茶庭では簡素な生垣がつくられるようになったと説明されている^①。

ところが、上原敬二著『生垣の仕立方と手入』では生垣の沿革に関して江戸時代の事例を挙げているのだが、「今日、生垣の歴史など古来どういいうものであったか知る由もない」と、それ以前の時代の生垣については言及していない^②。額田が古代からの生垣が現代につながっていると歴史的継続性を主張しているのに対して、上原が近世の史料しか示していないのはなぜなのだろうか。

問題は上原が同書で、次のように生垣を定義していることにあるように思う^③。

一、列状に植えたもの。

二、高さは三メートル以下、幅は一メートル以下。

三、刈り込みが行なわれている。

四、密植されている。

という四点を満たしているものを生垣とすることは、現状の各地の事例からみると妥当と言えるだろう。

しかし、額田は生きている木を使っている柵のような形態までも生垣とするとように、広く考えているところに相違がある。本稿では額田と同様に生きている木を使っている垣根を生垣と定義して、上原のいう生垣を刈り込み生垣と呼ぶことにしたい。過去にはどのような形態の生垣が存在していたのか、それらの古い形態の生垣はいつから始まり、いつまで存続していたのかを追求することで、今日見られる刈り込み生垣の歴史的な意味を考えてみたい。

二 刈り込み生垣の出現まで

(一) ウツギの生垣

『万葉集』の生垣

『万葉集』にはウツギの歌が二〇首ほどあり、ホトトギスとの関連を詠んだものが多いのだが、次の二首にウツギの垣根が詠まれている。

春されば卯の花ぐたし(ちらし)わが越えし妹が垣間は荒れにけるかも「一八九九」

鶯の通ふ垣根の卯の花の厭き事あれや君が来まさぬ「一九八八」

生垣という言葉は使われずに、「垣」と呼ばれていたらしい。前者の歌からは、ウツギが屋敷の境界に堀の代わりに植えられていたことが推測される。ホトトギスとウツギとの関連を詠んだ歌が多いのは、家屋の周囲にウツギの生垣を巡らした所が多かったからなのだろう。ウツギ以外の樹種を用いた生垣については、他に史料を見つけ出すことができない。

『枕草子』の生垣

平安時代のウツギの生垣については、清少納言の『枕草子』(長保二年「一〇〇〇」頃)の一節にその形状を見ることができ

まことの山里めきてあはれなるに、うつぎ垣根といふものの、いとあらあらしくおどろおどろしげに、さし出でたる枝などもおほかるに、〔二〇五段〕

紫野の齋院からの帰り道に見た民家のウツギの垣根は、枝がさし出るほど乱れ茂った姿をしていたという。ウツギの生垣

は徒長した枝を切り取った程度の、自然樹形に近いものが一般的だったと考えられる。

『二遍上人絵伝』の生垣

鎌倉時代にもウツギの生垣は存在し続けていて、貞応二年〔一二二二〕の東海道の旅を記した『海道記』には、近江の瀬田の長橋（唐橋）を過ぎた辺りの民家について「竹ノ編戸ノ^{あみど}牆根^{かきね}ニハ、卯花^{うのはな}サキスサミテ山郭公忍^{やまほとけ}ビナク」と描写されていて、タケで編んだ戸がついたウツギの生垣があったことがわかる。

『二遍上人絵伝（巻十）』（正安元年〔一二九九〕）の僧教願の住房（現、岡山

図9-1 ウツギの生垣（『二遍上人絵伝』1299年）

県倉敷市」の前面には、二本ほど横木が添えられた生垣が見られる〔図9-1〕。絵巻物類に描かれている植物については、植物名まで判断することは困難なのだが、緑色の葉の間に白い花がところどころに描かれているところから見て、ウツギの生垣の可能性が高い。これは下枝が少なく自然樹形ではないことからすると、後に述べる枝打ちされた垣根の類なのかもしれない。『海道記』のウツギの垣根も時代からすると、同形態だったのではないだろうか。

その他の事例

ウツギが垣根として多く用いられたのは、萌芽力があつて強い刈り込みにも耐え、かなりの日陰でも生育するためと考えられる。^①鎌倉時代の『玉葉和歌集』〔三一九〕（正和二年〔一二三三〕）や『続後拾遺和歌集』〔一七二〕（嘉暦元年〔一二三六〕）、『新千載和歌集』〔一四九八〕（延文四年〔一三五九〕）、『新後拾遺和歌集』〔二六八〕（至徳元年〔一三八四〕）などに「うのはなかきね」と詠まれているのは、^②『万葉集』の歌の影響が強いものかもしれないが、ウツギの垣根が実在していたためではないだろうか。なお、江戸時代にもウツギの垣根はつくられていて、仙台藩の遠田郡籠峰寺の「ウツギ久根（生垣のこと）」が、延宝五年（一六七七）三月に荒らされたと記録にある。^③

（二）下枝のない生垣

平安時代の『粉河寺縁起絵巻』（一二世紀後半）の第四断片、狛師の家の網代の木戸の両側に、紅葉した葉をわずかに持つ落葉広葉樹が列植されて、柴を束ねた横木で結わえられた姿で描かれている。この図では落葉広葉樹が生きているかどうかはつきりしないが、第二九断片ではもつと枝や葉が付いた樹木が描かれているので、落葉樹を枝を短く切り落としてほとんど葉を付けない状態で列植して生垣にしていたと考えられる。

同様の形態の生垣は、鎌倉時代の『一遍上人絵伝（巻七）』の天津の浜の町家に隣接する堂のような建物の周囲に見られ

図9-2 下枝を切り落した生垣（『一遍上人絵伝』より）

る。枝を切り落とした低いものと倍ほどの高さの常緑広葉樹の生垣が描かれている。この後方には同じように枝を切り落とした落葉樹の生垣もみられる〔図9-2〕。では、なぜ樹木の枝を切り落とした生垣が発生したのだろうか。『信貴山縁起（尼公巻）』（一一六〇年代）には畿内の民家の菜園に、長さ一メートルほどの割り板を使った柵が描かれ、『西行物語絵巻』（徳川黎明会本、一三世紀半ば）の嵯峨野の民家の畑の仕切りに枯れ枝が立てられているのが見られる。こうした木材や枯れ枝を使ったものは朽ち果てることから、樹木が死なないように最低限の葉を残して枝打ちをして、横木を縛り付けて柵としたのではないかと考えられる。

（三）タケの生垣

『法然上人絵伝』（一四世紀前半）の巻四十八第十紙に一本横木を通したタケらしい生垣が見られるが〔図9-3〕、節が書かれていないのでタケとは断定しにくい^①ためか、『絵巻物による日本常民生活絵引』ではアサとされている。しかし、『法然上人絵伝』の同巻第十四紙の空阿上人の臨終の場面には節を持つ列植したタケが描かれていて、巻四十一第二

図9-3 低いタケの生垣（『法然上人絵伝』14世紀前半）

十紙にも節を持つタケが描かれているので、巻四十八第十紙の植物もタケである可能性が高い。なお、タケを背高く育てて家の周囲の垣にしたものが、『一遍上人絵伝（巻四）』の筑前国の武士の館や、『法然上人絵伝（巻二）』の漆時国館の周囲には描かれている。

（四）刺のある生垣

『兼好法師集』と『羅葡日対訳辞書』

吉田兼好（一二八三頃—一三五〇頃）の歌を集めた『兼好法師集』（二四世紀中頃）の中に、

藤原行朝すゝめ侍し、鹿島の社のうた

郭公鳴かぬかぎりはたちばなのにほふ垣根ぞ人だのめなる
〔一三六〕

とあって、タチバナが垣根にされていたことがわかる。

安土桃山時代の『羅葡日対訳辞書』（文禄四年「一五九五」）に、「畠ナドノ回りノ荆棘ノイケガキ。―その場所に生えているいはらを組み合わせて作った垣」とあり、安土桃山時代には刺のある樹木を生垣にしたものが、辞書に載るほど畑など

で一般的につくられていたことがわかる。吉田兼好が詠んだタチバナも刺があることから生垣とされていたのだろう。

江戸時代の事例

江戸前期も刺がある樹木を使った生垣は盛んに設けられていたようで、宮崎安貞著『農業全書（巻之九）』（元禄十年「二六九七」）の「園籬を作る法」に、

いけがきに作る木は、臭橘・枸杞・五加・秦椒・梔子・刺杉・楮・桑・桜桃・細竹色々多し。此等の類よし。中にも臭橘、うこぎ、枸杞勝れて宜し。

と記されていることから、カラタチ・クコ・ウコギ・サンショウ・ハリスギ（ネズミサシ？）が生垣に用いられていたことがわかる。

こうした実例としては、延宝三年（一六七五）二月に金沢藩の一柳堅物屋敷廻りにサイカチが挿し木され、芭蕉七部集の一つの『猿蓑（巻之五）』（元禄四年「二六九一」）の芭蕉の句に、「うき人を枳殻垣よりぐざらせん」「二〇二二」と詠まれていることなどがある。井原西鶴著『日本永代蔵（巻六、第二）』（元禄元年「二六八八」）には、「程なく大屋敷を買もとめ」略「生垣も枸杞・五加木を茂らせ」と、物語上だが利発な男が無駄がないようにと、クコ・ウコギを生垣にしたと書かれている。クコについては芭蕉七部集の『春の日』（貞享三年「二六八六」）の荷兮の句に「朝夕の若葉のために枸杞うへて」「二四七」とあることから、生垣のクコの葉を食用にしていたことがわかる。

寺島良安編『和漢三才図会（巻第八十一）』（正徳三年「二七一三」）の「藩籬（ませがき・まがき）」の項に、「盗みを防ぐには枳殻に如くは無きなり」「原漢文」と書かれていることからすると、江戸中期も刺のある樹木を使った生垣は盛んにつくられていたのだろう。刺がある樹木を使った生垣は成長が盛んになれば枝を切る必要があっただろうが、生垣のクコの葉を食用にしていたことからすると、後の刈り込み生垣のように綺麗に形を整えることはしていなかったように思う。しかし、刈り込

鎌倉時代の『一遍上人絵伝(巻六)』には、尾張国甚目寺前の屋敷の周囲に、高さ二メートルほどの樹木を列植している状態が描かれている[図9-5]。これは下枝を切り落としているが、刈り込まずに自然樹形に近い形で生垣にしている古い例で、江戸時代には自然樹形の生垣が増加している。享保元年(一七一六)八月に弘前藩の総代官から在所の役所の生垣に植え

図9-4 涉成園外周のカラタチの生垣(『都名所図会』1780年)

み生垣が流行した後には、秋里籬島著『都名所図会(巻二)』(安永九年「一七八〇」)に描かれている涉成園周囲のカラタチの生垣のように、刈り込んだものも現れている[図9-4]。

中国の生垣の影響

刺がある樹木を使った外国の生垣の例としては、中国の『晋書』(六四八年)の成都王穎伝に「枳籬を樹てこれを塋域(墓地)となす」[原漢文]とあり、朝鮮の朴世堂(二六二九—一七〇三)著『山林經濟』には、

およそ籬を挿むは松・竹・橡(?)・櫟(クヌギ?)皆可ならざる無きも、枳(カラタチ)・棗(ナツメ)及び刺多き木を種うるに如くは無し。

〔原漢文〕

とある。⁽¹⁰⁾ 刺を持つ樹種を用いた生垣は中国に始まって、朝鮮や日本に伝わったという可能性が考えられる。

(五) 自然樹形の生垣

るべき木として次の植物が申し渡されている。^①

うつ木・うこぎ・山ぶき・ひやうひ（イヌガヤ）・にが竹（メダケ・マダケ?）・ちしや木（エゴノキ）・からたち・唐竹（ハチク）・むくの木・すもの木・山升の木・ふたこ柴（?）・はんの木・桜・くこ等

これらの植物のうち、ウツギ・タケは古代から継承されてきたもので、ウコギ・イヌガヤ・カラタチ・サンショウ・クコは刺があることから生垣に適するとされたものだろう。ヤマブキの垣については『竹林抄（巻第二）』（文明八年「二四七六」頃）

の賢盛の句に、「歟冬の垣を荒れゆく春の暮（二二六）」とあるように古くから存在していたことからすると、防犯には適していないけれども、ウツギと同じように萌芽力が強く花も楽しめるという利点があったのだろう。

しかし、エゴノキ・ムクノキ・スモモ・ハンノキ・サクラについては、先に引用した『農業全書』に挙げられているコウゾ・クワ・ニワザクラ（ニワウメの変種）と同様に、垣根になるものかどうか疑問が生じる。クワについては貝原益軒著『大和本草（巻之十）』（宝永五年「一七〇八」序）に「古人宅圃ノ界限ニハ桑ヲウヘ其下ニ炭ヲ埋ム」とあり、屋敷や田畑の境界に植えていたことがわかる。大きくなる落葉広葉樹を刈り込み生垣みたいに形を整えることは困難

図9-5 自然樹形の生垣（『一遍上人絵伝』より）

だから、『一遍上人絵伝』のように一列に並べて植えて、自然樹形に近い形で生育させていたのではないだろうか。サクラなどは剪定ができないから、花を楽しむことを兼ねて列植したもので、境界を示す程度の意味で用いたものなのだろう。江戸前期までは常緑広葉樹も落葉広葉樹も生垣としたものは、自然樹形だったものが多かったのではないだろうか。

三 刈り込み生垣の出現

(一) 出現年代

それでは刈り込み生垣はいつ頃から出現したのだろうか。『諸国茶庭名跡図会』(古今茶道全書)所収、元禄七年「二六九四」には、想像をかなり交えた一六世紀後半から一七世紀初頭にかけての茶庭が描かれているが、タケなどの垣根で茶室の周りを囲ったものは多いものの、生垣が設けられているものは見当たらない。秋里籬島著『都林泉名勝図会』(寛政十一年「二七九」)に掲載されている、建仁寺正伝院・高台寺・石清水八幡宮泉坊・妙喜庵などの著名な茶室も同様に、竹垣が描かれているだけで生垣は存在していない。安土桃山時代の茶庭には生垣は設けられていなかったことからすると、刈り込み生垣は茶庭との関連から生まれたものではなかったことになる。

北村援琴著『築山庭造伝』(享保二十年「二七三五」)には、京都の遍照心院の庭園に生垣的な刈り込みが見られるだけだが「図9-6」、六〇年ほど後の『都林泉名勝図会』になると、大徳寺方丈・大通寺実法院・双林寺文阿弥・清閑寺・成就院・養源院・竜徳庵・天竜寺雲居庵などの多くの庭園の背後に生垣が設けられている「図9-7」。刈り込み生垣は寺院の庭園などで、塀に代わる仕切りとして設けられたのが始まりで、低木の丸い刈り込みに対して直方体の刈り込みを置いて、造形的な面白さを出そうとしたのが流行するようになった理由だろう。

図 9-6 遍照心院の刈り込み生垣（『築山庭造伝』1735 年）

図 9-7 大通寺実法院の刈り込み生垣（『都林泉名勝図会』1799 年）

秋里籬島著『築山庭造伝(前編・下)』(文政十一年「二八二八」)では、刈り込み生垣について次のような説明がされるに到っている。

生垣に二種あり。刈込の生垣、透^{すか}作りの生垣なり。刈込の生垣は中の枯枝を能透^{よく}して後見^{のち}付を刈^{すか}し。透垣は始に見付を刈込て後中を透すべし。

どのように手入れをするかが問題にされるほど、刈り込み生垣は流行していたようで、江戸後期(一九世紀)に渡来したイギリス人までが感想を書き残している。万延元年(二八六〇)から翌文久元年まで日本に滞在した園芸家ロバート・フォーチュンは、『江戸と北京』に江戸近郊の生垣のことを次のように述べている。¹²⁾

ときどき種々の種類の常緑のカシヤ、時にはスギや他の常緑樹でつくられた見事な生垣に注目した。生垣は丁寧^{丁寧}に刈り込まれて、手入れがゆきときどき、時にはかなりの高さに整枝されて、イギリスの貴族の庭園や公園でよく見かける、ヒイラギやイチイの高い生垣を思い出させる。

(二) イギリスの生垣との類似

日本の刈り込み生垣はイギリスの生垣と類似していたらしく、フォーチュンは「イギリスのイチイの生垣と同じ方法で、生垣を管理している」とも語っている。¹³⁾ 現代のイギリスの生垣としては樹種として洋種イチイと西洋ヒイラギが最も多く、後者は特に古い邸宅に多く見られるもので、これらの生垣の高さは三―八メートル、幅は一メートルにも及ぶという。¹⁴⁾

イギリスの外交官として安政六年(二八五九)から文久二年(二八六二)まで滞在したラザフォード・オールコックも、日本の生垣に対して同じような感想を抱いたらしく、

良く手入れされた背の高い生垣や垣根は、まだ厚くおおわれており、オランダ式造園法（これが日本からヨーロッパへ紹介された流行であることはほぼ確実だ）で刈り込まれている。その植え方や刈りこみ方は、称賛にあたいする。イギリス以外では、どこにもこのような生垣はみられないし、イギリスにおいてさえもこのような変化は見いだせない。

と、横浜付近を散歩した時に見かけた光景を『大君の都』の中で述べている。⁽¹⁵⁾ イギリスの生垣よりも変化に富んでいるというのは、長さや高さがさまざまで多様な樹種が使われていたということなのだろうか。日本の生垣が「オランダ式造園法」で刈り込まれているというのは、「これが日本からヨーロッパへ紹介された流行であることはほぼ確実だ」という感想からすると、オランダ人が長崎の出島で交易を許されていた関係から、日本の刈り込み生垣の技法がオランダに伝わってヨーロッパ各地に広まっていた、という意味になる。

四 生垣の剪定用具

こうした刈り込み生垣はどのような経過から誕生したものなのだろうか。前にも述べたように朝鮮からの使者宋希環が『老松堂日本行録』に、明・永楽十八年（一四二〇）六月十六日に西芳寺庭園を訪れた際に「池の三面は花木叢鬱として剪りて、二層と作す」を見た^なと記しているように、室町時代前半にはすでに樹木の上方を切つて段状にすることを^{とき}行なっている。『言繼卿記』の天文二年（一五三三）九月四日の条に「小法師召寄、庭梢^{しすえ}つませ掃除候了」とあることなどからすると、室町時代後半には樹木の剪定が一般的に行なわれるようになったらしい。『お湯殿の上の日記』の永禄七年（一五六四）五月九日の条に「こみはさまるゝ」、『兼見卿記』の天正六年（一五七八）八月五日の条に「籠古木」などとあって、貴族・武家邸宅や寺院において「こみ」と呼ばれる低木を刈り込んだものも出現している。

図9-8 江戸時代の刈り込み鋏（『築山庭造伝（前・後編）』1828年）

『言経卿記』^{とぎつね}の天正七年六月九日の条に、「一条殿ヨリ木鋏御借
用」と書かれていることから、安土桃山時代には樹木剪定専用の
鋏がつくられていることがわかる。このことと低木を刈り込むこ
とが流行したのとは、関連し合っているように思う。

樹木用の鋏については秋里籬島著『築山庭造伝（後編・中）』に収
録されている庭造り道具の中に、「手鋏・木鋏」^{てばさみ きばさみ}が図示されている
〔図9-8〕。「手鋏」は和鋏（蔵手）^{わらて}、「木鋏」は両手で使う剪定鋏で
あることがわかる。先の遍照心院庭園の状況からすると、低木を
刈り込むことから生垣を刈り込むように進展していったのではな
いだろうか。江戸時代中期以降に刈り込み生垣が流行している
のは、両手の剪定鋏が出現して、生垣の面を速く、正確に剪定で
きるようになったからではないかと考えられる。

五 結論として

国語辞典の引用例からすると、「生垣」という言葉は『多聞院日
記』の天文十九年（一五五〇）八月二十六日の条に「坊之生垣、善
阿ミ来沙汰了」とあるのが早い時期の例になる。¹⁶ 生きている植物
を使うことから生垣と言うようになっていったものだろうが、そ

れ以前は垣とか垣根とか呼んでいる。

生垣の変遷を歴史的にたどってみると、『万葉集』の時代には自然樹形に近いウツギの生垣がつくられ、平安・鎌倉時代には絵巻物を見る限りでは、下枝を切り落とした生きた樹木を植え並べた生垣が主流になっている。これは枯れ枝や割り板を立てた垣根の代わりに腐らない垣としてつくられたもので、葉は最小限度しかついていないものだった。鎌倉時代頃からは防犯のために、カラタチ・クコ・ウコギなどのような刺がある樹木を使った生垣が現れ始めて、室町時代から江戸初期にかけて流行している。安土桃山時代から江戸前期の著名な茶室の周囲には、生垣はほとんど設けられていないので、刈り込み生垣は茶庭との関連から生まれたものではなかったことになる。江戸中期に出版された『築山庭造伝』の図には生垣的な刈り込みが見られ、少し後の『都林泉名勝図会』では多くの庭園の背後に生垣が描かれるようになることから、江戸中期頃から刈り込み生垣は始まったもので、両手で使う刈り込み鋏の出現によって可能になったものと考えられる。

江戸後期には日本の技法が西洋に伝わって、オランダ式造園法と呼ばれているように、豊富な樹種を使った大小さまざまな形の日本の刈り込み生垣は、世界的にも特色のあるものになっている。このような伝統のある生垣を、今後も継承して発展させていくことが望まれる。

第九章 註

- (1) 額田巖『垣根』法政大学出版局、一九八四年、一〇二—一〇七頁。
- (2) 上原敬二『生垣の仕立方と手入』加島書店、一九七九年、八一—一三頁。
- (3) 上原、前掲書、四、五頁。
- (4) 上原敬二『樹木大図説(一)』有明書房、一九八五年、一二二—一三八頁。
- (5) 新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観(一、索引)』角川書店、一六二頁。
- (6) 前掲『生垣の仕立方と手入』一一頁。
- (7) 洪澤敬三篇『絵巻物による日本常民生活絵引(五)』角川書店、一九六八年、一八・一九頁。

- (8) 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典(室町時代編一)』三省堂、一九九一年、三五五頁。
- (9) 前掲『生垣の仕立方と手入』一二頁。
- (10) 前掲『生垣の仕立方と手入』二〇・一一八頁。
- (11) 前掲『生垣の仕立方と手入』八・九頁。
- (12) ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳『江戸と北京』
- (13) 広川書店、一九八三年、九五頁。
- (14) ロバート・フォーチュン、前掲書、二〇頁。
- (15) 前掲『生垣の仕立方と手入』一二六、一二七頁。
- (16) 山口光朔訳『大君の都(中)』岩波文庫(青四二四
一二)、岩波書店、一九八三年、二三頁。
- (17) 注8と同じ。

第一〇章 庭園植栽の禁忌

信仰や迷信のような俗信によって、行為・日時・言葉などについて避けるべきだと
して禁止されている事柄を禁忌きんきというが、庭園植栽についても昔から禁忌というもの
が存在している。近代化した今日では、禁忌は過去の産物となつてしまった感じだ
が、ときどき姿を現すことがある。禁忌は言い回しに特徴があつて、「もしそんなこと
をすると、……になる」というように、その禁忌を犯した場合の制裁を伴うものが一
般的な形になっている。⁽¹⁾しかも、なぜそうしてはいけないのかという理由が明確では
なく、禁忌を犯すとうなるかが強迫的な表現で示されていることが、人びとを不安
に落とし込む仕組みになっている。一切無視すれば良いのだが、仕事や生活のことを
将来まで見通すことができず、病氣や死がいつ襲ってくるかわからない不安を持つ人
間の、その存在の弱さを突いているのが禁忌ということになる。

一 禁忌の意味

造園の分野では上原敬二著『樹木大図説』が、最も多く樹木の禁忌を記載しているが、⁽²⁾民俗学や文化人類学の分野では早



トリカブト
(『草花絵前集』より)

表10-1 『日本俗信辞典』の禁忌植物

[悪いとされるもの]

アオキ・アオギリ・アケビ・アツモリソウ・イチョウ・イヌエンジュ・ウツギ・カキ・カツラ・カラタチ・カラマツ・キキョウ・キク・クサボケ・クスノキ・クチナシ・グミ・ケヤキ・コブシ・サカキ・サクラ・サザンカ・サルスベリ・サワラ・サンショウ・シキビ・シダレザクラ・シダレヤナギ・シャクナゲ・シャクヤク・ジンチョウゲ・スイセン・スギ・センダン・ソテツ・タケ・チャ・ツガ・ツツジ・ツバキ・トチノキ・ナツメ・ナナカマド・ニッケイ・ノウゼンカズラ・ハス・バショウ・バナナ・ヒガンバナ・ヒマワリ・ビャクシン・ビワ・フクジュソウ・フジ・ブドウ・ヘチマ・ホウセンカ・ホオズキ・ボケ・ボタン・ポプラ・ムクゲ・モミ・モミジ・ヤマブキ・ユズ・ユリ

[悪いとも良いともされるもの]

アサガオ・イチイ・イチジク・ウメ・カシ・カリン・キリ・クリ・クルミ・サイカチ・ザクロ・シュロ・ダイダイ・チャンチン・ナシ・ナンテン・バラ・マキ・マツ・モクセイ・モクレン・モモ・ヤツデ

[良いとされるもの]

アジサイ・エノキ・オモト・ガジュマル・カシワ・サボテン・ヒイラギ・モチ

くから、各地の庭木の禁忌についての言い伝えを採集している。民俗学の立場からまとめた鈴木棠三編『日本俗信辞典』は、最もよく禁忌事例を収録しているようなので、この辞典を基本にして庭園植栽についての禁忌の性格を見てみたいと思う（以下「」は『日本俗信辞典』からの引用頁を示す）。なお、「……したら良い」ということも、禁忌の裏返しとして考えられているので、禁忌として扱うことにしたい。また、『日本俗信辞典』には禁忌を用いている場所の地名が詳しく記載されているが、煩雑さを防ぐために都道府県名だけを示すことにする。

二 禁忌とされる植栽植物

(一) 『日本俗信辞典』の禁忌植物

『日本俗信辞典』には民家の庭園や寺社の境内に用いられている植物が一〇〇種類ほど挙げられているが、これらを植える悪い、あるいは良いとされるものに分類してみると、表10-1のようになる。悪いとされる植物が七〇種類ほどあつて、その数の多さに驚かされる。これに対して良いとされるものは、わずかに八種類にすぎない。人生には良いことが少なく悪いことが多い、と人びとが感じていることの表れ

だろうか。庭園用植物で良いとされるものが少ないのは、矛盾するようだが、植栽で幸運を招くことができるとは考えていないためだろう。悪いことだけはせめて避けたい、そのためには頼りにならない植物にもすがりたいというのが、人生の重庄に耐える人間のかすかな願いなのではないだろうか。

(二) 禁忌の理由

禁忌の持つ不気味さの正体を明らかにするために、述べられている理由ごとに植物を分類してみると、表10-2のようになる。庭園植栽の禁忌については、病氣に関わるものが非常に多いことがわかる。「病人が絶えない・病人が出る」という禁忌の脅し文句は、日本全国の人びとが病氣にかかることを恐れていたことの反映だろう。具体的な病氣を探してみると、サザンカでは肺病「二八九」、ツツジでは癩病「三七二」というように、一昔前の病名になっている。植物が「病人の呻き声を聞いて大きくなる」というのも、現在のように病院に完治するまで入院している時代ではあまりないことだろう。禁忌の基になった人びとの生活年代は、第二次世界大戦以前と考えられる。

家に関わるものとしては「家運が悪くなる」とか、「家が滅ぶ・一家離散する・子孫が絶える」などがあるが、これらも個人よりも家を重視した時代の雰囲気を表している。また、「牛馬が痩せる・繁盛しない・死ぬ」ということも、農家において盛んに牛馬を飼っていた時代のことだろう。『日本俗信辞典』は、高度経済成長が始まる前の昭和三十年（一九五五）頃までの資料を主にまとめたもので、明治・大正時代発刊の各地の地誌も引用していることから、江戸時代後期（一九世紀前半）の言い伝えも一部反映していると考えられる。

良いとされる植物を理由ごとに分類すると、表10-3のようになる。「魔・災難・病氣・火事・雷」を避けたいというのが、人びとの希望だったのだろう。最近はまだあまり言わないが、災難や病氣をもたらす悪神は鬼門から屋敷内に入ってくるというのが古代からの考え方だった。雷を避雷針でよけるのではなく、植物に頼ろうとしているところにも時代の差が感じられる。

表10-2 悪いとされる植物の理由 (『日本俗信辞典』より)

[病気に関わるもの]

(1)「病人が絶えない」

アツモリソウ (長野)・イチジク (秋田・神奈川・新潟・石川・福井・愛知・岡山・山口・佐賀・熊本・鹿児島)・イチヨウ (群馬・福井)・カキ (福井・福岡)・キリ (秋田・新潟・福井)・クチナシ (愛知)・クルミ (秋田・新潟・愛知)・サイカチ (秋田)・ザクロ (秋田・長野・新潟・鳥取・山口)・サワラ (秋田)・サンショウ (秋田・山形・福島・群馬・福井・愛知・広島・福岡)・シダレヤナギ (秋田・山形)・シャクナゲ (奈良・広島)・シャクヤク (兵庫)・ジンチョウゲ (愛知)・スイセン (秋田)・センダン (鹿児島)・ソテツ (広島・愛媛)・ツバキ (秋田・宮城)・トチノキ (秋田)・ナツメ (秋田・長野・愛知・広島・鳥取)・バショウ (秋田・岡山・広島・鳥取)・パナナ (鹿児島)・ピワ (宮城・群馬・茨城・千葉・静岡・富山・福井・愛知・滋賀・京都・奈良・和歌山・大阪・兵庫・鳥取・広島・山口・愛媛・高知・佐賀・熊本・宮崎・鹿児島)・フジ (秋田・宮城・千葉・長野・鹿児島)・ブドウ (宮城・埼玉・千葉・神奈川・新潟・石川・岐阜・兵庫・鳥取・高知・鹿児島)・ホウセンカ (群馬・福井・岐阜・和歌山・広島)・ホオズキ (秋田・山形・宮城・福島・群馬・埼玉・新潟・岐阜・長野・福井・和歌山)・ボタン (青森)・モクレン (長野)・モモ (山口)・ヤマブキ (秋田)・ユズ (群馬)

(2)「病人が出る」

イチヨウ (石川)・カシ (長野)・キリ (新潟・岐阜・山口)・クルミ (秋田)・ザクロ (岩手・宮城)・サザンカ (神奈川)・サルスベリ (秋田)・シダレヤナギ (愛媛)・シュロ (埼玉・岡山)・ツツジ (和歌山)・ヘチマ (愛知)

(3)「人(病人)の呻き声を聞いて大きくなる」

イチジク (新潟・富山)・イチヨウ (宮崎)・ザクロ (秋田)・ピワ (千葉・静岡・愛知・広島・福岡・佐賀・長崎・熊本)・ホウセンカ (長野・愛知)・ユリ (山形・秋田)

[人の死に関わるもの]

(1)「植えた人が死ななければ実がならない」

カラタチ (秋田)・ピワ (千葉・福井・三重・奈良)・ユズ (福島・群馬・三重・京都・鳥取)

(2)「植えた人が死ぬ」

カラタチ (岡山)・ユズ (福島・栃木・鳥取)

(3)「主人・家人が死ぬ」

イチジク (秋田・広島)・ウツギ (千葉)・カキ (広島)・クルミ (秋田)・サンショウ (長野)・シュロ (愛知)・ソテツ (広島)・ナシ (佐賀)・ホオズキ (富山)・ボケ (岐阜)・マツ (鹿児島)・ヤツデ (富山)・ユズ (神奈川・愛知)

(4)「人の血を吸う」

イチジク (広島)・クルミ (長野)・シュロ (兵庫)

[家に関わるもの]

(1)「家運が悪くなる」

イチイ (愛知)・イチジク (新潟・広島)・カキ (鹿児島)・クリ (新潟)・クルミ (新潟)・ケヤキ [ツキ] (愛知)・サクラ (鳥取)・ツバキ (鳥取・愛媛)・バショウ (広島・鳥取・宮崎)・ヒマワリ (福岡)

(2)「貧乏になる・家が繁昌しない」

イチョウ (和歌山・佐賀・長崎)・グミ (石川)・サザンカ (愛知)・サンショウ (群馬・岐阜・愛知)・シダレヤナギ (石川)・シュロ (群馬・大分・佐賀)・ソテツ (広島)・ヒマワリ (京都)・ビワ (秋田・愛知・富山・奈良・徳島・福岡)・フジ (青森・茨城・栃木・東京・富山・愛知)・ブドウ (茨城・富山・福井・長野・京都・奈良)・マキ (愛知)

(3)「家の中がもめる」

カキ (広島)・フジ (秋田)・モミ (群馬・広島)・モミジ (長野)・ユズ (愛媛)

(4)「破産する」

グミ (秋田)・クリ (秋田)・チャ (愛知)・ナシ (愛知・広島)・モミ (秋田・鳥取)

(5)「家が滅ぶ・一家離散する・子孫が絶える」

イチジク (岡山)・カラタチ (群馬)・キキョウ (兵庫)・サクラ (和歌山)・スギ (秋田・佐賀)・ソテツ (山口)・フクジュソウ (群馬)

(6)「凶事が起きる・災難が起こる・不幸になる」

アケビ (青森)・イヌエンジュ (愛知)・ウメ (岩手)・キキョウ (愛知)・グミ (京都・鳥取)・サワラ (秋田)・サンショウ (秋田・長野)・シヤクナゲ (熊本)・ツガ (石川)・ツバキ (新潟)・フジ (奈良・岡山・鳥取)・ブドウ (宮城・愛知・福岡・宮崎)

(7)「火事になる」

コブシ (福島)・センダン (宮崎)・ツツジ (長崎)・ナナカマド (東京)・ノギク (島根)・ヒガ
ンバナ (京都・大阪)・ビワ (和歌山)・ヤマブキ (長野)

[信仰に関わるもの]

(1)「寺の木だから」

イチョウ (愛知・長野・奈良・宮崎)・サルスベリ (群馬・千葉・長野・新潟・岐阜・兵庫)・シダレザクラ (長野)・ツバキ (群馬・東京)・ビワ (千葉・東京)

(2)「墓に供える木だから」

シキビ (富山・千葉・東京・神奈川・広島)・ツバキ (長野)

(3)「神の木だから」

クスノキ (鳥取)・サカキ (滋賀・広島)・スギ (鳥取)

(4)「位負けする」

イチョウ (鳥取)・ソテツ (福岡)・パショウ (岡山・福岡)・ボタン (宮崎)

[家畜に関わるもの]

(1)「牛馬が痩せる・繁盛しない・死ぬ」

イチジク (広島)・クルミ (岩手)・コブシ (秋田)・ナツメ (広島)

表10-3 良いとされる植物の理由(『日本俗信辞典』より)

[魔・災難・病気・火事・雷よけ]	
(1)「鬼門に魔除けとして」	ウメ(富山・広島)・ナシ(愛知・京都)・ナンテン(愛媛)・モモ(和歌山)
(2)「魔除け」	クルミ(宮城)・ヒイラギ(愛知・三重・広島・佐賀)・ヤツデ(秋田・鳥取)
(3)「災難よけ」	ウメ(秋田)・オモト(福岡)・サイカチ(秋田)・ナンテン(秋田・山形・神奈川)
(4)「病気・伝染病よけ」	イチジク(岡山)・サイカチ(秋田)・ヒイラギ(神奈川・広島)・ヤツデ(宮崎)
(5)「火事よけ」	エノキ(福島)・モチノキ(愛知)
(6)「雷よけ」	チャンテン(岐阜)・モチノキ(富山)・ヤツデ(富山・愛知)
[家の繁昌]	
(1)「家が繁栄する」	カシワ(福岡)・ザクロ(秋田)・ダイダイ(香川)・ナンテン(秋田・愛知)・マキ(鳥取)
(2)「金が貯まる(金持ちになる)」	アジサイ(滋賀・兵庫)・カシ(長野)・カシワ(群馬)・カリン(愛知・広島・鳥取)・シュロ(広島)・モチノキ(熊本)
(3)「子供に恵まれる・幸福になる・家族が強健になる」	ザクロ(福岡)・シュロ(富山・愛知)・モクセイ(鳥取)

「家が繁栄する」ことを個人の幸福より優先させていたのは、現代との大きな違いだろう。ただし、「金が貯まる(金持ちになる)」というのは、時代によっても変わらない人間の欲望の深さを示している。

三 禁忌の根拠の分析

(一) 名称の語呂合わせ

禁忌の事例を羅列するだけでは意味がないので、禁忌の理由の根拠となっていることを項目分けして、さらに分析したい。植物の名称に由来する語呂合わせは、人びとの日常生活と深い関わり合いがあるように感じられる。現代では自然災害のための防災対策や、病気に対しての医療技術の発展によって、人びとに降りかかる災難はかなり防げるようになったが、昔は将来起こりうる災難を可能な限り逃れるように、日

常から氣を配っていたのがそのまま表現されているのだろう。また、金錢に対して貪欲なことは、今も昔も変わらなかったようで、冗談を装っているが本音のように思える。

災難に関わるものとしては、「ウツギバナを屋敷に植えると不幸がある（新渴）」「八六」、「家の周りにカラタチを植えると家が空になる」「人が死に絶える」（群馬）」「一七七」などがある。ウツギは「うつ（空）無」と連想し、カラタチは「カラ（空）」という言葉嫌ったもので、ともに深い理由があるわけではない。「ボケの花を家へ持つて来ると親が死ぬ（岐阜）」「五五二」は、おそらくボケに「ぼける」を掛けたものだろう。良いものとしては、「鬼門にはナシやクチナシを植えておくと良い（愛知）」「四〇二」、「屋敷にナンテンを植えておくと、家が栄える（秋田・愛知）」「四一五」などがある。ナシ・クチナシは「祟りなし」という語呂合わせで、ナンテンは「難を転じる」と解している。金錢に係る禁忌には、「ソテツを庭に植えると貧乏する（香川）」「三三〇」というのがある。岡山ではソテツは鉄分を好くので釘などを打ち込むために嫌われていることからすると「三三〇」、「鉄（かね）を食う」ことが「金を食う」、「貧乏になる」と転化したのだろう。

また、駄洒落に近いものも少なくない。「キリを植えるとそれきりといって財産が増えない（秋田）」「二一六」、「モチの木を屋敷に植えると金持になる（熊本）」「六〇〇」と言われている。二種類の植物を掛け合わせたものでは、「家の裏にカシ、表にカリンを植えるとお金がたまる（長野）」「一四三」というのがある。これは「貸し」と「借りん」という言葉を掛けている。こうした語呂合わせの禁忌については、実害はなかっただろう。

（二）植物の性質・形状から

植物の持つ性質あるいは形状から、忌み嫌われるものが多い。禁忌が指し示す部分を分類すると、幹・枝・葉などの刺、枝がしだれるものや蔦類、異様な葉や変わった花、豊富に実る果実、良く延びる根、盛んな成長などになる。これらの禁忌は、植物の特徴的な形状・性質に対しての語呂合わせと言えるものが多い。

幹・枝・葉などの刺

幹・枝・葉などの刺については次のようなものがある。「ヒイラギを屋敷に植えると、魔除けになる（愛知・三重・広島・佐賀）」〔四九三・四九四〕と言われるように、ヒイラギは葉に鋸歯があることから古くから魔除として使われていたらしく、『土佐日記』（二〇世紀）にも事例が見られる。古代のケルト人はセイヨウヒイラギを家の近くに植えて邪気を払ったというが、これも葉の鋸歯が邪気を防ぐと考えたのだろう。『垣根にバラを植えると病気が治る（熊本）』〔四九二〕というのも同様の考え方らしい。

枝がしだれるもの・薦類

「シダレヤナギを植えると貧乏になる（石川）」〔三〇九〕というように、枝がしだれるものは嫌われている。また、「フジを植えると貧乏になる（青森・茨城・栃木・東京・富山・愛知）」〔五〇五〕というのは、「成り下がる」という語呂合わせからきている。さらに、「フジは家を巻き倒す（福岡・熊本）」〔五〇五〕というように、蔓が巻きつくことから、家を倒したり住人を絞め殺すと連想して嫌っている。フジ（各地〔五〇五〕）やアケビ（群馬・青森・秋田〔四〕・ノウゼンカズラ（秋田・長野〔四七五〕）が悪いとされるのも同じ理由だろう。

葉の異様さ

葉の異様さから嫌われているものもある。「門内にヤツデを植えると魔除けになる（秋田・鳥取）」〔六〇七〕という理由は明確ではないが、宮崎県では「八ツ手の葉は五枚―九枚で人間の手の形で大きいので、この葉で人の心や身体をつかむ」とされている。⁽⁵⁾葉の形からヤツデが嫌われているわけだが、魔除けになるのも特異な葉の形からだろう。また、「カシワは新芽が出ても落葉しないから喜ばれる（福岡）」〔二四五〕というように、落葉樹だが冬になっても葉が長く残っていたり、常緑でも

生え変わる時期に古葉がしばらく残っている樹木は喜ばれている。

花の色合い・散り方

花については、色合いや付き方、あるいは散り方などが禁忌の対象になっている。「ツツジは火がまわるので家の庭には植えない（長崎）」「三七二」は、「ヒガンバナを家に持ち帰ると火事になる（京都・大阪）」「四九四」ということからすると、花の色が赤いためと考えられる。庭に植えたら火事になると決まっていなくても、できるだけ危険は避けたいというのが人間の気持ちなのだろう。花の色では白も嫌われている。「白ユリを屋敷内に植えると主人が死ぬ（秋田）」「六一三・六一四」、「白ナテンを植えて良いのはお寺だけ（静岡）」「四一五」というのは、江戸時代までは葬儀の時には死者には白い衣を着せることが決まりになっていたからではないだろうか。

また、「サクラを屋敷に植えるな、散ってしまう（和歌山）」「二八二」というのは、花がさつと散ることから財産がなくなったり、家族が離散してしまうことを連想したらしい。ツバキについては「首がとれるように花が散るために嫌う（千葉・東京・山梨・長野・岐阜・富山・和歌山・岡山・広島・鳥取・愛媛・熊本）」「三七三」とされている。ツバキの花が散る時にぼろりと落ちることから、江戸時代の武士が首が切り落とされると連想して嫌ったことによる。

果実の不気味さ

樹木になる果実が嫌悪されている場合もある。徳島県では「屋敷内に果樹を植えると、果実が成熟して落ちる頃には、その家に死人が出るか、もしくは落目になる」とされている「一四五」。果樹を畑から持つてくることは、卑しいこととして嫌うだけでなく、実が成ることは居住者の命を奪うことだと連想したものらしい。イチジク（群馬・神奈川・愛知・長野・三重・京都・大阪・奈良・愛媛・香川・岡山・大分）「三三三」・ザクロ（福島・群馬・千葉・神奈川・静岡・愛知・三重・和歌山・大阪・鳥取・山口・佐賀・熊本）「二八五」・ビワ（群馬・千葉・埼玉・東京・神奈川・長野・静岡・富山・三重・滋賀・和歌山・大阪・鳥取・香川・

愛媛・佐賀・長崎・大分〔四九八〕・ユズ（福島・群馬・三重・京都・鳥取〔六一二〕）などに悪い伝えが多い。イチジクは果実の中に花が生じて外側から見えないことから、種ができないように思われたらしく、「子孫が無くなる（岡山）〔三三〕」とされている。「ザクロを門口に植えると子宝に恵まれる（福岡）〔二八五〕」とするのは、ザクロの果実の中には多くの種子が含まれているからだろう。「ビワはうなり声を聞くとたくさん結実する（岐阜）〔四九八〕」と言われるのは、小さな実が多く成るからと思う。ユズについて、「植えた人が死ななければ実が成らない（福島・群馬・三重・京都・鳥取）〔六一二〕」と言うのは、結実までに年月を要するということだろうか。樹木類だけでなく草本類でも、「ホウセンカとホオズキを家の周りに植えると病人の唸り声を聞きたがる（長野・愛知）〔五四九〕」とされている。これも種子の部分が、樹木の果実と同様に膨らむためだろう。

長く伸びる根

長く伸びる樹木の根も嫌われている。「床下までイチジクの根が伸びてくると、家に病人が絶えない（島根）〔三三〕」とされるが、根についての同様の禁忌はイチヨウ（広島〔三六〕）・キリ（秋田・広島〔二二六〕）・クルミ（秋田〔三三七〕）・ケヤキ（秋田〔三七二〕）・シダレヤナギ（愛媛〔六〇八〕）・タケ（秋田〔三四八〕）・ビワ（奈良〔四九八〕）・フジ（山口〔五〇五〕）などについても言われている。確かに根が建物の下に伸びてくれば建物にとって良くない。これはおそらく昔の家屋が、現在のようにコンクリートの布基礎の上につくられるのとは違い、礎石の上に柱を置くだけだったために樹木の根が縁の下に入りやすく、人の目にもつきやすかったからだろう。

成長のしすぎ

樹木が成長しすぎること嫌われている。「木が屋根棟より上に伸びると凶兆（山梨・岐阜・長野・滋賀・鳥取・愛媛・鹿児島）〔二八〇〕」とする例は多い。樹木が日陰をつくることは住人の健康を害し、落葉が樋に詰まることは建物を傷めるからだろう。事例としてはカキ（広島〔二三四〕）・カシ（埼玉〔二四三〕）・キリ（石川〔二二六〕）・ケヤキ（茨城〔二四九〕）・サワラ（秋田〔三

〇三二）・チャンチン（愛知「三七〇」）・ツバキ（愛知「三七三」）・ナシ（岐阜・広島「四〇二」）・ナンテン（和歌山・岡山・富山「四五」）・ポプラ（長野「五五六」）・マツ（秋田・愛媛「五五九」）・モクセイ（広島「五九八」）・モクレン（鹿児島「五九九」）・モミ（和歌山・広島「六〇一」）・ヤツデ（秋田「六〇七」）などがある。ナンテン・ヤツデなどはそれほど背が高くないものだが、昔は平屋が多かったためだろうか。しかし、エノキだけは、「門先に植える」と良い（愛媛）、屋敷に一本植えておくと火除けになる（福島）「一一四」というように好まれている。柳田国男はその理由を、ヤドリギが着くからとしている^⑤。

（三）信仰からのもの

神仏に供える樹木を庭木とすることは、かなり嫌がられている。神仏に供えるものを人間のために植えるのは、神仏を冒瀆することだと考えたのだろう。「サカキは神の木、シキビは仏の木であるから屋敷に植えると死人が出る（滋賀）」「二七四」という。ビワについても「葬式の時、ビワの葉を飾りに付けるので、この木を植えると死ななければならない（福井）」「四九九」とされている。葬式を不浄なもの、恐ろしいものと見なしているからなのだろう。

また、「イチヨウはお寺に植える木だからいけない（愛知・長野・奈良・宮崎）、イチヨウは神木だから俗家に植えると主人が死ぬ（広島）」「三六」というように、寺院や神社に植える木は民家には植えてはならないとする禁忌も数多い。その例としては、サルスベリ（群馬・千葉・長野・新潟・岐阜・京都・兵庫「三〇二」）・シダレザクラ（長野「二八二」）・シダレヤナギ（静岡「六〇八」）・ツバキ（群馬・東京「三七三」）などがある。これらの樹木が寺院に多いのは、敷地が広大なので成長して大きくなっても問題がないためだろう。沖縄県ではガジュマルが民間信仰の対象となっている。「屋敷内には吉日にガジュマルを植える。ガジュマルの古木にはキシムナー「キシムン。おかっぱ頭で赤ら顔の童形の妖怪」が生じる」「一四五」とされている。

(四) 家相からのもの

家相は中国から伝来した俗信で、陰陽五行説が基礎になったものだが、鬼門に関する禁忌などに影響が現れている。鬼門に植える植物としてはウメ〔広島「二〇五」・クチナシ（愛知「四〇二」）・ナシ（愛知「四〇二」）・ナンテン（愛媛「四一五」）・モモ（和歌山「六〇二」）などが挙げられている。屋敷の門口に植えておくと災難除けになるという例も多い。時代が下るにつれて、悪霊も門から入ってくると考えられるようになったためだろう。クルミ〔宮城「三三七」）・ナンテン（福島・兵庫「四一五」）・ヤツデ（広島「六〇七」）が災難除けとされているが、八重ザクラなどは悪く言われている（静岡「二八二」）。

また、鬼門以外にも植栽する方角について、問題とされている場合がある。「ウメの木を屋敷内の北に植えると不幸が続く（秋田）」「一〇五」、「カキを家の前に植えるのは悪いから、東側に植える（三重）」「一三四」という。マツでも北・南・西は植栽してはならないとされている（大阪・愛媛・群馬「五五九」）。東側は日当たりを考えると植栽をしない方がいいのだが、なぜなのだろうか。

(五) 山野の植物の拒否

「野ギクを植えると、火事がある（島根）」「一八七」、「野マツを屋敷に植えると、屋敷が野になる（秋田）」「五五九」というのは、山野から植物を採ってきて庭に植えると祟りがあるということらしい。「屋敷内にスギを植えると家が滅ぶ（秋田）」「三一八」、「ウメを宅地に植えると不幸がある（岩手）」「二〇五」とも言われている。山に植える木や畑の果樹を家に持ち込むな、ということなのだが、山野に潜む悪霊が屋敷内に入り込むという意味なのだろうか。現在でも農村地帯で山の樹木を採ってきて庭園に植えることは、庭木を買う金もないのかと他人に思われるとして嫌がる傾向があるので、そうした意味合いも含

むのかもしれない。

(六) 雷よけの樹木

避雷針のなかった昔には、雷よけの樹木が庭に植えられていたらしい。チャンチン(岐阜「三七〇」)・モチノキ(富山「六〇〇」)・モクセイ(新潟「五九八」)・ヤツデ(富山・愛知「六〇七」)が雷よけの樹木とされている。他の文献にはエノキ・エンジュ・キササゲ・ゴンズイ・チャンチン・ナギ・ナナカマド・ニワウルシ(シンジュ)・ヒイラギなども雷よけとして挙げられている。⁽⁸⁾常緑・落葉を問わず大木になる木が、雷よけの資格があるとされたのは理解できるのだが、ヒイラギ・モクセイ・ヤツデなどは何か別な理由からなのだろう。

(七) 偶然からのもの

「庭の木が枯れると財産が傾く、家が滅びる(秋田・富山)」「一八〇」という言い伝えがある。なぜこうした俗信が生まれたのだろうか。モクセイに関して次のような話が伝わっている。⁽⁹⁾

紀州有田地方ではモクセイを植えると不吉なりとする。「略」大きな構への庄屋であつたがその家のモクセイが枯れると同時にその家もつぶれた。それ以来モクセイが栄えていればその家は隆盛だが、これが枯れたらその家は衰へるといふ迷信から殆ど植えていない。

大木のある家は何代も続いた歴史があり、名家とされる所が多かつただろう。大木は遅かれ早かれ枯れるものだから、運悪く家長の死や家の滅亡に重なることが起こる可能性がある。各地で同じような禁忌が残っているのは、こうした偶然が起

源になっているのではないだろうか。

(八) 実用面への嫌悪

「センダン」は獄門の時に打首をかける木だから(鳥取)、センダンは棺桶にする木だから(福岡)、屋敷内に植えてはいけない「三二八」、「ムクゲは墮胎に使用した木だから屋敷内に植えてはいけない(鳥取)」「五九四」というように、実用面から庭木とすることが否定されているものもある。しかし、反対に、「シュロの木を植えると長者になる(広島)」「三二二」は、シュロが機欄縄の原料として売れ、現金収入をもたらすからだろうとされている。

四 存続する禁忌

禁忌でも語呂合わせ的なものは問題はないが、植物の性質・形状から生じたものでは、植物の成長が居住者に害を及ぼすことがあるために、無視できない場合がある。信仰に由来するものや家相によるものは、日常生活に強く関わっているだけになかなか消滅しないだろう。現在の禁忌の状況については、民俗学の研究の立場から次のように言われている。¹⁰⁾

社会の価値体系が変り、周囲の環境も、禁忌を守り通すことが困難な状態になってくると、特定の人々が特定の場合にだけ守るとか、気にする人だけが個人的に守るような形をとり、禁忌そのものも、社会的な拘束力を持たない、軽い意味あいのものが多くなってくる。

「気にする人だけが個人的に守る」というのが、まさに個人庭園においては起きるわけで、造園家にとっては仕事上差し支

えが生じることになる。植栽禁忌は人間存在のもろさを突いているものだから、恐怖感を取り除くことは困難を極める。生
活と密着したものであればあるほど、禁忌を否定することは難しくなる。庭園植栽についての禁忌は、言われることは少な
くなるだろうが、今後でも存続していくと考えられる。

第一〇章 註

- (1) 井之口章次『日本の俗信』弘文堂、一九七五年、五四頁。
- (2) 上原敬二著『樹木大図説(全四巻)』有明書房、一九八五年。
- (3) 鈴木棠三編『日本俗信辞典』角川書店、一九八二年。
- (4) 上原敬二、前掲『樹木大図説(二)』八八二頁。
- (5) 宮崎県農業改良普及協会編『宮崎県のことわざ・格言』鉾脈社、一九九一年、一九四頁。
- (6) 柳田国男『神樹篇』『柳田国男全集(二四)』ちくま文庫、筑摩書房、一九九〇年、一七四頁(初版、実業之日本社、一九五三年)。
- (7) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典(縮小版、三)』小学館、一九八〇年、五六四頁。
- (8) 宮沢文四郎『庭木の民族誌』銀河書房、一九八五年、一四三頁。
- (9) 上原敬二、前掲『樹木大図説(三)』六七三頁。
- (10) 井之口、前掲書、五三、五四頁。

第二章 植物名の比較

今まで多くの本から植物名を引用してきたが、特性を示さずに名前を書いているだけのことが多く、その植物が何だったのかを確定することは非常に難しい。本草学の影響から漢名を使用している場合もあり、時代や人によって指す植物が異なっていることも、同定を困難にしている。本書の最後に、各時代の文献に現れている植物を比較することによってできるだけ品種名を明らかにするとともに、植物の渡来年代や植栽の流行について考えてみることにしたい。

一 植物名の同定

例えば、奈良時代の庭園のマツを詠んだ『万葉集』の歌に次のようなものがある。



ラン

(『草花絵前集』より)

西の池の辺に御在して肆宴きこしめす歌一首

池の辺の松の末葉に降る雪は五百重降りしけ明日さへも見む「二六五〇」

この中の「松」をおそらく植物の専門家は、奈良市近辺の丘陵地帯に生育しているのはアカマツだから、アカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.) と同定するだろう。しかし、西池は平城宮内の北西に位置し、現在の佐紀池に該当するとされているもので、宮廷の儀式に利用されていた園池で、溜池ではなかった。すでに述べたように、奈良時代の園池は大陸の影響を受けたもので、海洋風景をかたどったものだった。マツは海岸の松原を模して植栽されたものだったから、平城京左京三条二坊六坪庭園の発掘事例からすると、品種としてはクロマツ (*Pinus Thunbergii* Parl.) の可能性もある。

天平二年(七三〇)正月十三日に大宰府長官の同伴旅人邸で催された宴席では、

梅の花咲きたる園の青柳を縋にしつつ遊び暮さな「八二五」

という歌が詠まれている。この歌の「梅」(*Prunus Mume* Sieb. et Zucc.) が白梅か紅梅かは、これだけでは判断がつかないが、わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも「八二二」

という旅人の歌があるので、雪と見えたのだから紅梅ではなく、時代的に見て白梅という結論になる。紅梅は『続日本後紀』の承和十五年(八四八)正月二十一日の条に「殿(仁寿殿)前の紅梅」とあるのが初見とされている。鎌倉時代の『明月記』によると、藤原定家邸にはウメの種類として「白梅・八重白梅・紅白梅・単紅梅・八重紅梅・薄紅梅・八重薄紅梅・木紅」などが集められ、江戸時代の滝沢馬琴邸になると「青軸梅・鶯宿梅・養老梅」といった変種が加わっている。時代ごとに多くの種類で変種が見られるようになるので、品種を同定するにはかなりの注意がいる。基本的な植物でも、いつの時代にもどの

ような品種が登場しているのかを確認しておく必要がある。

二 植物名の時代比較

(一)『万葉集』『下学集』『大和本草』の比較

古代・中世・近世の文学や日記類、各種の史料から植物名を探し出しても、厳密に同定することは不可能に近いものが多い。だが、薬草を研究した草本草の書物は、漢名や和名や植物の特色が書かれているので参考になる。しかし、それでも解明は困難に感じられる。各時代の植物名が何を指しているのかを比較するために、植物分類の専門家の研究成果を利用すること⁽⁵⁾にしたい。『万葉集』の植物については、現在一般に入手しやすい松田修著『万葉の植物』を使い、江戸時代の植物の呼称を知るために、貝原益軒撰・白井光太郎考証『大和本草』(原本、宝永五年「一七〇八」序)を使用することにした。⁽⁶⁾中世の植物を扱った研究書を見出せない⁽⁷⁾ので、室町時代の文安元年(一四四四)に編纂されて元和三年(一六一七)に出版された『下学集』(巻下、草木門)を用いて、掲載されている植物の同定を木村陽二郎監修『図説草木名彙辞典』に拠ること⁽⁸⁾で、植物名の変遷をたどってみることにした[表11・1・2]。

『万葉集』に詠まれている植物のうちから、主に庭園に植えられている木本類と草本類で、『下学集』あるいは『大和本草』に掲載されている比較できる種類を選んだために、実際よりも植物数は少なくなっている。木本類と草本類の表を比較すると、『万葉集』と『大和本草』では同一の植物がかなり異なった名前と呼ばれている。だが、『下学集』と『大和本草』の植物名はほとんど同じで、漢名を使っているものが多い。これは『万葉集』が各地の人びとの歌を収集していることから、各地の植物の呼び名が取り入れられているためとされている。⁽⁹⁾それ以後は植物和名にあまり変動がなくなるのは、平安時代に

表11-1 『万葉集』『下学集』『大和本草』の植物名の比較 (木本類)

(学名は、牧野富太郎『改訂増補・牧野新日本植物図鑑』[北隆館, 1989年]を用いた)

現代和名	学 名	『万葉集』	『下学集』	『大和本草』
アオギリ	<i>Firmiana simplex</i> W. F. Wight	ごどう (梧桐)		梧桐 (アラギリ・シマギリ)
アカガシ	<i>Quercus acuta</i> Thurb. ex Murray	かし (櫟)		櫟 (カシ・カタギ)
アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> Muell. Arg.	ひさぎ (久木・歴木)		楸樹 (ヒサキ・カシハ)
アジサイ	<i>Hydrangea macrophylla</i> ser.	あぢさゐ		紫陽花 (アツサヒ・アヂサイ)
アズサ	<i>Betula grossa</i> Sieb. Et Zucc. var. <i>ulmifolia</i> Makino	あづさ (梓)	梓 (アヅサ)	梓 (アツサ)
アセビ	<i>Pieris japonica</i> D. Don	あしび (馬酔木)	馬酔木 (アセボ)	馬酔木 (アセボノキ)
イチイガシ	<i>Quercus gilva</i> Blume	いちひ		櫟 (イチヒ)
ウツギ	<i>Deutzia crenata</i> Sieb. et Zucc.	うのはな	楊盧木 (ウツギ)	空木 (ウツキ・卵ノ花)
ウメ	<i>Prunus mume</i> Sieb. et Zucc. var. <i>mume</i>	うめ (梅)	清客 (セイカク・梅)	梅
エノキ	<i>Celtis sinensis</i> Pers. var. <i>japonica</i> Nakai	え (榎)	榎木 (エノキ)	榎 (エ)
カエデ	<i>Acer palmatum</i> Thunb. ex Murray var. <i>palmatum</i>	かへるで (蛙手)	楓 (カヤデ)	機樹 (カヘデ)
カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> Vent.	たく (柶)	梶 (カヂ)	
カラタチ	<i>Poncirus trifoliata</i> Rafin.	からたち (枳)	枳 (カラタチ)	枳実・枳殻
クネンボ	<i>Citrus nobilis</i> Lour.	あべたちばな (阿部橘)		柑 (クネンボ・カウジ)
クリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	くり (栗)		栗 (クリ)
クワ	<i>Morus bombycis</i> Koidz.	つみ (柘)	桑 (クワ・サウ)	桑 (クハ)
ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i> Makino	つき (榎)		榎 (ケヤキ)・榎(ツキ)
コノテガシワ	<i>Thuja orientalis</i> L.	このてがしわ		側柏 (児ノ手栴)
サイカチ	<i>Gleditschia japonica</i> Miq.	さいかち		皂莢 (サイカシ)
サカキ	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	さかき (賢木)	榊 (サカキ)	榊 (サカキ)
シイ (総称)	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima ex Yamazaki et Mashiba <i>Shiia cuspidata</i> Schottky	しひ (椎)	椎 (シイ)	椎 (シヒ)
シキミ	<i>Illicium anisatum</i> L.	しきみ	榿 (シキミ)	芥草 (シキミノ木)
シダレヤナギ	<i>Salix babylonica</i> L.	やなぎ (柳・楊)	楊・柳 (ヤナギ)	柳 (シタリヤナギ)
シラカシ	<i>Quercus myrsinaefolia</i> Blume.	しらかし (白櫟)		白カシ
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	すぎ (杉・榧)	杉 (スギ)	杉
スモモ	<i>Prunus salicina</i> Lindl.	すもも (李)	李 (スモ、)	季
センダン	<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	あふち	棟 (アフチ)	棟 (アフチ・センタン)

現代和名	学名	『万葉集』	『下学集』	『大和本草』
タブノキ	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	つまま		ダモ
ツゲ	<i>Buxus microphylla</i> Sieb. et Zucc. var. <i>japonica</i> Rehder et Wils	つげ (黄楊)	槻 (ツゲ)	黄楊 (ツゲ)
ツツジ (総称)	<i>Rhododendron</i>	つつじ<ヤマツツジ>	躑躅花 (ツ、ジ・テキチヨク)	躑躅 (ツ、ジ)
ナシ	<i>Pyrus pyrifolia</i> Nakai var. <i>culta</i> Nakai	なし (梨)	梨 (ナシ)	梨
ナツメ	<i>Zizyphus jujuba</i> Mill. var. <i>inermis</i> Rehd.	なつめ (棗)	棗 (ナツメ)	棗 (ナツメ)
コナラ類 (総称)	<i>Quercus</i>	なら (櫟)	櫟木 (ナラノキ)	櫟 (クヌギ・ナラ)
ニワウメ	<i>Prunus japonica</i> Thunb. ex Murray	はねず		郁李 (棠棣)
ニワトコ	<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>sieboldiana</i> Hara	やまたづ		接骨木 (タツノキ)
ヌルデ	<i>Rhus javanica</i> L. var. <i>roxburghii</i> Rehder et Wils.	かづのき	白膠木 (ヌルデ)	五椀子 (フシ・ヌルデ)
ネムノキ	<i>Albizia julibrissin</i> Durazz.	ねぶ (合歓木・合歓)	合歓木 (カツクワンボク・ネブノキ)	合歓 (ネフリノキ・カウクハン)
ノイバラ	<i>Rosa multiflora</i> Thunb. ex Murray var. <i>multiflora</i>	うまら		野薔薇 (ノイバラ)
ハンノキ	<i>Alnus japonica</i> Steud.	はり (榛)		榿 (ハリイ・ハンノキ)
マツ (総称)	<i>Pinus</i>	まつ (松)		松
ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtuse</i> Sieb. et Zucc. ex Endl.	ひ (檜)	檜 (ヒノキ)	檜
フジ (総称)	<i>Wistaria</i>	ふぢ (藤)		紫藤 (フヂ)
ホオノキ	<i>Magnolia obovata</i> Thunb.	ほほがしは		厚朴 (ホ、ノキ)
タチバナ	<i>Citrus</i>	たちばな (橘)	橘 (タチバナ)	橘 (タチバナ・ミカン)
ネズ	<i>Juniperus rigida</i> Sieb. et Zucc.	むろのき (室木)	檜 (ムロ)	檜杉 (ムロノキ)
モミ	<i>Abies firma</i> Sieb. et Zucc.	おみのき (巨木)		榧 (モミ)
モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch.	もも (桃)		桃
ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i> L. var. <i>japonica</i>	つばき (椿・海石榴)		山茶 (ツバキ)
ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex koidz.	さくら (桜)	さくら	桜
ヤマハギ	<i>Lespedeza bicolor</i> Turcz. var. <i>japonica</i> Nakai	はぎ (芽木)		天竺花 (ハギ)
ヤマブキ	<i>Kerria japonica</i> DC.	やまぶき (山吹)	蘇酴 (ヤマブキ・ドビ, 山吹)	棣棠 (ヤマフキ)
ユズリハ	<i>Daphniphyllum macropodum</i> Miq. var. <i>macropodum</i>	ゆずるは (弓絃葉)	杠 (ユズリハ)	ユヅリ葉

表11-2 『万葉集』『下学集』『大和本草』の植物名の比較(草本類)

現代和名	学 名	『万葉集』	『下学集』	『大和本草』
オキナグサ	<i>Pulsatilla cernua</i> Spreng.	ねつこぐさ		猫草(白頭草)
オギ	<i>Miscanthus sacchariflorus</i> Benth. et Hook. f.	をぎ(荻)		荻(ヲギ)
オミナエシ	<i>Patrinia scabiosaefolia</i> Fisch.	をみなへし(女郎 花)	女郎花(ヲミナメ シ)	敗醬(ヲミナエ シ, 女郎花)
カキツバタ	<i>Iris laevigata</i> Fisch.	かきつばた	杜若(カキツバ タ)	燕子花(カキツハ タ)
カサスゲ	<i>Carex dispalata</i> Boott var. <i>dispalata</i>	すげ(菅)	菅(スゲ)	菅(スケ)
カワラナデシコ (ナデシコ)	<i>Dianthus superbus</i> L. var. <i>speciosus</i> Reichb.	なでしこ(石竹・ 瞿麦)	瞿麦(ナデシコ)	瞿麦(ナデシコ, セキチク)
キキョウ	<i>Platycodon grandiflorum</i> A. DC.	あさがお(朝貌・ 朝貝)	桔梗(キキヤウ)	桔梗
ケイトウ	<i>Celosia cristata</i> L.	からある(韓藍・ 鵝頭草)		鵝冠花(ケイト ゲ)
ショウブ	<i>Acorus calamus</i> L.	あやめ(菖蒲)	菖蒲(シヤウブ)	菖蒲
ジャノヒゲ	<i>Ophiopogon japonicus</i> Ker-Gawl.	やますげ(山菅)		麦門
ススキ(カヤ)	<i>Miscanthus sinensis</i> Andress. var. <i>sinensis</i>	すすき(尾花)	薄(ス、キ)	芒(ス、キ、カヤ)
スマレ	<i>Viola mandshurica</i> W. Becker	すみれ		紫花地丁(コマヒ キグサ, スマレ)
ツクサ	<i>Commelina communis</i> L. var. <i>communis</i>	つきくさ(月草・ 鵝頭草)		鴨跖草(アヲハ ナ)
ハス	<i>Nelumbo nucifera</i> Gaertn.	はちす(蓮)	蓮(ハチス)	蓮(ハチス・ハス)
ハマユウ (ハマオモト)	<i>Crinum asiaticum</i> L. var. <i>japonicum</i> Baker	はまゆふ(浜木 綿)		浜木綿(ハマユ フ・ハマヲモト)
ヒオオギ	<i>Belamcanda chinensis</i> DC.	ぬばたま(黒玉)		射干(カラスアフ ギ)
ヒメユリ	<i>Lilium concolor</i> Salisb. var. <i>partheneion</i>	ひめゆり		百合(ヒメユリ)
ヒルガオ	<i>Calystegia japonica</i> Choisy	かほばな(容花・ 貞花)		鼓子花(ヒルカ ホ)
フジバカマ	<i>Eupatorium fortunei</i> Turcz.	ふぢばかま(藤 袴)		真蘭(フヂバカ マ)
フトイ	<i>Scirpus lacustris</i> L. var. <i>tabernaemontani</i> Trautv.	おほるぐさ		莞
フユアオイ	<i>Malva verticillata</i> L. var. <i>verticillata</i>	あふひ(葵)		冬葵(ウユアラ ヒ)
メハジキ	<i>Leonurus japonicus</i> Houtt.	つちはり(土針)	茺蔚草(メハジ キ)	

京都での呼称が標準和名として使用されたことによるのだろうか。漢名の使用が増加するのは、中国の植物についての書物を本草学者が研究した結果だろう。

(二) 植物の渡来年代

橘の渡来年代

『万葉集』『下学集』『大和本草』によつて渡来植物を比較してみよう。『万葉集』には「橘」がよく詠まれているが、弥生・古墳時代の遺跡からはモモ・スモモ・カキ・ウメが検出されているのにもかかわらず、ミカン類の種子はまだ発見されていない。しかし、『日本書紀』の垂仁天皇九十年の条に田道間守^{たぢまもり}という人物が、天皇の命令で常世国^{とこよのくに}に「非時の香菓^{ふじのくわ}」と呼ばれた「橘」を求めて旅に出て、十年後に常世国から持つて帰ってくるという話が載っている。橘は現在のどの種に該当するかが明らかでないので、仮にタチバナとしておくが、なぜタチバナについてこのような話がつくりだされたのだろうか。

モモの原生地は中国の黄河上流の陝西省・甘肅省とされているが、日本の弥生時代の遺跡から出土しているモモの核は大型のことから、大陸のものが渡来したとされている⁽¹⁾。また、ウメについては、原生地は揚子江以南の四川省・湖北省・湖南省あたりで、日本にはコメなどと一緒に同じ経路で入つて来たと言われている⁽²⁾。中国の果樹栽培の分布図を見ると、揚子江の北側でモモ類を、南側でミカン類を栽培している。モモと同時にタチバナが伝来してこなかったのは、朝鮮経由でモモが伝わったからではないだろうか。北部のモモが揚子江以南を経由して入つて来ていれば、タチバナも一緒に渡来していて、『日本書紀』の話は生まれなかったように思う。タチバナはウメよりも遅れた時期に入ってきたのだから、渡来年代はおそらく古墳時代だろう。発掘調査で古墳時代の遺跡からまだタチバナの種子が発見されていないのは、栽培が広まっていなかったか、あるいは種子が腐食しやすいためではないだろうか。

『下学集』の渡来植物

『下学集』に掲載されていて、『万葉集』に収録されていない庭園用植物としては次のようなものがある。

牡丹・芍薬・芝蘭・水仙花・葡萄・刈萱・紫苑・竜胆・芙蓉・仙翁花・牽牛花・砥草・南天・果李木・石榴・緋桃・柿・木犀・梔子・辛夷・石楠花

このうちボタン・シャクヤク・ブドウ・フヨウ・センノウ・アサガオ・カリン・ザクロ・モクセイは外来種だが、ナンテンも外来種だとすると、鎌倉時代の『明月記』の寛喜二年（一二三〇）六月二十日の条に「南天竺」とあるのが初見となる。ボタン・シャクヤクは奈良時代の『出雲国風土記』に記載があるが、室町時代になるとかなり渡来したものが多くなっている。センノウは『看聞御記』の永享三年（二四三二）七月四日の条に「仙翁花」、モクセイは『言継卿記』の天文二十二年（一五五三）七月五日の条に「木せい」、ブドウは『実隆公記』の長享元年（二四八七）二月二十一日の条に「葡萄」と挙げられていて、庭園に植栽されていたことがわかる。薬用あるいは食用として入ってきたものが庭園に植えられるようになった場合が多いが、センノウなどは当初から観賞用として輸入されたものなのだろうか。

『大和本草』の渡来植物

『大和本草（巻之十二、花木）』になると、

海棠（カイドウ）・百日紅（サルスベリ）・瑞香（ジンチヨウゲ）・蠟梅（ロウバイ）・笑靨花（シジミバナ）・金糸桃（ビヨウヤナギ）・仏桑花（ブッソウゲ）・迎春花（オウバイ）・木瓜（ボケ）・鈴掛（コデマリ）

といった外来種が登場している。カイドウ・オウバイは『実隆公記』の延徳二年（二四九〇）十月六日の条に「海棠樹」、大永

七年（一五二七）五月三十日の条に「黄梅」とあり、ブッソウゲは『言繼卿記』の天文十三年（一五四四）五月七日の条に「仏笑花」と記載があつて、室町時代に入つていたことがわかる。サルスベリも『義演准后日記』の慶長九年（一六〇四）三月一日の条に「百日紅」と出ているので、安土桃山時代にはすでに渡来していたことになる。これらの植物は江戸初期に一举に輸入されたのではなく、室町時代から江戸初期にかけて徐々に入つてきたものと考えられる。

（三）庭園植物の栽培技法

果樹の栽培技法の応用

『万葉集』『下学集』『大和本草』から栽培技法の歴史をたどつてみよう。『下学集』には、「柚・橙・蜜柑・柑子・橘柑・橘・枳・温州橘」とミカン類の品種が列挙されているが、鎌倉時代の『明月記』には「橘・柑子」が出ていて、室町時代の『実隆公記』には「蜜柑・金柑」とあるから、室町時代頃までにミカンの品種は次第に増加していることがわかる。藤原定家が「橘・柑子・紅梅・白梅・木紅梅・薄紅梅・八重桜」などの挿し木を行ない、「八重桜・夏梨」の接ぎ木をしていることからすると、果樹栽培の技術が園芸品種の育成に応用されたと推測される。安土桃山時代には『多聞院日記』によると、生駒の農民らしい人物が、「キンカン・朝倉サンシヨ・リンシ梅・ウシユキツ・長柿」などを接いでいるのは、栽培技法が地方にも一層広がったことを示している。多くの果樹の品種が集め続けられているのは、果樹は当時の人びとにとって貴重な嗜好品だったからだろう。

園芸品種の栽培

『下学集』にはツツジの別称として「杜鵑花・映山紅」を挙げているが、『蔭涼軒日録』ではそれぞれ別種として扱われている。江戸時代の鹿苑寺境内では、『隔簾記』によるとツツジの品種として「千重赤・万葉・雲仙・千葉四季・美女・風車・

曙・薩摩・赤熊^{しやぐま}・胡蝶・益鏡・羅漢・五月」が栽培され、サツキとしてはさらに「千重・紀州・青山・金四手・銀台」が存¹⁸在している。『花壇地錦抄』(元禄八年「二六九五」)になるとさらに増加していて、ツツジ・サツキともに一六二種が挙げられているが、接ぎ木や挿し木といった技術がないことには、変種を増産して大量に販売することは不可能だっただろう。江戸時代の園芸品種の多様さは、古代からの栽培技術の伝統の上に成立していたと言える。

(四) 各時代ごとの流行植物

年代を追って植栽植物の変化を調べると、つぎつぎに新しいものが加わっていて目まぐるしい感じがするが、同時代の書物で植物を比較してみると別な面も見えてくる。

室町時代の『下学集』と、同時代の『大乘院寺社雜事記』の文明十年(一四七八)・明応六年(一四九七)の記事の庭園植物「表4・13・14」を比較してみると、ヤマブキ・カキツバタ・オミナエシ・フヨウ・スモモ・ナシ・ツツジ・サツキが共通している。ツツジ・サツキのような常緑の低木類が愛好されだしたことが、平安・鎌倉時代とはやや異なっている。これはツツジやサツキを刈り込むことが流行していたことに関連している。

『尺素往来』と『大乘院寺社雜事記』に共通なものとしては、ニワザクラ・ユキヤナギ・ジンチョウゲ・カイドウ・シモツケ・フヨウ・ムクゲがあり、鎌倉時代までは見かけなかったものが多くなっている。渡来年代が確定していないモクセイも、『下学集』に「木犀^{モクセイ}」とあり、「尺素往来」と『新撰類聚往来』の「桂花」も、中国でと同様にモクセイを指すと考えられるので、室町時代には日本に入っていたことになるだろう。室町時代は戦乱に明け暮れた時代のように感じられるが、渡来植物が多かったことは大陸との貿易が頻繁に行なわれるようになったということだろう。植物の品種が増加したことは、国内の物的流通が盛んになったことを示している。戦国時代を含めると室町時代は二〇〇年にもわたっている。室町時代は鎌倉時代と安土桃山時代に挟まれた単なる混乱した時代ではなく、多くの可能性を秘めた独特の時代だったように感じられる。

各地の武將たちが競って庭園を造営し、珍しい植物を収集しているのは、都の権力者たちに負けないという気概を持っていたからだろう。人びとの植物愛好の強さは、不安定な時代だったからこそ、必死で生きる喜びを植物に見出そうとしていたためかもしれない。

史料の中の植物の種類を同定することは困難なのだが、このように同時代の史料を集めてみると、植物の収集・栽培は流行を追っている場合が多いことから、同じ種類の植物が登場していることがわかる。こうした作業を続けると各時代の一般的な植物名が判明し、現代の何に当たるのかを類推することも可能になるだろう。

第一章 註

- (1) 三五・三六頁参照。
- (2) 宮澤文吾『花木園芸』養賢堂、一九四〇年、四八一頁
(復刻、八坂書房、一九七八年)。
- (3) 一一七—一二三頁参照。
- (4) 二八二—二八六頁参照。
- (5) 松田修『万葉の植物』カラーブックス(九七)、保育社、一九七二年。
- (6) 白井光太郎考証『大和本草』有明書房、一九八三年(初版、一九三六年)。
- (7) 山田忠雄監修・解説『元和三年版下学集』古辞書叢刊(二)、新生社、一九六八年。
- (8) 木村陽二郎監修『図説草木名彙辞典』柏書房、一九九一年。
- (9) 松田修、前掲書、一三四—一四一頁。
- (10) 小林章『果物と日本人』NHKブックス(五〇八)、日本放送出版協会、一五七—一六二頁。
- (11) 小林章、前掲書、一六三—一六七頁。
- (12) 西北師範学院地理系・地図出版社編『中国自然地理図集』地図出版社(中華人民共和国)、一九八四年、八八頁。
- (13) 一一九・一二〇頁参照。
- (14) 一九一頁参照。
- (15) 一一九—一二二頁参照。
- (16) 二三四頁参照。
- (17) 一九四・一九五頁参照。
- (18) 二五七・二五八頁参照。

おわりに

平安・鎌倉時代は優美な落葉広葉樹が好まれ、室町時代には枯山水的な緊張が感じられる針葉樹が使われ、安土桃山時代には里山に住むような気分になれる常緑広葉樹が植栽され、江戸時代にはこれらすべてが利用されるようになるというように、新しい時代に合った植物が各時代ごとに求められている。庭園という小面積の空間なのだが、植栽には日本の歴史、すなわち人びとと時代との関わりを見ることができると言えるだろう。社会の変動が人びとの心理に影響を与え、新しい時代に合った植物が求められていくのだろうが、現代でも外国から珍しい樹木や草花がつぎつぎに入ってきて、庭園に限らず環境緑化という目的でさまざまに利用されている。庭園に植栽される植物の種類は限定されているように見えても、時代とともに変化している。

奈良時代にはウメ・モモ・シダレヤナギ・タケなどが好んで庭園に植栽されているが、この背景には中国文化の影響があったことがわかる。それ以後、各時代ごとに外来種が入ってきているのは、珍しい植物を栽培したいという気持ちだけではなく、外国の文化への憧れが常にあつたように感じられる。平安時代に国風化が起こり、江戸時代には鎖国が行なわれているが、絶えず外国の文物を積極的に取り入れようと努めてきたのが、島国に住む日本人の性向であり、日本庭園の特色なのではないだろうか。

配植の仕方を見ると、平安時代の庭園は全体の形態が自然を模していて、植栽も自然に見られる形をとっている。室町時代には自然植生的な姿を再現することが主張され、安土桃山時代の露地では深山の雰囲気を持たせるために、アカマツ林やシイ・カシ林を模倣している。このように庭園植栽は、日本の自然風景と密接な関係にあつたことがわかる。

徳川吉宗の時代には江戸の町の環境改善だけが課題とされていたが、昭和前期には東京の郊外まで含めてのすべての緑地

が考慮されるようになり、庭園は都市緑地の一部と見なされるに至っている。生活環境の悪化によって、庭園植栽というもののだけでは問題がすまなくなつたわけだが、現代では自然を保全するために、生態学的な対処法が検討されている。このようにして庭園というものの価値が、低下してしまつたのが現状ということになる。

しかし逆に、庭園は個人所有の限定された小空間であり、芸術的な創造性が問題とされた場所だつたことを改めて認識させられる。自然に対する憧れや植物に対する嗜好が、庭園植栽を多彩なものにし、植栽の美的な構成を追求することが、庭園の芸術性を高めたと考えられる。このような努力が各時代ごとに特色のある庭園を生みだし、「日本庭園」と呼ばれるものを形成してきたと言えるだろう。

これまで文献調査や庭園の実測あるいは発掘調査によって、過去の庭園がどのような形態だつたかが、次第に明らかにされてきている。しかし、庭園植栽は人びとの日常生活とも密接に結び付いたものだつたために、歴史的に庭園に蓄積されてきた文化は幅が広く、解明することは容易なことではない。だが、以上に述べたような事柄を明らかにできたことでは、庭園植栽史を研究することも一つの有効な方法のように思う。

引用文献

刊行されている本の場合でも、使用する原本が異なると内容が異なっていたり、改訂されていたりする場合があるので、引用した文献を挙げておくことにしたい。

Ⅰ 歴史

・『吾妻鏡』は次のものを使用した。

『吾妻鏡(一一四)』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九七一年。

また、読み下し文は次のものから引用した。

『全訳吾妻鏡(一一五)』貴志正造訳注、新人物往来社、一九七六—一九七七年。

・『延喜式(前・中・後篇)』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九七九年。

・『統日本紀』の読み下し文は次のものから引用したが、振り仮名は現代仮名使いに改めた。

青木和夫・他校注『統日本紀(一一五)』新日本古典文学大系(二一一六)、岩波書店、一九八九—一九九八年。

・『統日本後紀』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九八八年。

・『徳川実紀(一一〇)』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(三八—四七)、吉川弘文館、一九六四—一九六六年。

・『寧楽遺文(上・中・下)』竹内理三編、東京堂出版、一九六五年。

・『日本紀略(第二・三)』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九八八年。

・『日本後紀』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九八七年。

・『日本三代実録(前・後編)』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九七八—一九七九年。

・『日本書紀』の読み下し文は次のものから引用したが、振り仮名は現代仮名使いに改めた。

坂本太郎・他校注『日本書紀(上・下)』日本古典文学大系(六七・六八)、岩波書店、一九七四・七五年。

・『日本文徳天皇実録』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九七九年。

・『百鍊抄』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(普及版)、吉川弘文館、一九八三年。

- ・『増訂』武江年表(一・二) 金子光晴校訂、東洋文庫(一一六・一一八)、平凡社、一九八八年。
- ・『伏見天皇宸記』増補史料大成刊行会編、増補史料大成(三)、臨川書店、一九七五年。
- ・『扶桑略記』、黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(一二)、吉川弘文館、一九六五年。
- ・『風土記』の読み下し文は次のものから引用したが、振り仮名は現代仮名使いに改めた。
秋本吉郎校注『風土記』日本古典文学大系(二)、岩波書店、一九六九年。
- ・『類聚三代格』黒板勝美・国史大系編修会編、新訂増補国史大系(二)、岩波書店、一九六五年。

2 日記・随筆

- ・『猪隅関日記(一一六)』東京大学史料編纂所編、大日本古記録、岩波書店、一九九五年。
- ・『蔭涼軒日録(一一五)』竹内理三編、増補統史料大成(二一二五)、臨川書店、一九七八年。
- ・『字槐記抄』、増補史料大成刊行会編、増補史料大成台記(三)、臨川書店、一九八一年。
- ・『猿猴庵日記』織茂三郎校注、日本都市生活史料集成(四)、学習研究社、一九七六年。
- ・『おもひのまゝの日記』塙保己一編、群書類従(二八)、続群書類従完成会、一九九一年。
- ・『お湯殿の上の日記』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従(補遺三)、続群書類従完成会、一九八五年。
- ・『隔宴記』赤松俊秀編、鹿苑寺、一九五八—一九六七年(復刻、思文閣出版、一九九七年)。
- ・『蜻蛉日記』今西祐一郎校注、新日本古典文学大系(二四)、岩波書店、一九九二年。
- ・『甲子夜話(一一六)』中村幸彦・中野三敏校訂、東洋文庫、平凡社、一九七七・一九七八年。
- ・『兼見卿記(一・二)』齊木一馬・染谷光広校訂、史料纂集、続群書類従完成会、一九七一・一九七六年。
- ・『看聞御記(上・下)』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従(補遺二)、続群書類従完成会、一九八五年。
- ・『臥雲日件録(一一六)』東京大学史料編纂所編、大日本古記録、岩波書店、一九六一年。
- ・『北野社家日記(一一七)』竹内秀雄・山田雄司校訂、史料纂集、続群書類従完成会、一九七二—二〇〇一年。
- ・『北山殿行幸記』塙保己一編、群書類従(三)、続群書類従完成会、一九九三年。

- ・『義演准后日記（一一三）』弥永貞三・他校訂、史料纂集、統群書類従完成会、一九七六—一九八五年。
- ・『堯恕法親王日記（一一三）』妙法院史研究会編、妙法院史料（一一三）、吉川弘文館、一九七六—一九七八年。
- ・『空華日用工夫略集』辻善之助編、太平洋社、一九三九年。
- ・『愚管記（一一四）』竹内理三編、増補統史料大成（一一四）、臨川書店、一九八五年。
- ・『慶長日件録（一一二）』山本武夫校訂、史料纂集、統群書類従完成会、一九八一・一九九六年。
- ・『殿助往年記』近藤圭造編、改定史籍集覧（二五）、近藤出版部、一九三二年。
- ・『康富記（一一四）』増補史料大成刊行会編、増補史料大成（三七—四〇）、臨川書店、一九九二年。
- ・『（増補）駒井日記』藤田常春編・校訂、文献出版、一九九二年。
- ・『後法興院記（一一四）』竹内理三編、増補統史料大成（五一—八）臨川書店、一九九四年。
- ・『実隆公記（一一三）』高橋隆三編、統群書類従完成会、一九五八—一九六三年。
- ・『三長記』増補史料大成刊行会編、増補史料大成（三一）、臨川書店、一九九二年。
- ・『三藐院記』近衛通隆・他校訂、史料纂集、統群書類従完成会、一九七五年。
- ・『在京日記』本居宣長、本居宣長全集（二六）、筑摩書房、一九九〇年。
- ・『秋長記（一一二）』増補史料大成刊行会編、増補史料大成（二六—一七）、臨川書店、一九八一年。
- ・『舜旧記（一一八）』鎌田純一・藤本元啓校訂、史料纂集、統群書類従完成会、一九七〇—一九九九年。
- ・『鍾奇斎日々雜記』藤本篤校註、日本都市生活史料集成（二）、学習研究社、一九七七年。
- ・『小右記（一一三）』増補史料大成刊行会編、増補史料大成（別巻）、臨川書店、一九八一年。
- ・『聚楽第行幸記』塙保己一編、群書類従（三）、統群書類従完成会、一九九三年。
- ・『水左記』増補史料大成刊行会編、増補史料大成（八）、臨川書店、一九八一年。
- ・『師記』増補史料大成刊行会編、増補史料大成（五）、臨川書店、一九六五年。
- ・『宗湛日記』芳賀幸四郎校注、茶道古典全集（六）、淡交新社、一九五八年。

- ・『台記(一一三)』増補史料大成刊行会編、増補史料大成(二三―二五)、臨川書店、一九八一年。
- ・『田村藍水・西湖公用日記』草野訝子・藤田寛校訂、史料纂集、統群書類従完成会、一九八六年。
- ・『多聞院日記(一一五)』竹内理三編、増補統史料大成(三八―四二)、臨川書店、一九九四年。
- ・『大乘院寺社雜事記(一二二)』竹内理三編、増補統史料大成(二六―三七)、臨川書店、一九七八年。
- ・『池亭記』の読み下し文は次のものから引用した。
- 大曾根章介・他校注『本朝文粹』新日本古典文学大系(二七)、岩波書店、一九九二年。
- ・『中右記(一一七)』増補史料大成刊行会編、増補史料大成(九―一五)、臨川書店、一九八〇年。
- ・『筑紫道記』川添昭二・福田秀二校注、新日本古典文学大系(五一)、岩波書店、一九九〇年。
- ・『徒然草』久保田淳校注、新日本古典文学大系(三九)、岩波書店、一九八九年。
- ・『言繼卿記(一一六)』高橋隆三・他校訂、統群書類従完成会、一九九八・一九九九年。
- ・『言経卿記(一一四)』東京大学史料編纂所編、大日本古記録、岩波書店、一九五九―一九九一年。
- ・『とはすがたり』三角洋一校訂、新日本古典文学大系(五〇)、岩波書店、一九九四年。
- ・『中務内侍日記』岩佐美代子校注、新日本古典文学大系(五一)、岩波書店、一九九〇年。
- ・『仲光卿記』近藤瓶城編、改定史籍集覧(二四)、近藤活版所、一九〇二年(復刻、臨川書店、一九八三年)。
- ・『二水記(一一三)』東京大学史料編纂所編、大日本古記録、岩波書店、一九八九―一九九四年。
- ・『宣胤卿記(一一二)』増補史料大成刊行会編、増補史料大成(四四・四五)、臨川書店、一九九二年。
- ・『平日閑話』大田南畝著、日本随筆大成編輯部編、日本随筆大成(二〔八〕)、吉川弘文館、一九七五年。
- ・『馬琴日記(一一四)』暉峻康隆・他校訂、中央公論社、一九七三年。
- ・『兵範記(一一五)』増補史料大成刊行会編、増補史料大成(二八―三二)、臨川書店、一九八一年。
- ・『深川御別荘の記』東京市役所編・発行、東京市史稿(遊園編二)、一九二九年(復刻、臨川書店、一九七三年)。
- ・『伏見天皇宸記』増補史料大成刊行会編、増補史料大成(三)、臨川書店、一九九一年。

- ・『碧山日録』竹内理三編、増補続史料大成(二〇)、臨川書店、一九九三年。
- ・『宝暦はなし』藤本利治校注、日本都市生活史料集成(四)、学習研究社、一九八一年。
- ・『枕草子』渡辺実校注、新日本古典文学体系(二五)、岩波書店、一九九一年。
- ・『満濟准后日記(上・下)』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従(補遺一)、続群書類従完成会、一九八八・一九八九年。
- ・『御堂関白記(上・中・下)』東京大学史料編纂所・陽明文庫編、大日本古記録、岩波書店、一九五二・一九五四年。
- ・『紫式部日記』伊藤博校注、新日本古典文学体系(二四)、岩波書店、一九九二年。
- ・『明月記』は次のものを使用した。

『明月記(一一三)』国書刊行会、一九八七年。

また、読み下し文は次のものから引用した。

今井文雄訳『訓読明月記(一一六)』河出書房新社、一九八五年。

- ・『門葉記』大正新脩大藏経(図像一一・一二)、高楠順次郎都監、大正新脩大藏経刊行会、一九七七年。
- ・『冷泉町記録』森谷尅久・下阪守校注、前掲『日本都市生活史料集成(二)』所収。
- ・『鹿苑日録(一一六)』辻善之助校訂、続群書類従完成会、一九六一年。

3 物語

- ・『朝食始末記』近藤瓶城・近藤圭造編、改定史籍集覧(六)、臨川書店、一九八三年。
- ・『今鏡』国史大系編修会編、新訂増補国史大系(二二下)、吉川弘文館、一九六五年。
- ・『栄花物語(上・下)』松村博司・山中裕校注、日本古典文学大系(七五・七六)、岩波書店、一九八二年。
- ・『大鏡』松村博司校注、日本古典文学大系(二二)、岩波書店、一九六七年。
- ・『愚管抄』岡見正雄・赤松俊秀校注、日本古典文学大系(八六)、岩波書店、一九七四年。
- ・『源氏物語(一一五)』柳井滋・他校注、新日本古典文学大系(一九・二三)、岩波書店、一九九三・一九九七年。

- ・『小男の草子』徳田和夫校注、新日本古典文学大系(五四)、岩波書店、一九八九年。
- ・『古今著聞集』永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系(八四)、岩波書店、一九六六年。
- ・『五代帝王物語』塙保己一編、群書類従(三)、続群書類従完成会、一九九三年。
- ・『西鶴名残の友』井上敏幸校注、新日本古典文学大系(七七)、岩波書店、一九八九年。
- ・『さかゆく花(上)』塙保己一編、群書類従(三)、続群書類従完成会、一九九三年。
- ・『猿の草子』沢井耐三校注、前掲『新日本古典文学大系(五四)』所収。
- ・『改定』信長公記』桑田忠親校注、新人物往来社、一九七九年。
- ・『太閤記』檜谷昭彦・江本裕校注、新日本古典文学大系(六〇)、岩波書店、一九九六年。
- ・『太平記(一一三)』後藤丹治・釜田喜三郎校注、日本古典文学大系(三四・三六)、岩波書店、一九六〇―一九六二年。
- ・『日本永代蔵』野間光辰校注、日本古典文学大系(四八)、岩波書店、一九六七年。
- ・『春の日』上野洋三校注、新日本古典文学大系(七〇)、岩波書店、一九九〇年。
- ・『万松院殿穴太記』塙保己一編、群書類従(二九)、続群書類従完成会、一九九一年。
- ・『平家物語(上・下)』梶原正昭・山下宏明校注、新日本古典文学大系(四四・四五)、岩波書店、一九九一・一九九三年。
- ・『増鏡』時枝誠記・木藤才蔵校注、日本古典文学大系(八七)、岩波書店、一九六五年。
- ・『室町時代物語(上)』徳田和夫校注、岩波書店、一九八九年。

4 和歌・漢詩・俳句

- ・『恵慶法師集』新編国歌大観編集委員会編、新編国歌大観(三)、角川書店、一九八五年。
- ・『懷風藻』の読み下し文は次のものから引用したが、振り仮名は現代仮名使いに改めた。
- 小島憲之校注『懷風藻』日本古典文学大系(六九)、岩波書店、一九七〇年。
- ・『下葉集』新編国歌大観編集委員会編、新編国歌大観(八)、角川書店、一九九〇年。

・『菅家文章』の読み下し文は次のものから引用した。

川口久雄校注『菅家文章』日本古典文学大系(七二)、岩波書店、一九七四年。

・『金槐和歌集』小島吉雄校注、日本古典文学大系(二九)、岩波書店、一九七二年。

・『玉葉和歌集』新編国歌大観編集委員会編、新編国歌大観(二)、角川書店、一九八三年。

・『経国集』塙保己一編、群書類従(八)、続群書類従刊行会、一九九一年。

・『兼好法師集』荒木尚校注、新日本古典文学大系(四七)、岩波書店、一九九〇年。

・『幻雲稿』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従(一三上)、続群書類従完成会、一九九四年。

・『古今和歌集』小島憲之・新井栄蔵校注、新日本古典文学大系(五)、岩波書店、一九八九年。

・『後撰和歌集』片桐洋一校注、新日本古典文学大系(六)、岩波書店、一九九〇年。

・『猿蓑』白石悌三校注、新日本古典文学大系(七〇)、岩波書店、一九九〇年。

・『山家集』風巻景次郎校注、日本古典文学大系(二九)、岩波書店、一九七二年。

・『散木奇歌集』は前掲『新編国歌大観(三二)』所収。

・『詞花和歌集』工藤重距校注、新日本古典文学大系(九)、岩波書店、一九八九年。

・『順集』は前掲『新編国歌大観(三三)』所収。

・『拾遺愚草』は前掲『新編国歌大観(三二)』所収。

・『拾遺和歌集』小町谷照彦校注、新日本古典文学大系(七)、岩波書店、一九九〇年。

・『春霞集』は前掲『新編国歌大観(八)』所収。

・『統詞花和歌集』新編国歌大観編集委員会編、新編国歌大観(二)、角川書店、一九八八年。

・『統拾遺和歌集』は前掲『新編国歌大観(二)』所収。

・『千載和歌集』片野達郎・松野陽一校注、新日本古典文学大系(二〇)、岩波書店、一九九三年。

・『竹林抄』島津忠夫・他校注、新日本古典文学大系(四九)、岩波書店、一九九一年。

・『月詔和歌集』は前掲『新編国歌大観(二)』所収。

・『文華秀麗集』の読み下し文は次のものから引用した。

小島憲之校注『文華秀麗集』日本古典文学大系(六九)、岩波書店、一九七〇年。

・『本朝続文粹』黒板勝美・国史大系編修会編、国史大系(二九下)、吉川弘文館、一九六五年。

・『本朝文粹』大曾根章介・他校注、新日本古典文学大系(二七)、岩波書店、一九九二年。

・『松下集』は前掲『新編国歌大観(八)』所収。

・『万葉集』は次のものから引用したが、振り仮名は現代仮名使いに改めた。

高木市之助・他校注『万葉集(二―四)』日本古典文学大系(四一七)、岩波書店、一九七四年。

・『夢窓国師御詠草』塙保己一編、群書類従(二五)、続群書類従刊行会、一九八三年。

・『唯心房集』は前掲『新編国歌大観(三)』所収。

・『凌雲集』塙保己一編、群書類従(八)、続群書類従刊行会、一九九一年。

5 地誌・紀行

・『江戸名所花暦』今井金吾校注、八坂書房、一九七三年。

・『(新版)江戸名所図会(一―六)』市古夏生・鈴木健一校訂、筑摩書房、一九九六・一九九七年。

・『廻国雑記』塙保己一編、群書類従(二八)、続群書類従完成会、一九九二年。

・『海道記』大曾根章介・久保田淳校注、新日本古典文学大系(五二)、岩波書店、一九九〇年。

・『京羽二重』新修京都叢書刊行会編、新修京都叢書(六)、光彩社、一九六八年。

・『京羽二重織留』新修京都叢書刊行会編、新修京都叢書(六)、臨川書店、一九六九年。

・『四時遊観録』三田村鳶魚編・朝倉治彦校訂、江戸年中行事、中央公論社、一九八一年。

・『拾芥抄』故実叢書編集部編、新訂増補故実叢書、明治図書出版、一九五二年。

- ・『十方庵遊歴雜記』江戸叢書刊行会編・発行、江戸叢書(三一七)、一九一六年。
- ・『摂陽奇観(一一六)』船越政一郎編・校訂、浪速叢書(一一六)、浪速叢書刊行会、一九二六—一九二九年。
- ・『摂陽群談』蘆田伊人編集・校訂、大日本地理大系(三八)、一九二三年(復刻、雄山閣、一九七七年)。
- ・『摂津名所図会』原田幹校訂、大日本名所図会刊行会、一九一九年(復刻、臨川書店、一九七四年)。
- ・『摂津名所図会大成(一一二)』船越政一郎編・校訂、浪速叢書(七・八)、浪速叢書刊行会、一九二八・一九二九年。
- ・『増補江戸惣鹿子名所大全』江戸叢書刊行会編・発行、江戸叢書(三・四)、一九一六年(復刻、江戸叢書刊行会編、日本図書センター、九八〇年)。
- ・『増補江戸年中行事』は前掲『江戸年中行事』所収。
- ・『続江戸砂子温故名跡志』小池章太郎編、江戸砂子、東京堂出版、一九七六年。
- ・『東関紀行』大曾根章介・久保田淳校注、前掲『新日本古典文学大系(五二)』所収。
- ・『東都遊覧年中行事』は前掲『江戸年中行事』所収。
- ・『浪花青楼志』船越政一郎編纂・校訂、浪花叢書(一四)、浪花叢書刊行会、一九二七年。
- ・『浪花の梅』船越政一郎編纂・校訂、浪速叢書(一二)、浪速叢書刊行会、一九二七年。
- ・『難波丸綱目』は次のものから引用した。
- ・『校本難波丸綱目』野間光辰鑑修、中尾松泉堂書店、一九七七年。
- ・『武江遊覧志略』は前掲『江戸年中行事』所収。
- ・『北国紀行』鶴崎祐雄・福田秀一校注、前掲『新日本古典文学大系(五一)』所収。
- ・『都花月名所』新修京都叢書刊行会編、京都叢書(二)、光彩社、一九六七年。
- ・『都名所図会』『拾遺都名所図会』原田幹校訂、人物往来社、一九六七年。
- ・『山城名所社寺物語』新修京都叢書刊行会編、新修京都叢書(二)、光彩社、一九六八年。
- ・『山城名跡巡行志』新修京都叢書刊行会編、新修京都叢書(二〇)、光彩社、一九六八年。

・『雍州府志』新修京都叢書刊行会編、新修京都叢書(三)、光彩社、一九六八年。

6 有職故実・辞書

- ・『禁秘抄考註(上巻)』故実叢書編集部編、新訂増補故実叢書、明治図書出版、一九五二年。
- ・『近世風俗志「守貞謄稿」(一一四)』宇佐美英機校訂、岩波書店、一九九八—二〇〇一年。
- ・『毛吹草』新村出校閲・竹内若校訂、岩波文庫、岩波書店、二〇〇〇年。
- ・『拾芥抄』故実叢書編集、新訂増補故実叢書、明治図書出版、一九五二年。
- ・『新撰類聚往来(上・中・下)』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従(一三下)、続群書類従完成会、一九九〇年。
- ・『尺素往来』塙保己一編、群書類従(九)、続群書類従完成会、一九九二年。
- ・『明良帶録』近藤瓶編、改定史籍集覧(一一)、臨川書店、一九八四年。
- ・『吏徵』続々群書類従(七)、続群書類従完成会、一九八四年。
- ・『和漢三才図会(上・下)』和漢三才図会刊行委員会編、東京美術、一九九五年。
- ・『諸本集成 倭名類聚抄』京都大学文学部国語国文学研究室編、臨川書店、一九六八年。

7 絵巻

- ・『一遍上人絵伝』小松茂美編、日本の絵巻(二〇)、中央公論社、一九九七年。
- ・『春日権現験記絵(上・下)』小松茂美編、続日本の絵巻(一三・一四)、中央公論社、一九九五年。
- ・『粉河寺縁起』小松茂美編、日本の絵巻(五)、中央公論社、一九八七年。
- ・『駒競行幸絵巻』小松茂美編、日本の絵巻(一八)、中央公論社、一九九三年。
- ・『西行物語絵巻』小松茂美編、日本の絵巻(一九)、中央公論社、一九八七年。
- ・『信貴山縁起』小松茂美編、日本の絵巻(四)、中央公論社、一九八七年。

- ・『年中行事絵巻』小松茂美編、日本の絵巻(八)、中央公論社、一九八七年。
- ・『法然上人絵伝(上・中・下)』小松茂美編、続日本の絵巻(一一三)、中央公論社、一九九〇年。

8 作庭・園芸・茶道

- ・『花壇地錦抄』加藤要校注、東洋文庫(二八八)、平凡社、一九七六年。
- ・『花譜』筑波常治解説、八坂書房、一九七三年。
- ・『草花絵前集』加藤要校注、東洋文庫(二八八)、平凡社、一九七六年。
- ・『公益地錦抄』京都園芸倶楽部編・発行、一九八三年。
- ・『江岑夏書』千宗左校訂、茶道古典全集(一〇)、淡交社。
- ・『作庭記』は次のものから引用した。
- 田中正大「作庭記」『造園雜誌(五三―四)』日本造園学会、一九九〇年、二七一―二八二頁。
- ・『諸国茶庭名跡図会』針ヶ谷鐘吉編、加島書店、一九七六年。
- ・『山水抄』は次のものから引用した。
- 小林文次「山水抄」について「日本古代学論集」古代学協会、一九七九年、三〇九―三三九頁。
- ・『山水並に野形図』は次のものから引用した。
- 上原敬二編、『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、一九七四年。
- ・『地錦抄付録』京都園芸倶楽部編・発行、一九八三年。
- ・『築山庭造伝』北村援琴著、大原出版企画編、庭園古書刊行会、一九七五年。
- ・『築山庭造伝(後編)』(秋里籬島著)は次のものから引用した。
- 上原敬二編『解説築山庭造伝(後編)』加島書店、一九七五・一九七六年。
- ・『都林泉名勝図会』井口洋校訂、柳原書店、一九七五年。

・『大和本草（一・二）』白井光太郎考証、有明書房、一九八三年。

9 その他

- ・『建設物価』建設物価調査会編・発行、二〇〇二年八月。
- ・『菅波信道一代記』菅波信道著、頼祺一校註、日本都市生活史料集成（八）、学習研究社、一九八一年。
- ・『内外三時抄』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従（一九中）、続群書類従完成会、一九八五年。
- ・『農業全書』土屋喬雄校訂、岩波文庫、岩波書店、一九七七年。
- ・『春の深山路』外村南都子校注・訳、新編日本古典文学全集（四八）、小学館、一九九四年。
- ・『夢窓国師年譜』塙保己一編・太田藤四郎補、続群書類従（九下）、続群書類従完成会、一九九四年。
- ・『冷泉町記録』森谷・下坂校注、日本都市生活史料集成（一）、学習研究社、一九七七年。

収録図版一覧

ご厚意をいただいた所蔵・提供者の方々に感謝いたします。

- I 扉絵 『華嚴宗祖師絵伝』(高山寺蔵) 部分
- II 扉絵 『春日権現験記絵』(東京国立博物館蔵) 部分
- III 扉絵 上杉本 『洛中洛外図屏風』(米沢市上杉博物館蔵) 部分
- IV 扉絵 『江戸図屏風』(国立歴史民俗博物館蔵) 部分
- V 扉絵 『御城御庭絵図』(名古屋蓬左文庫蔵) 部分

- 一章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 二章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 四章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 六章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 七章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 八章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 九章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 一〇章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より
- 一一章 タイトル下 『草花絵前集』(東京大学図書館蔵) より

写真1-1 『家屋文鏡』(宮内庁書陵部蔵)

写真1-2 著者撮影

写真1 1	3	著者撮影
写真1 1	4	著者撮影
写真1 1	5	著者撮影
写真1 1	6	著者撮影
写真1 1	7	著者撮影
写真1 1	8	著者撮影
写真2 2	1	著者撮影
写真2 2	2	著者撮影
写真2 2	3	著者撮影
写真2 2	4	著者撮影
写真3 3	1	著者撮影
写真3 3	2	著者撮影
写真4 4	1	著者撮影
写真4 4	2	著者撮影
写真4 4	3	著者撮影
写真5 5	1	著者撮影
写真5 5	2	著者撮影
写真6 6	1	著者撮影
写真7 7	1	『明治園芸史』(復刻版) 有明書房のご厚意による
写真7 7	2	『造家と築庭』(博文館、一九〇七年)より
写真7 7	3	著者撮影
写真7 7	4	著者撮影
写真8 8	1	著者撮影

- 図 1-1 「平城宮整備調査報告Ⅰ」より
 図 2-1 太田静六『寝殿造の研究』より一部改変
 図 2-2 太田静六『寝殿造の研究』より一部改変
 図 2-3 『拾芥抄』所収「内裏図」より一部改変
 図 2-4 太田静六『寝殿造の研究』より一部改変
 図 2-5 太田静六『寝殿造の研究』より一部改変
 図 2-6 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 2-7 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 2-8 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 2-9 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 2-10 「法然上人絵伝」(知恩院蔵)部分
 図 2-11 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 2-12 「法然上人絵伝」(知恩院蔵)部分
 図 2-13 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 2-14 「法然上人絵伝」(知恩院蔵)部分
 図 3-1 太田静六『寝殿造の研究』より
 図 3-2 「年中行事絵巻」(田中家蔵)部分
 図 3-3 「法然上人絵伝」(知恩院蔵)部分
 図 3-4 「参謀本部仮製地形図」(一八八九年)より作成
 図 3-5 「都名所図会」新人物往来社のご厚意による
 図 3-6 「門葉記」の図を合成
 図 3-7 鎌倉市教育委員会『永福寺跡』(一九九四年)より一部改変
 図 3-8 「建長寺指図」(「一三三一年」)を筆者が模写、一部改変
 図 3-9 「称名寺絵図」(称名寺蔵(神奈川県立金沢文庫保管))

- 図 3-10 『一遍上人絵伝』(清浄光寺・歓喜光寺蔵) 部分
- 図 4-1 『等持寺絵図』を筆者が模写
- 図 4-2 『築山庭造伝』 大原出版企画のご厚意による
- 図 4-3 『福照院関白記』を筆者が模写、一部改変
- 図 4-4 川上貢『新訂日本中世住宅の研究』より
- 図 4-5 上杉本『洛中洛外図屏風』(米沢市上杉博物館蔵) 部分
- 図 4-6 『築山庭造伝』 大原出版企画のご厚意による
- 図 4-7 『都林泉名勝図会』 柳原書房のご厚意による
- 図 4-8 歴博甲本『洛中洛外図屏風』(国立歴史民俗博物館蔵) 部分
- 図 5-1 『大坂夏の陣図屏風』(大阪城天守閣蔵) 部分
- 図 5-2 『聚楽第図屏風』(三井文庫(別館)蔵) 部分
- 図 5-3 川上貢の建築推定図と森蘊の庭園実測図を基に作成
- 図 5-4 『都名所図会』 新人物往来社のご厚意による
- 図 6-1 『寛永江戸図』 復刻者不明版より
- 図 6-2 『水戸様江戸御屋敷御庭之図』 吉川需『小石川後楽園』所収図を筆者が模写
- 図 6-3 『楽只堂年録』 森守『六義園』所収図を筆者が模写、一部改変
- 図 6-4 『都名所図会』 新人物往来社のご厚意による
- 図 6-5 『都名所図会』 新人物往来社のご厚意による
- 図 6-6 『江戸名所図会』 筑摩書房のご厚意による
- 図 6-7 『江戸名所図会』 筑摩書房のご厚意による
- 図 6-8 『拾遺都名所図会』 新人物往来社のご厚意による
- 図 6-9 『拾遺都名所図会』 新人物往来社のご厚意による
- 図 6-10 『青山青果全集(17)』(講談社、一九七五年)より一部改変
- 図 6-11 『日本都市生活史料集成(八)』所収の『神辺本陣絵図』を筆者が模写、一部改変

- 図 6-12 『風俗画報(第一六二号)』(復刻版) 国書刊行会・山本家のご厚意による
- 図 6-13 『摂津名所図会』 臨川書店のご厚意による
- 図 6-14 『築山庭造伝』(前・後編) 庭園文化研究所のご厚意による
- 図 7-1 椎原兵市 『庭園の設計と其实例』 所収図を筆者が模写
- 図 7-2 清水栄二 『小庭園の見方造り方』 より一部改変
- 図 8-1 『春日権現験記絵』(東京国立博物館蔵) 部分
- 図 8-2 『都林泉名勝図会』 柳原書房のご厚意による
- 図 8-3 森蘊 『小堀遠州』 所収『新院御所花壇付近指図』より一部改変
- 図 8-4 『江戸叢書』 所収の『十方庵遊歴雜記』の図を模写
- 図 8-5 『中御座之間北御庭惣絵』(名古屋蓬左文庫蔵) 部分
- 図 8-6 『御城御庭絵図』(名古屋蓬左文庫蔵) 部分
- 図 9-1 『一遍上人絵伝』(清浄光寺・歓喜光寺蔵) 部分
- 図 9-2 『一遍上人絵伝』(清浄光寺・歓喜光寺蔵) 部分
- 図 9-3 『法然上人絵伝』(知恩院蔵) 部分
- 図 9-4 『都名所図会』 新人物往来社のご厚意による
- 図 9-5 『一遍上人絵伝』(清浄光寺・歓喜光寺蔵) 部分
- 図 9-6 『築山庭造伝』 大原出版企画のご厚意による
- 図 9-7 『都林泉名勝図会』 柳原書房のご厚意による
- 図 9-8 『築山庭造伝』(前・後編) 庭園文化研究所のご厚意による

あとがき

日本美術工芸社発行『日本美術工芸』に「庭園植栽の歴史」を掲載することになったのは、故村岡正先生（庭園文化研究所長）のご推薦による。先生には学生時代以来、日本庭園史の研究を御指導いただいたことが、一九九〇年二月に亡くなられ、「庭園植栽の歴史」の初回を読んでいたことが最後になってしまったことは、まことに残念でならない。『日本美術工芸』への掲載については、編集長の近藤良朋氏にお世話になった。「庭園植栽の歴史」が完結した時に身内に不幸が起こったために、まとめる機会を失ってしまったのだが、吉田博宣先生（当時、京都大学農学部教授）のご指導によって、学位論文として書くことができたことをここに感謝したい。今回の出版に際しては、京都大学学術出版会の鈴木哲也氏に大変お世話になった。

本論稿は学位論文をまとめたものだが、各章と既発表論文との関係は次のようになる。

I は次のものを基に補足・修正を行なった。

「庭園植栽の歴史」『日本美術工芸（六一六―六一九）』日本美術工芸社、一九九〇年。

「奈良時代までの庭園植栽」『ランドスケープ研究（六二―一）』日本造園学会、一九九八年。

II・III・IV は次のものを基に補足・修正を行なった。

「庭園植栽の歴史」『日本美術工芸（六二〇―六三九）』日本美術工芸社、一九九〇―一九九二年。

「大坂の植木屋と花屋」『ランドスケープ研究（六三―五）』二〇〇〇年。

V の第一一章は新たに書き加えたが、他は次の論文を使用して修正を加えた。

「庭園植栽の禁忌」『ランドスケープ研究(六〇―五)』一九九七年。

「江戸時代までの花壇についての史的考察」『ランドスケープ研究(六一―五)』一九九八年。

「日本の生垣の歴史の変遷について」『ランドスケープ研究(六二―五)』一九九九年。

なお、本書の出版にあたっては、日本学術振興会の平成十四年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けた。

二〇〇二年十一月末日

飛田 範夫

二条殿 172・218 (信長)

仁和寺常光院 178

浜御殿 (浜離宮) 252

海荘 280

東山殿 181

伏見城 223

伏見殿 87

伏見宮貞成邸 168・169

藤原京 24

藤原宇合邸 34

藤原兼輔邸 71

藤原成範邸 92

藤原定家邸 117

布施屋 41

平安京 57

平城京 28

平城京左京三条二坊六坪庭園 35

方広寺 225

法住寺殿 88

法成寺 82・94

法勝寺 92

堀川殿 90

三島神社 146

水無瀬殿 126

夢窓疎石 158・176

無土器時代 8

無隣庵庭園 316

室町殿 159 (義満)・161 (義教)・163 (義政)

明治神宮内苑 329

山科言繼邸 192

山科言経邸 231

弥生時代 10

永福寺 138

慶滋保胤邸 80

吉田神社 254

吉田兼見邸 230

六義園 252

冷然院・冷泉院 62・76

鹿苑寺 (金閣寺) 255

六条内裏 90

若宮御所 136

植栽管理 107・149
 植物名 393
 寝殿造庭園 75
 針葉樹 206
 実用庭園 321
 樹木の価格 298・331
 浄土式庭園 80・144
 尺素往来 207
 前栽 66・100・105・341
 山水並に野形図 211
 剪定 150・204・303・372
 大乗院寺社雑事記 209
 築山 90
 接ぎ木 98・148・236・328
 都市公園 319・326
 トピアリー 216・237
 年中行事絵巻 88
 配植技法 102・202・300
 花園 342
 藤棚 252・278
 風土記 46
 文人風庭園 311
 碧山日録 179
 方形の園池 18
 万葉集 29・395
 大和本草 395
 洋風庭園 313
 吉野山 92・129・197
 流行の植物 274 (京都)・278 (大坂)・279 (伊勢
 国)・304・402
 露地 234

(2) 時代・人名・都城・邸宅・寺社

飛鳥京跡苑池 22
 飛鳥浄御原宮時代 21
 飛鳥時代 16
 飛鳥寺西の広場 20
 安土城 218
 上之宮遺跡 16
 江戸城 245
 大倉御所 135
 大坂城 219
 大津王子 22
 御土居 224
 小野宮 80
 龜山殿 129
 高陽院 78・115
 烏丸殿 162
 河原院 69
 閑院 63・113

神辺本陣(菅波家) 286
 北山殿(鹿苑寺) 160
 旧二条城 217
 京極殿(土御門殿) 77
 祇園社 133
 岐阜城 215
 恭仁京 42
 建長寺 141
 小石川後楽園 250
 高師直邸 178
 興福寺多聞院 233
 古墳時代 11
 西園寺殿(北山殿) 127
 西行 131
 西芳寺 176
 斎宮邸 73
 嵯峨院 64
 三条白川房 131
 三条西殿 190 (実隆)・198
 島庄 18
 島の宮 21
 相国寺蔭涼軒 192
 勝長寿院 140
 称名寺 144
 白錦後苑 25
 神泉苑 60
 聚楽第 220
 淳和院 62
 縄文時代 9
 菅原道真邸 70
 朱雀院 68
 蘇我馬子 18
 滝沢馬琴邸 282
 多門山城 216
 大極 179
 醍醐寺三宝院 225
 大内裏 71
 月輪殿 125
 土御門内裏 165 (南北朝)・166 (応永度)・184
 (康正度)
 鶴岡八幡宮 143
 東院 34
 東三条殿 89
 等持寺 158
 東福寺靈隠軒・靈雲院 179
 徳川吉宗 268
 鳥羽殿 83
 頼阿 178
 中御門殿(京極殿) 116
 長屋王佐保邸 32
 西宮 77

トウキ 165 (当帰草)・233 (当帰)
 トクサ 233 (トクサ)・400 (砥草 [トクサ])
 トロロアオイ 305
 ナデシコ 38 (奈泥之故 [なでしこ])・46 (瞿
 麦) 67 (山となでしこ)・79 (常夏)・100
 (なでしこ)・109 (撫子)・118 (瞿麦)・151
 (撫子)・231 (瞿麦)・266 (撫子)・279 (撫
 子)・285 (なでしこ)・290 (常夏)・307 (瞿
 麦)
 源氏車なでしこ 353
 ニオイスマレ 313 (香堇 [ニオイスマレ])
 ニチニチソウ 291 (日々草)
 ハゲイトウ 290 (葉鶏頭)
 ハス 19・23・35 (蓮)・48 (荷 [はちす])・82
 (蓮)・85 (蓮)・151 (蓮)・250・260 (藕・
 蓮藕・蓮)・272 (蓮)
 白蓮 165・260
 ハナショウブ 231 (花菖蒲)・266 (花菖蒲)・279
 (花菖蒲)・307 (花菖蒲)
 ハハコグサ 286 (母子草)
 ハラン 286 (葉蘭)
 ヒガンバナ 385
 ヒナゲシ 266 (美人草)・305
 ヒマワリ 305
 ヒメシャガ 353 (小杜若)
 浅黄小杜若 353, 黄小杜若 353
 ヒヤシンス 313 (風信子 [ヒヤシンス])
 ヒルガオ 266 (昼顔)
 フクジュソウ 305
 フジバカマ 33 (蘭?)・46 (藤袴)・67 (ふぢば

かま・藤袴)・71 (紅蘭)・105 (ラン)・118
 (蘭)・151 (藤袴)・259 (蘭)・282 (藤袴)・
 291 (ふじはかま)
 ヘクソカズラ 291 (灸花 [やいとばな])
 ヘチマ 285 (へちま)
 ホウセンカ 259 (鳳仙花)・291 (鳳仙花)・386
 ホオズキ 386
 マコモ 103 (かつみ)・291 (花がつみ)
 マツバラン 280 (松葉蘭)
 ミズアオイ 305
 ミズヒキ 291 (水引)
 メハジキ 231 (益母草 [やくもそう])・290 (益
 母草)
 ヤブラン 103 (やますげ)
 ヤマブキソウ 305
 ユリ 38 (佐由利 [さゆり])・48 (百合)・190 (百
 合花)・266 (早百合)・285 (ゆりの花)・
 307 (百合)・348 (百合)
 車百合 259, 相良百合 259, 姫百合
 353, 山形百合 259
 ラナンキュラス 313 (ランクユラス)
 リンドウ 48 (竜胆 [えやみぐさ])・109 (くた
 に)・151 (竜胆)・179 (竜胆草)・400 (竜
 胆)
 ルコウソウ 259 (琉香)・305
 レイロ 192 (藜蘆)
 ワレモコウ 104 (われもかう)・128 (我もか
 う・吾木香)・151 (吾亦紅)・282 (われも
 かう)

2. 植栽関連

(1) 庭園様式・植栽技法・植物関連

アイヌ民族 14
 秋の野の庭 67・81
 嵐山 129
 生垣 359
 移植技法 95・149・203・301
 植木屋 200 (京都)・292 (京都)・294 (大坂)・
 296 (江戸)
 運搬方法 97・201
 園芸品種 305・401
 園芸用具 330
 懐風藻 24・30
 回遊式庭園 249
 海洋風形式庭園 22・29
 家屋文鏡 11
 下学集 395
 果樹 236・239・401

果樹園 40
 春日山原始林 26
 花壇 169・172・190・227・339
 刈り込み生垣 369
 枯山水 198
 外来植物 50・212・239・305・333・399
 禁忌 377
 蹴鞠の庭 123
 外科的手術 150
 行楽地 261 (京都)・266 (大坂)・270 (江戸)・
 288 (江戸)
 国立公園 326
 籠 (こみ) 205・230
 栽培方法 43・98・101
 挿し木 45・148・328
 自然風庭園 316
 しま 29
 修羅 201

- アオイ 307 (葵)
 アサガオ 118 (槿花)・151 (朝顔)・179 (牽牛花)・192 (槿)・279 (牽牛花)・282 (朝がほ)・280 (朝顔)・307 (朝顔)・400 (牽牛花 [アサガラ])
 　　るり八重・茶台・ばんど 286
 アシ 33 (蘆)・61 (蘆)・63 (蘆)・103 (あし)・252
 アシタバ 282 (あした草)
 アネモネ 313 (アネモネ)
 アラセイトウ 305
 イチビ 259 (一ヒ)
 イヌタデ 291 (犬蓼)
 イワヒバ 233 (岩ヒバ)・286 (岩ひば)
 ウキクサ 291 (萍の花)
 エビネ 211 (エビネ)
 オカトラノオ 285 (とらの尾)
 オギ 151 (荻)
 オグルマ 192 (小車草)・211 (ヲクルマ)・291 (小車の花)
 オシロイバナ 291 (白粉花)・305
 オニバス 23・260 (水蓼)
 オノマンネングサ 305
 オミナエシ 46 (姫部志 [をみなへし]) 67 (をみなへし・女郎花)・78 (女郎花)・104 (女郎)・118 (女郎)・282 (女郎花)
 オモダカ 291 (沢瀉 [おもだか])
 オモト 247・279 (万年青)・280 (おもと)
 カーネーション 313 (麝香瞿麦 [カーネーション])
 カキツバタ 103 (かきつばた)・151 (杜若)・174 (杜若)・211 (杜若・カキツバタ)・250・266 (かきつばた)・273 (燕子花 [かきつばた])・276 (燕子花)・307 (杜若)
 　　四季の杜若 260
 カザグルマ 266 (風車)
 カルカヤ 105 (カルカヤ)・151 (刈萱)・290 (刈萱)・400 (刈萱 [カルカヤ])
 カンアオイ 179 (紫杜薔)
 カンゾウ 106 (萱草 [かんぞう])・118 (萱草)・128 (萱草)
 キキョウ 48 (桔梗 [ありのひふき])・104 (桔梗)・118 (桔梗)・186 (桔梗)・282 (桔梗)・307 (桔梗)
 キク 33 (菊)・61 (菊)・78 (菊)・85 (菊)・101 (菊)・186 (菊)・212 (黄白紅紫・十三色)・227 (菊)・233 (菊)・273 (菊)・307 (菊)・342
 　　白菊 70・79・137・211, 黄菊 138・151, すいやうひ 212, 梅菊 212, 大紫 212, 秋菊 (伊勢紅・櫛・実盛・豊前・風車・天竜寺・伏見常磐・深江・広島) 259, 夏菊 259・266・307, 寒菊 259, 大菊 278・279 (菊の大輪), エゾギク 291 (蝦夷菊), コンギク 305
 キチジョウソウ 291 (観音草)
 ギボウシ 104 (ぎぼうし)
 クマツヅラ 233 (馬鞭草)
 クロッカス 286 (花さふらん)
 ケイトウ 44 (韓藍・鶏頭子)・192 (鶏頭花)・233 (鶏頭花)・259 (鶏冠花)・285 (鶏頭)
 ケシ 二重芥子 266
 コウホネ 291 (河骨)
 コケ 103 (こけ)・193 (苔)
 　　白苔 227
 サクラソウ 209 (桜草)・233 (桜草)
 サボテン 305
 シオン 105 (紫苑)・151 (紫苑)・211 (シオン)・282 (紫苑)・400 (紫苑 [シオン])
 シネラリア 313 (シネラリア)
 シバ 103 (しば)・314 (芝生)
 シュウカイドウ 282 (秋海棠)
 ショウブ 103 (あやめ)・280 (菖蒲)
 シラン 227 (紫蘭)・400 (芝蘭 [シラン])
 スイートピー 313 (麝香連理 [スウィートピー])
 スイセン 259 (水仙花)・285 (水仙)・400 (水仙花)
 スイレン 305
 ススキ 37 (尾花)・46 (平花・乎婆奈 [をばな]) 67 (すゝき)・105 (薄)・117 (薄)・235 (すゝき)
 　　高宗薄 118, 糸薄 285 (糸すゝき)
 セキショウ 211 (石菖)・279 (石菖蒲)
 セキチク 83 (唐撫子 [からなでしこ])・307 (石竹)
 セッコク 295 (石解 [せきこく])
 センニチソウ 305
 センノウ 169 (仙翁花)・290 (仙翁花 [せんとうけ])・400 (仙翁花)
 ゼニアオイ 305
 ダリア 313 (ダリア)
 タチアオイ 192 (唐葵)
 　　千様葵 259, 紅葵 259
 ダンドク 305
 チュウリップ 313 (爵金香 [チウリップ])
 チョウセンニンジン 233 (高麗の人参)・269 (唐の人参)
 ツルレイシ (ニガウリ) 305
 テッセン 259 (鉄線花・鉄銭花)・305
 トウガラシ 305
 トウキンセンカ 180 (金銭花)・259 (金銭花)

237 (びやくしん)・259 (白楨)・314 (柏)
 ビョウヤナギ 305・400 (金糸桃 [ビヤウヤナギ])
 ビワ 72 (枇杷)・192 (枇杷の木)・193 (枇杷)・233 (枇杷木)・235 (枇杷)・259 (枇杷)・326 (ビワ)・385・386・387
 ビラカンサ 316 (ビラカンサス)・324 (ピラカンサス)
 フジ 37 (藤)・73 (藤)・98 (藤)・151 (藤)・174 (藤)・252 (藤)・276 (藤)・384・386
 白藤 165, 長白藤 260, 八重藤 260
 フヨウ 233 (芙蓉木)・400 (芙蓉)
 ブッソウゲ 192 (仏笑花・仏桑花)・209 (仏せう花)・400 (仏桑花 [ブツセウケ])
 ブドウ 190 (葡萄)・285 (葡萄・ぶどう)・326 (ブドウ)・400 (葡萄 [ブドウ])
 プラタナス 326 (鈴懸)
 ホオノキ 247
 ボケ 383・400 (木瓜 [ボケ])
 ボタン 105 (牡丹・牡丹 [ぼうたん] 草)・118 (牡丹)・227 (牡丹)・246 (牡丹)・273 (牡丹)・307 (牡丹)・316 (ボタン)・348 (牡丹)・349 (牡丹)・400 (牡丹)
 白牡丹 105・260・266, 玉牡丹 260
 ポプラ 326 (イタリヤ白楊)・387
 マキ 118 (真木)・163 (楨)・203 (真木)・285 (楨)・314 (楨)
 ラカンマキ 168 (羅漢樹)
 マサキ 259 (正木)
 マツ 25 (松)・47 (松)・60 (松)・74・84 (松樹)・116 (松)・159 (松)・164 (松樹)・184 (松・松木)・220 (松の木)・225 (松)・235 (松)・254 (松)・329
 チョウセンゴヨウ 9・23, アカマツ 23・35・89・134・163 (岡松)・193 (丹松?)・256 (岡松)・282 (赤松)・394, クロマツ 36・118 (浜松)・131 (浜松?)・139・259 (男松)・282 (黒松)・394, ゴヨウマツ 109 (五えう)・159 (五葉)・184 (五えうのまつ)・193 (五葉)・256 (五葉松)・282 (五葉松)・285 (五葉松)
 マユミ 48 (檀 [まゆみ])・203 (真弓)
 ミカン類 タチバナ 24 (橘)・41 (多知婆奈 [たちばな])・47 (橘)・73 (橘樹)・91 (橘の木)・109 (花橘)・118 (橘・橘木・橘樹)・148 (橘)・149 (橘の木)・165 (橘木)・211 (橘)・230 (橘)・266 (橘)・365 (たちばな)・399・401 (橘 [タチバナ]), クネンボ 118 (柑子)・148 (柑子)・149 (柑子)・211 (柑子?)・223 (柑子)・230 (柑)・401 (柑子 [カンシ]), ミカン 190 (蜜柑)・

230 (蜜柑)・234 (ミカン)・259 (蜜柑)・401 (蜜柑 [ミツカン]), キンカン 192 (金柑)・230 (金柑)・234 (キンカン)・401 (橘柑 [キンカン]), カラタチ 331 (カラタチ)・366 (臭橘 [からたち])・383・401 (枳 [カラタチ]), ウンシュウミカン 231 (ウシウキツ)・401 (温州橘 [ウンジュキツ])
 ミズキ 247
 ムクゲ 32 (槿)・209 (ムク花)・233 (槿)・290 (木槿 [もくげ])・307 (木槿)・390
 源氏木犀 260, 黄薔 260
 ムクノキ 86・109 (棕 [むく])・368 (むくの木)
 モクセイ 32 (桂?)・192 (木せい [木犀])・208 (桂花・木犀)・282 (木樨)・328 (木犀)・387・389・400 (木犀)
 キンモクセイ 353 (金桂)
 モクレン 285 (木蓮)・387
 シモクレン 48 (木蘭 [もくらに]), ハクモクレン 260 (白木蓮華)・312 (白木蓮)
 モチノキ 247・282 (もちの木)・383
 モッコク 247・259 (木斛)・282 (木斛)
 モミ 16・235 (もみ)・287 (樅)・314 (樅)・319・329・387
 モモ 10・16 (桃)・23・30 (桃)・35・118 (桃)・165 (桃)・211 (桃)・235 (桃)・273 (桃)・307 (桃)・388
 越桃 193, 緋桃 193・260 (燈の桃木)・400 (緋桃), 碧桃 193, 駿河桃 353
 ヤツデ 259 (八手)・287 (ハツ手)・384・388・389
 ヤブニッケイ 281 (和肉桂?)
 ヤマウルシ 211 (山ウルシ)
 ヤマブキ 37 (山吹)・109 (山吹)・117 (欵冬)・118 (欵冬)・151 (山吹)・211 (山吹)・233 (山吹)・276 (欵冬)・316 (ヤマブキ)
 ヤマモモ 86・259 (楊梅)
 ユキヤナギ 316 (ユキヤナギ)
 ユズ 211 (柚)・259 (柚子)・386
 ユズリハ 10・211 (ユズリハ)・259 (ユズリハ)
 姫ユズリハ 259
 ユリノキ 322
 リギダマツ 326 (リギダ松), ストロブマツ 326 (ストロブス五葉松)
 リンゴ 118 (林檎)・282 (林檎)・326 (リンゴ)
 レダマ 305
 ロウバイ 282 (唐梅)・305・400 (蠟梅)
 (2) 草本類
 アイ 279 (あい)

- スモモ 10・16 (李)・23・25 (李)・87・282 (李)
 センダン 23・35・86・190 (栲木)・266 (栲[おうち])・390
 センリョウ 305
 ソテツ 165 (蘇木)・183 (そてつ)・231 (蘇木)・236 (ソテツ・蘇鉄)・281 (蘇鉄)・287 (蘇鉄)・315 (ソテツ)・383
 タイサンボク 322 (タイサンボク)・326 (泰山木)
 タケ 25 (竹)・47 (竹)・61 (竹)・62 (竹)・70 (竹)・99 (竹)・118 (竹)・192 (竹)・224 (竹)・307 (竹)・364・386
 メダケ 48 (簗[なよたけ])、呉竹 91・109、クロチク 190 (紫竹)、小笹 103 (こざさ)・211 (小篠)、クマザサ 247、真竹 260・269、寒竹 260、寒山竹 312、根笹 314、ハチク 368 (唐竹)【ササを含む】
 タラヨウ 259 (タラヤウ)
 チャ 287 (茶)・326
 チャラン 305
 チャンチン 387・389
 チョウジ 285 (丁子)
 ツガ 227 (栂)・314 (栂)
 ツツジ 35・74・118 (躑躅木)・162 (躑躅)・185 (つつじ)・192 (躑躅)・227 (躑躅)・247 (躑躅)・307 (躑躅)・314 (躑躅)・379・385
 八重躑躅 118・174、蓮華躑躅 163 (蓮華ツ・ジ)・193、映山紅 193、杜鵑花 193、紅躑躅 193、琉球躑躅 250・281、千重赤・万葉・雲梯・千葉四季・美女・風車・曙・薩摩・赤熊[シヤグマ]・胡蝶・益鏡・羅漢 256、浅麻つゝじ 285、霧島躑躅 272・285 (霧島つゝじ)・286 (杜鵑花[きりしま])、ドウダンツツジ 317・332 【サツキツツジは別項】
 ツバキ 35・118 (椿)・162 (椿)・164 (椿樹)・227 (椿)・272 (椿)・278 (椿)・285 (山茶花)・314 (椿)・348 (椿)・385・387
 ヤブツバキ 10、千葉椿樹 165、広島しほり 246、ウス色・玉・イセ椿 255、諫早・大村・白腰裏・吉田・町・白雲・五郎左衛門・等安・炭屋・大白玉・豊田・元和・飛入・宇佐・立分・桜重・大諫早 256
 トチノキ 9・41 (橡?)・285 (橡)
 トネリコ 10
 トベラ 323 (トベラ)
 ナギ 389
 ナシ 16 (梨)・23・41 (梨)・63 (梨)・118 (梨)・梨木)・148 (梨木)・168 (梨)・211 (梨ノ木)・282 (梨子)・287 (梨子の木)・326 (ナシ)・383・387・388
 青梨 260、泡雪梨 285、夏梨 118、古河梨子 285
 ナツツバキ 260 (沙羅双樹)
 ナツメ 41 (棗)・97 (なつめ)・192 (棗)・326 (ナツメ)
 ナナカマド 389
 ナンテン 118 (南天竺)・163 (南天竺・南燭)・192 (南天)・233 (南天木)・259 (南天)・317・383・387・388・400 (南天)
 ニレ 47 (楡[にれ])
 ニワザクラ 193 (庭桜?)・366 (桜桃[にわさくら])
 ヌルデ 270 (ぬるで)
 ネズミモチ 282 (ねずみもち)
 ネムノキ 282 (合歡)
 ノウゼンカズラ 384
 ハギ 44 (芽子[はぎ])・67 (はぎ・萩)・105 (萩)・117 (萩)・211 (萩)・273 (萩)
 白萩 118・285、宮城野萩 131 (宮城野西行萩)・178 (宮城野の萩)
 ハクチョウゲ 316 (ハクチャウゲ)
 ハシドイ 316 (ハシドイ)
 ハシバミ 193 (榛栗)・317 (榛[はしばみ])
 ハゼノキ 91 (はじ)・118 (槲紅葉)・269 (槲)・270 (はじ)・317 (蠟木[ろうのき])
 ハナズオウ 180 (紫荆?)
 ハマナシ (ハマナス) 350
 ハリエンジュ (ニセアカシア) 322 (アカシヤ)
 パショウ 140 (芭蕉)・141 (芭蕉葉・芭蕉)・260 (芭蕉)・312 (芭蕉)
 ヒメパショウ 305
 パラ 63 (薔[しょう])・109 (薔薇[そうび])・169 (薔薇)・190 (薔薇)・314 (薔薇)・384
 コウシンバラ 122 (長春花)・209 (長春)、白薔薇 193
 ヒイラギ 165 (平木)・287 (柃・柃木)・317・384
 ヒサカキ 235 (ひさ・木)
 ヒノキ 8 (檜)・16・35・47 (比之木)・118 (檜木)・164 (檜樹)・182 (檜)・184 (檜樹・ひの木)・211 (檜木)・227 (檜)・287 (檜)・314 (檜)・329
 杉なりの檜木 192
 ヒマラヤスギ 315 (シーダー)・322 (ヒマラヤシーダー)・326 (ヒマラヤ杉)
 ビャクシン 141・163 (白楨)・164 (柏楨・白楨)・167 (白楨)・183 (白真)・227 (柏楨)・

- 386
 ギンヨウアカシア 322 (ハナアカシア)
 クコ 234 (クコ)・366 (枸杞)
 クスノキ 8 (欒樟 [くす])・11・319・329
 クチナシ 48 (枝子 [くちなし])・164 (口無)・
 193 (梔子)・282 (梔子)・366 (梔子)・383・
 388・400 (梔子)
 クヌギ 11・47 (柴 [くぬぎ])・317 (櫟 [くぬ
 ぎ])
 クリ 9・16・41 (栗)・86・169 (栗木)・192 (栗)・
 211 (栗ノ木)・260 (栗木)
 クルミ 9・16・386・388
 クロガネモチ 312 (鉄冬青樹)
 クワ 11・16 (桑)・366 (桑)・368 (桑)
 グミ 235 (山ぐみ)
 ケヤキ 11・20 (楓 [つき])・47 (楓 [つき])・
 260 (楓)・323・386
 ケンボナシ 317 (枳椇 [けんぼなし])
 コウゾ 41 (加治木?)・317 (楮 [こうぞ])・366
 (楮 [こうぞ])
 コウヤマキ 8 (椴 [まき])・16・48 (真木 [ま
 き])・315 (カウヤマキ)
 コデマリ 400 (鈴掛 [スマカケ])
 コナラ 9・47 (柞 [ははそ])・109 (柞)・118 (奈
 良)
 コノテガシワ 259 (側栢葉)
 コブシ 309 (辛夷)・400 (辛夷 [コブシ])
 ゴンズイ 389
 サカキ 10・247・285 (榊)・387
 サクラ 11・35・46 (桜)・65・66 (桜・さくら)・
 72 (桜の樹)・86・114 (桜・桜樹・桜木)・
 129 (桜)・133・160 (桜)・176 (桜花樹)・
 197 (さくら・桜)・226 (桜)・247・
 269 (桜)・272 (花・桜)・307 (桜)・314 (桜
 樹)・385
 ヤマザクラ 26 (山桜)・127 (山ざくら),
 シダレザクラ 93 (いとざくら・しだり
 桜)・159 (糸桜)・163 (糸桜)・196 (イト
 サクラ)・245 (枝垂桜)・287 (糸桜)・
 387, 八重桜 98 (八重ざくら)・122・
 148・152・168・200, 遅桜 131・200,
 普賢像 172 (不言堂)・186 (ふけんさ
 う)・193 (普賢堂), 信濃桜 184 (信州
 桜)・193, 大原野桜 186, 彼岸桜 227・
 233 (ヒカン桜)・260, 伊勢桜 227, 楊貴
 妃桜 233 (やうきひ桜)・298 (やうき
 ひ), 法輪寺桜・ロウマ桜・糸ヨリ桜・常
 真桜・青桜 260, 浅黄桜 285・299 (あ
 さぎ), 塩電桜 260・298 (しほかま), 長
 崎なでん 285, わしの尾・水かみ・とう
 がんこし・たいさんふく 298
 サザンカ 165 (山茶)・259 (山茶花)・307 (山茶
 花)・314 (山茶花)
 サツキツツジ 21 (石上つつじ)・109 (岩躑
 躑)・163 (岩躑躑)・174 (岩つつじ)・193
 (岩躑躑)・211 (岩ツ・シ)・266 (五月躑
 躑)・307 (さつき)・314 (岩躑躑)
 千重・紀州・青山・金四手・銀台 256
 サルスベリ 227 (百日紅)・281 (百日紅)・285
 (百日紅)・312 (百日紅)・328 (百日紅)・
 387・400 (百日紅)
 サワラ 331 (サワラ)・386
 ヒムロ 315 (ヒムロ)
 サンゴジュ 282 (さんご樹)
 サンザシ 316 (サンザシ)・353 (さんさし)
 サンショウ 233 (山椒木・サンシヨノ木)・326
 (サンシヨウ)・368 (山升の木)・366 (秦
 椒)
 浅倉サンシヨ 234
 ザクロ 164 (柘榴)・179 (石榴)・193 (榴樹)・
 203 (柘榴)・282 (ざくろ)・312 (柘榴)・
 385・400 (石榴 [ジャクロ])
 千重榴樹 260, 朽葉色の榴 260, ヒメ
 ザクロ 282 (朝鮮柘榴)・353 (朝鮮ざく
 ろ)
 シイ 11・45 (椎)・211 (シキノ木)・320・329
 シキミ 35・387 (シキビ)
 シジミバナ 400 (笑靨花 [コマメ])
 シダレヤナギ 19・25 (柳)・28 (柳)・41 (楊)・
 58 (柳樹)・64 (楊柳)・89・117 (柳)・118
 (垂柳・柳)・227 (柳)・233 (柳の木)・282
 (柳)・384・386・387
 シモツケ 316 (シモツケ)
 シャクナゲ 190 (石楠花)・259 (石南花)・400
 (石南花)
 姫石楠花 259
 シャクヤク 48 (芍薬 [えびすぐすり])・255
 (芍薬)・281 (芍薬)・307 (芍薬)・400 (芍
 薬)
 シャシャンボ 11
 シュウカイドウ 305
 シュロ 94 (榎梧)・106 (棕櫚 [すろの木])・118
 (棕櫚)・192 (しゅろ)・220・236 (棕櫚)・
 250・285 (棕櫚)・390
 シュロチク 305
 シンジュ 389 (ニワウルシ)
 ジンチョウゲ 316 (デンチヤウゲ)・400 (瑞香
 [デンチヤウゲ])
 スオウ 209 (スワウ)
 スギ 8 (杉)・16・21 (杉)・45 (杉)・143・211
 (楡 [あやすぎ])・219 (杉木)・227 (杉)・
 314 (杉)・319・388

索引

1. 植物

表中の植物は除き、総称が使われているものはその下に品種を列挙した。()は植物名表記, []は振り仮名を示す。

(1) 木本類

アオキ 259 (冬青樹)・305
 アオギリ 63 (梧)・312 (梧桐)
 アケビ 384
 アコウ 186 (榕樹)・190 (榕樹)
 アジサイ 316 (アザサキ)・350
 ガクアジサイ 285 (額草)
 アセビ 22 (馬酔)・30 (安之婢 [あしび])・233
 (アセホ)
 アンズ 193 (杏)・326 (アンズ)
 イチジク 326 (イチヂク)・385・386
 イチョウ 144 (銀杏)・193 (銀杏)・244 (いてう)・386・387
 イヌガヤ 314 (犬榎)
 イブキ 178 (湯吹?)・256 (伊吹)
 カイヅカイブキ 324 (カイヅカ)
 ウコギ 234 (五ヶ葉)・366 (五加 [うこぎ])
 ウツギ 39 (宇乃花 [うのはな])・109 (卵の花)・138 (卵の花)・190 (卵花)・266 (卵の花)・361 (卵の花)・383
 御山ウツギ 118
 ウメ 10・16・23・25 (梅)・31 (梅)・35・40 (宇米 [うめ])・68 (梅)・86・90 (梅樹)・117 (梅)・163 (梅)・164 (梅樹)・168 (梅)・190 (梅)・198・227 (梅・梅木)・272 (梅)・307 (梅)・388・394
 紅梅 71・88・168・186 (こうはい)・230・260, 白梅 118, 紅白梅 118・193 (紅白接梅), 一重紅梅 118, 八重紅梅 118, 薄紅梅 118・151, 八重薄紅梅 118, 木紅 118, 八重白梅 118・282, リンシ梅 234, 未開紅梅 260, 越中梅 260, 豊後梅 282, 青軸梅 285, 鶯宿梅 285, 養老梅 285
 ウメモドキ 260 (梅モドキ)・305
 ウルシ 317 (漆)
 エゴノキ 86・368 (ちしゃ木)
 エノキ 47 (榎)・86・190 (榎木)・287 (榎)・387・389
 エンジュ 41 (槐)・48 (槐 [えにす])・186 (槐)・389

オウバイ 192 (黄梅)・209 (黄梅)・400 (迎春花 [ワウバイ])
 オオデマリ 266 (大手毬)・285 (てまり)・
 カイドウ 190 (海棠樹)・193 (海棠)・400 (海棠)
 カエデ 37 (蛙手)・47 (鶏頭樹 [かえるでのき])・61 (楓)・74・86・91 (かへで)・102 (かへで)・115 (楓)・118 (鶏冠木・加衣天)・123 (蛙手)・146 (楓樹)・160 (楓)・172 (鶏冠木)・177 (楓樹)・178 (紅葉 [もみじ])・190 (鶏冠木)・211 (鶏冠木・カイデ)・247 (紅葉)・260 (楓木)・269 (楓)・282 (もみぢ)・307 (楓)・314 (楓)
 カキ 10・23・41 (柿)・74・86・163 (柿)・233 (柿ノ木)・237 (柿)・267 (柿木)・307 (柿)・323 (カキ)・386・400 (柿)
 高麗の柿 227, 長柿 234, 木練柿 260, 夏柿 260, 御所柿 285, 峰谷柿 353
 カシ 9・235 (かしの木・榎)・267 (榎木)・329・383・386
 アラカシ 9・35, イチイガシ 9・47 (欒?)・161 (一イ), シラカシ 320・331 (シラカシ)
 カシワ 193 (柏葉)・209 (カシワ)・211 (栢木)・317 (柏)・384
 カジノキ 86
 カツラ 48 (杜 [かつら])・87 (かつら)・208 (木犀)・287 (桂)
 カナメモチ 235 (かなめ)・285 (かなめ)
 カヤ 10・227 (柏木)・314 (榎)
 カラタチバナ 279 (橘・立ち花)・305
 カラマツ 163 (富士松)
 カリン 260 (唐無?)・383・400 (果李木 [クワリンボク])
 ガジュマル 387
 ガンピ 209 (カンヒ)・307 (がんぴ)
 キガンピ 209 (木カンヒ)
 キササゲ 389
 キハダ 317 (欒木 [きはだ])
 キャラボク 259 (伽羅木)
 キリ 117 (桐樹)・179 (桐)・233 (桐の木)・383・

[著者紹介]

飛田範夫 (ひだ のりお)

長岡造形大学造形学部デザイン学科教授

1947年生まれ。1977年、京都大学大学院農学研究科博士課程退学。

京都府文化財保護課等を経て、2001年4月より現職。

京都大学論文博士(農学)。

主要著書

『「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985年。

『日本美術全集(11)』(共著)講談社、1995年。

『日本庭園と風景』学芸出版社、1999年。

日本庭園の植栽史

© Norio Hida 2002

平成14(2002)年12月20日 初版第一刷発行

平成16(2004)年11月20日 初版第三刷発行

著者 飛田 範夫

発行人 阪上 孝

発行所

京都大学学術出版会

京都市左京区吉田河原町15-9

京大会館内 (〒606-8305)

電話(075)761-6182

FAX(075)761-6190

Home Page <http://www.kyoto-up.gr.jp>

振替01000-8-64677

ISBN 4-87698-604-5

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります



ISBN4-87698-604-5

定価:本体4,600円(税別)

C3061 ¥4600E



Kyoto University Press

